

大方町埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

早咲遺跡

県道大用大方線改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1991

高知県大方町教育委員会

早咲遺跡

県道大用大方線改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1991

高知県大方町教育委員会

題字 大方町教育長 文野 荣喜

序

大方町には、縄文時代から中・近世にいたるまでの数多くの遺跡が分布していますが、中でも今回調査をしました「早咲遺跡」は、その表採遺物の多さから見て、貴重な遺構が存在していることが早くより予想されました。

今回県道大用大方線の改良工事に伴い、事前の調査記録保存を行なったわけですが、調査によって幡多郡下では初めて、弥生時代後期から古墳時代にかけての集落跡が確認され、同時に土製模造鏡を始めとする祭祀遺物も多数出土いたしました。その中には県下では出土例のない貴重な土製品も含まれています。

埋蔵文化財は、古代住民の生活様式を解明するだけでなく、未来へつなぐ貴重な文化遺産でもあります。しかし近年の各種の開発事業にともない、一朝にして貴重な遺跡が破壊される恐れがあり、憂慮すべき事態がしばしば発生していますが、今回の調査にあたっては、開発当局の深いご理解により、二ヵ年にわたる記録保存のための調査を終えることができました。

本書の刊行により、県内はもとより、広く文化財研究の一助になれば幸いです。

終わりに、本調査でご指導いただきました高知県教育委員会文化振興課廣田佳久氏、暖かいご理解とご協力をいただきました中村土木事務所、炎熱酷暑の中で作業に従事されました皆様や、本調査にあたって何かとご協力いただいた関係者及び地域住民の方々に心より厚くお礼を申し上げます。

平成3年3月

大方町教育委員会

教育長 文野 荣喜

例　　言

1. 本書は、大方町教育委員会が高知県の委託を受けて、平成元・2年度に実施した早咲遺跡発掘調査の調査報告である。
2. 発掘調査は、高知県教育委員会の指導を受け、大方町教育委員会が主体となり実施した。
3. 発掘調査及び整理作業は、大方町教育委員会の依頼を受け、高知県教育委員会文化振興課主幹廣田佳久が担当した。調査の事務、総括は大方町教育委員会社会教育係長有田昌子、同主事畦地和也が行った。
4. 本書の執筆、写真撮影、編集等は廣田佳久が行った。調査の際には故廣田典夫（高知県文化財保護審議会委員）の指導を得た。
5. 遺構については、S T（堅穴住居址又は堅穴状遺構）、S B（掘立柱建物跡）、S K（土坑）、S D（溝跡）、S X（性格不明遺構）で標示し、遺構ごとの通し番号である。
6. 遺物については、弥生土器と土師器（縮尺 $\frac{1}{4}$ ）、粗製土器（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）、須恵器（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）、陶磁器類（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）、土製品（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）、石製品（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）、金属製品（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）ごとにまとめ、表記の縮尺で実測図を載せた。ただし、縮尺を変更しているものもある。なお、番号は通し番号で、実測図の番号と図版の番号と一致している。また、観察表等において（ ）で囲んだ数値は残存値を示す。
7. 発掘区の設定並びに遺構の測量にあたっては、平成元年度に任意座標によるトラバース測量を実施し、測量成果に基づく基準点を使用した。なお、標高は工事用水準点（T-7）を基準として実施した水準測量の結果を使用し、海拔高を示す。
8. 遺構等の縮尺率は、それぞれに示した。なお、S T、S Bは $1/80$ 、S K、S Dは $1/60$ で掲載した。また、方位（N）は真北である。
9. 英文要旨は原文を廣田が作成し、翻訳を則大阪市文化財協会 岡村勝行氏、大阪大学文学部考古学研究室研究生 佐々木憲一氏に依頼した。記して謝意を表する。
10. 調査にあたっては、高知県中村土木事務所、大方町文化財調査委員会、地元関係者の方々に全面的な協力を得た。また、整理作業では下記の方々の協力及び高知県教育委員会文化振興課の諸氏から貴重な助言を得た。記して深く感謝する次第である。

秋山勢子 大原喜子 川村亜矢 西岡陽子 西内宏美 中西純子 橋田美紀 浜田雅代
松木富子 矢野 雅 古本睦子 山本裕美子 （五十音順、敬称略）
11. 出土遺物等は大方町教育委員会において保管している。

目 次

第Ⅰ章 調査の契機と経過	1
1. 契機と経過	1
2. 調査日誌抄	1
第Ⅱ章 遺跡の地理的、歴史的環境	
1. 地理的環境	5
2. 歴史的環境	6
第Ⅲ章 調査の概要	
1. 調査の方法	14
2. 調査区の概要	17
第Ⅳ章 遺構	
1. B区	27
2. C区	35
3. D区	38
4. E区	47
第Ⅴ章 遺物	
1. 弥生土器、土師器	53
2. 粗製土器	61
3. 須恵器	62
4. 陶磁器類	64
5. 土製品	65
6. 石製品	66
7. 金属製品	68
第Ⅵ章 考察	
1. 遺構	69
2. 遺物	71
3. まとめ	75
付編	
英文要旨	79
	145

挿 図

Fig. 1	水没したB区	4
Fig. 2	現地説明会	4
Fig. 3	大方町位置図	5
Fig. 4	大方町遺跡分布図	11
Fig. 5	早咲遺跡周辺の地形図	14
Fig. 6	早咲遺跡調査区全体図	15
Fig. 7	トラバースポイント配置図	16
Fig. 8	A区周辺図とトレント設定図	17
Fig. 9	A区土層柱状図	17
Fig. 10	降雨時のB区	18
Fig. 11	B区周辺図とグリッド設定図	18
Fig. 12	B区北壁セクション図	19
Fig. 13	C区周辺図とグリッド設定図	20
Fig. 14	C区北壁セクション図	21
Fig. 15	D区周辺図とグリッド設定図	23
Fig. 16	E区周辺図とグリッド設定図	24
Fig. 17	F区周辺図とトレント設定図	26
Fig. 18	F区土層柱状図	26
Fig. 19	B区遺構平面図	27
Fig. 20	S T - 1	28
Fig. 21	S K - 5 遺物出土状態	29
Fig. 22	S K - 3・4・10・11・16~19, S D - 6・7	30
Fig. 23	S K - 22・24・25	31
Fig. 24	S Dセクション図 1	33
Fig. 25	C区遺構平面図	35
Fig. 26	S K - 30・34・40	36
Fig. 27	S K - 41 遺物出土状態	37
Fig. 28	S Dセクション図 2	37
Fig. 29	D区遺構平面図	39
Fig. 30	S T - 3, S K - 57	39
Fig. 31	S T - 4, S X - 8, P - 14・15	40

Fig. 32 S B - 1	41
Fig. 33 S K - 53・54・60・65・70・76	43
Fig. 34 S D セクション図 3	45
Fig. 35 E 区造構平面図	47
Fig. 36 S T - 6, S K - 80	47
Fig. 37 S T - 7, S X - 10	48
Fig. 38 S T - 8, S X - 11	49
Fig. 39 S K - 87 遺物出土状態	49
Fig. 40 S K - 84・100・104・108, S X - 12, P - 17	51
Fig. 41 壺形態分類図	53
Fig. 42 壺形態分類図	55
Fig. 43 鉢, 高杯, 器台形態分類図	56
Fig. 44 遺物実測図 1 (弥生土器, 土師器)	119
Fig. 45 遺物実測図 2 ()	120
Fig. 46 遺物実測図 3 ()	121
Fig. 47 遺物実測図 4 ()	122
Fig. 48 遺物実測図 5 ()	123
Fig. 49 遺物実測図 6 ()	124
Fig. 50 遺物実測図 7 ()	125
Fig. 51 遺物実測図 8 ()	126
Fig. 52 遺物実測図 9 ()	127
Fig. 53 遺物実測図 10 ()	128
Fig. 54 遺物実測図 11 ()	129
Fig. 55 遺物実測図 12 ()	130
Fig. 56 遺物実測図 13 (粗裂土器)	131
Fig. 57 遺物実測図 14 (須恵器)	132
Fig. 58 遺物実測図 15 ()	133
Fig. 59 遺物実測図 16 ()	134
Fig. 60 遺物実測図 17 (須恵器, 陶磁器類)	135
Fig. 61 遺物実測図 18 (陶磁器類, 土製品)	136
Fig. 62 遺物実測図 19 (土製品)	137
Fig. 63 遺物実測図 20 (石製品)	138
Fig. 64 遺物実測図 21 ()	139
Fig. 65 遺物実測図 22 ()	140

Fig. 66 遺物実測図23（石製品）	141
Fig. 67 遺物実測図24（　　）	142
Fig. 68 遺物実測図25（　　）	143
Fig. 69 遺物実測図26（金属製品、付編収録遺物）	144

表

Tab. 1 大方町遺跡一覧表	11	Tab. 25 弥生土器、土師器観察表13	98
Tab. 2 トライバース測量座標 成果一覧表	16	Tab. 26 弥生土器、土師器観察表14	99
Tab. 3 壁穴住居址又は壁穴状 遺構計測表	80	Tab. 27 弥生土器、土師器観察表15	100
Tab. 4 据立柱建物跡計測表	80	Tab. 28 弥生土器、土師器観察表16	101
Tab. 5 上坑計測表1	80	Tab. 29 弥生土器、土師器観察表17	102
Tab. 6 土坑計測表2	81	Tab. 30 弥生土器、土師器観察表18	103
Tab. 7 土坑計測表3	82	Tab. 31 粗製土器観察表1	103
Tab. 8 土坑計測表4	83	Tab. 32 粗製土器観察表2	104
Tab. 9 上坑計測表5	84	Tab. 33 粗製土器観察表3	105
Tab. 10 溝跡計測表1	84	Tab. 34 須恵器観察表1	105
Tab. 11 溝跡計測表2	85	Tab. 35 須恵器観察表2	106
Tab. 12 性格不明遺構計測表	85	Tab. 36 須恵器観察表3	107
Tab. 13 弥生土器、土師器観察表1	86	Tab. 37 須恵器観察表4	108
Tab. 14 弥生土器、土師器観察表2	87	Tab. 38 須恵器観察表5	109
Tab. 15 弥生土器、土師器観察表3	88	Tab. 39 須恵器観察表6	110
Tab. 16 弥生土器、土師器観察表4	89	Tab. 40 陶磁器類観察表	111
Tab. 17 弥生土器、土師器観察表5	90	Tab. 41 土製品観察表1	112
Tab. 18 弥生土器、土師器観察表6	91	Tab. 42 土製品観察表2	113
Tab. 19 弥生土器、土師器観察表7	92	Tab. 43 石製品観察表1	113
Tab. 20 弥生土器、土師器観察表8	93	Tab. 44 石製品観察表2	114
Tab. 21 弥生土器、土師器観察表9	94	Tab. 45 石製品観察表3	115
Tab. 22 弥生土器、土師器観察表10	95	Tab. 46 石製品観察表4	116
Tab. 23 弥生土器、土師器観察表11	96	Tab. 47 石製品観察表5	117
Tab. 24 弥生土器、土師器観察表12	97	Tab. 48 金属製品観察表	117
		Tab. 49 付編収録遺物観察表	118

図 版

- | | | | |
|----------|-----------------------------|----------|----------------------------------|
| P L . 1 | 調査区全景（西上空より） | P L . 15 | D区遺構完掘状態（西より） |
| | 調査前全景（西より） | | D区遺構完掘状態（東より） |
| P L . 2 | A区試掘トレンチ（南より） | P L . 16 | S T - 4 遺物出土状態（北より） |
| | A区T R A - 1 セクション（北よ
り） | | S T - 4 床面遺構検出状態（北よ
り） |
| P L . 3 | B区調査前全景（東より） | P L . 17 | S T - 4, S X - 8 遺物出土状態
(北より) |
| | B区遺構検出状態（東より） | | S T - 4, S X - 8 (北より) |
| P L . 4 | B区遺構完掘状態（東より） | P L . 18 | S T - 5 (西より) |
| | B区遺構完掘状態（西より） | | S B - 1 (北より) |
| P L . 5 | S T - 1 床面遺構検出状態（東よ
り） | P L . 19 | S K - 50 (東より) |
| | S T - 2 (西より) | | S K - 52 (西より) |
| P L . 6 | S K - 5 遺物出土状態（西より） | P L . 20 | S K - 65 (西より) |
| | S K - 11, S D - 7 (南より) | | S K - 70 (東より) |
| P L . 7 | S K - 22セクション（東より） | P L . 21 | S K - 72 (東より) |
| | S K - 23・24, S X - 3 (東より) | | P - 11 (東より) |
| P L . 8 | S D - 8 (東より) | P L . 22 | S D - 20 (北より) |
| | S D - 9セクション（東より） | | S D - 20セクション（北より） |
| P L . 9 | S D - 11セクション（東より） | P L . 23 | S D - 20セクション（北より） |
| | S D - 12・13 (北より) | | S D - 20 (北より) |
| P L . 10 | C区調査前全景（東より） | P L . 24 | E区調査前全景（東より） |
| | C区T R C - 1 遺構検出状態（東
より） | | E区遺構検出状態（東より） |
| P L . 11 | C区遺構検出状態（東より） | P L . 25 | E区遺構検出状態（西より） |
| | C区遺構完掘状態（東より） | | E区遺構完掘状態（西より） |
| P L . 12 | S K - 34セクション（東より） | P L . 26 | S T - 6 遺物出土状態（西より） |
| | S K - 42 (南より) | | S T - 6 (西より) |
| P L . 13 | S K - 41遺物出土状態（南より） | P L . 27 | S T - 7, S X - 10 (東より) |
| | S D - 19, S X - 6 (北より) | | S T - 7, S X - 10 (南より) |
| P L . 14 | D区調査前全景（西より） | P L . 28 | S T - 8 遺物出土状態（北より） |
| | D区遺構検出状態（西より） | | S T - 8 付属遺構検出状態（北よ
り） |

P L . 29	S K - 87 遺物出土状態 (東より)	P L . 45	出土遺物 9
	S K - 99 (東より)	P L . 46	出土遺物 10
P L . 30	S K - 104 (南より)	P L . 47	出土遺物 11
	S K - 108 (南より)	P L . 48	出土遺物 12
P L . 31	F 区調査区全景 (西より)	P L . 49	出土遺物 13
	調査区全景 (北上空より)	P L . 50	出土遺物 14
P L . 32	B 区第Ⅱ層, S T - 1, S K - 22 · 24 遺物出土状態	P L . 51	出土遺物 15
P L . 33	S X - 1 · 3, S D - 8 · 12, P - 1 遺物出土状態	P L . 52	出土遺物 16
P L . 34	C 区第Ⅱ層, S K - 30 · 41, S T - 3 · 4 遺物出土状態	P L . 53	出土遺物 17
P L . 35	S B - 1, S K - 53 · 54, P - 15, S T - 8 遺物出土状態	P L . 54	出土遺物 18
P L . 36	手捏土器 土製円板	P L . 55	出土遺物 19
P L . 37	出土遺物 1	P L . 56	出土遺物 20
P L . 38	出土遺物 2	P L . 57	出土遺物 21
P L . 39	出土遺物 3	P L . 58	出土遺物 22
P L . 40	出土遺物 4	P L . 59	出土遺物 23
P L . 41	出土遺物 5	P L . 60	出土遺物 24
P L . 42	出土遺物 6	P L . 61	出土遺物 25
P L . 43	出土遺物 7	P L . 62	出土遺物 26
P L . 44	出土遺物 8	P L . 63	出土遺物 27
		P L . 64	出土遺物 28
		P L . 65	出土遺物 29
		P L . 66	出土遺物 30
		P L . 67	出土遺物 31
		P L . 68	付編収録遺物

第一章 調査の契機と経過

1. 契機と経過

早咲遺跡は、昭和48年の県下一円の遺跡分布調査の際に発見された遺跡で、多量の土器片が散布していることから地元では著名な遺跡の一つに数えられている。丁度、当遺跡の西端には県道大用大方線の幹道が通っており、近年の交通量の増加に伴う幅員の拡張等の道路改良工事が昭和61年度頃から高知県によって計画実施されている。道路改良工事は当遺跡の北端までは現県道の幅員の拡幅工事で対応されてきたが、当遺跡以南は住宅密集地であり幅員の拡幅が不可能であることから新たなルートが考案されていた。そして、県道のバイパスとして当遺跡を斜めに横断する形で計画され、大方町教育委員会との協議が始まった。当初、ルート変更を県当局に再三打診したが、当該ルート以外では改良工事ができない旨の回答があり、止むを得ず記録保存のための緊急発掘調査を実施することとなった。

調査は土地の買収完了後遺構の有無を確認するための試掘調査を実施し、その上で本調査に移る計画であった。しかし、耕作物等の問題で、試掘調査と併行して本調査を行うこととなった。調査は、土地の買収等の問題で、2次に分けて実施され、第1次調査は平成元年8月1日から10月17日までの実働42日、第2次調査は平成2年6月25日から9月8日までの実働41日をそれぞれ費して実施された。

2. 調査日誌抄

(1) 第1次調査 A・C・D・F区

1989年8月1日～10月17日

8・1～3 雨天のため現場作業は中止。雨の合間にみて器材の搬入、写真撮影（発掘前全景）等を行う。

8・4 本日より発掘調査を開始する。まず、A区の2本の試掘トレンチから調査する。堆積上大半は2次堆積であり遺物包含層は確認されなかった。

8・7 A区の試掘トレンチの調査を引き続き行う。地表下約1mまで2次堆積であり、遺物包含層もなく、かつ湧水があり調査を打ち切る。

8・8 A区の測量を行いC区に調査区を移す。

8・9 C区に設定した試掘トレンチからピットを中心に遺構が検出される。遺構検出状態

の写真撮影を行う。

8・10～11 C区の拡張作業を行う。表土層の除去後第Ⅱ層の掘削を行う。

8・16 T P 1 (X=200,000, Y=200,000)とした任意座標でトラバース測量を行う。基準点はT P 1～11の11点。

8・17 水準測量を行い、各基準点に標高を配布する。

8・18 C区の遺構検出作業を実施する。検出直上より弥生土器、土師器、須恵器片がまとめて出土した。

8・21 C区の遺構検出状態の写真撮影を行い、引き続き遺構の調査に移る。

8・22～25 C区の遺構の調査を行う。弥生

時代後期後半、古墳時代後期（6世紀前半）の遺構が主に確認されたが、かなりの部分で近世の遺構に壊されていた。

8・28 8月26・27日にかけて轟多地方を通過した台風17号の雨でC区はプールのように一面水が溢っていた。終日水汲みを行うが一向に引かない。

8・29 C区の水汲みを行うが周囲からの流入と湧水により調査不能。一時、D区の調査に移る。

8・30 C区の一部遺構の調査とD区の拡張作業を行う。

8・31 C区の遺構の調査。周囲からの水の流入が相変わらず続く。

9・1 雨天のため現場作業は中止。C区の水汲み作業は実施する。

9・4 C区はまたプールの状態になっており、水汲み作業を行う。B区の埋戻し作業を重機を使用して行う。また、D区の廃土の移動も実施する。

9・5 雨天のため現場作業は中止。

9・6 C区の水汲み、D区の拡張作業を実施する。また、D区にTP-7から杭打ちを行う。

9・7 C区の水汲み、D区の拡張作業を実施する。C区は徐々にではあるが水が引いていく。

9・8 C区の水汲み作業。D区東部の精査を行い、住居址2棟、土坑十数基、ピット約20個を検出する。

9・11 C区の残りの調査、掃除を行い完掘状態の写真撮影を行う。D区の拡張作業も併行して行う。

9・12 D区の遺構検出作業を行い、検出状態の写真撮影を行う。

9・13 雨天のため現場作業は中止。中村土木事務所で今後の打合せを行う。

9・14 雨天のため現場作業は中止。

9・18 D区の水汲みを行うが、午後からまた雨のため現場作業は中止。

9・19 雨天のため現場は中止。

9・20 D区の水汲み作業と一部精査を行

う。

9・21 D区の遺構の調査を開始する。東から順に行う。併行して遺構の配置図の作成を行う。午後、大方町の歴史をさぐる会が見学に来る。

9・22 D区の遺構の調査を行うが、途中から降雨のため現場作業は中止する。連日の雨で、土地は水が脛和状態になっており、なかなか水が引かない。

9・25 D区の遺構の調査。S T - 4 から鉢類など多数の土器片が出土。S B - 1 の南東隅の柱穴から石の礎盤を検出する。

9・26 D区の遺構の調査。S K - 77 は S X - 9 にその大半を壊されており、唯一残ったピットより手握土器などがまとまって出土。S T - 4 の遺物出土状態の写真撮影を行う。県文化財保護審議会委員故廣田典夫氏が現場視察に来られる。

9・27 D区の遺構の調査。S T - 4 の上面の遺物取り上げを行い、床面の精査を実施。

9・28 D区の遺構の調査。S T - 4 の床面で検出した遺構の調査。西部で検出した S D - 20~25 の調査。S D - 20 から 18世紀後半以降の遺物が多量に出土。

9・29 D区の遺構の調査。S D - 20~25 の調査と測量。S X - 7 を 6 分割して調査する。大方町長、企画課長が視察に来られる。

10・2 D区の遺構の調査。S T - 4 の床面で検出した遺構出土遺物の取り上げを行う。

10・3 D区の遺構の調査。S T - 4 の完掘状態の写真撮影。S X - 7 の調査。

10・4 D区の遺構の調査。S X - 7 のセクション実測。バンク除去後、D区完掘状態の写真撮影を行う。

10・5 F区の調査を開始。試掘トレンチを設定し調査するが、遺物、遺構は検出されず、測量し調査を完了する。

10・6 C区の遺構平面測量。

10・11~12 D区の遺構平面測量。

10・13 C・D区のレベル測量。

10・16 全遺構の実測を終え、調査を終了。

(2) 第2次調査 B・E区

1990年6月25日～9月8日

6・25 調査の準備と器材の搬入。調査前の写真撮影を行う。

6・26 E区から調査を開始する。堆積状態は表土層直下が遺構検出面となっており、遺物包含層は残存していないかった。

6・27 重機を使用し、表土層の除去作業を行うと共に東から順に精査し、遺構検出を行う。

6・28 E区の精査と遺構検出作業を行うと共にTP-10から杭打ちを行う。

6・29 雨天のため現場作業は中止。ベルトコンベヤーの配線を行う。

7・2 雨天のため現場作業は中止。

7・3 E区の水汲みと精査を行う。

7・4 昨夜の雨のため、再精査を行い、遺構検出状態の写真撮影を行う。東から順に遺構の調査を開始する。

7・5 E区の遺構の調査。遺構の配置図並びに周囲の地形測量を実施する。

7・6 E区の遺構の調査。東部は19世紀以降の遺構が目立つ。

7・9 E区の遺構の調査。土坑の調査を行なう。埋土はほとんどが單一層で弥生時代から古墳時代にかけての遺構の埋土は黒色ないし暗褐色粘性砂質土で、近世（18世紀後半以降）のそれは概ね灰褐色粘性砂質土であった。

7・10 E区の遺構の調査。SK-87から弥生時代後期後半の土器が集中して出土。実測して取り上げる。

7・11 E区の遺構の調査。ST-8を4分割して調査を開始。後世の遺構の影響はほとんど受けおらず、良好な状態で遺物が出土した。ST-7は2分割して調査を行うが、出土遺物は僅かであった。

7・12 E区の遺構の調査。ST-8の遺物の取り上げを行う。手の平に乗る程度の河原石に刻線を施した石製円板と呼称され得る極めて珍しいものも出土した。弥生時代終末の良好な括資料である。

7・13 E区の遺構の調査。ST-8・9の調査を完了。ST-9は平面形が方形を呈する

堅穴状遺構であるが、出土遺物はST-8よりやや古いものであった。

7・16 E区の完掘状況の写真撮影を行う。引き続き、最後の調査区であるB区に器材等を移動し調査を開始する。それに先立ち、B区の調査前の写真撮影を行う。

7・17～18 E区の遺構平面測量並びにB区の表土層の掘削を行う。

7・19～20 E区のレベル測量を行い、E区の全遺構の実測を完了。

7・23～24 B区の表土層の掘削作業を重機を使用して行う。

7・25 B区の第II層の掘削作業を人力で行う。TP-2とTP-5から杭打ちを行う。

7・26 第II層掘削後精査し、遺構の検出を行う。引き続き遺構検出状態の写真撮影を実施する。

7・30 本日よりB区の遺構の調査を開始する。SD-1～3を調査する。18世紀後半以降の陶磁器類に混じって多量の叩石が出土した。

7・31 B区の遺構の調査。SD-1～3は一連のものとみられるが、調査区外にさらに伸びる。SK-5からは破片ではあるが比較的まとまって弥生時代終末の土器が出土。

8・1 B区の遺構の調査。SD-4・5を調査し、SD-5の底面からTK-208並行の無蓋高杯が出土。他に土坑の調査、測量も行う。

8・2 B区の遺構の調査。SD-8の調査にかかる。須恵器を始めとして、数多くの土師器片が出土。また、極めて小型の手捏土器が数点出土した。

8・3 B区の遺構の調査。SD-8に掘り込まれていた遺構の測量完了後さらに掘り進む。埋土は大きく上下2層に分層された。P-1からは、叩石で蓋をした状態の弥生時代終末の完形の土器が出土。

8・6 B区の遺構の調査。SD-8を引き続き調査。基底面近くで灰色砂土を検出。SD-9・11の調査を開始。

8・7 B区の遺構の調査。ST-1, SD

—12・13の調査を開始。S T—1の床面でS K—16・17を検出。

8・8～9 B区の遺構の調査。引き続きS T—1・2の満査並びに実測を行う。S D—12からT K—208そのものと思われる杯蓋出土。S D—13からも比較的古い時期の須恵器が土師器に混じって数多く出土した。遺物出土状態の写真撮影。

8・20 調査を再開。B区の遺構の調査を引き続き行う。S X—3の調査に取り掛かる。

8・21 B区の遺構の調査。引き続きS X—3の調査を行う。底面より数基の土坑とピットを検出。ベルトコンベヤーと発電機を搬出する。

8・22～23 雨天のため現場作業は中止。



Fig. 1 水没したB区

8・24 終日2インチポンプを使用し、水汲みを行う。

8・27 B区の遺構の調査。S X—3の調査を再開する。埋土中から出土した遺物の取り上げ作業。底面から検出された遺構の調査を行う。S D—12・13の調査も引き続き行う。基底面は北西に向って傾斜している。

8・28 B区の遺構の調査。S X—3並びに

S K—24・25の調査を引き続き行う。S K—24は円形、S K—25は方形の土坑で、双方から多量の須恵器片と土師器片が出土した。特に、S K—25からは印石がセットで出土し注目される。

8・29 B区の完掘状態の写真撮影を行う。引き続き平面測量に取り掛かる。

8・30 B区の遺構の平面測量並びに発掘器材の片付けを行う。

8・31 B区の遺構の平面測量。

9・3 高知県教育委員会南国調査連絡所へ出土遺物コンテナケース約50箱分を運搬する。また、航空写真撮影のため高知空港より大方町上空まで飛行する。

9・4 B区の遺構平面測量を終了し、レベル測量に移る。

9・5 B区のレベル測量を行う。

9・6 新聞発表。B区のレベル測量を行う。

9・7 全遺構の実測を終える。

9・8 現地説明会を開催する。約180名が参加する。

これで、すべての調査を終了する。



Fig. 2 現地説明会

註

(1) 文化庁記念物課『全国遺跡地図 高知県』 昭和51年にその成果が収録されている。

第Ⅱ章 遺跡の地理的、歴史的環境

1. 地理的環境

大方町は、高知県の西南部に位置し、行政区画では幡多郡に属す。東を佐賀町、西と北の大半を中村市、北の一部を大正町の、1市2町と境を接する。面積112.51km²、人口11,020人（平成3年2月末現在）を有し、名勝として国の指定を受けた入野松原のある風光明媚な土地として広く知られるところである。

幡多地方、3市7町村の中では、総面積は7番目に位置する狭い土地ではあるが、耕地面積は町村の中では最も広く、比較的広い平野部を有しているといえる。町は、西部から東部にかけて山に囲まれ、南部は太平洋に面し、大きく19の部落からなっている。これらの部落の内、東端の瀬、西南部の田野瀬と出口以外はすべて中小の河川の流域に存する。中小河川の数は幡多地方の中では多い方で、6河川あり、東から伊田川（伊田）、有井川（有井川）、籠川（籠川、上田口）、濱川（奥濱川、口濱川、浮瀬）、加持川（大井川、加持川、入野）、躑躅川（馬荷、橘川、御坊瀬、上田口、下田口）の順に太平洋に流れ込んでいる。これら河川によって形成された沖積平野や舌状台地と海岸に面した海岸段丘上に遺跡が分布している。

現在の主要幹線道路は、海岸沿を東西に走る国道56号線が中心で、それから南北に県道と町道が派生した形となっている。鉄道も国道と同じく海岸沿を東西に土佐くろしお鉄道が走っており、東から有井川、土佐上川口、浮瀬、土佐入野、西大方の各駅が設置され、土佐入野駅は特急の停車駅にもなっている。

今回報告する早咲遺跡は、大方町で最も広い平野部を有す入野の東部に位置する。入野は加持川の西部に展開した平野部で、延長約3kmにも及ぶ入野の浜を有している。ほぼ全域が砂地であり、かつて入野全体が海であったことを物語っている。また、白鳳の大地震によって1つの村が海底に没したという伝説も残っている。入野一帯はこの砂地を利用した棘葦の栽培が盛んで、早咲遺跡も棘葦畑が大半を占めている。特に遺跡の立地する部分は、周辺より約1m程度高い微高地となっており、栽培に適しているとみられる。周囲は水田とビニールハウスが立ち並ぶのどかな農村風景が広がっているが、今回の道路改良工事で開通するバイパスの隣接



Fig. 3 大方町位置図

部分は近い将来宅地化することが十分予想される。今後は遺跡の重要性を認識し、遺跡の保護を含めて留意されるべきところであろう。

2. 歴史的環境

大方町の歴史を語る上で、忘れることができないものに尊良親王にまつわる伝説がある。中でも小袖貝の物語は有名でその悲劇を今日まで伝えている。⁽¹⁾ 伝説地も数多く、入野にはミヤゲの地名の残る土地もある。

このような伝説地であるためか遺跡数も多く、幡多地区では3市に次ぐ数を誇り、町村の中では際立っている。田ノ口古墳⁽²⁾や有井庄司墓⁽³⁾などの県指定の史跡も所在する。田ノ口古墳は幡多地区では数少ない古墳の1つで、幡多7町村の中では唯一の古墳である。有井庄司墓は尊良親王を慰め、護り、仕えた有井庄司の墓所で、数十の五輪塔、石仏が眾々と群集している。

遺跡全体を概観すると、縄文時代以降各時代の遺跡が存在する。このように各時代の綿々とした人間の生活の痕跡を取扱えるところは、幡多地区では、中村市、宿毛市、大方町だけで生活に適した土地があり、かつ、政治的にも重要視されていたことが推察される。古代幡多郡下5郷の一つ大方郷が設置されたことからも首肯できよう。このように多くの遺跡が立地する要因は、大方町が太平洋に面した比較的広い平野部と遺跡の立地に適する多く舌状台地や海岸段丘を有し、各谷々からは生活に必要な水を得ることの可能な河川が流れでていることによるともられる。中でも渋川流域と加持川流域に遺跡の分布が目立っている。以下各時代ごとに大方町87の遺跡について観てみることにする。

縄文時代

14遺跡が確認されている。大半が海岸部に位置し、轆⁽⁴⁾遺跡(7)、長門馴場遺跡(84)などが代表的な遺跡であるが、発掘調査によって詳細が判明している遺跡はなく、すべて表探等により石鏃や土器片が発見されたもので、その時期は縄文時代前期に遡るものもみられるが概ね縄文時代後期に位置付けることができる。この内、小坂口遺跡⁽⁵⁾も以前に縄文時代の石鏃が数点表探されており、平成2年度に高知西南国営開拓事業に伴う事前の試掘調査を実施したが遺構、遺物は確認されなかった。

なお、旧石器時代に位置付けられるものは、大方町では確認されておらず、県的にも発見例は僅かで、幡多地区では宿毛市宇須々木遺跡からナイフ形石器、中村市双海遺跡からナイフ形石器、同市双海本駄場遺跡から三稜石器が発見されている程度である。これに次ぐ遺跡としては、十和村十川駄場崎遺跡⁽⁶⁾があり、縄文時代草創期の豆粒文土器片や尖頭器が発見されている。

弥生時代

8遺跡が確認されており、今回調査した早咲遺跡⁽⁷⁾が代表的な遺跡である。ただし、発掘調査によって確認された遺跡は先の早咲遺跡だけである。立地をみた場合、防ノ駄場遺跡

(38)、庄田遺跡⁽¹⁰⁾のように舌状台地や丘陵上に立地した遺跡が多く、時期的にも中期後半以降のものであり、前期に遡る遺物、遺跡は発見されていない。中村市人田遺跡からは前期初頭の土器が発見されており、加持川や湊川下流域の低湿地からも将来発見される余地がないわけではない。現状では、今回出土したような叩目を持つ土器の時期が主流で、物部川流域のこの時期の遺跡同様、畿内地方の影響下にあったことを物語っている。⁽¹¹⁾

古墳時代

15遺跡が確認されている。幡多地区で、この時代の遺跡は中村市、宿毛市、大方町で確認されているのみで、他の1市6町村では全くこの時代の遺物、遺跡は発見されておらず、かつ、古墳もこの2市1町のみに存在するという特異な状況を呈する。

さて、代表的な遺跡としては、県史跡の田ノ口古墳⁽¹⁵⁾、早咲遺跡⁽¹³⁾を挙げることができる。田ノ口古墳は、明治40年に畠地の開墾の際に発見された古墳であり、横穴式石室を有す円墳で須恵器、瑪瑙製勾玉が出土した記録はあるが散逸し、今は知る由もなく、石室も玄室の一部を残すのみである。時期的には古墳時代後期、6世紀代のものとみられる。早咲遺跡については今回報告するわけであるが、概ね3世紀後半から4世紀前半にかけてと5世紀後半から6世紀前半にかけての遺跡とみることができ、遺物の性格からして、祭祀遺跡の色彩が濃く、また、県下では少ない古式須恵器が出土する遺跡としても注目される。早咲遺跡周辺には、⁽¹²⁾亀ノ甲遺跡⁽⁵⁸⁾、宇町ノ前遺跡⁽⁵⁶⁾、弘野遺跡⁽⁸⁾などがあり、特に亀ノ甲遺跡などのようないかほどの丘陵上に立地する遺跡には古墳が存在したのではないかとみられるが、現在は削平され、古墳時代の須恵器が散布する程度である。早咲遺跡の北約1.5kmの丘陵先端部には竹シマツ遺跡⁽⁵⁴⁾が所在する。当遺跡も、道路改良工事に先立って発掘調査を実施し、古墳時代の竪穴住居址2棟が確認されている。⁽¹⁴⁾早咲遺跡とは丘陵を1つ隔てた湊川流域にも、高知神遺跡⁽³⁵⁾、防ノ駄場遺跡⁽³⁸⁾、鞭遺跡⁽⁷⁾などの複合遺跡が所在し、防ノ駄場遺跡の南端部には、古墳ではないかと思われる個所がある。古墳とすれば、径約20mの円墳が想定されるが、周囲が開墾されており確認するまでには至っていない。大方町、延いては中村市や宿毛市でも言えることではあるが、古墳時代の遺跡は比較的多くあるにもかかわらず、古墳の数が極めて少ない。この要因が政治的要因なのか立地的、地理的要因によるものか結論を早急に出す必要はないが、今後発見される余地は少なからず残っているのではないかろうか。田ノ口古墳の立地を考えた場合、眺望の利かない部分に位置し、果して大方一帯を傘下に治めた小豪族の古墳であり得たのか疑問であり、今後再検討を要する問題である。事に依れば、幡多地区一帯が御座された状況にあったのかもしれない。ともかく、幡多地区を考える上で避けて通れない課題の1つではなかろうか。

奈良・平安時代

51遺跡が確認されている。ほとんどが複合遺跡であり、遺跡分布調査によって発見された遺跡が大半を占め、両時代の識別が難しく、大きく古代という範疇で捉えたもので奈良・平安時

代という表現を使用した。厳密には平安時代以降のものがその多くを占めるとみられる。

さて、この時代では特筆すべき 2 つの遺跡を挙げることができる。まず、第 1 は鹿々場古窯址（6）である。全容については未発掘のため不明であるが、少なくとも 4 基以上の須恵器窯で構成されていたと考えられ、幡多地区唯一の窯跡である。県下的にみても、県西部で確認されている窯跡は土佐市大の場窯跡、佐川町芝の端窯跡・花の木窯跡・堂ヶ鼻窯跡・東組窯跡の 5 カ所と当窯跡のみである。時期的には、灰原出土の須恵器から 8 世紀後半から 9 世紀頃のものと考えられる。第 2 は宮崎遺跡（87）である。当遺跡は加持川の支流である猿飼川の左岸に位置し、河川改修工事の際に発見された遺跡で、縄文陶器、転用硯を始めとして 9 世紀から 10 世紀に比定される須恵器、土師器が数多く出土している。縄文陶器は中村市風指遺跡などにもみられるが幡多地区では極めて珍しいもので、硯の出土はこの時期としては幡多地区唯一のものである。これら遺物の性格からして、官衙関係の遺跡と考えられ、郷家関連のものではなかったかと推察される。また、早咲遺跡からも 10 世紀に位置付けられる掘立柱建物跡や遺物が確認されており、周辺部からは布目瓦片も数点が出土している。これら以外にも古代に位置付けられる遺跡は数多くみられるが、発掘調査によって確認されたものではなく未知数の要素の強いものである。

中世

69 遺跡が確認されている。時期的には室町時代後半、戦国時代のものが大半で、この中世から遺跡数が急激に増加する。このことは県下的にもいえることで、至る所に存在するともいえ、各谷々の奥まで遺跡が分布している。この内、城跡が 26 カ所確認されており、約 38% を占める。

まず、主だった城跡を東から挙げると、伊田城跡（1）、有井城跡（3）、上川口城跡（23）、高山城跡（24）、浮津城跡（28）、浮鞭城跡（32）、米津城跡（5）、吹上城跡（9）、小川城跡（12）、鹿持城跡（11）、入野城跡（60）、馬荷城跡（78）、西本城跡（70）、岩合城跡（69）、蛎瀬城跡（81）、出口城跡（83）などがある。この内、浮鞭城跡、吹上城跡、小川城跡、入野城跡、蛎瀬城跡の 5 城跡以外は遺存状態が極めて良好で、堀切、堅堀、土壘が各所に残存し、詰、二ノ段等の平坦部も明瞭に確認できる。高山城跡では、幅約 10m、深さ約 3m の堀切が現存している。なお、各城跡の詳細については、大方町教育委員会が実施した中世城跡の調査があるので、ここではそれに譲ることにする。

これら城跡に伴う形で、所謂「土居」と呼称される場所がある。城主の屋敷を指す名称で、遺跡の可能性を強く秘めており、実際多数の遺跡を確認しているが、立地的に良い場所にあり、今日も宅地化しているところも少なくなく、確認には至っていないものもある。寺跡などについても同様なことがいえ、確認できなかったものが数多くあった。これら中世の遺跡を発見する中で、長曾我部地検帳が極めて有効であったことを付加しておきたい。

なお、鹿持城跡と田村遺跡（55）からは、それぞれ N 字口線をなす常滑の大堀が発見されており、ふるさと総合センターに復元展示されている。

近世

現在は、4遺跡を遺跡として取り扱っている。実際は、中世の遺跡以上に数多く存在しているわけであるが、現在実施している高知県一円の遺跡分布調査においては、近世以降について(20)限定したものに限って遺跡として扱っており、県的に近世の遺跡数の比率は低くなっている。

4遺跡の内、寺跡が3遺跡で、東から松山寺跡(18)、清源寺跡(22)、積善寺跡(68)が確認されている。これら寺跡は中世から存続したものである。残りの1遺跡は伊田の火立場跡(17)で、所謂幕末の狼煙場跡であり、黒船の襲来を高知城へ知らせたものと言われる。海岸部を有する幡多の市町村には数多くの火立場跡や砲台跡が現存している。

以上、大方町の遺跡について概観したが、複合遺跡が35遺跡と多いのも1つの特色であり、生活し得る土地が少ない故に、原始以来は同じ場所に住まざるを得なかつたのではないか。

大方町を始めとして、中村市、宿毛市は遺跡の最も集中する地域であり、幡多地区の約61%を占める。一方、計画、実施されている開発事業の大半は奇しくもこの地域と一致する。高知県も高速道路時代が近付いており、今後、埋蔵文化財保護に対する今一層の理解が求められよう。

註

- (1) 大方町教育委員会『大方町史』昭和38年3月30日に尊良親王に縛わる伝説は詳細に記載されている。
- (2) 高知県教育委員会『高知県遺跡詳細分布調査概報一幡多ブロッカー』昭和63年3月
- (3) 宿毛市に曾我山古墳、高岡山1・2号古墳の3基、中村市に古津賀古墳、土居山1・2号古墳、福重古墳の4基が確認されているのみである。
- (4) 大方町内には古墳ではないかとみられるものがあるが、確認には至っていない。なお、後述してある。
- (5) 『和名類聚抄』には土佐7郡の中の幡多郡下には大方(大方町)、宇和(中村市)、山田(宿毛市山奈町)、枚田(宿毛市平田町)、鯨野(上佐清水市)の5郷が記載されている。
- (6) 木村剛朗『姫島産・黒曜石の交易』『土佐考古学叢書2』1978年
- (7) 山口将仁「<土佐の考古学>高知県における後期旧石器時代の様相」『旧石器考古学』41
1990年11月
- (8) (7)と同じ
- (9) 1990年2月12日の高知新聞(朝刊)に記事が載っている。
- (10) 十和村教育委員会『十川駄場崎遺跡発掘調査報告書』1989年3月
- (11) 同本健児『高知県史—考古編』高知県 昭和43年
- (12) 土佐山田町ヒビノキ遺跡、林田遺跡、市国市東崎遺跡、金地遺跡などでは叩目を持った土器が主流を占めている。
- (13) 高知県教育委員会『高知県の指定文化財』昭和53年3月31日
- (14) 廣田佳久「県内遺跡からみた持ち込み文物、古式須恵器について」『土佐史談』第185号1990

年12月

- 03 平成3年度に宮崎遺跡ともども報告する予定である。

04 同じ

05 同じ

06 高知県教育委員会『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』1989年3月

07 大方町教育委員会『大方の中世城跡』1990年3月30日

08 高知県教育委員会では、昭和61年度から10カ年計画で県下一円の遺跡分布調査を実施しており、幡多ブロックと香美・長岡ブロックについては調査が終了している。

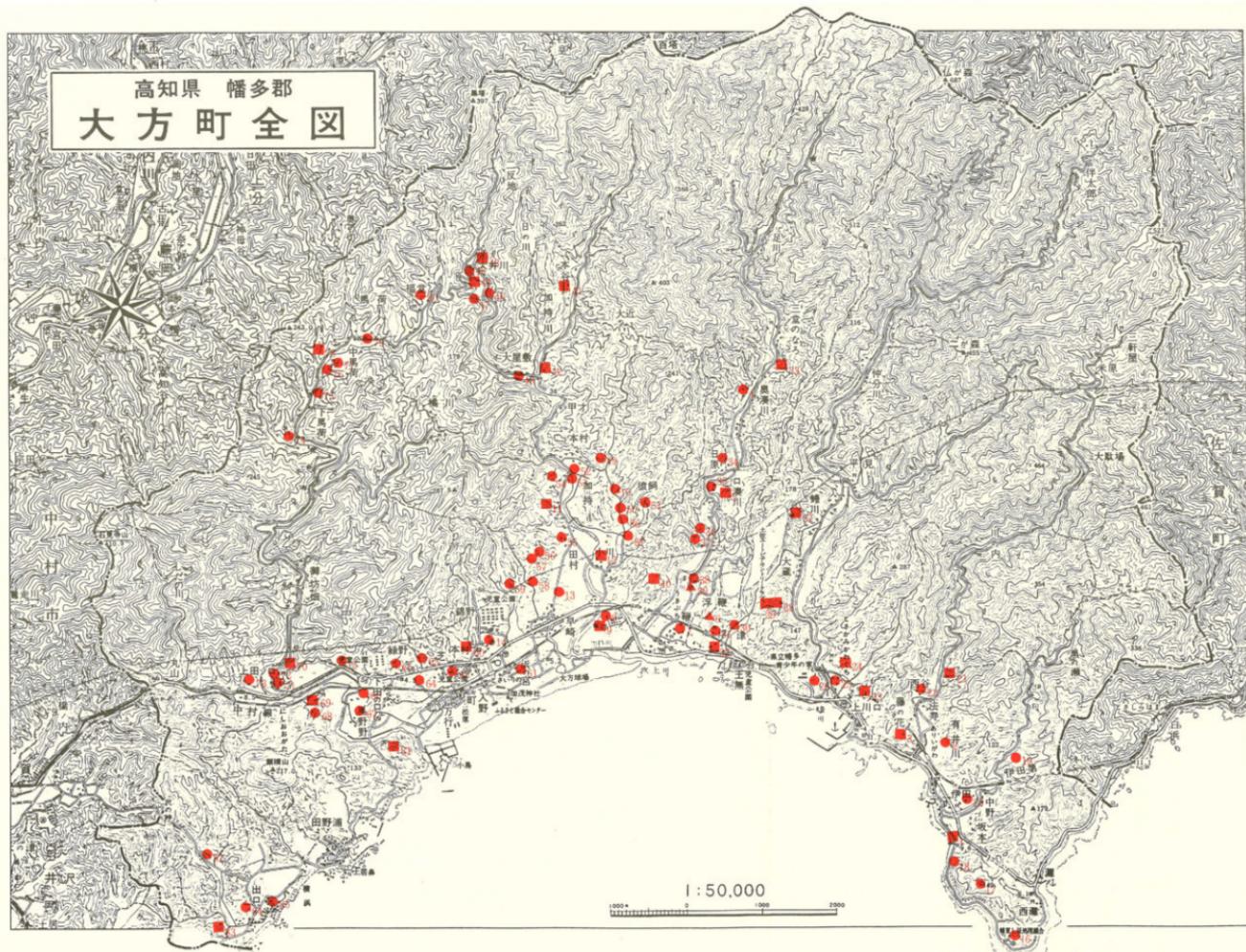


Fig. 4 大方町遭跡分布図

Tab. 1 大方町遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	種別	現況	時代	備考
1	伊田城跡	大方町伊田字古城	城跡	山林・墓地	中世	
2	有井庄司墓	タ 有井川字八幡神社	墓	墓地	タ	県史跡
3	有井城跡	タ タ 字ホキノ跡	城跡	山林	タ	
4	奥濱川遺跡	タ 奥濱川字中地顕敷	散布地	水田・畑	弥生・中世	
5	米津城跡	タ 口濱川字城山	城跡	山林	中世	
6	鹿々場窯跡	タ 浮櫛字鹿々場	窯跡	水田・畑	奈良・平安	
7	鞆遺跡	タ ホ 宇東ダバ・奥ダバ・色見ダバ他	散布地	畑・宅地	縄文～中世	
8	弘野遺跡	タ ホ 宇弘野	タ	畑・荒蕪地	縄文～平安	
9	吹上城跡	タ ホ 宇南旧城	城跡	山林・荒蕪地	中世	
10	庄田遺跡	タ 加持字庄田	散布地	畑	弥生～古墳	
11	鹿持城跡	タ ホ 宇古城	城跡	山林	中世	
12	小川城跡	タ ホ 宇平見	タ	タ	タ	
13	早咲遺跡	タ 入野字早咲	散布地	水田・畑	弥生～中世	県史跡
14	入野遺跡	タ ホ 宇大谷・タバタ他	タ	学校・畑	古墳	
15	田ノ口古墳	タ 下田ノ口字石ガミ	古墳	公園	タ	県史跡
16	伊の岬遺跡	タ 置字中ダバ	散布地	畑・荒蕪地	縄文	
17	伊田の火立場跡	タ ホ 宇火立場跡	猿煙場跡	山林	近世	
18	松山寺跡	タ 伊田字寺山	社寺跡	畑・墓地	中世～近世	
19	清水出遺跡	タ ホ 宇清水出	散布地	水田・畑	中世	
20	伊田遺跡	タ ホ 宇ホコデン	タ	タ	平安・中世	
21	北有井川城跡	タ 有井川字シロクビ・ヌタノダバ	城跡	山林	中世	
22	清源寺跡	タ ホ 宇橋本	社寺跡	荒蕪地	中世・近世	
23	上川口城跡	タ 上川口字岡野地山	城跡	山林	中世	
24	高山城跡	タ ホ 宇高山	タ	タ	タ	
25	上川口遺跡	タ ホ 宁西高山・中屋敷	散布地	畑・宅地	奈良～中世	
26	小柳山遺跡	タ ホ 宇鳥羽ノ谷・板屋カダバドモ	タ	畑・荒蕪地	縄文	
27	越川城跡	タ 越川3599-1・5・11-13	城跡	山林	中世	
28	浮津城跡	タ 浮櫛字城山・上城山	タ	タ	タ	
29	南浮津城跡	タ ホ 宇小城山	タ	タ	タ	
30	浮津遺跡	タ ホ 宇南千次ヤシキ・代僧・休場他	散布地	水田・畑	縄文～中世	
31	奥尾遺跡	タ ホ 宇前奥尾・西奥尾・田中谷他	タ	畑	奈良～中世	
32	浮櫛城跡	タ ホ 宇田城	城跡	畑・荒蕪地	中世	
33	大平城跡	タ 奥濱川字地蔵ノ上	地跡	山林	タ	
34	日原遺跡	タ 口濱川字ヒビ原	散布地	畑・宅地	奈良・平安	
35	高知神遺跡	タ ホ 宁高知神・新田	タ	水田・畑	縄文～中世	
36	コウカ遺跡	タ ホ 宇コウクワ	タ	畑・荒蕪地	中世	
37	寺尾遺跡	タ ホ 宇禹寺尾	タ	畑	奈良～中世	
38	防ノ駄馬遺跡	タ 浮櫛字防ノ駄馬・防ノ谷	タ	タ	縄文～中世	
39	鞍窓跡	タ ホ 宇ツエツチ	窓跡	畑・山林	奈良・平安	

番号	遺跡名	所 在 地	種別	現 態	時 代	備 考
40	曾我城跡	大方町浮藏字城ノ谷口	城 跡	山 林	中 世	
41	本谷城跡	* 加持川字下ケンギウ・ケンキウロ	タ	タ	タ	
42	加持川城跡	* * 宇城山・北汐水・東汐水	タ	タ	タ	
43	宮ノ川城跡	* 大井川字クサイガ峠山	タ	タ	タ	
44	大井川城跡	* * 字城ノ谷	タ	畑・道路	タ	一部掘削
45	大井川遺跡	* * 宇宮川屋敷	散布地	水 田・畑	タ	
46	長丁頭遺跡	* 加持川字長丁頭	タ	畑	タ	
47	アリノ木遺跡	* * 宇アリノ木	タ	タ	タ	
48	大塹敷遺跡	* * 字寺田・上林山・上林谷他	タ	畑・ハウス	縄 文	
49	花井川遺跡	* * 字上屋式	タ	畑	中 世	
50	正田歟遺跡	* * 字正田歟	タ	畑・山 林	平安・中世	
51	猿飼遺跡	* * 字サ子トウシ	タ	畑・果樹園	縄 文	
52	加持本村遺跡	* * 字イセキ	タ	水 田・畑	奈良～中世	
53	泉福寺跡	* * 字寺中	社寺跡	畑	タ	
54	竹シマツ遺跡	* * 字竹シマツ	散布地	畑・荒廃地	タ	
55	田村遺跡	* * 字田村ヤシキ・王子谷口	タ	畑・宅 地	タ	
56	宇町ノ前塚跡	* * 字ウチウマエ	タ	山 林・畑	古墳・中世	
57	岡崎遺跡	* 入野字岡崎	タ	タ	タ	
58	亀ノ甲遺跡	* * 字亀ノ甲	タ	畑	古墳～中世	
59	高知駄場遺跡	* * 字高知駄場・四拾石他	タ	タ	タ	
60	入野城跡	* * 字城山	城 跡	山 林・畑	中 世	
61	浜ノ宮遺跡	* * 字浜の宮・上万行・神上	散布地	畑・宅 地	タ	
62	入野本村遺跡	* * 字八幡屋敷	タ	タ	奈良～中世	
63	板取谷遺跡	* * 字板取谷	タ	畑・墓 地	タ	
64	芝遺跡	* * 字サッハイ・弓場・水留	タ	水 田・畑	タ	
65	東ヲゴウ遺跡	* 下田ノ口字東ヲゴウ・地ヲゴウ	タ	畑	古墳・中世	
66	カシワ遺跡	* * 字カシワ	タ	タ	古墳～中世	
67	下田ノ口遺跡	* * 字地イケノ谷	タ	タ	奈良～中世	
68	積善寺跡	* * 字イワカミ	社寺跡	山 林	中世・近世	
69	岩合城跡	* * 字ツボノソト	城 跡	タ	中 世	
70	西本城跡	* * 字タナダ・テッホウ田	タ	タ	タ	
71	上田ノ口遺跡	* 上田ノ口字荒神下・苗代	散布地	畑・宅 地	タ	
72	コビロウカ遺跡	* * 字ウヂカワ他	タ	タ	奈良～中世	
73	ムネノダバ遺跡	* * 字ヤマサキ他	タ	畑	タ	
74	下馬荷遺跡	* 馬荷字コヤノダバ	タ	タ	縄 文	
75	野中遺跡	* * 字野中・山方	タ	水 田・畑	中 世	
76	宗正寺遺跡	* * 字寺敷山・ヨリマセ	タ	タ	縄文・中世	
77	天神駄場遺跡	* * 字天神駄場	タ	畑	中 世	
78	馬荷城跡	* * 字城山	城 跡	山 林	タ	
79	中馬荷遺跡	* * 字上大田	散布地	畑・宅 地	タ	

番号	遺跡名	所在地	種別	現況	時代	備考
80	福堂遺跡	大方町馬衛字カヂヤシキ	散布地	畠・宅地	中世	
81	蜘蛛城跡	タ 田ノ浦字古城・古城東平・古城西平	城跡	山林	々	
82	小坂口遺跡	タ 出口字小坂口・シシボリ・西板本・新闇	散布地	水田・畠	繩文	
83	出口城跡	タ フ 字寺田・寺田谷	城跡	山林	中世	
84	長門駄場遺跡	タ フ 字長門ダバ・ヤマメダ・長門	散布地	畠	繩文	
85	上駄場遺跡	タ 出口字上ミノキシ・椿屋敷	々	畠・宅地	縄文・中世	
86	屋敷前遺跡	タ 加持字屋敷前	集落跡	水田	奈良・平安	
87	宮崎遺跡	タ フ 字宮崎	官衙間連遺跡	タ	々	

第Ⅲ章 調査の概要

1. 調査の方法

調査の契機は道路の改良工事であり、従って調査範囲も道路幅部分に限られた。道路は遺跡の南部を北西から南東に向って設定されており、調査対象範囲は幅10~12m、総延長約250mに及んだ。調査は、土地買収の関係等で2カ年に分けて実施された。

調査対象範囲が広範囲に及ぶため、平成元年度にまず、トラバース測量を行い合せて水準測量も実施した。基準点は、任意座標とし、X軸は真北に向う値を正、Y軸はX軸に直交する軸とし真東に向う値を正とするようにとり、TP 1~11までを設定した。トラバース測量は、TP 1の座標をX=200.000, Y=200.000とし、20秒読みのセオドライト、ニコンNTD-2C



Fig. 5 早咲遺跡周辺の地形図



Fig. 6 早咲遺跡調査区全体図

を使用して行った。なお、調査区西方の標高約24.0mを測る亀ノ甲の丘陵にある鉄塔を方位標とし、鉄塔Aと呼称した。測量結果はTab.2に記し、同時に実測した水準測量の結果も同表に記載した。

また、調査年度の関係もあり、調査区を北から順にA～F区に分けて調査を行った。平成元年度は、A・C・D・F区、平成2年度

はB・E区の調査をそれぞれ実施した。この内、B-Eにおいて遺構が確認されたため全面発掘調査を行った。調査対象面積は約3,360m²であり、最終的な発掘調査面積は1,527.5m²であった。なお、発掘調査面積の内訳は、第1次調査が632.5m²第2次調査が895m²である。



Fig. 7 トランバースポイント配置図(S = 1 : 3,000)

Tab. 2 トランバース測量座標成果一覧表

(路線名 早咲遺跡
測点名 TP1～TP11 実測精度1/26,780)

測角点	方向点	整正方向角	水平距離(m)	X (m)	Y (m)	座標点	標高 (m)
TP11	TP1	295° 59' 9"	53.625	200.000	200.000	TP1	4.125
TP1	TP2	300° 15' 14"	65.878	233.192	143.094	TP2	4.327
TP2	TP3	329° 52' 12"	31.092	260.083	127.487	TP3	4.658
TP3	TP4	184° 7' 56"	35.389	224.786	124.937	TP4	4.547
TP4	TP5	114° 59' 57"	59.167	199.938	178.633	TP5	4.155
TP5	TP6	117° 47' 44"	31.654	185.177	206.635	TP6	4.101
TP6	TP7	109° 47' 29"	29.454	175.204	234.349	TP7	3.905
TP7	TP8	110° 10' 8"	42.496	160.552	274.239	TP8	3.360
TP8	TP9	133° 17' 13"	70.203	112.417	325.342	TP9	2.726
TP9	TP10	339° 53' 5"	39.481	149.490	311.764	TP10	2.920
TP10	TP11	293° 1' 34"	69.062	176.504	248.204	TP11	3.716
TP11	TP1	295° 59' 9"	53.625	200.000	200.000	TP1	4.125
TP1	鉄塔A	265° 56' 14"	408.399	171.066	-207.373	鉄塔A	—
TP2	*	259° 56' 52"	355.931	*	*	*	—

2. 調査区の概要

本節では A～F 区の各調査区の概要並びに層序及び堆積層から出土した遺物について記すことにする。

(1) A区

調査対象地の北西端部で、当遺跡への道路の北の入口部分に当たる。調査対象面積は約462m²で、標高約4.65mを測る。調査は、まず南北2本の試掘トレンチを設定して行った。北側のトレンチは幅2.5m、長さ7.0mの南北トレンチで、TRA-1と呼称し、南側のトレンチは幅4.0m、長さ12.0mの南北トレンチで、TRA-2と呼称した。TRA-1では南端、TRA-2では南端と北端にサブトレンチをそれぞれ追加設定した。

調査の結果、遺物包含層及び遺構は確認されず、試掘調査(調査面積65.5m²)のみで調査を完了した。

層序

TRA-1では表土層以下第Ⅱ・Ⅲ層は2次堆積層で、第Ⅳ層が旧表土層となっており、TRA-2の第Ⅳ層に対応させることができる。第Ⅳ層削削中に湧水が認められた。

TRA-2もTRA-1とは同じ堆積状態を呈しており、第Ⅳ層下部から湧水が認められた。第V層中から須恵器の小破片が数点出土したが、流れ込みによるものと考えられる。

これらのことから判断すると、当時このA区は早咲遺跡本体より一段低くなった丁度当遺跡の縁辺部、即ち西端部に当たるのではないかと推察される。なお、客土されたのはごく最近、戦後以降ではないかとみられる。



Fig. 8 A区周辺図とトレンチ設定図 (S = 1 : 750)

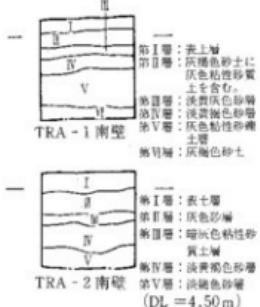


Fig. 9 A区上層柱状図 (S = 1 : 60)

(2) B区

A区とは農道を境として東西約11m、南北約50mの細長い調査区で、北西から南東にかけて伸びる。2次調査の際の最後の調査区で調査面積は537m²であった。

調査は、第1次調査の際C区において多数の遺構が確認されており、B区においても遺構の存在が十分想定されたため試掘調査は行わず、当初から全面発掘とした。ただし、A区においては全く遺構が検出されておらず、B区全域に遺構が存在するとは考え難かった。

調査の結果、竪穴住居址2軒、土坑28基、溝跡15条、性格不明遺構3基及び多数のピットがほぼ全域から検出された。遺物には弥生土器、土師器、須恵器、近世陶磁器類等があり、中でも土師器の出土量が目立った。総点数約25,000点、コンテナケース約33箱分が出土している。これら遺構、遺物の時代は、概ね弥生時代後期後半、古墳時代後期（5世紀後半～6世紀前半）、近世（18世紀後半以降）の3時期に区分することができ、この中では古墳時代後期、特に6世紀前半の遺構、遺物が多く検出されている。

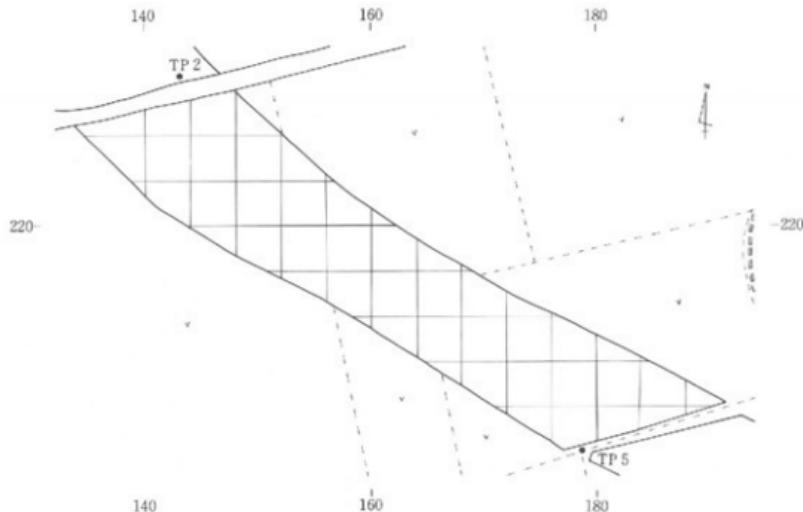
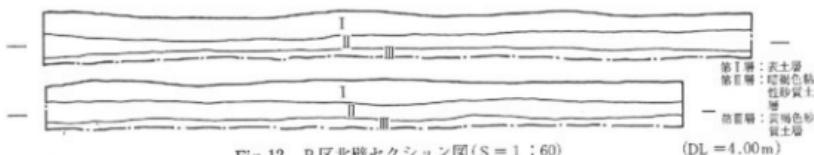


Fig. 10 降雨時のB区

(雨水が浸透し浮き上がって見えるのが遺構である)

Fig. 11 B区周辺図とグリッド設定図(S = 1 : 500)

Fig. 12 B区北壁セクション図 ($S = 1 : 60$)

(DL = 4.00m)

層序

B区において認められた基本層序は以下の通りである。

第Ⅰ層 表土層

第Ⅱ層 暗褐色粘性砂質土層

第Ⅲ層 黄褐色砂質土層

層位中、遺構が検出されたのは第Ⅲ層上面であった。C～E区においてもほぼ同じ状況を呈していた。

第Ⅰ層の表土層は、現在の耕作土であり、厚さ20～30cmを測る。畑地であり、畝状をなす。

第Ⅱ層は遺物包含層で、多量の遺物を包含している個所が数ヵ所あった。しかし、前述のように近世の遺構もあり、かなりの部分で掘り込まれていることが考えられ、プライマリーな遺物包含層とは言い難い。また、砂地であるが故に識別し辛く、分層に苦慮したのも事実である。ただし、基本的には古墳時代後期（6世紀前半）の遺物包含層と考えることができよう。

第Ⅲ層は自然堆積層で、遺構検出面となっている。遺構の埋土との差異は、粘質土を含むか含まないかであり、粘質土を含む場合は色調もやや黒色を帯びており、識別可能である。中には全く粘質土を含まない遺構（特に、S Xに多い）もあった。その場合は、赤褐色を帯び、かつ、自然堆積層に比べ硬質であった。また、本土層は厚さ50～60cmで堆積し、下層は灰色砂層となる。この段階で、湧水が認められ、さらに50～60cm下には粘土層が認められる。このため、水分がある一定以上になれば、遺構の基底面からも湧水することになる。

第Ⅱ層出土遺物

弥生土器、土師器（Fig. 44～45）

3の甕と24の鉢が弥生土器である以外はすべて土師器である。1は二重口縁の甕で、2は台付甕の脚台部とみられる。216の台付鉢のそれより一回り大きいものである。3～22は甕で、3の外面には横方向の叩目が一面に残存する。内面と口縁部外面にハケ調整を加える。4～6はB-2-d類、7・8はB-3-a類、9～11はB-3-e類、12～16はB-3-f類、17・18はB-3-g類、19はc類にそれぞれ形態分類されるものである。これら弥生土器、土師器の形態分類については第V章1で詳述してあるのでそれを参照していただきたい。なお、4～19の甕は基本的には口縁部をヨコナデ調整、他をナデ調整で仕上げるもので、概ね古墳時代後期（6世紀前半後）に位置付けることができよう。20は甕の底部で丸底となっており、外

面に粘土の接合痕が残る。21～23は把手で、21・22は同一個体のものとみられる。23は瓶の把手ではなかろうか。24は平底の鉢でコップ状をなすものである。25は丸底の鉢で、椀状をなす。26は口縁部が体部から短く外反する鉢である。小型丸底壺の祖形とみられるものである。27～30は高杯で、27・28は杯部口縁が外反する。29のそれは外上方へ直線的に伸びる。また、28の杯部は極めて深いものである。30は小型の高杯で、裾部は中実の脚部から大きく聞く。

須恵器 (Fig. 57)

290～295は杯蓋である。稜が断面三角形をなすもの (290)、段となるもの (291)、円線によって表現されるもの (292～294)、若干屈曲させることにより稜とみせるもの (295) と形態的に差異が認められ、時期差を見出すことができる。296～300は杯身である。296のようにたち上がりが高く、端部が外傾する浅い凹面をなすものもあるが、他は、たち上がり高が1cm前後で内傾し、端部は丸く仕上げられるか細く仕上げられるかどちらかである。301は高杯で、脚は比較的短い。302は壺の蓋で、内面には内下方を向くかえりが付く。303は極めて小さい短頭壺で、口縁部は短く内傾する。304は普通の短頭壺で、口縁部は短く直上を向く。305は大型の短頭壺で、口縁部は短く内傾する。306・307は壺で、306の口縁部は大きく外反し、端部は肥厚され内傾する平面をなす。307は大型の壺で、口縁部は外反し、端部を肥厚する。

石製品 (Fig. 63～408～410)

3点とも叩石で、すべて手の半に乗る程度の大きさのものであり、両面中央部に比較的深い敲打痕が残る。

(3) C区

B区の南側に隣接し、D区とは農道を境とする台形状の調査区で、第1次調査の際A区に引き続き調査を実施した。調査面積は157m²であった。

調査は、まず、調査区中央部に南北

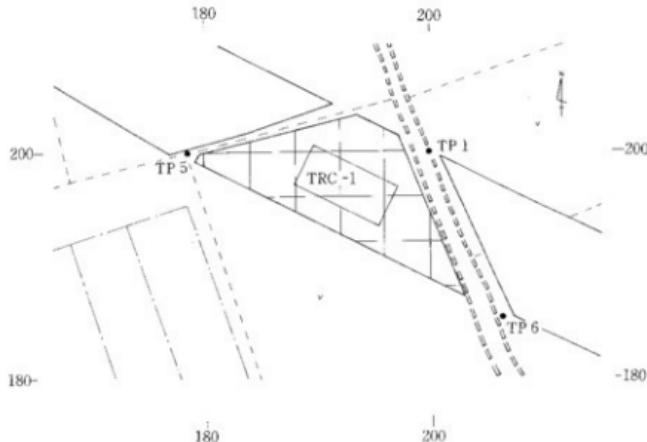


Fig. 13 C区周辺図とグリッド設定図 (S = 1 : 500)

4.0m、東西12.0mの試掘トレンチT R C - 1を設定して行った。その結果、第Ⅲ層上面より遺構が検出されたため、全面発掘することとした。調査時点では、B区は未買収地であり、かつD区との間には農道があったため極めて狭い調査区とならざるを得なかった。

調査の結果、土坑17基、溝跡4条、性格不明遺構3基及び多数のピットがほぼ全城から検出された。遺物には弥生土器、土師器、手捏土器、須恵器、近世陶磁器類、土製品、石製品等があり、弥生土器の出土がやや目立つ程度であった。総点数約15,000点、コンテナケース約20箱分が出土している。これら遺構、遺物の時期は、概ね弥生時代中期末から古墳時代初頭、古墳時代後期（6世紀前半）、近世（19世紀以降）の3時期に区分することができ、弥生時代後期後半と古墳時代後期（6世紀前半）の遺構、遺物の比率がやや高かった。

層序

C区において認められた基本層序は以下の通りである。

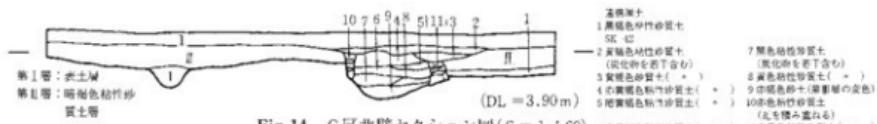
第Ⅰ層 表土層

第Ⅱ層 暗褐色粘性砂質土層

第Ⅲ層 黄褐色砂質土層

層位中、遺構が検出されたのは第Ⅲ層上面であり、B区とは全く同じ堆積状態を呈していた。

なお、第Ⅰ層の表土層は、現在の耕作土であり、厚さ約25cmを測る畑地である。第Ⅱ層は遺物包含層であるが、各所で近世以降の遺構によって掘り込まれており、良好な状態で残っている部分は少なかった。また、B区のように遺物がまとまって出土するといったような状態を呈する個所は確認されていない。



第Ⅰ・Ⅱ層出土遺物

弥生土器、土師器 (Fig. 47-60 ~ Fig. 48-85)

60~62は第Ⅰ層から出土したもので、60が弥生土器、他は土師器である。60は壺で、口縁部は大きく開き、端部を上方に拡張する。61は鉢で、椀状をなすもので、底部は浅く杯と表現し得るものである。62は高杯の脚部で、内面にはしばり目、外面上にはヘラ状工具によるナデ調整が施される。

63~85は第Ⅱ層から出土したもので、弥生土器と土師器が混在する。63は円線文を有す弥生中期末の土器で、今回の遺物の中では最も古いものの1つに位置付けられる。64は二重口縁の壺で、口縁外面には6条の波状文が施される。65も壺で、口縁部はラッパ状に開く。66~69は土師器の壺で、66は球形に近い胴部に外傾する比較的長い口縁部が付く。外面上には右上がりの

細い叩目が残る。67の口縁部は外傾した後、外反する。68は口縁部の破片で、内湾気味にたち上がる。外面にはハケ調整の後に下から上へのヘラ磨きが一面に施される。69は、68のような口縁部が付くものであり、胴部はやや扁平である。70・72は甕で、72が弥生土器である。口縁部はすべて胴部から外反して上がる。72の胴部外面には横方向の叩目が残る。72・73は弥生土器の壺の底部である。74は土師器の甕の底部である。75は甕の把手である。77・81は鉢で、77・78は平底であり、79・81は丸底である。79の底部外面には僅かに叩目が残る。82・83は高杯で脚部のみが残存する。82は中実、83は大きく開く。84・85は器台で、84の脚部には円孔が3方に穿たれる。85は中実の脚部から裾部は内湾気味に開く。

粗製土器 (Fig. 56-273・274)

手捏土器で、273は球形をなし、指頭で成形してある。274は椀状をなすものである。

須恵器 (Fig. 59-343-346)

343が第Ⅰ層から出土した以外は、第Ⅱ層から出土した。343は甕で、口縁部の破片である。344は杯蓋で、稜は口縁部の屈曲で識別できる程度である。345は高杯で、裾部はハの字形に開く脚部から屈曲し、端部は肥厚され外傾する平面をなす。346は短頸甕で、口頭部は内傾し、端部を細く仕上げる。口頭部外面にはヘラ状工具によるとみられる圧痕が残る。

陶磁器類 (Fig. 60-374・375)

2点とも伊万里Ⅲ期の所謂、紅猪口と言われるもので、外面には条線が一面に施される。第Ⅱ層出土として挙げたが、近世の遺構掘削の際に混入したものとみられる。

石製品 (Fig. 64-428- Fig. 65-431, Fig. 67-461・462)

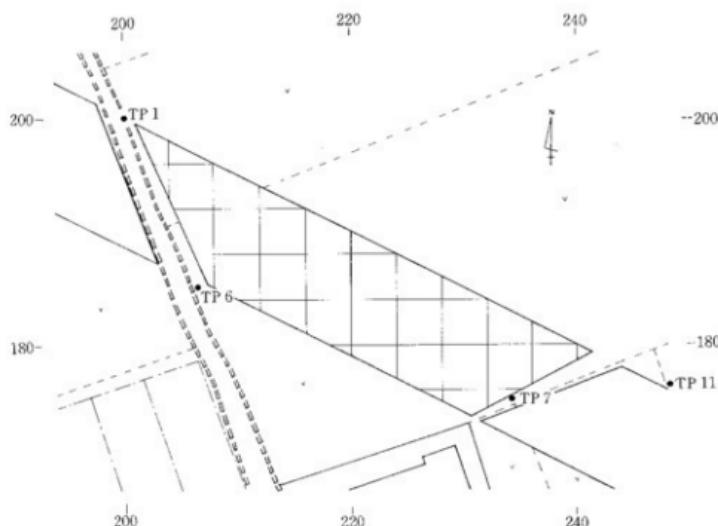
428~431の4点とも第Ⅱ層から出土した叩石で、すべて手の平に乗る程度のものである。429以外は両面と側面にそれぞれ敲打痕が残る。461・462は砾石で、461は2面、462は4面をそれぞれ使用している。461は第Ⅰ層、462は第Ⅱ層出土である。

(4) D区

C区とは農道を境とし、E区に隣接する細長い調査区で、第1次調査の際C区に引き続き調査を実施した。調査面積は402m²であった。

調査は、C区で遺構が検出されたこともあり、当初から全面発掘とした。調査時点ではE区の大半が未買収地であったため、E区とは畑の境で区切ることとした。

調査の結果、堅穴住居址3軒、掘立柱建物跡1棟、土坑32基、溝跡11条、性格不明遺構3基及び多数のピットが全域から検出された。遺物には弥生土器、土師器、手捏土器、須恵器、陶磁器類、土製品、石製品等があり、弥生時代終末から古墳時代前期にかけての土器の出土が多かった。総点数約24,000点、コンテナケース約32箱分が出土している。これら遺構、遺物の時期は、概ね前述の時期、古墳時代後期（6世紀前半）、近世（19世紀以降）の3時期に区分することができる。また、S T - 4とS X - 8から遺物が多量に出土したこと、S X - 7のような掘り方のはっきりしない近世以降の落ち込みによって数多くの遺構が破壊されていたことなど

Fig. 15 D区周辺図とグリッド設定図 ($S = 1 : 500$)

を本調査区の特徴として挙げることもできよう。

層序

D区において認められた基本層序は以下の通りである。

第Ⅰ層 表土層

第Ⅱ層 黄褐色砂質土層

層位中、遺構が検出されたのは第Ⅱ層上面であり、B・C区で認められた暗褐色粘性砂質土層ではなく、表土層直下が遺構検出面であった。本調査区の第Ⅱ層がB・C区の第Ⅲ層に対応するものである。B・C区のような第Ⅱ層が遺存しなかったのは、周囲に比べ標高が高かったため後世削平された結果とみられ、多量の土器片が地表に散布しているのもその結果といえよう。

第Ⅰ層出土遺物

弦生土器、土師器 (Fig. 49-104-115)

111-113以外は土師器である。104-110は壺で、口縁部が胴部からくの字形をなすもの (104・105) と外反して上がるもの (106-110) がある。104の外面には細い叩目が残る。106の胴部には推定径約4.0cmの円孔を造り付けている。111-113は壺の底部とみられるものである。114は鉢で、椀状をなすものである。115は杯の底部の破片で、底部外面は回転糸切りである。11世紀頃のものとみられる。

粗製土器 (Fig. 56-275-277)

手捏土器で、3点とも碗状をなす。275・277は、器面を比較的丁寧に調整してあるが、276の器面には指頭圧痕が明瞭に残存する。

須恵器 (Fig. 60-357-361)

357は杯蓋で、後は凹線による。358・359は杯身で、358のたら上がりは比較的長く内傾して伸び、端部は外傾する凹面をなす。359のそれは短く内傾して伸び、端部は細い。360は高杯で、口縁部外面には断面三角形の凸帯が巡る。361は高杯の脚で、ハの字形に開く脚部外面には回転カキ目調整が施される。

土製品 (Fig. 61-392・393, Fig. 62-400-404)

392・393は上師質の土鍤で、概ね円筒形を呈す。400・401は土製模造鏡で、中央部に鏡を造り出す。402-404は土製円板で、片面に格子状の刻線を施す。402・403はヘラ状工具、404は棒状工具によるとみられる。

石製品 (Fig. 65-435-439)

5点とも叩石で、すべて手の平に乗る程度の大きさのもので、438以外は両面中央部と側面にそれぞれ敲打痕が残る。

(5) E区

D区の南側に隣接し、東西に走る町道と境を接するやや細長い調査区で、第2次調査の際に最初に調査を実施した。調査面積は358m²であった。

調査は、第1次調査の結果から本調査区でも遺構の存在が十分想定されたため、試掘調査は行なわず、当初から全面発掘することとした。なお、F区とは約1mの比高差がある。

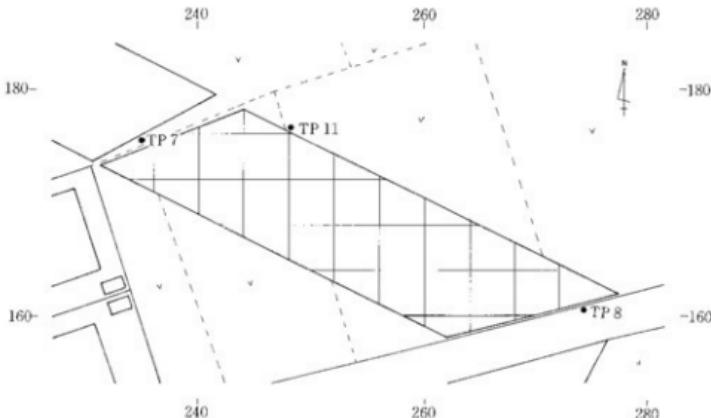


Fig. 16 E区周辺図とグリッド設定図 (S = 1 : 500)

調査の結果、堅穴住居址 1 軒、堅穴状遺構 2 軒、土坑 31 基、溝跡 4 条、性格不明遺構 4 基及び多数のピットが全域から検出された。遺物には弥生土器、土師器、手握土器、須恵器、土製品、石製品等があり、弥生土器の出土が目立った。総点数約 15,000 点、コンテナケース約 20 箱分が出土している。これら遺構、遺物の時期は、弥生時代後期後半～終末、古墳時代後期（6 世紀前半）、近世（19 世紀以降）の 3 時期に区分することができる。

層序

E 区において認められた基本層序は以下の通りである。

第Ⅰ層 表土層

第Ⅱ層 黄褐色砂質土層

層位中、遺構が検出されたのは第Ⅱ層上面であり、B・C 区で認められた暗褐色粘性砂質土層ではなく、D 区と全く同じ堆積状態を呈していた。なお、検出面は南東方向にやや傾斜していた。

第Ⅰ層出土遺物

弥生土器、土師器（Fig. 54-235-238）

235-237 は鉢で、すべて丸底である。235・236 は椀状をなすものである。237 は、口縁部が底部から外反するもので、底部外面には僅かではあるが叩目が残る。238 は高杯で、脚部内面にはしばり目、外面には叩目が残る。

粗製土器（Fig. 56-286）

手握土器で、皿状をなし、底部はやや尖り気味である。

石製品（Fig. 67-454）

叩石で、手の平には乗る程度の大きさのもので、両面ほぼ中央に弱い敲打痕が残る。

(6) F 区

E 区とは東西に走る町道を挟んだ南側で、南北約 120m に及ぶ調査区である。調査区は標高約 2.50m を測る水田で、E 区との比高差は約 1 m である。標高が低い関係で水田は當時溼田のような状態であった。

調査は、まず調査区を南北 2 つに分け、それぞれに東西 2 m、南北 3 m の試掘トレンチを設定して行った。北部の試掘トレンチを T R F - 1、南部の試掘トレンチを T R F - 2 と呼称した。

調査の結果、遺構、遺物包含層は確認されず、試掘調査（調査面積 12m²）のみで調査を完了した。

層序

T R F - 1・2 で確認された層序は以下の通りである。

T R F - 1

第Ⅰ層 表土層

第Ⅱ層 灰色砂質土層

第Ⅲ層 暗褐色砂質土層

第Ⅳ層 灰色シルト層

TRF-2

第Ⅰ層 表土層

第Ⅱ層 灰褐色砂層

第Ⅲ層 灰黑色粘性砂質土層

第Ⅳ層 灰色粘性砂質土層

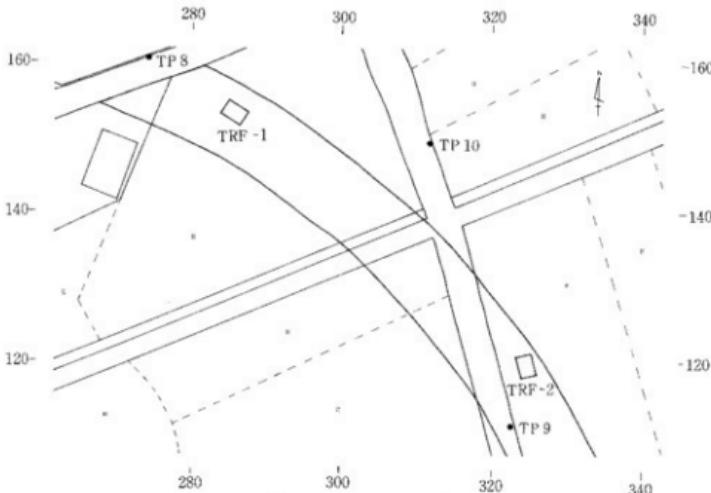


Fig. 17 F区周辺図とトレーナー設定図($S = 1 : 750$)

TRF-1 の第Ⅰ層は現在の耕作土層、第Ⅱ・Ⅲ層は旧耕作土層、第Ⅳ層は自然堆積層である。TRF-2 の第Ⅰ層も現在の耕作土層、第Ⅱ～Ⅳ層は自然堆積層である。各トレーナー、各層、どこからも遺物は出土しなかった。

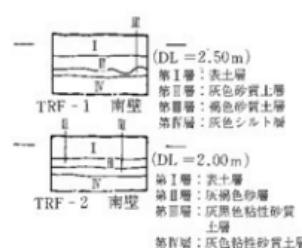


Fig. 18 F区土層柱状図($S = 1 : 40$)

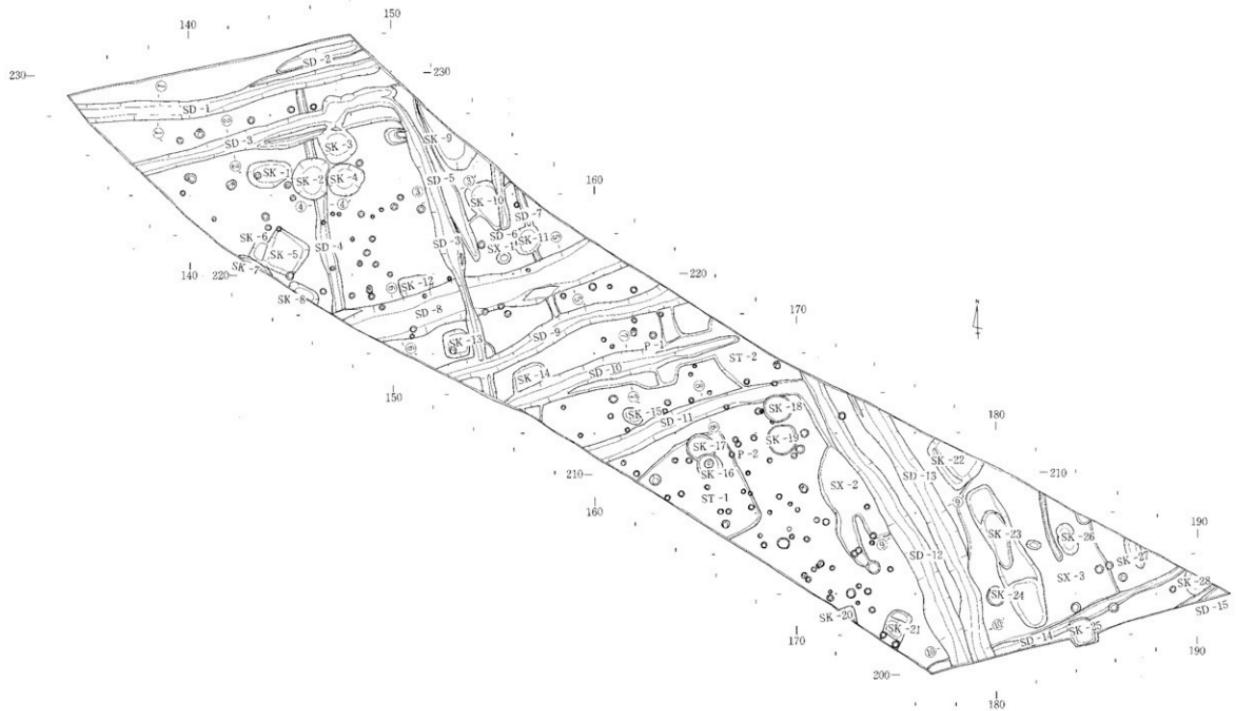


Fig. 19 B区造構平面図 ($S = 1 : 200$)

第IV章 遺構

本章では、遺構が確認された調査区ごとに主だった遺構について、堅穴住居址又は堅穴状遺構、掘立柱建物跡、土坑、溝跡、性格不明遺構、その他の遺構の順に事実記載を掲げることとする。なお、記載しなかった遺構については各遺構の計測表に譲ることとした。また、出土遺物が細片であり復元できず掲載していない遺構については計測表の備考欄に概ねの時期を記載してあるので参照していただきたい。

今回の調査で遺構が確認されたのはB～E区で、確認された遺構の総数は、堅穴住居址又は堅穴状遺構8軒、掘立柱建物跡1棟、土坑108基、溝跡34条、性格不明遺構13基及び大半が柱穴ではないかとみられるピット397個であった。これら遺構の内、B区のSK-24・25、C区のSK-30、D区のSK-54、E区のST-6・8などは比較的遺存状態が良く、出土遺物は良好な括遺物であって、絶好の基準資料となり得るものである。また、D区のST-4も、SX-8、P-14・15との重複関係はあるが、ほぼ一定時期の遺物が多量に出土しており、古墳時代前期を考える上で貴重な資料を提示している。

1. B区

(1) 堅穴住居址

ST-1 (Fig. 20)

ST-1は、調査区南東部で検出した堅穴住居址である。約3分の1が調査区外にあるが、ほぼ全容を知ることができる。遺構は4個のピットに掘り込まれ、2基の土坑を掘削していた。平面形は方形で、一辺5.00m程度のものである。長軸方向はN-26°-Wである。壁はほぼ平坦な床面から緩やかに上がる個所とやや角度を持って上がる個所とがあるが、全般に遺存状態は不良で壁高は5～10cm程度であった。床面の標高は3.787～3.874mを測る。埋土は黒褐色粘性砂質土單一層であった。付属遺構として10個のピットを検出した。この内主柱穴と考えられるのはP-1～3で、他の主柱穴は調査区外にあるとみられ、本来は4本柱で檻を支えていたのではないかと推測される。主柱穴の規模は、P-1が径53cm、深さ38cm、P-2が径30cm、深さ26cm、P-3が径30cm、深さ20cmであり、柱間距離はP-1・2間が2.00m、P-2・3間が3.25mを測る。また、他のピットの中には主柱穴とはほぼ同規模のものもあり、建替えが行われた可能性もある。出土遺物は、須恵器と土師器が中心であるが、混入したとみられる弥生土器片も数片みられた。この内、399の土製模造品は特殊な文様が施され、かつ類例も極めて少ないので注目される。

ST - 2

ST - 2 は、調査区南東部、ST - 1 の北隣りで検出した堅穴住居址である。遺構の大半が調査区外にあり、詳細は不明といわざるを得ない。また、遺構は SD - 10 - 13 に掘り込まれていた。平面形は円形とみられ、径約 6.00m 程度ではなかろうか。壁はほぼ平坦な床面から急角度で短く上がり、壁高約 17cm と遺存状態は良くない。床面の標高は 3,666 ~ 3,728cm を測る。埋土は赤褐色粘性砂質土單一層であった。付属遺構として 3 個の小ピットを検出したが、調査部分が狭いためどのよう

な性格のものであったか不明確といわざるを得ない。出土遺物としては、叩目のある弦生土器片が十数点と叩石が 1 点あった。前者については、細片で復元できるものはなかった。

(2) 土坑

SK - 1

SK - 1 は、調査区北西部で検出した土坑である。平面形は不整橢円形で、長辺 2.19m、短辺 1.37m、深さ 0.14m を測る。長軸方向は N - 83° - E である。断面形は舟底形を呈し、一見鉢状をなす。壁は底面から緩やかに上がる。底面西端より径 33cm、深さ 14cm のピット 1 個を検出した。埋土は暗褐色粘性砂質土單一層であった。出土遺物は極めて少なく、須恵器片、土師器片、伊万里の碗片が数点あったのみで、復元できるものはなかった。

SK - 3・4 (Fig. 22)

2 基とも調査区北西部で検出した土坑である。平面形は、SK - 3 が不整形で長辺 1.83m、短辺 1.60m、深さ 0.40m、SK - 4 が不整円形で長辺 1.72m、短辺 1.64m、深さ 0.27m をそれぞれ測る。長軸方向は、SK - 3 が N - 27° - W、SK - 4 が N - 63° - W である。断面形は 2

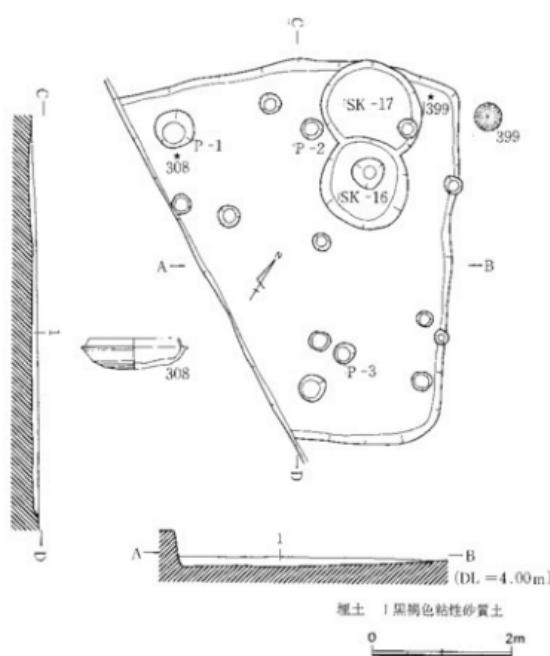


Fig. 20 ST - 1

基とも舟底形を呈し、壁は底面から緩やかに上がる。埋土は、SK-4が暗褐色粘性砂質土單一層であるのに対し、SK-3は3層に分層された。出土遺物は2基とも19世紀以降とみられる陶器片が数点出土したのみであり、復元できるものはなかった。

SK-5 (Fig. 21)

SK-5は、調査区西北部で検出した土坑である。遺構はSK-6を切って、ピット2個に掘り込まれていた。平面形は方形で、長辺約2.00m、深さ0.14mを測る。長軸方向はN-60°-Wである。断面形は逆台形を呈し、壁は平坦な底面からたち上る。埋土は黒色粘性砂質土單一層であった。遺物には上層から散乱した状態で出土した弥生土器片があり、内1点が復元できた。

SK-10 (Fig. 22)

SK-10は、調査区北部、SD-6に切られた状態で検出した土坑である。平面形は不整形で、長辺2.65m、短辺1.45m、深さ0.13mを測る。長軸方向はN-24°-Wである。断面形は舟底形を呈し、壁は底面から緩やかに上がる。埋土は灰黒色粘性砂質土單一層であった。遺物には、弥生土器片もあるが、近世陶磁器もあり、復元できたのは唐津系の刷毛目の鉢(371)1点のみであった。

SK-11 (Fig. 22)

SK-11は、調査区北部、SX-1の底面で検出した土坑で、SX-1とは埋土が異なり識別されるが、時期的にはほとんど隔たりはない。遺構は古墳時代後期の溝SD-7に切られている。平面形は隅丸方形で、長辺1.38m、短辺1.35m、深さ0.21mを測る。長軸方向はN-9°-Wである。断面形は逆台形を呈し、壁は平坦な底面から角度を持って上がる。埋土は上下2層に分層され、上層が赤褐色粘性砂質土、下層が黒色粘性砂質土であった。出土遺物には、弥生土器片があったが、復元できるものはなかった。

SK-16・17 (Fig. 22)

2基とも調査区南東部、ST-1の床面で検出した土坑で、ST-1とは埋土が異なり識別される。平面形は、SK-16が不整形で、長辺1.31m、短辺1.23m、深さ0.29m、SK-17が円形で、径1.41m、深さ0.09mをそれぞれ測る。断面形は2基とも舟底形を呈し、壁は底面から緩やかに上がる。SK-16の底面にはピット状の浅い落ち込みが認められ、SK-17はST-1のピット1個に掘り込まれていた。埋土は、SK-16が黒色粘性砂質土單一層、SK-17が暗褐色粘性砂質土單一層であった。遺物には、それぞれ須恵器片、土師器片が数点あったのみであった。



Fig. 21 SK-5 遺物出土状態

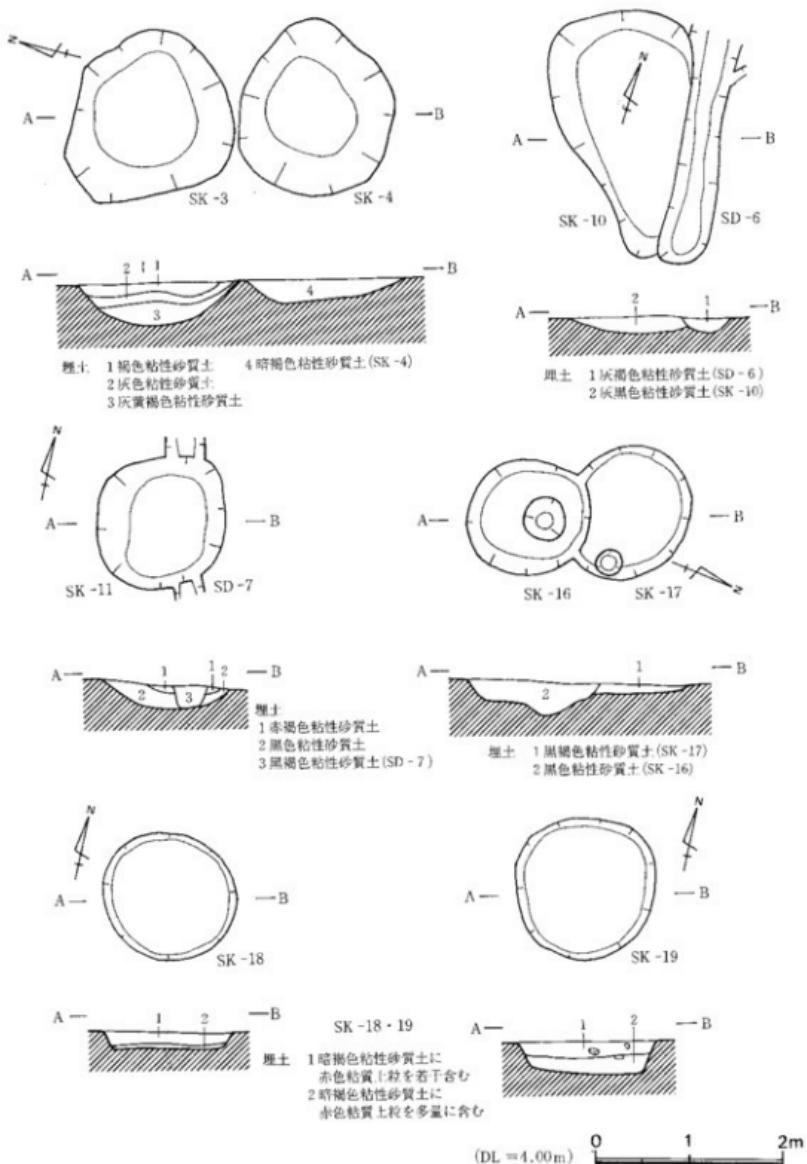


Fig. 22 SK - 3 · 4 · 10 · 11 · 16 · 19, SD - 6 · 7

SK - 18 (Fig. 22)

SK - 18は、調査区南東部で検出した土坑で、SD - 11を切って掘り込まれていた。平面形は円形で、径1.43m、深さ0.18mを測る。断面形は逆台形を呈し、壁は底面から急角度でたち上がる。埋土は上下2層に分層され、上層が暗褐色粘性砂質土に赤色粘質土粒を若干含むもの、下層が暗褐色粘性砂質土に赤色粘質土粒を多量に含むものであった。遺物は、19世紀以降の陶器が主であり、図示した土錐は混入したものとみられる。

SK - 19 (Fig. 22)

SK - 19は、SK - 18の南側に隣接する土坑である。平面形は円形で、径1.50m、深さ0.34mを測る。断面形は逆台形を呈し、壁は底面から急角度でたち上がる。埋土はSK - 18と全く同じであった。遺物も、SK - 18同様19世紀以降の陶磁器が主であり、図示した叩石は混入したものとみられる。

SK - 22 (Fig. 23)

SK - 22は、調査区南東部で検出した土坑である。造構の約1/2が調査区外にある。平面形は方形で、長辺2.62m、短辺1.99m以上、深さ0.30mを測る。長軸方向はN - 36° - Wである。

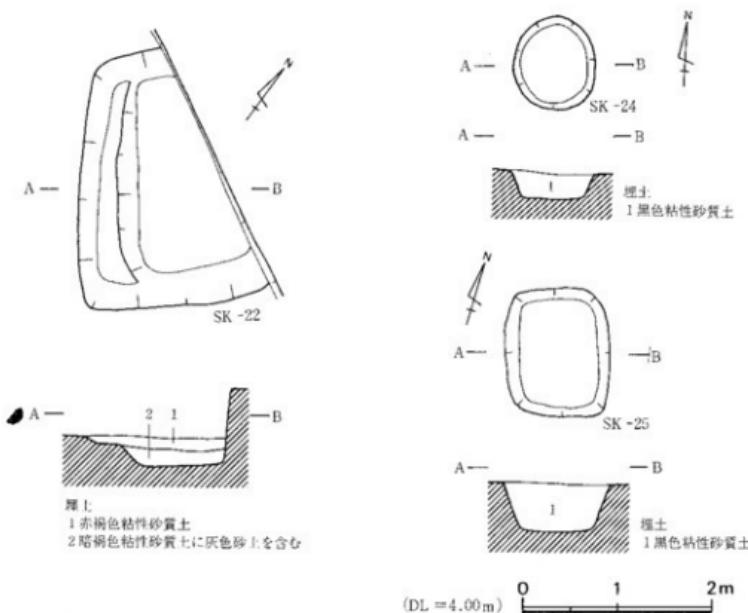


Fig. 23 SK - 22 · 24 · 25

断面形は逆台形を呈し、壁は底面から急角度でたち上がる。また、西側の壁は段状をなしている。埋土は上下2層に分層され、上層が赤褐色粘性砂質土、下層が暗褐色粘性砂質土に灰色砂土を部分的に含むものであった。遺物には、須恵器、土師器があり、各1点が復元できた。

S K - 24 (Fig. 23)

S K - 24は、調査区南東端で検出した土坑で、S X - 3を掘り込んでいた。平面形は不整形で、長辺0.98m、短辺0.83m、深さ0.29mを測る。長軸方向はN - 4° - Wである。断面形は逆台形を呈し、壁は底面から急角度でたち上がる。埋土は黒色粘性砂質土單一層であった。遺物は、須恵器、土師器が中心に出土した。復元できたのは土師器5点、須恵器1点であった。

S K - 25 (Fig. 23)

S K - 25は、調査区南東約4.0mのところで検出した土坑である。平面形は方形で、長辺1.35m、短辺1.12m、深さ0.45mを測る。長軸方向はN - 12° - Wである。断面形は逆台形を呈し、壁は平坦な底面から急角度ないし垂直に近い角度でたち上がる。埋土はS K - 24と同じ黒色粘性砂質土單一層であった。遺物もS K - 24と同様に須恵器、土師器が中心に出土した。中でも叩石がセットで出土しており、使用方法を考察する上で注目される。なお、復元できたのは土師器6点、須恵器6点、叩石3点であった。

(3) 溝跡

S D - 1 (Fig. 24)

S D - 1は、調査区北西端で検出した東西に伸びる溝跡である。溝は、幅0.80 - 1.18m、深さ0.26 - 0.29m、検出長15.00mを測る。主軸方向は概ねN - 79° - Eである。断面形はU字形を呈し、壁は底面からやや角度を持って上がる。基底面はほぼ水平である。埋土は灰褐色粘性砂質土單一層であった。遺物は、近世の陶磁器が主に出土したが、図示できたのは混入とみられる弥生土器1点と叩石1点であった。

S D - 3 (Fig. 24)

S D - 3は、調査区北西端で検出した東西と南北に伸びる溝跡で、S D - 1と並行する。溝は、幅0.70 - 1.47m、深さ0.18 - 0.35m、検出長29.20mを測る。東西の方向は概ねN - 74° - Eで、南北の方向はこの方向にはば直交する。断面形は逆台形を呈し、壁は底面から急角度で上がる。埋土は、單一層をなす部分と2層に分層される部分があるが、概ね灰褐色 - 暗褐色粘性砂質土である。遺物はS D - 1同様近世陶磁器が中心に出土し、復元できたのは近世陶磁器2点と混入とみられる叩石4点であった。

S D - 4 (Fig. 24)

S D - 4は、調査区北西部で検出した南北に伸びる細長い溝跡である。溝は、幅0.54 - 0.75m、深さ5 - 7cm、検出長11.40mを測る。主軸方向は概ねN - 7° - Wである。断面形は舟底形を呈し、壁は底面から緩やかに上がる。埋土は赤褐色粘性砂質土單一層であった。遺物は僅かで須恵器の細片が数点出土したのみであった。

SD-8 (Fig. 24)

SD-8は、調査区中央部やや北寄りで検出した東西に伸びる比較的幅の広い溝跡である。溝は、幅1.30~2.09m、深さ0.20~0.33m、検出長12.80mを測る。主軸方向はN-73°-Eである。断面形は舟底形を呈し、壁は底面から緩やかに上がる。また、基底面は西に向って約13cmの比高差で傾斜している。埋土は上下2層に分層され、上層は赤褐色粘性砂質土、下層は灰色砂土となっており、当時は東から西に向って流れていたとみられる。遺物では、須恵器、土師器が中心に数多く出土したが、細片が多く図示できたのは、弥生土器の支脚1点、手捏土器6点、須恵器9点、叩石1点であった。

SD-9~11 (Fig. 24)

3条とも調査区中央部で検出した東西に伸びる溝跡で、時期的にSD-12・13とはほぼ同じであり、SD-9・10はSD-12・13と繋がる可能性がある。溝は、幅1.50m前後、深さ0.25m前後、検出長約12.00mを測る。主軸方向もほぼN-70°-E前後である。断面形も舟底形を呈す。埋土は基本的に黒褐色粘性砂質土で、2層に分層される例もある。遺物では、上師器、須恵器が中心に出土したが、出土量は僅かで図示できたのは各遺構とも須恵器1点であった。

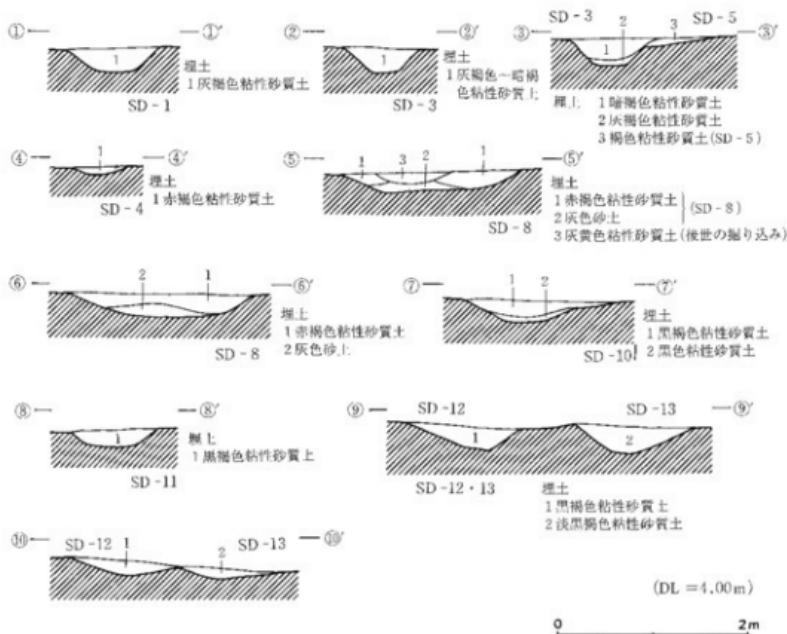


Fig. 24 SD セクション図 1

S D - 12・13 (Fig. 24)

2条とも調査区南東部で検出した南北に伸びる溝跡で、S D - 12がS D - 13を切っているが、時期的には隔たりはほとんどないとみられる。また、前述のようにS D - 9・10とは一連の可能性もある。溝は、幅1.00m前後、深さ0.30m前後、検出長約15.00mを測る。主軸方向はほぼN-30°-Wである。断面も舟底形を呈す。埋土は黒褐色粘性砂質土單一層で、S D - 13の方が若干薄い。遺物では、須恵器、上師器が中心に出土したが、弥生土器の混入も認められた。中でもS D - 12から古式須恵器（T K - 208）が出土しており注目される。

(4) 性格不明遺構

S X - 1

S X - 1は、調査区北部で検出した遺構で、当初竪穴作居址ではないかと考えたが、南側がS D - 8等と重複しており、掘り方が残存せず、確認するには至らなかった。平面形は不整形で、長辺5.28m、短辺4.40m、深さ0.13mを測る。壁はほぼ平坦な底面から角度を持って上がっている。埋土は赤褐色粘性砂質土單一層である。遺物では、弥生土器が出土しており、図示できた甕1点と手捏土器1点であった。この甕は西端、S D - 5と接するピット（径34cm、深さ21cm）から出土した。

S X - 2

S X - 2は、調査区南東部で検出した明確な掘り方を持たない染み状の遺構である。遺構は不整形で、長辺6.16m、短辺2.16m、深さ9cmを測る。埋土は赤褐色粘性砂質土單一層である。遺物では、須恵器と土師器の細片が多く出土しているが、図示できたのは須恵器1点であった。

S X - 3

S X - 3は、調査区南東端で検出した明確な掘り方を持たない窪地状の遺構である。遺構は不整方形で、長辺11.20m、短辺6.88m、深さ0.21mを測る。埋土は黒褐色粘性砂質土單一層である。底面からS K - 23のような弥生時代後期後半の遺構を検出しており、遺物の中では土師器や須恵器に混って弥生土器の出土もあった。

(5) その他の遺構

遺構の大半はピットであり、その多くは建物跡等の確認には至らなかったが柱穴ではないかとみられるものである。掘り方はほぼ円形で、埋土は黒褐色粘性砂質土を呈すものがほとんどであった。遺物には、叩目のある弥生土器、古墳時代の上師器と須恵器等があり、今回復元できたのは弥生土器の甕（59）とそれに蓋をした状態で出土した叩石（427）及び土錘（390）であった。前者はP - 1、後者はP - 2から出土している。

P - 1

P - 1は、調査区中央部、S D - 9と10の間で検出した円形のピットで、径38cm、深さ13cmを測る。埋土は赤褐色粘性砂質土であった。

P - 2

P - 2は、調査区南東部、S T - 1の東隣りで検出した円形のピットで、径27cm、深さ24cmを測る。埋土は黒褐色粘性砂質土であった。

2. C区

(1) 土坑

SK - 30 (Fig. 26)

SK - 30は、調査区北西部、S X - 4の底面から検出した土坑である。平面形は不整梢円形で、長辺1.16m、短辺1.03m、深さ0.31mを測る。長軸方向はN - 85° - Wである。断面形は逆台形状を呈し、西壁以外は段状をなし、壁は底面から急角度で上がる。埋土は黒色粘性砂質土單一層であった。遺物には、土師器、須恵器、叩石等があり、土師器4点、須恵器4点、叩石1点が復元できた。また、珍しい須恵器として、杯蓋の口縁部外面とみられる個所にヘラ状工具で浅い刻目を等間隔に施したものがある。

SK - 34 (Fig. 26)

SK - 34は、調査区中央部南寄りで検出した土坑である。平面形は不整円形で、長辺1.24m、短辺1.20m、深さ0.16mを測る。長軸方向はN - 60° - Eである。断面形は逆台形を呈し、壁

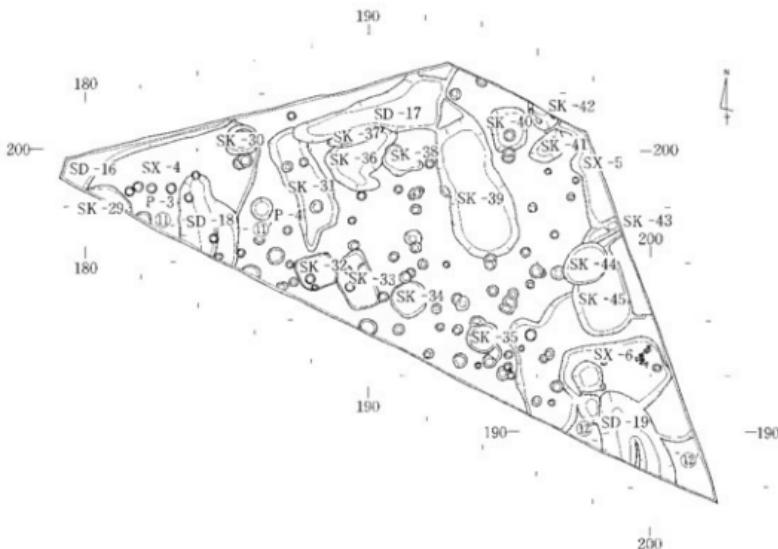


Fig. 25 C区遺構平面図 (S = 1 : 200)

は底面から急角度でたち上がる。埋土は2層に分層され、灰色砂土の部分と赤褐色粘土の部分とがある。19世紀以降、比較的新しい時代のものとみられる。

S K - 39

S K - 39は、調査区中央部北寄りで検出した土坑で、当初溝跡ではないかと考えたものである。平面形は大きな舟形で、長辺5.65m、短辺2.00m、深さ0.30mを測る。長軸方向はN-19°-Wである。断面形は逆台形を呈し、壁は平坦な底面からたち上がる。埋土は暗褐色粘性砂質土單一層であった。遺物には須恵器、土師器も含まれるが、近世以降の陶磁器片が出土しており、SK - 34とほぼ同じ時期ではなかろうか。また、SK - 44・45も同じ時期のものである。

S K - 40 (Fig. 26)

S K - 40は、調査区北部で検出した土坑で、南壁にはピットが掘り込まれる。平面形は隅丸方形で、長辺1.54m、短辺1.27m、深さ0.10mを測る。長軸方向はN-5°-Wである。断面形は逆台形を呈し、壁は平坦な底面から急角度で上がる。底面中央部からピット1個を検出した。埋土は黒色粘性砂質土單一層であった。遺物には、須恵器、土師器があるが、細片で復元できるものはなかった。

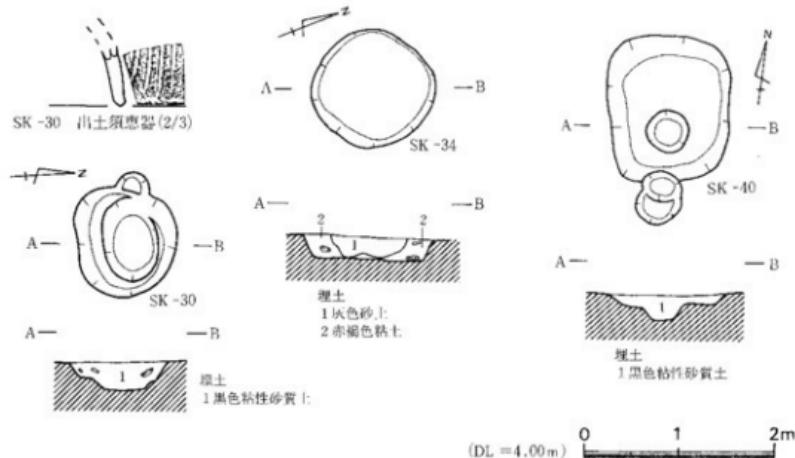


Fig. 26 SK - 30 · 34 · 40

S K - 41 (Fig. 27)

S K - 41は、調査区北部、SK - 40の東隣りで検出した土坑である。平面形は不整梢円形で、長辺1.35m、短辺0.79m、深さ5cmを測る。長軸方向はN-58°-Eである。断面形は舟底形を呈し、壁は底面から緩やかに上がる。底面から杭穴4個を検出した。埋土は焼土と炭化物の

包含量により4層に分層される。遺物は、西壁部分からほぼ完形の平底の鉢(90)1点が出土したのみであった。

(2) 溝跡

SD - 16

SD - 16は、調査区西北端で検出した東西に伸びる溝跡であり、B区南東端で検出したSD - 15と位置関係から一連のものであるとみられる。溝は、幅1.05m以上、深さ0.13~21cm、検出長6.20mを測る。主軸方向はN - 75° - Eである。断面形は逆台形を呈し、壁は底面から急角度で上がる。埋土は暗褐色粘性砂質土單一層である。遺物には須恵器、土師器片も含まれるが、その大半は近世陶磁器であった。

SD - 18 (Fig. 28)

SD - 18は、調査区西部で検出した南北に伸びる溝跡で、SX - 4の底面から検出した。溝は、幅1.17~2.09m、深さ0.24~0.26m、検出長2.80mを測る。主軸方向はN - 8° - Wである。断面形は舟底形を呈し、壁は、南に傾斜する底面から緩やかに上がる。埋土は黒色粘性砂質土單一層である。遺物は、土師器、須恵器が主に出土するが、図示できたのは須恵器(351)と叩石(433)の2点であった。

SD - 19 (Fig. 28)

SD - 19は、調査区南東端で検出した南北に伸びる溝跡で、SX - 6を切って掘り込んでいた。溝は、幅1.79~2.10m、深さ0.20~0.31m、検出長4.00mを測る。主軸方向はN - 21° - Wである。断面形は舟底形を呈し、基底面から約20cmの所で東西2条に分れる。壁は南に傾斜する底面から緩やかに上がる。埋土は黒色粘性砂質土單一層である。遺物では、須恵器、土師器の細片が数点出土していた。

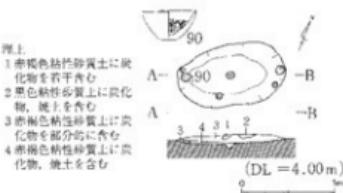


Fig. 27 SK - 41遺物出土状態

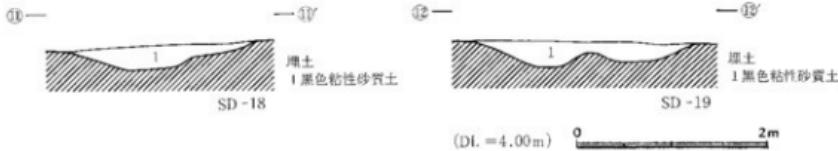


Fig. 28 SD セクション図2

(3) 性格不明遺構

SX - 4

SX - 4は、調査区西部で検出した明確な掘り方を持たない染み状の遺構である。遺構は不整形で、長辺5.84m、短辺3.60m、深さ4cmを測る。埋土は赤褐色粘性砂質土單一層である。

遺物には、須恵器、土師器等があり、復元できたのは土師器1点(91)、須恵器4点(352~355)、磨石1点(434)であった。

S X - 6

S X - 6は、調査区南東部で検出した明確な掘り方を持たない遺構であるが、土器が比較的まとまって出土しており、堅穴住居址ないし堅穴状遺構の可能性もあるが確認するには至っていない。遺構は不整形で、長辺5.36m、短辺4.64m、深さ0.14mを測る。底面から数個のピットを検出した。埋土は黒色粘性砂質土單一層である。遺物は比較的多く出土しており、11点が復元できた。

(4) その他の遺構

遺構の大半はピットであり、その多くは建物跡等の確認には至らなかったが柱穴ではないかとみられるものである。掘り方はほぼ円形で、埋土は暗褐色ないし黒褐色粘性砂質土である。今回、復元可能な遺物が出土したのはP-3とP-4である。

P - 3

P-3は、調査区西端、S X - 4に掘り込まれていた円形のピットで、径37cm、深さ25cmを測る。埋土は暗褐色粘性砂質土であった。素焼の小皿(377)1点が出土している。

P - 4

P-4は、調査区西部で検出した円形の比較的大きなピットで、径77cm、深さ19cmを測る。埋土は黒褐色粘性砂質土であった。須恵器の杯身(356)1点が出土している。

3. D区

(1) 堅穴住居址

S T - 3 (Fig. 30)

S T - 3は、調査区中央部北端、S X - 7を掘り下げた段階で検出した堅穴住居址である。約3分の1が調査区外にあり、S X - 7にかなりの部分が掘削されており、遺存状態が良好であるとは言い難い。平面形は基本的に方形とみられるが歪みがみられ、一边4.0~5.0m程度のものとみられる。長軸方向はN-15°-Wである。壁はほぼ平坦な床面から角度を持って上がり、壁高は8~28cmである。床面の標高は3.395~3.415mを測る。埋土は2層に分層され、黒色粘性砂質土の個所と黒褐色粘性砂質土の個所とがあった。付属遺構として6個のピットを検出した。この内主柱穴と考えられるのはP-1~3で、他の主柱穴は調査区外にあるとみられ、本来は4本柱で棟を支えていたのではないかと推考される。主柱穴の規模はP-1が径29cm、深さ13cm、P-2が径54~64cm、深さ16cm、P-3が径34~38cm、深さ19cmであり、柱間距離はP-1・2間が2.00m、P-2・3間が1.80mを測る。また、P-4も径28cm、深さ9cmとP-1よりやや小さいが主柱穴の1つとなり得るものである。遺物はほとんどが細片で、復元できたのは、甌(116)、甕(117)、鉢(118~120)であった。

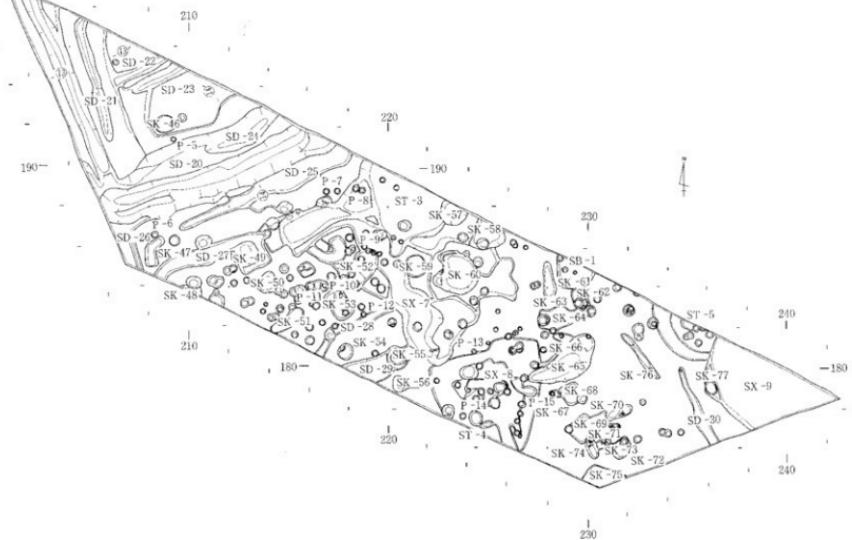


Fig. 29 D区遺構平面図 ($S = 1 : 200$)

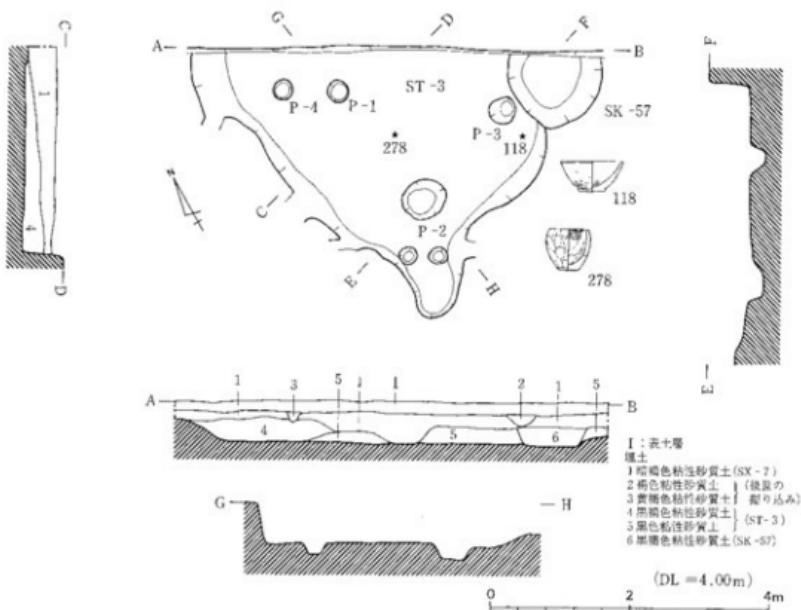


Fig. 30 ST - 3, SK - 57

S T - 4 (Fig. 31)

S T - 4 は、調査区南東部で検出した堅穴住居址であり、 S K - 65 に切られ、 S X - 8, P - 14・15 を掘削していた。平面形は基本形に方形と考えるが、各所に歪みがみられる。一応、長辺 5.65 m、短辺 5.50 m を測る。長軸方向は N - 14° - W である。壁は床面から角度を持って上がるが、遺存状態はやや不良で壁高は 10 cm 程度である。床面の標高は 3.618 ~ 3.737 m を測る。埋土は基本的に黒褐色粘性砂質土であるが、一部褐色粘性砂質土が堆積している箇所もあった。付属造構として大小 18 個のピットを検出したが、造構自体が S X - 8 等を掘削しているためピットの相関関係を十分明確にし得なかった。しかし、一応 P - 1 ~ 4 が主柱穴となり得るのではないかとみられ、本来は 4 本柱で棟を支えていたと考えられる。それらピットの規模は、P - 1 が径 42 cm、深さ 13 cm、P - 2 が径 28 ~ 39 cm、深さ 26 cm、P - 3 が径 70 cm、深さ 28 cm、P - 4 が径 67 ~ 88 cm、深さ 24 cm である。遺物は多量に出土し、甕、壺、瓶、鉢、高杯の各器種が挿う。

S T - 5

S T - 5 は、調査区南東部で検出した堅穴住居址であり、約 3 分の 2 が調査区外にある。また、造構は東端を S X - 9 に掘り込まれていた。平面形は円形で、径約 5.00 m と推測される。

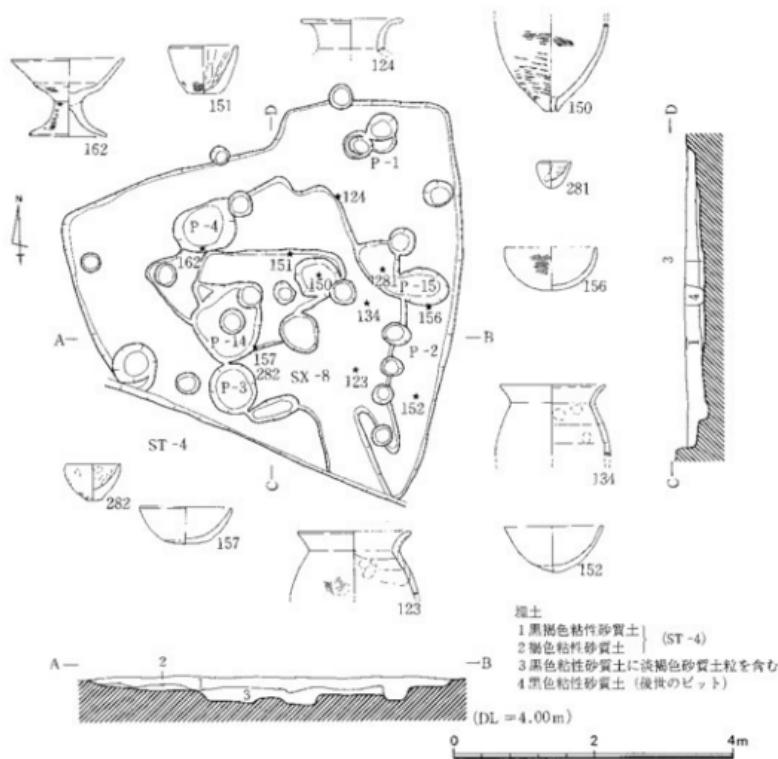


Fig. 31 ST-4, SX-8, P-14・15

壁は床面、段部からそれぞれ角度を持って上がり、壁高は約20cmである。床面の標高は3.447m～3.512mを測る。埋土は赤褐色粘性砂質土單一層であった。付属遺構として7個のピットとベッド状遺構を検出した。主柱穴については残存部分が少なく、不明確と言わざるを得ない。遺物は極めて少なく、かつ、細片で図示できるものはなかった。

(2) 掘立柱建物跡

S B - 1

S B - 1は、調査区南東部で検出した桁行2間以上(3.75m, 12.5尺)以上、梁間2間(総長4.5m, 15尺)の南北棟掘立柱建物跡である。棟方向は、N-6°47'-Wであるが、棟にやや歪みがみられる。柱間寸法は、桁行が1.8m(6尺)と1.95m(6.5尺)、梁間が1.95m(6.5尺)と2.25m(8.5尺)とまちまちである。柱穴の掘り方は円形で、梁の柱径が大きく径60cm、深

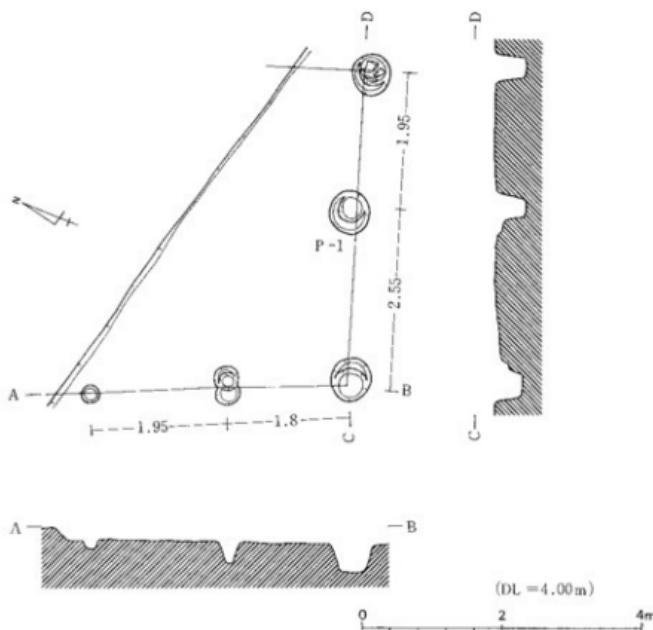


Fig. 32 SB - 1

さ36~41cmを測り、南東隅の柱穴底面から碇板に使用したとみられる3個の縁を検出した。柱の柱穴は径25~35cm、深さ20cm前後と小さなものである。底面の標高は3.304~3.703mを測る。埋土は黒褐色粘性砂質土であった。遺物は、土師器が僅かに出土した程度で、杯(164)1点が復元できた。この杯は妻柱の真中の柱穴(P-1)から出土したもので、検出面直下と基底面からそれぞれ破片が検出された。

(3) 土坑

SK-50

SK-50は、調査区中央部西寄りで検出した土坑である。平面形は不整形で、長辺1.12m、短辺0.95m、深さ0.38mを測る。長軸方向はN-45°-Eである。断面形は逆台形を呈し、壁は底面から急角度で上がる。南側に段部を有す。埋土は黒褐色粘性砂質土單一層であった。遺物は、土師器を中心に出土しており、他に須恵器片十数点と叩石があり、叩石(444)のみが図示できた。

SK-52

SK-52は、調査区中央部で検出した土坑で、SX-9を切って掘り込まれていた。平面形

は不整形で、長辺1.51m、短辺1.01m、深さ0.14mを測る。長軸方向はN-28°-Wである。断面形は逆台形を呈し、壁は底面から短く上がる。底面からは3個のビットが検出された。埋土は暗褐色粘性砂質土單一層であった。遺物には、須恵器、土師器もあるが、輝管が出土しており、時期的には近世のものとみられる。また、SX-7を掘り込んでいることからもそのことはいえよう。

S K - 53 (Fig. 33)

S K - 53は、調査区中央部、S K - 52の南隣りで検出した土坑である。平面形は隅九方形で、長辺1.61m、短辺1.01m、深さ0.45mを測る。長軸方向はN-29°-Wである。断面形は概ね逆台形を呈し、壁は3段になった底面から角度を持って上がる。また、底面から1個のビットを検出した。埋土は赤褐色粘性砂質土單一層であった。遺物は土師器が大半であったが、細片で図示できたのは鉢(166)と叩石(445)であった。なお、叩石はビット直上から出土した。

S K - 54 (Fig. 33)

S K - 54は、調査区中央部、S D - 28とS D - 29の間で検出した土坑である。平面形は円形で、径0.78m、深さ0.22mを測る。断面形は逆台形を呈し、壁は平坦な底面から角度を持って上がる。底面西端に梢円形の浅い落込みがある。埋土は黒褐色粘質土單一層であった。遺物は比較的まとまって出土しており、高杯(167)、壺(168-170)、土製円板(405)、大型の砥石(467)が復元できた。

S K - 57 (Fig. 30)

S K - 57は、調査区中央部北端で検出した土坑で、ST-3を切り、SX-7に掘り込まれていた。平面形は不整円形で、長辺1.36m、短辺1.03m以上、深さ0.17mを測る。主軸方向はN-59°-Wである。断面形は舟底形を呈し、壁は底面よりやや角度を持って上がる。埋土は黒褐色粘性砂質土單一層であった。遺物は、土師器片が十数点出土したのみで、壺の底部(171)1点が図示できた。

S K - 59

S K - 59は、調査区中央部、SX-7の底面で検出した土坑である。平面形は円形で、径1.10m、深さ4cmを測る。断面形は逆台形を呈し、壁は底面より短くたち上がる。埋土は黒褐色粘性砂質土單一層であった。遺物は、土師器片が約20点ほど出土しており、壺の底部(172)1点が図示できた。

S K - 60 (Fig. 33)

S K - 60は、調査区中央部、SX-7の底面で検出した土坑である。平面形は不整円形で、長辺2.05m、短辺1.85m、深さ0.49mを測る。長軸方向はN-8°-Eである。断面形は逆台形を呈し、壁は平坦な底面から急角度でたち上がる。また、西壁には南北2カ所に段部がある。埋土は2層に分層されるが基本的には暗褐色粘性砂質土が主である。遺物には土師器から近世陶磁器まであるが、図示できたのは砥石(468)1点であった。

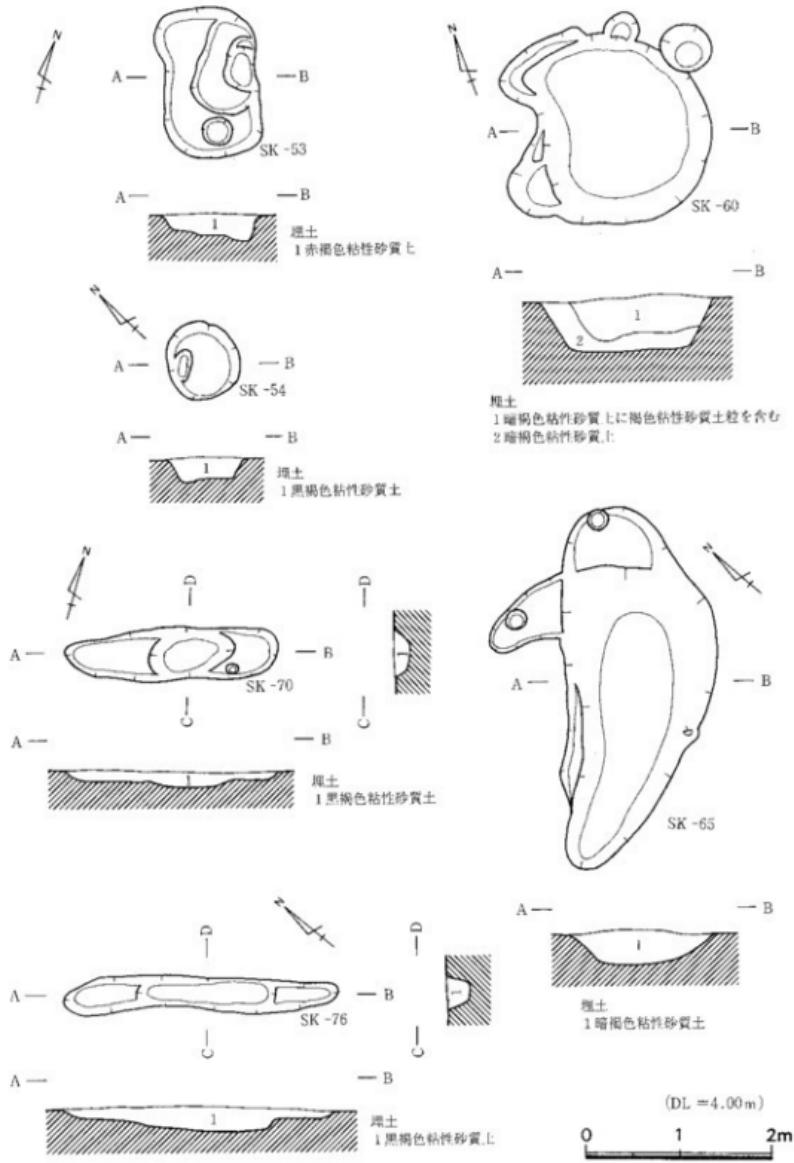


Fig. 33 SK-53・54・60・65・70・76

SK - 65 (Fig. 33)

SK - 65は、調査区東部で検出した土坑である。平面形は不整形であるが、一見三日月状をなす。長辺3.84m、短辺1.56m、深さ0.31mを測る。長軸方向はN - 49° - Eである。断面形はU字形をなし、壁は底面から内湾気味に上がる。埋土は暗褐色粘性砂質土單一層であった。遺物には弥生土器、土師器、須恵器等があるが、底面近くから近世陶磁器片2点が出土する。なお、復元できたのは鉢(173)1点であった。

SK - 68・69

2基とも調査区東部で検出した土坑である。平面形は方形で、一边1.00 - 1.30m、深さ0.14mを測る。長軸方向はN - 24° - 47° - Wである。断面形は2基とも逆台形を呈し、壁は底面から短くたち上がる。埋土も同じく黒褐色粘性砂質土單一層であった。遺物には土師器、須恵器があるが、細片で復元できるものはなかった。この2基の土坑周囲からは短い舟形をなす土坑(SK - 67・71・73・74)が確認されている。埋土、出土遺物がほぼ同じものであり、この2基に付属した可能性がある。

SK - 70 (Fig. 33)

SK - 70は、調査区東部で検出した土坑で、SK - 69に掘り込まれていた。平面形は舟形で、長辺2.24m、短辺0.54m、深さ0.16mを測る。長軸方向はN - 72° - Eである。断面形は舟底形をなし、壁は底面から内湾気味に上がる。底面中央には橢円形の浅い落込みがある。埋土は黒褐色粘性砂質土單一層であった。遺物には弥生土器の壺(174)があり、西寄りの底面から出土した。

SK - 76 (Fig. 33)

SK - 76は、調査区東部で検出した土坑である。平面形は舟形で、長辺2.90m、短辺0.34m、深さ0.24mを測る。長軸方向はN - 39° - Wである。断面形は舟形で、壁は底面から急角度で内湾して上がる。底面中央には舟形の浅い落込みがある。埋土は黒褐色粘性砂質土單一層であった。遺物には、土師器片4点、須恵器片2点があった。

SK - 77

SK - 77は、調査区東端部で検出した土坑であるが、その大半はSX - 9に壊されており、実体は不明確であると言わざるを得ない。本来は竪穴住居址であった可能性もある。現状での平面形は不整形で、長辺2.90m以上、短辺0.64m以上、深さ9cmを測る。長軸方向は一応N - 14° - Wを示す。断面形は逆台形で、壁は底面から短くたち上がる。底面から径54 - 70cm、深さ30cmのピット1個を検出した。埋土は黑色粘性砂質土單一層であった。遺物はこのピットから比較的多く出土しているが、細片が多く図示できたのは3点のみであった。

(4) 溝跡

SD - 20 (Fig. 34)

SD - 20は、調査区西端部で検出したL字形に曲がる溝跡で、SD - 21 - 27の各溝を切って

掘り込まれていた。溝は、幅2.81~3.50m、深さ0.42~0.48m、検出長22.40mを測る。東西に伸びる溝の方向はN-70°-Eで、南北に伸びる溝はこの方向にはほぼ垂直となっている。断面形は舟底形を呈し、壁は底面から内湾して緩やかに上がる。埋土は主に暗褐色粘性砂質土で、下層部に灰褐色砂質土が認められた。遺物は弥生土器から近世陶磁器まで多量に出土している。

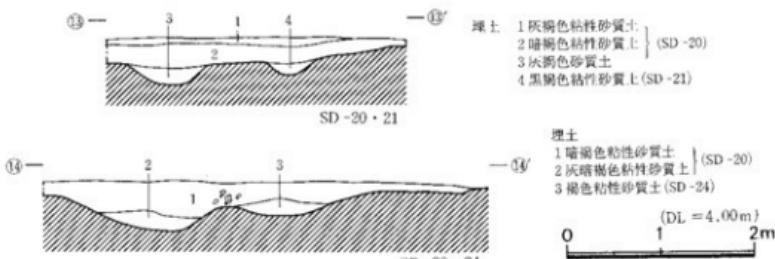


Fig. 34 SD セクション図 3

S D - 21 (Fig. 34)

S D - 21は、調査区西端部、S D - 21の底面から検出した南北に伸びる溝である。溝は、幅0.50~0.55m、深さ6~12cm、検出長12.80mを測る。主軸方向はN-15°-Wである。断面形は舟底形を呈し、壁は底面から内湾して緩やかに上がる。埋土は黒褐色粘性砂質土単一層であり、S D - 20とは明確に識別される。遺物には、土師器、須恵器があるが細片で図示できるものはなかった。

(5) 性格不明遺構

S X - 7

S X - 7は、調査区中央部北側で検出した明確な掘り方を持たない窪地状の遺構で、多数の遺構を掘り込んでいた。遺構は不整形で、長辺14.00m、短辺5.92m、深さ0.28mを測る。埋土は暗褐色粘性砂質土単一層である。遺物は弥生土器から近世陶磁器まで数多く出土している。

S X - 8 (Fig. 31)

S X - 8は、調査区南東部、S T - 4の底面で検出した不整形の遺構で、一見S T - 4に付属する遺構のようにみえるが、埋土が全く異なり、かつ、南へ溝状のものが派生しており、S T - 4に先行するものと考えられる。遺構は、長辺4.80m、短辺2.72m、深さ0.21mを測る。埋土は黑色粘性砂質土に淡褐色砂質土粒を含むものであった。遺物は数多く出土しており、42点が復元できた。

S X - 9

S X - 9は、調査区南東端で検出した不整形の遺構である。遺構は、長辺6.72m、短辺3.44m、深さ0.26mを測る。埋土は暗褐色粘性砂質土単一層であった。遺物は弥生土器から近世陶磁器

まで出土している。

(6) その他の遺構

遺構の多くはピットであり、その大半が建物跡等の柱穴ではないかとみられるものであるが建物等の復元には至っていない。掘り方は概ね円形で、埋土は暗褐色ないし黒色粘性砂質土である。この内、P-5～15から復元可能な遺物が出土した。

P-5

P-5は、調査区西部、S D-20の底面で検出した円形のピットで、径25cm、深さ16cmを測る。埋土は黒褐色粘性砂質土であった。手捏土器（285）が出土した。

P-6

P-6は、調査区西部で検出した円形のピットで、径35cm、深さ8cmを測る。埋土は黒褐色粘性砂質土であった。須恵器（368）が出土した。

P-7

P-7は、調査区中央部北寄り、S X-7の底面で検出した円形のピットで、径36cm、深さ16cmを測る。埋土は暗褐色粘性砂質土であった。伊万里の紅猪口（386）が出土した。

P-8

P-8も、調査区中央部北寄り、S X-7の底面で検出した円形のピットで、径34cm、深さ45cmを測る。埋土は暗褐色粘性砂質土であった。土師質の土鍤（396）が出土した。

P-9

P-9は、調査区中央部、S X-7の底面で検出した円形のピットで、径30cm、深さ10cmを測る。埋土は黒褐色粘性砂質土であった。土師器の壺（224）が出土した。

P-10

P-10は、調査区中央部で検出した円形のピットで、径45cm、深さ20cmを測る。埋土は黒褐色粘性砂質土であった。須恵器の杯蓋（369）が出土した。

P-11

P-11は調査区中央部南寄りで検出した円形のピットで、径52cm、深さ42cmを測る。埋土は黒褐色粘性砂質土であった。土師器の壺（225）と鉢（226）が出土した。

P-12

P-12は、調査区中央部、S D-28を切って掘り込まれていた円形のピットで、径31cm、深さ25cmを測る。埋土は黒褐色粘性砂質土であった。土製円板（407）が出土した。

P-13

P-13は、調査区東部、S T-4の壁で検出した円形のピットで、径26cm、深さ20cmを測る。埋土は黒褐色粘性砂質土であった。鉢（226）が出土している。

P-14 (Fig. 31)

P-14は、調査区東部、S T-4の床面で検出した不整形のピットで、長辺1.10m、短辺1.00m

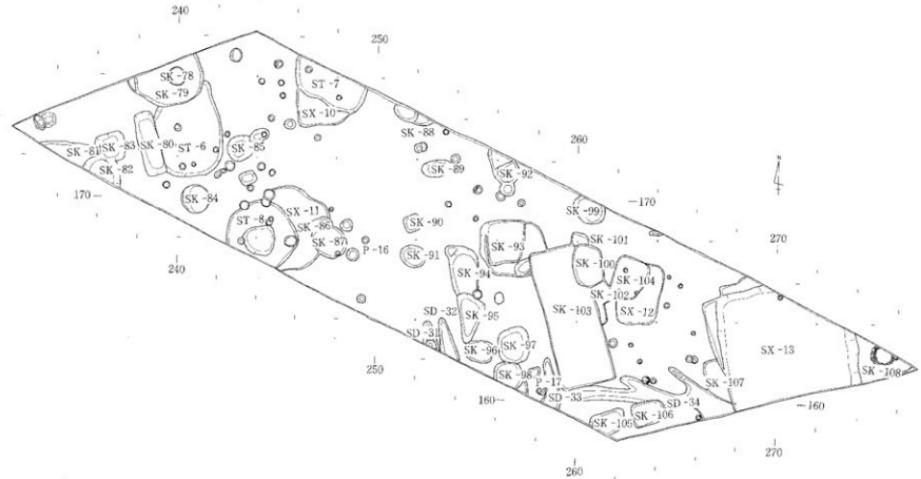


Fig. 35 E区造構平面図 ($S = 1 : 200$)

を測る。埋土は黒色粘性砂質土であった。壺、鉢、高杯（229～231）が出土した。

P-15 (Fig. 31)

P-15もS T-4の床面で検出した不整形のピットで、長辺1.45m、短辺0.32m、深さ14cmを測る。埋土は黒色粘性砂質土であった。鉢と高杯（232～234）が出土した。

4. E区

(1) 壺穴住居址又は堅穴状遺構

S T - 6 (Fig. 36)

S T - 6は、調査区西部で検出した堅穴状遺構である。遺構は、SK-79・80に掘り込まれていた。平面形は南北にやや長い隅丸方形で、長辺4.50m、短辺3.20mを測る。長軸方向はN-13°-Wである。壁はほぼ平坦な床面から角度を持って上がり、壁高は約18cmである。底面の標高は3.170～3.232mを測る。埋土は黒色粘性砂質土單一層である。付属遺構としてピット4個を検出した。構造的には上部構造をなすものと考えるが、明確に主柱穴と断定し得るピットは確認できなかった。ただ、P-1・2がその可能性のあるものである。遺物は比較的出土しており、壺、壺6点（239～244）、手捏土器（287）が図示できた。

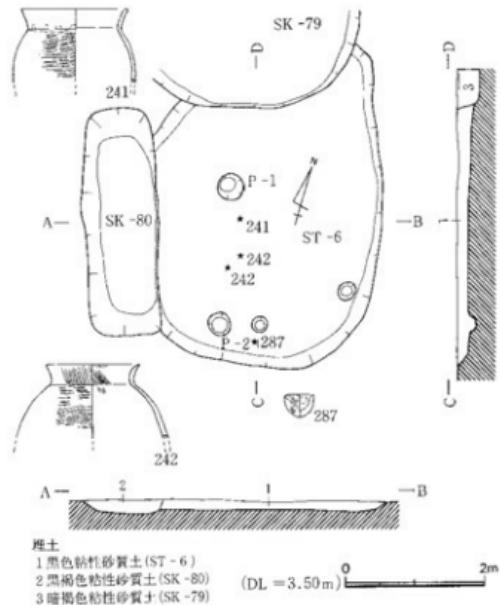


Fig. 36 ST-6, SK-80

S T - 7 (Fig. 37)

S T - 7は、調査区北西部で検出した堅穴状遺構であり、S X-10を切って掘り込んでいた。平面形は隅丸方形で、長辺3.20m、短辺1.50m以上を測る。長軸方向はN-63°-Wである。壁は平坦な底面から緩やかに上がり、壁高は約12cmである。底面の標高は3.148～3.216mを測る。埋土は黒褐色粘性砂質土單一層である。付属遺構としてピット2個を検出したが、未調査部分が半分以上あり、その性格について断定するには至っていない。なお、ピットの規模は、

P-1 が径34cm、深さ8cm、P-2 が径26cm、深さ13cmである。遺物の出土は少なく、図示できたのは弥生土器(246)、土師器(245・247)、須恵器(370)、叩石(455)である。

S T - 8 (Fig. 38)

S T - 8 は、調査区南西部で検出した堅穴住居であり、S X - 11を切って掘り込んでいた。また、壁が3個のピットに掘り込まれていた。平面形はほぼ円形で、径3.50mを測る。壁は平坦な床面から角度を持って上がり、壁高は約10cmである。底面の標高は3.133-3.451mを測る。埋土は2層に分層され、上層が黒褐色粘性砂質土、下層が褐色粘性砂質土であった。付属遺構として、小ピット3個、中央ピット1個を検出した。遺構自体の規模が小さいことからP-1・2を主柱穴と考えることができよう。他の主柱穴は確認されてないが、位置的に3本柱で棟を支えていたとみられる。中央ピットは、平面形が不整円形をなし、長辺1.64m、短辺1.35m、深さ5cmを測る。遺物はまとまって出土しており、良好な一括資料としてとらえることができるもので、壺、甕、鉢、高杯、手捏土器、土鍤、磨石、石製円板が復元できた。

(2) 土坑

S K - 80 (Fig. 36)

S K - 80 は、調査区西部で検出した土坑で、S T - 6 を切って掘り込んでいた。平面形は方形で、長辺3.23m、短辺1.08m、深さ0.18mを測る。長軸方向はN-15°-Wである。断面形は逆台形を呈し、壁は平坦な底面から角度を持って上がる。埋土は黒褐色粘性砂質土単一層であった。遺物には土師器、須恵器があるが、細片で復元できるものはなかった。

S K - 84 (Fig. 40)

S K - 84 は、調査区西部で検出した土坑である。平面形はほぼ円形で、径1.42m、深さ0.42mを測る。断面形はほぼ逆台形を呈し、壁は平坦な底面から急角度でたち上がる。埋土は4層に分層され、上面1層から多量の近世以降の瓦片が出土した。他には近世以降の陶磁器片が数点出土した程度であった。

S K - 87 (Fig. 39)

S K - 87 は、調査区南西部で検出した土坑で、S X - 11を掘り込んでいた。平面形は不整円形で、長辺1.70m、短辺1.58m、深さ0.14mを測る。長軸方向はN-31°-Wである。断面形

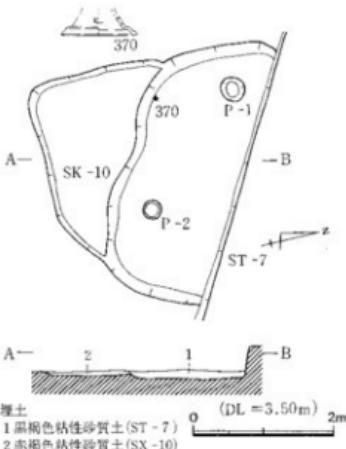


Fig. 37 ST - 7, SX - 10

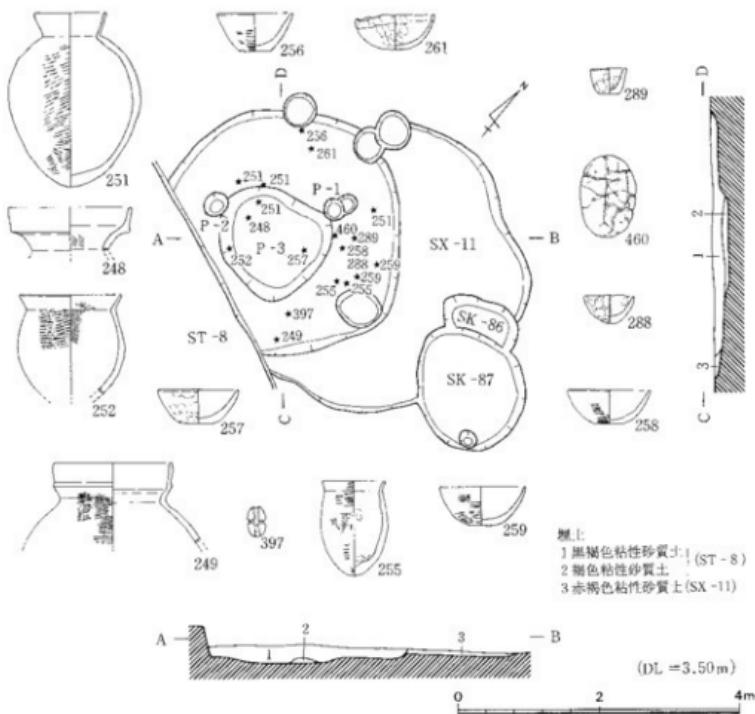


Fig. 38 ST - 8, SX - 11

は舟底形を呈し、壁は平坦な底面から緩やかに上がる。埋土は黒褐色粘性砂質土單一層であった。遺物は検出面から集中して出土したが、復元できたのは蓋(263)1点であった。

SK-100 (Fig. 40)

SK-100は、調査区東部で検出した土坑で、近世の上坑SK-103に掘り込まれていた。平面形は不整方形で、長辺2.20m、短辺1.50m、深さ0.42mを測る。長軸方向はN-13°-Wである。断面形は逆台形を呈し、壁は底面から垂直に近い角度で上がる。埋土は黄褐色粘性砂質土で間層に

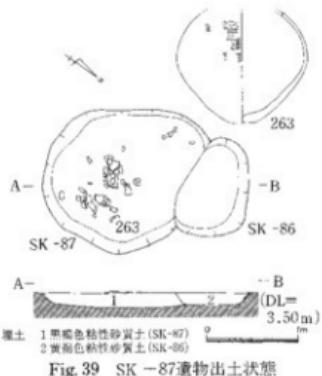


Fig. 39 SK - 87 遺物出土状態

黄褐色砂土を含んでいた。遺物では弥生土器から近世陶磁器までが出土するが、図示できたのは土錘（398）1点であった。

S K - 104 (Fig. 40)

S K - 104は、調査区東部で検出した土坑で、S X - 12を掘り込んでいた。平面形はほぼ方形で、長辺2.10m、短辺1.73m、深さ0.19mを測る。長軸方向はN-13°-Eである。断面形はほぼ逆台形を呈し、壁は底面から角度を持って上がる。埋土は黒褐色粘性砂質土單一層であった。遺物は細片ばかりで、復元できるものはなかった。

S K - 108 (Fig. 40)

S K - 108は調査区東端で検出した近世以降のカマド跡ではないかとみられるもので、C区のS K - 42も同じものと考えられる。平面形は楕円形で、長辺2.15m、短辺0.89m以上、深さ0.26mを測るが、カマド自体は径1.10mの円形である。断面形は逆台形で、壁は底面から垂直に近い角度でたち上がる。カマド部分は周りを拡大より一回り大きい礫で3段に積む。石は火を受け赤色化していた。S K - 42の場合は瓦を積んだ個所があった。埋土は焼土、炭化物を含む量により4層に分層された。遺物は極めて少なく、近世の陶磁器片が数点出土したのみであった。

(3) 溝跡

S D - 31・32

2条とも調査区南東部で検出した南北に伸びるとみられる溝跡である。溝は、幅0.45~0.81m、深さ5~9cm、検出長約2.00mを測る。主軸方向はN-11°-Wである。断面形は舟底形を呈し、壁は底面から緩やかに上がる。埋土は黒褐色粘性砂質土單一層であった。出土遺物は皆無で、掘削時期は不詳といわざるを得ない。ただし、埋土からすると古墳時代以前のものと考えることができよう。

S D - 34

S D - 34は、調査区東部で検出した東西に伸びる溝跡で、短く派生した部分がある。溝は、幅0.60~1.12m、深さ2~20cm、検出長9.12mを測る。主軸方向はN-85°-Wである。断面形は逆台形を呈し、壁は底面から短く上がる。埋土は灰褐色粘性砂質土單一層であった。出土遺物は皆無で、掘削時期は不詳といわざるを得ない。ただし、埋土からすると近世以降のものとみられ、同じ埋土であるS D - 33も同時期のものではなかろうか。

(4) 性格不明遺構

S X - 10 (Fig. 37)

S X - 10は、調査区北西部で検出した明確な掘り方を持たない染み状の遺構で、S T - 7に掘り込まれていた。遺構は不整方形で、長辺2.56m、短辺1.92m、深さ8cmを測る。埋土は赤褐色粘性砂質土單一層であった。遺物は土師器の細片ばかりで、図示できるものはなかった。

S X - 11 (Fig. 38)

S X - 11は、調査区南西部で検出した明確な掘り方を持たない染み状の遺構で、S T - 8, S K - 86・87に掘り込まれていた。遺構は不整円形で、径4.28m、深さ4cmを測る。埋土は赤褐色粘性砂質土單一層であった。遺物は細片が数点あるのみで、図示できるものはなかった。

S X - 12 (Fig. 40)

S X - 12は、調査区東部で検出した明確な掘り方を持たない染み状の遺構で、S K - 104に

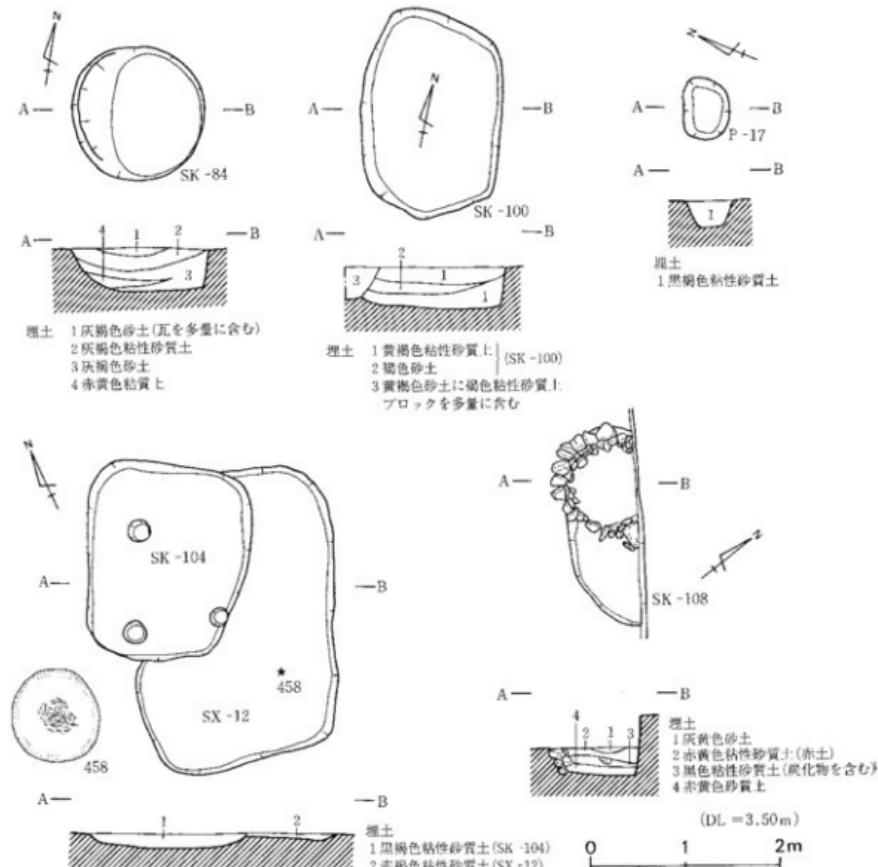


Fig. 40 SK - 84 · 100 · 104 · 108, SX - 12, P - 17

掘り込まれていた。遺構は一応隅丸方形で、長辺3.04m、短辺1.76m、深さ4cmを測る。埋土は赤褐色粘性砂質土单一層であった。遺物では叩石（458）が底面から出土した。

S X - 13

S X - 13は、調査区東部で検出した明確な掘り方を持たない溝地状の遺構である。遺構は不整形で、長辺6.96m、短辺6.32m、深さ0.33mを測る。埋土は灰褐色粘性砂質土单一層であった。遺物には弥生土器から近世陶磁器までがあるが、図示できたのは叩石（459）1点であった。

(5) その他の遺構

遺構の大半はピットであり、建物跡等の柱穴とみられるが確認するまでには至っていない。掘り方はほとんど円形で、一部方形もみられた。埋土はほぼ黒褐色粘性砂質土で、灰褐色粘性砂質土のものもあった。この内、P - 16・17から復元可能な遺物が出土している。

P - 16

P - 16は、調査区中央部で検出した円形のピットで、径34cm、深さ14cmを測る。埋土は黒褐色粘性砂質土であった。壺（264）が出土した。

P - 17

P - 17は、調査区南東部で検出した方形のピットで、長辺57cm、短辺50cm、深さ27cmを測る。埋土は黒褐色粘性砂質土であった。遺物では壺（265）以外に須恵器片も出土している。

第V章 遺物

本章では、遺構から出土した遺物について、弥生土器、土師器、粗製土器、須恵器、陶磁器類、土製品（土鍾、模造品）、石製品（叩石、模造品、砥石、石臼）、金属製品（鍔等）の順に概略を記載することとする。なお、詳細については遺物観察表に譲ることとした。また、各遺物については、調査区ごと各遺構順に記してある。

今回の調査で出土した遺物の総数は約80,000点、コンテナケース約105箱分であった。この内遺構から出土したものが約8割を占めていた。遺物では、土師器が最も多く全体の35%を占め、以下弥生土器22.4%、須恵器17%、石製品13%、手捏土器5%、土製品4%、陶磁器類3%，金属製品0.6%の順に出土した。遺物の出土量では、S T - 4 が最も多く、S X - 8, S T - 8, S T - 7などからも比較的多くかつまとまって出土していた。

1. 弥生土器、土師器

出土遺物では、この弥生土器と土師器が全体の約57%を占め最も多量に出土している。これらは、その大半が弥生時代後期後半から古墳時代後期、西暦では概ね3世紀から6世紀前半にかけてのものであり、以下器種ごとに形態分類を行い記述していく。

壺

口縁部の形態により5類に大別することができる。

壺A 二重口縁をなすもので、さらに5類に細分可能である。

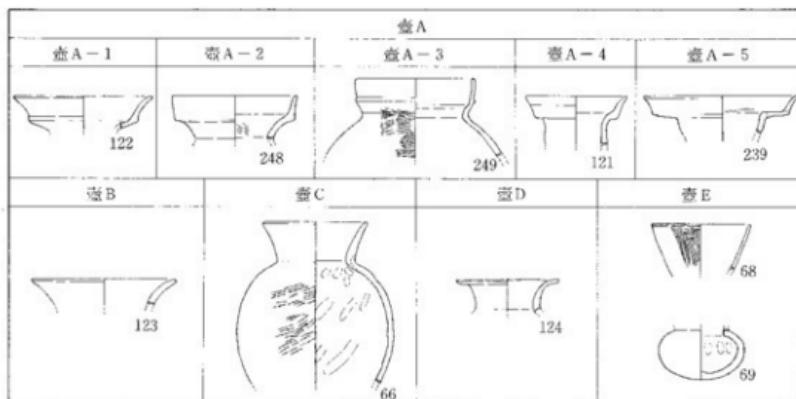


Fig. 41 壺形態分類図(1/8)

- 壺A-1 頸部は大きく外反し、口縁部も外反するもの。
- 壺A-2 頸部は大きく外反し、口縁部は短くほぼ直立するもの。
- 壺A-3 頸部は外反気味に上がり、口縁部は上方に直線的に上がるるもの。
- 壺A-4 頸部は外反気味に上がり、口縁部は外傾ないし外反するもの。
- 壺A-5 頸部は外上方上がった後屈曲し、口縁部は外反するもの。
- 壺B 口縁部が頸部から外反し広がるもの。
- 壺C 口縁部が外上方へ直線的に伸びるもの。
- 壺D 口縁部が直立した頸部から屈曲し大きく外反するもの。
- 壺E 器高が15~20cmの小・中型品で、口縁部は直線的に外上方へ伸び、胴部はほぼ球形を呈する。

甕

口縁部と胴部の形態により4類に大別することができる。

- 甕A 口縁部が胴部からくの字形をなして上がるもので、頸部に棱をなす。さらに3類に細分される。

- 甕A-1 口径と胴径がほぼ同じもの。
- 甕A-2 口径が胴径より大きいもの。
- 甕A-3 口径が胴径より小さいもの。

- 甕B 口縁部が胴部から外済気味に上がるもので、頸部には稜はみられない。さらに3類に細分される。

- 甕B-1 口径と胴径がほぼ同じもの。
- 甕B-2 口径が胴径より大きいもの。
- 甕B-3 口径が胴径より小さいもの。

- 甕C 口縁部がほぼ直線的に上がる胴部から外傾するもの。

- 甕D 口縁部が内傾して伸びる胴部から上方へ直線的に伸びるもの。

これらの内甕Aと甕Bは口縁部の形態によりさらに7類を加えることができる。

- a類 口縁部が比較的長く伸びるもの。
- b類 口縁部はほぼ真直ぐ伸び、端部が面をなすもの。
- c類 口縁部はほぼ真直ぐ伸び、端部を内側に肥厚するもの。
- d類 口縁部はほぼ真直ぐ伸び、端部が丸味を有するもの。
- e類 口縁部は外反気味に伸び、端部が丸味を有するもの。
- f類 口縁部は外反気味に伸び、途中で屈曲するもの。
- g類 口縁部は外反気味に伸び、口唇部を大きく屈曲さするもの。

瓶

一種類のみ出土しており、口縁部は胴部から外上方へ直線的に伸びる。胴部外面には把手が

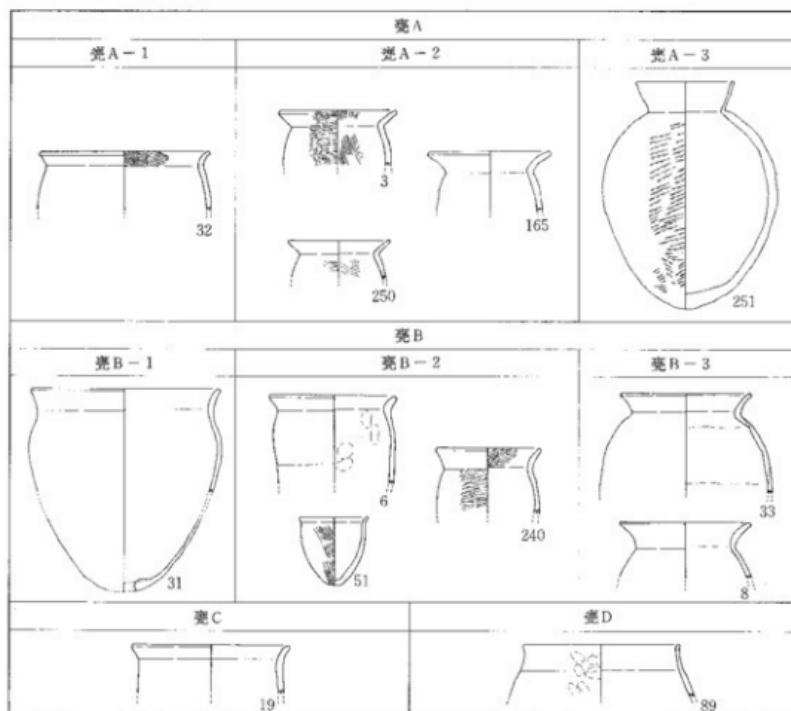


Fig. 42 変形態分類図(1/8)

付くとみられる。

鉢

形態的に碗、杯と表現した方が適切とみられるものもあるが、ここではすべて鉢という表現を使用した。これらは4類に大別することができる。

鉢A 平底で、口縁部が外上方へ伸びるもので、さらに2類に細分される。

鉢A-1 口縁部が直線的に上がるるもので、コップ状をなす。

鉢A-2 口縁部が内湾気味に上がるるもので、椀状をなす。

鉢B 椓状をなすもので、碗、杯と表現し得るものが含まれる。

鉢B-1 底部が尖底風になっているもの。

鉢B-2 底部が丸底になっているもの。

鉢B-3 口径に対し器高が低く杯と表現し得るもので、器高指数が0.3を若干越す。

鉢C 盆状をなし、盆と表現し得るもので、器高指数が0.3以下である。

鉢D 口径10cm前後で、口縁部が体部から外傾するもので、さらに2類に細分される。

鉢D-1 口縁部が短く外傾するもの。

鉢D-2 口縁部が僅かに外傾するもの。

高杯

杯部の形態により2類に大別される。

高杯A 杯部が屈曲して伸びるもので、口縁部の形態により2類に細分される。

高杯A-1 口縁部が外反するもの。

高杯A-2 直線的に伸びるもの。

高杯B 杯部が椀状をなすもの。

器台

皿形の受部を持ち、受部と脚部が貫通しない小型の器台で、基本的には一種類のみの出土であるが、脚部の形態により2類に分類することができる。

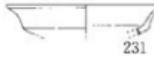
鉢A		鉢B		
鉢A-1	鉢A-2	鉢B-1	鉢B-2	鉢B-3
				
				
				
鉢D	鉢D-1	鉢D-2		
				
高杯A	高杯B		器台	
高杯A-1	高杯A-2		器台A	器台B
				
				
				

Fig. 43 鉢・高杯・器台形態分類図(1/8)

器台A 脚部が中空であるもの。

器台B 脚部が中実であるもの。

以下この形態分類に基づき記述する。

(1) B区

S T - 1 (Fig. 20-31)

土師器で壺B - 1 - e に属し、外面には煤が付着する。

S K - 5 (Fig. 21-32)

弥生土器で壺A - 1 - b に属し、外面には荒い叩目が残る。

S K - 22 (Fig. 46-33)

土師器で壺B - 3 - b に属す。胴部内面には粘土の接合痕が明瞭に残る。

S K - 24 (Fig. 46-34-38)

すべて土師器で、34-36が壺、37・38が鉢である。壺はすべてB - 3 - e 類に属し、37が鉢B - 1、38が鉢D - 1 に属す。

S K - 25 (Fig. 46-39-44)

41が弥生土器である以外すべて土師器である。39・40は壺B - 3 - e に属す。41は壺の底部とみられ、平底で外面には叩目が残り、混入したものと考えられる。42は鉢B - 1、43・44は鉢B - 2 に属す。器面の調整はナデ調整による。

S D - 1 (Fig. 46-45)

弥生土器で鉢A - 2 に属す。内面には横方向のハケ目が明瞭に残る。

S D - 8 (Fig. 46-46)

弥生の支脚で、受部は皿状を呈し、脚台部は中実で柱状をなす。

S D - 12 (Fig. 46-47)

土師器で口縁部は欠損するが、高杯B に属する可能性がある。脚部内面は横方向のヘラナデ調整を施す。

S D - 13 (Fig. 46-48-50)

すべて土師器で、48が壺A - 3 - b、49が壺B - 3 - e に属す。50は鉢B - 2 に脚が付くものである。

S X - 1 (Fig. 46-51)

弥生土器で壺B - 2 - d に属す。底部は小さな平底で、胴部外面には縱方向のハケ目が残る。

S X - 3 (Fig. 47-52-58)

52-54が弥生土器、55-58は土師器である。52は壺A - 3 で口縁部外面にはクシ描波状文が施される。53は壺A - 3 - d で、胴部外面には叩目が残り煤が付着する。54は壺A - 3 - e で、胴部外面一面に叩目が残る。55は壺A - 3 - e、56・57は壺B - 2 - e に属す。58は壺とみられるものであるが口縁部が欠損する。底部は丸底である。

P - 1 (Fig. 47-59)

弥生土器で口縁部は欠損するが壺B-3-eに属するとみられる。胴部外面には縱方向のハケ目が残る。

(2) C区

SK-30 (Fig. 48-86-89)

すべて土師器で、86-88が壺B-3-e、89が壺Dに属す。調整はナデ調整とヨコナデ調整である。

SK-41 (Fig. 48-90)

弥生土器で鉢A-1に属す。平底で内面にはハケ調整を施す。

SX-4 (Fig. 48-91)

土師器で壺B-3-eに属す。器面は摩耗が著しい。

SX-5 (Fig. 48-92)

土師器で壺A-3-dに属す。器面は摩耗が著しい。

SX-6 (Fig. 48-49-93-103)

すべて弥生土器である。93が壺A-1、94が壺A-2-f、95が壺A-3-f、96が壺B-3-d、97が壺B-3-cにそれぞれ属す。98は壺の底部である。99-103は鉢で、99-100が鉢A-1、101-103が鉢B-1に属す。鉢の体部外面には叩目が残存する。

(3) D区

ST-3 (Fig. 49-116-120)

すべて弥生土器で、116は瓶の口縁部の破片である。117は壺の底部とみられる。118-120は鉢で、鉢A-2に属し、体部外面には叩目が残る。118は小型の鉢である。

ST-4 (Fig. 49-121- Fig. 51-161)

121-125が壺で、土師器とみられ、121-122は壺A-4、123は壺B、124は壺Dに属す。125は胴部の破片で、外面には叩目が部分的に残存する。126-146は壺で、127-146が弥生土器である以外はすべて土師器とみられる。126は壺A-3-d、127-131は壺A-3-e、132-135は壺A-3-f、136は壺B-1-c、137は壺B-3-c、128-141・143は壺B-3-d、142は壺A-2-d、143は壺B-3-cにそれぞれ属す。この内、127の外面全面には叩目が残る。また、142の胴部外面にも僅かではあるが叩目が残存する。145は平底の底部である。146も弥生土器の壺の底部である。147-149は土師器の底部である。147-148が壺、149が壺である。148と149の外面には僅かではあるが叩目が残る。150は瓶で、底部には径1.5cmの円孔を穿つ。151-161は鉢で、151以外は土師器である。151は鉢A-1、152-155は鉢B-1、156-158は鉢B-2、159は鉢B-3、160-161が鉢Cに属す。この内、151と153の底部外面には叩目が残る。調整はハケ調整とナデ調整による。162は土師器で高杯A-2に属し、外面はほぼ全面に横方向のヘラ磨きを施す。163は高杯で、脚部は中実で外面には縱方向の荒いハケ目が

残る。

S B - 1 (Fig. 51-164)

土師器の杯で、平安時代のものであり時代が他と掛け離れる。底部外面は回転ヘラ切り後ナデ調整を加える。

S K - 52 (Fig. 51-165)

土師器で甕 A - 2 - e に属す。口縁部はヨコナデ調整を行う。

S K - 53 (Fig. 51-166)

土師器で鉢 B - 2 に属す。内外面にはハケ調整を施す。

S K - 54 (Fig. 51-167~170)

すべて土師器である。167は高杯の脚部で、内外面はナデ調整を施す。168~170は甕で、168が甕 A - 3 - d, 169が甕 A - 3 - e, 170が甕 A - 3 - f にそれぞれ属す。

S K - 57 (Fig. 51-171)

土師器の壺の底部で、外面には荒いハケ目が残存する。

S K - 59 (Fig. 51-172)

土師器の甕の底部で、外面には叩目が残存する。

S K - 65 (Fig. 51-173)

土師器で鉢 B - 2 に属す。底部外面には叩目、内面には横方向のハケ目が残る。

S K - 70 (Fig. 51-174)

弥生土器の甕の底部で、外面には叩目が明瞭に残る。

S K - 77 (Fig. 51-175・176)

2点とも弥生土器である。175は鉢 A - 2 に属し、底部は小さいが平底である。176は高杯の脚部である。

S D - 20 (Fig. 51-177~179)

3点とも土師器である。177は甕 B - 3 - e に属し、一部叩目が残存する。178は高杯の脚部である。179も高杯の脚で、基部は屈曲して開く。

S X - 7 (Fig. 51・52-180~182)

3点とも土師器の甕である。180は甕 B - 2 - e, 181は甕 B - 3 - d, 182は甕 B - 3 - f にそれぞれ属す。

S X - 8 (Fig. 52-183~Fig. 53-222)

183~188は土師器の壺である。183・184は壺 A - 4, 185は壺 D, 186~188は壺 E にそれぞれ属す。189~207は甕で、189・198・199以外は土師器と考える。189~191は甕 A - 3 - d に属し、189の外面全面には叩目が残る。192は甕 A - 3 - f, 193~195は甕 B - 3 - e, 196は甕 B - 3 - f にそれぞれ属す。197は胴部、198~207は底部である。外面にはどれも叩目が残る。底部はほとんどが丸底となっている。なお、201は器壁の厚さからすると鉢 B - 1 の可能性も

ある。208~216は土師器の鉢である。208・209は鉢B-1, 210は鉢B-3, 211~213は鉢C, 214・215は鉢D-1にそれぞれ属す。211は脚で鉢D-1が上に付くとみられる。201の外面にはヘラ磨き, 214の底部外面には叩目が残る。217・218は高台で, 217は高杯A-2に属す。218は弥生土器で, 据部は中実の脚部から大きく開く。据部には3方に円孔が穿たれる。219~222は土師器の器台である。すべて器台Aに属す。脚部は付け根からハの字形に開き, 円孔を3方に穿つ。受部は浅く皿状をなす。222の脚部外面上部には部分的に叩目が残存する。

S X - 9 (Fig. 53-223)

土師器で甕Cに属し, 口縁部は直立する胴部から外傾し, 端部を丸く仕上げる。

P - 9 (Fig. 53-224)

土師器で甕B-2-eに属し, 胴部から外反する口縁部はさらに外反する。

P - 11 (Fig. 53-225・226)

225は土師器で甕B-3-eに属す。口縁部内外面にはハケ調整を施す。226は土師器で鉢B-3に属す。内外面にはハケ目が残る。

P - 13 (Fig. 53-227)

土師器で鉢D-2に属し, 口縁部は短く外傾する。

P - 14 (Fig. 53-228~Fig. 54-231)

229以外は土師器である。228は甕Eの肩部で蝶形をなす。229は小型の鉢A-2であり, 底部は上底風である。230は鉢D-1に属し, 内外面にはハケ目が残る。231は高杯A-1に属し, 口縁部は体部から屈曲し外反する。

P - 15 (Fig. 54-232-234)

3点とも土師器である。232は鉢B-1に属し, 器面はナデ調整を施す。233は器高指数0.3で鉢Cに属す。器面はナデ調整を施す。234は高杯で, 杯部は欠損する。脚部はハの字形に開き, 3方に円孔を穿つ。

(4) E 区

S T - 6 (Fig. 54-239~244)

すべて弥生土器である。239は甕A-5に属す。他はすべて甕で, 240は甕B-2-e, 甕B-3-d, 241~244は甕B-3-eに属す。

S T - 7 (Fig. 54-245~247)

245は土師器で甕B-3-eに属す。246は弥生土器で鉢A-2に属し, 底部は平底である。247は土師器で鉢D-2に属し, 口縁部は短く外傾する。

S T - 8 (Fig. 54-248~Fig. 55-262)

すべて弥生土器である。248・249は二重口縁の甕で248は甕A-2, 249は甕A-3に属す。250~255は甕であり, 250は甕A-2-d, 251は甕A-3-a, 252は甕A-3-d, 253は甕A-3-e, 254は甕A-3-f, 255は甕B-3-dにそれぞれ属す。255は小型の甕で, 底

部は小さいが平底になっている。256-261は鉢であり、256は鉢A-1、257-260は鉢A-2に属し、260はベタ高台風の底部となっている。261は鉢B-1に属するが、手捏風な造りで器面には指頭圧痕が残存する。262は高杯で、脚部には円孔が4方に穿たれる。また、脚部外面には叩き用工具でナデ調整した痕が残る。

S K - 87 (Fig. 55-263)

弥生土器で口縁部は欠損する。最大径は中胴部に求めることができる。底部は平底である。

P - 16 (Fig. 55-264)

土師器で壺Bに属す。器面は摩耗が著しく、調整不明。

P - 17 (Fig. 55-265)

土師器で壺B-3-eに属す。器面は摩耗が著しく、調整不明。

2. 粗製土器

手捏土器であり24点が出土しており、全体の5%を占める。手法としては、片手で捏ねた程度の粘土に指頭で穴を開けたものと鉢などを模した小型品とに分けることができる。前者をA類、後者をB類と呼称する。この内、B類は形態的に5類に細分される。

B-1類 平底でコップ状ないし椀状をなすもの。

B-2類 尖底で椀状をなすもの。

B-3類 丸底で椀状をなすもの。

B-4類 短い口縁部を有するもので、鉢Dをスケールダウンした形となっている。

B-5類 形態に捕われないので、器形には歪みが著しく、かつ、指頭圧痕を明瞭に残す。

以下この分類に従って記述する。

(1) B区

S D - 8 (Fig. 56-266-271)

266-268はA類、269・271はB-3類、270はB-4類にそれぞれ属す。

S X - 1 (Fig. 56-272)

B-3類に属し、表面には粘土の接合痕が明瞭に残る。

(2) D区

S T - 3 (Fig. 56-278)

B-1類に属す。口縁部は内湾気味に上がり、口縁部内面は横方向のハケ目が残存する。

S T - 4 (Fig. 56-279-282)

279がA類、280・281がB-3類、282がB-1類にそれぞれ属す。280と282の外面には叩目が残る。

S K - 77 (Fig. 56-283)

B-3類に属す。口縁部は細く仕上げられる。

S X - 8 (Fig. 56-284)

B - 3 類に属す。外面には2段に小さな指頭圧痕が残る。

P - 5 (Fig. 56-285)

B - 3 類に属す。口縁部は内湾して上がる。

(3) E 区

S T - 6 (Fig. 56-287)

B - 3 類に属す。外面には斜め方向の細い凹目が残存する。

S T - 8 (Fig. 56-288・289)

288はB - 2 類、289はB - 1 類に属す。288の外面には指頭圧痕が明瞭に残る。

3. 須恵器

図示できた須恵器は81点あり、内造構から出土したものは54点であった。この大半はB～D区から出土したもので、特にB区からの出土が多く全体の約67%を占めていた。これら須恵器の時期は一部の例外を除き概ね5世紀後半から6世紀前半のものである。この時期の須恵器は中村市具同中山遺跡群から数多く出土しており、その形態については筆者が分類を『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』(1988年6月高知県教育委員会発行)の中で行っている。今回出土したものもすべてその範疇で捉えることができるものである。しかし、今回は絶対数が少ない上、各時期散発的な出土状況であるため細かい形態分類は行わなかった。以下各器種の概要を述べることとする。

(1) B 区

S T - 1 (Fig. 58-308)

杯身であり、たち上がりは内傾して伸びる。端部は摩耗し外傾する平面をなしたようになっているが、本来は丸く仕上げられたものとみられる。

S K - 22 (Fig. 58-309)

杯身で、たち上がりは内傾して伸び、端部は丸く仕上げられる。底部は丸い。

S K - 24 (Fig. 58-310)

杯身で、たち上がりは内傾して伸び、端部内側に沈線が巡る。受部基部にも沈線が巡る。

S K - 25 (Fig. 58-311～316)

311～313は杯蓋で、311と312の後は凸線で表す。313の稜は、天井部が口縁部で屈曲することによりわかる程度である。314は高杯の蓋で、稜は凹線で表す。315と316は杯身で、たち上がりは内傾し、端部は細く仕上げられる。

S D - 5 (Fig. 58-317)

無蓋高杯の杯部で、口縁部も欠損する。外面には凸帯と凹線に挟まれて7本単位のクシ描波状文が巡る。

S D - 8 (Fig. 58-318~326)

316~321は杯蓋で、稜はすべて凹線で表す。322~324は杯身である。322と323のたち上がり端部は外傾する凹面をなすのに対し、324のそれは細く仕上げられる。325と326は無蓋高杯である。326の杯部は深い。2点とも2条の凸帯の下方にクシ描波状文が施される。

S D - 9 (Fig. 58-327)

杯蓋で、稜は一応断面三角形をなす。

S D - 10 (Fig. 58-328)

杯身で、たち上がりは内傾し、端部は内傾する凹面をなす。

S D - 11 (Fig. 59-329)

小型の杯身で、底部外面にはハの字形に開く高台が付く。これだけ8世紀後半の須恵器である。なお、底部外面は回転ヘラ切りとなっている。

S D - 12 (Fig. 59-330~332)

330は杯蓋で、稜は断面三角形をなし、口縁端部は下方を向く平面をなす。331は杯身で、たち上がりは内傾し、端部は外傾する平面をなす。332は壺で、口縁部は外反し、端部を肥厚する。外面には14本単位のクシ描波状文を施す。

S D - 13 (Fig. 59-333~338)

333~336は杯蓋で、稜はすべて凹線で表す。337と338は杯身で、337のたち上がり端部は外傾する凹面をなし、338のそれはやや丸味を有す。

S X - 2 (Fig. 59-339)

339は小型の直口壺である。口縁部は外傾してたち上がり端部を細く仕上げる。

S X - 3 (Fig. 59-340~342)

3点とも杯身であるが、時期がまちまちである。340のたち上がりは内傾して上がり端部は外傾する浅い凹面をなす。341のそれは内傾して上がり端部を丸く仕上げる。342のそれは短く内傾し端部を細く仕上げる。

(2) C 区

S K - 30 (Fig. 59-347~350)

347は杯蓋で、稜は凹線により表わす。348は杯身で、たち上がりはほぼ直立し、端部内側に浅い沈線1条が巡る。349は高杯で、脚部に長方形の透しを3方に穿つ。350は壺で、体部中位やや下に円孔を穿つ。底部外面は静止ヘラ削りの後にナデ調整を加える。

S D - 18 (Fig. 59-351)

杯身で、たち上がりは短く内傾して上がる。受部基部に凹線を配す。

S X - 4 (Fig. 60-352~355)

352と353は杯蓋で、稜は全くない。354は杯身で、たち上がりは内傾し、端部内側に凹線が巡る。355は高杯の脚部で、3方に台形の透しを穿つ。

P - 4 (Fig. 60-356)

杯身で、たち上がりは内傾して伸び、端部を丸く仕上げる。

(3) D区

S K - 52 (Fig. 60-362)

杯身で、たち上がりは短く内傾し、端部を細く仕上げる。

S D - 20 (Fig. 60-363-365)

363と364は杯蓋で、稜は全くない。365は高杯の脚部で、外面には凸帯が巡る。

S X - 7 (Fig. 60-366-367)

366は杯蓋で、稜は凹線により表す。367は杯身で、たち上がりは短く内傾する。

P - 6 (Fig. 60-368)

鉢であり、口縁部は外上方へ直線的に上がる。古代の所産とみられる。

P - 10 (Fig. 60-369)

杯蓋で、稜は天井部から口縁部の屈曲でわかる程度である。

(4) E区

S T - 7 (Fig. 60-370)

高杯の脚部で、長方形の透しが4方に穿たれていたとみられる。

4. 陶磁器類

大半が近世、18世紀後半以降の陶磁器である。今回は図示しなかったが20世紀代のものも出土している。以下概略を記す。

(1) B区

S K - 10 (Fig. 60-371)

唐津系の鉢で、外面にはハケ目文が施される。

S D - 3 (Fig. 60-372-373)

372は素焼の皿で、内面には押型による文様が残る。焼成は極めて良好である。373は伊万里の皿で、見込にはコンニャク判の五弁花と内面に蔓草文を施す。

(2) C区

S D - 16 (Fig. 60-376)

伊万里の碗で、見込にはコンニャク判の五弁花が残る。

P - 3 (Fig. 60-377)

土師質の小皿で、極めて焼成が良好である。底部外面は回転糸切りである。

(3) D区

S D - 20 (Fig. 60-61-378-384)

378と379は伊万里の碗、380は伊万里の皿である。381は京焼系とみられる皿である。382-

384は偏前の擂鉢で、内面には382が9本単位、383が11本単位、384が15本単位の条線をそれぞれ施す。

S X - 9 (Fig. 61-385)

伊万里の紅猪口で、外面全面に放射線状の刻目をいれる。

P - 7 (Fig. 61-386)

伊万里の猪口で、体部外面には草花文を描く。

5. 土製品

土製品には、土錘、模造品（玉、鏡、円板）がある。土製模造品の出土は県下でも珍しく、数か所の遺跡でしか発見されていない。また、今回出土した玉は全国的にも出土例の少ないものとみられる。以下調査区ごとに記述する。

(1) B区

S T - 1 (Fig. 62-399)

ソロバン状の玉で、中央部に径2.5mmの紐孔を穿ち、両面にそれぞれ異なった文様を施す。

S K - 18 (Fig. 61-387)

土師質の土錘で、円筒形を呈す。孔径は0.3cmである。

S X - 3 (Fig. 61-388・389)

2点とも土師質の土錘で、両側面に溝状の抉りを造る。

P - 2 (Fig. 61-390)

土師質の土錘で、概ね円筒形を呈す。孔径は0.4cmである。

(2) C区

S X - 4 (Fig. 61-391)

土師質の土錘で、円筒形を呈す。孔径は0.6cmである。

(3) D区

S K - 54 (Fig. 62-405)

土製円板で、両面にヘラ状工具で格子状の刻線を施す。

S D - 20 (Fig. 62-406)

土製円板で、片面のみに2条の刻線が残存する。

S X - 7 (Fig. 61-394・395)

2点とも土師質の土錘で、394が紡錘形、395が円筒形を呈す。

P - 8 (Fig. 61-396)

土師質の土錘で、概ね円筒形を呈す。孔径は0.4cmである。

P - 12 (Fig. 62-407)

土製円板で、片面が凸面、片面が凹面をなす。刻線は認められない。

(4) E 区

S T - 8 (Fig. 61-397)

土師質の土錘で、梢円形を呈し、十文字に経溝を配す。

S K - 100 (Fig. 61-398)

土師質の土錘で、円筒形を呈す。孔径は0.8cmである。

6. 石製品

石製品には、叩石、磨石、模造品（円板）、砾石、石臼がある。总数は63点で、全体の13%を占める。この内、叩石の出土が多く、石製品の約78%を占める。この叩石はまず大きさ、形態により3類に大別できる。

A類 手の平に乗る程度の大きさのもので、重量が1kg未満である。

B類 A類以上の大きさのもので、重量が1kg以上である。

C類 棒状をなすもので、A・B類とセット関係をなす。

この内、A・B類は敲打痕の位置によりさらに3類を追加することができる。

1類 片面のみに敲打痕を有するもの。

2類 両面のみに敲打痕を有するもの。

3類 両面及び縁辺部にも敲打痕を有するもの。

以下調査区ごとに記述する。なお、叩石については上記の分類を使用して行う。

(1) B 区

S T - 2 (Fig. 63-411)

叩石で端部が欠損するが、A-2類に属す。

S K - 19 (Fig. 63-412)

叩石で、A-3類に属す。断面は梢円形を呈す。

S K - 25 (Fig. 63-413-415)

3点とも叩石で、413がA-3類、414がB-2類、415がC類に属し、414と415はセットとみられる。

S D - 1 (Fig. 64-416)

叩石で、B-2類に属し、両面に深い敲打痕が残る。

S D - 3 (Fig. 63-64-417-420)

4点とも叩石で、417・418・420はA-2類、419がA-1類に属す。

S D - 8 (Fig. 64-421)

叩石で、A-2類に属す。敲打痕は両面に2~3カ所残存する。

S X - 3 (Fig. 64-422-426)

422は磨石で、全面を丁寧に磨く。423-426は叩石で、423-425はA-2類、426はB-2類

に属す。

P - 1 (Fig. 64-427)

叩石で、A - 3類に属す。両面には幅広の浅い敲打痕が残る。

(2) C区

S K - 30 (Fig. 65-432)

叩石で、約半分が欠損するがA - 3類に属す。

S K - 44 (Fig. 68-469)

上臼で上面約24cmの間を窪ませている。

S K - 45 (Fig. 68-470)

上臼で上面約21cmの間を窪ませている。

S D - 18 (Fig. 65-433)

叩石で、A - 2類に属すが、敲打痕は極めて弱いものである。

S X - 4 (Fig. 65-434, Fig. 67-463)

434は磨石で、全面を磨く。断面は梢円形を呈す。463は砥石で2面に使用痕が残る。

(3) D区

S T - 3 (Fig. 68-464)

河原石を使用した砥石で、片面に使用痕が残る。また、火を受け赤色化する。

S T - 4 (Fig. 65-440~Fig. 66-443, Fig. 68-465)

440~443は叩石で、440はA - 2類、441・442はA - 3類、443はC類に属す。465は砥石で一面のみ使用痕が残る。

S B - 1 (Fig. 68-466)

軽石の砥石で、P - 1から出土した。

S K - 50 (Fig. 66-444)

叩石で、A - 3類に属す。

S K - 53 (Fig. 66-445)

叩石で、A - 2類に属す。両面に残る敲打痕は比較的浅い。

S K - 54 (Fig. 68-467)

大型の河原石を利用したもので、片面のみに使用痕が残る。また、反対面には凹みが2列に並んで多数できている。

S K - 60 (Fig. 68-468)

砥石で、一面のみを使用する。

S D - 20 (Fig. 66-446~450)

5点とも叩石で、450がA - 2類である以外はA - 3類に属す。

S X - 7 (Fig. 66-451)

叩石で一部欠損するが、A - 2類に属す。

S X - 8 (Fig. 66-452・453)

2点とも叩石で、A - 3類に属す。

S T - 7 (Fig. 67-454)

叩石で、C類に属す。両端の敲打痕は弱いものである。

S T - 8 (Fig. 67-456・457・460)

456・457は磨石で、全面を丁寧に磨いている。460は極めて珍しいもので、石製円板と呼称し得るものであり、両面には格子状の刻線が残存する。

S X - 12 (Fig. 67-458)

叩石で、A - 3類に属す。両面の敲打痕は弱いものである。

S X - 13 (Fig. 67-459)

叩石で、A - 3類に属す。両面の敲打痕は極めて弱いものである。

7. 金属製品

煙管が3点出土したのみであった。

(1) D区

S K - 52 (Fig. 69-471)

雁首と竹の羅字の一部が残存する。

S D - 20 (Fig. 69-472)

雁首と竹の羅字の一部が残存する。

S X - 7 (Fig. 69-473)

竹の羅字の一部と吸口が残存する。

第VI章 考察

本章では、今回の調査によって確認された遺構と遺物について考察を行い、最後に早咲遺跡の消長を時代別に概述しまとめとする。なお、遺構については時期別、遺物については器種別に記述する。

1. 遺構

今回の調査によって確認された遺構は、堅穴住居址、堅穴状遺構、掘立柱建物跡、土坑、溝跡、性格不明遺構及び多数のピットである。これらの遺構は、弥生時代後期後半から近世、近代に及ぶものであり、4期に大別することができる。以下各時期ごとに記述し、論及する。

(1) I期

弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての時期であり、西暦では概ね3世紀から4世紀とみることができよう。遺構ではST-3・6・8、SK-54・87等を主だったものとして挙げることができる。これらは、D区を中心にC区からE区にかけて検出され、さらに出土遺物により小4期に細分される。

I-1期 弥生時代後期後半の時期で、ST-3・6、SK-87などが該当する。遺物では、叩目が全面に残存する甕や平底の鉢などがある。早咲遺跡に集落が形成し始めた頃とみられる。ベッド状遺構を有するST-5はこの期の所産ではなかろうか。住居址の平面形は円形と方形で、両形態が共存する時期でもある。

I-2期 弥生時代終末の時期で、ST-8などが該当する。ST-8からは良好な一括資料が出土している。遺物には壺、甕、鉢、高杯がみられ、叩目はI-1期に比べ減少傾向にあり、底部がほぼ丸底といえるような土器も出土して来る。ST-8の平面形はほぼ円形といえるものであるが、前時期と同様方形も共存したと考えられる。

I-3期 古墳時代初頭の時期で、ST-4、SX-8、P-14・15などが該当する。所謂小型三種の出現に特徴付けることができる。尤も、小型丸底壺自体の確認には至っていないが、⁽¹⁾その存在は予想し得るものである。遺物では叩目の減少、丸底の盛行を挙げることができ、甕などでは古い形態をとりつつも叩目を施さないものがみうけられる。住居址の平面形はほぼ方形になって来ると考えられる。

I-4期 古墳時代前期で、SK-54などが該当する。絶対量が少なく、明確な時期を提示することは難しいが、I-3期とはある程度の時期差を持ち、かつ須恵器出現以前のものとみることができよう。

これらを南四国における土器型式に当嵌めて考えるならば、I-1期及びI-2期をヒビノ

キⅡ式、I-3期をヒビノキⅢ式と馬場木式の一部、I-4期を馬場木式の大半にそれぞれ該当させることもできよう。また、幡多地方には芳奈Ⅰ式、芳奈Ⅱ式といわれる土器がある。これらは叩目を持たない土器であり、本遺跡出土のものとは手法、形態的に異なるもので、南予地方との繋がりが色濃くでているものとみることができる。⁽⁶⁾

ここで少し、土佐の古墳時代についてみてみたい。古墳時代は前方後円墳の出現をもって始まるとしている。ところが、土佐の場合、現在確認されている最も古い前方後円墳は宿毛市曾我山古墳で4世紀末から5世紀中葉にかけて築造されたと考えられている。このような現状で土佐の古墳時代を考えるならば、その始まりを大幅に遅らせる必要がでてくる。一步譲って、古墳時代の始まりを県内最古の古墳である高岡山古墳1号墳の築造の時期としても先進地域とは半世紀あまりのずれが生じて来る。そこには土佐独自の文化がなお生きづけているとみるとることはできないであろうか。搬入された土器で、南四国の土器を時間的に位置付けることも重要であろうが、そのまま同時代、同文化で推移していたといえない面もあるのではなかろうか。南四国の地理的環境を考慮すれば、今以上に南四国独自の時間的推移を設定する必要が生じて来ると思われる。このことはこの時代に限った特徴ではなく、7世紀の土佐についても同様なことが指摘される。すなわち、このことは土佐の地理的風土が生んだ後進性と保守性に起因するのではなかろうか。一方で、盲目的な効率性と突発的な革新性が裏腹に潜んでいることも指摘できよう。

(2) II期

古墳時代後期、西暦では6世紀前半の時期である。遺構ではS T-1・7、S K-22・24・30、S D-8~10・12・13等を主だったものとして挙げることができる。これらの遺構はB区を中心にはほぼ全域で検出されている。遺物としては5世紀後半のものもあり、また、遺構も重複しており、当然時期差を指摘し得るものであろうが、遺構自体ではそれを明確にすることはできなかった。尤も、早咲遺跡全体では、数期の小間に細分することも可能であると考えられる。また、この時期は祭祀が盛んに行われた時期でもあり、数多くの祭祀遺物がそれを物語ってくれる。しかし、今回は中村市具向中山遺跡群や古津賀遺跡で検出されたような祭祀場所そのものの確認には至らなかった。当遺跡の北側には以前小高い山があったと聞く。場合によれば、その周囲で祭祀行為が行われていたのかもしれないが、残念ながら今となっては確認する術が無い。

(3) III期

平安時代、西暦では10世紀頃の時期である。この時期の遺構は極めて少なく、S B-1、S D-10などが該当する程度である。今回の調査ではその性格まで言及することができないが、官衙関連遺跡とみられる宮崎遺跡などとの関連も今後追求していくかなければならないであろう。

(4) IV期

近世以降、西暦では18世紀後半以降の時期である。SK-7を始めとして各調査区から数多くの遺構が検出されている。SK-42・108のようなカマドの存在から当時集落を形成していたことが容易に想像され、SD-1~3・16・20などが屋敷地を囲む溝跡であったのではないかとみられる。また、今回は長曾我部地検帳に記載されている時期の遺構は確認されなかつたが、表採遺物の中にはその時期のものも含まれており、今後発見される可能性もある。

2. 遺物

(1) 弥生土器、土師器

今回確認した弥生土器は中期末と後期後半から終末にかけてのものであり、土師器は古墳時代前期（4世紀前半頃）と古墳時代後期（5世紀後半～6世紀前半）及び平安時代（10世紀頃）のものであった。これらの内遺構が確認されたものは前述のとおりであり、特に遺物としては弥生時代後期後半から古墳時代初頭頃に位置付けられるものと古墳時代後期（6世紀前半）に属するものが多く出土している。なお、前者における弥生土器と土師器との区別は小型三種の有無によって行った。また、形態分類についてはこれらを総括的に行ったため、出土量の多かった甕などでは便宜的なものとなっている。

まず、壺では、大半が弥生時代後期後半から古墳時代初頭に位置付けられるものであり、二重口縁をなすものが多い。壺A-1は古式土師器の典型的な壺である。壺A-2・A-3は弥生時代終末のものと考えられる。壺A-5の239は搬入品とみられる。壺B～Dは形態的に弥生時代後期後半に遡るものであるが、今回出土のものは概ね壺A-1と同時期であろう。壺Eは、庄内式からみられる形態で、時期的には壺A-1とほぼ同じものが出土している。甕は4種に大別した。甕C・Dは出土例が僅かであるが、甕Cは弥生時代以来みられる形態で、甕Dは土師器になってから出現する形態と考えられる。甕A・Bについては、弥生土器、土師器に普遍的にみられる形態である。ただし、傾向として、甕Aが弥生土器に多く、甕B、中でも甕B-3が6世紀前半の土師器に目立つ形態といえよう。ST-8の甕の組成をみてみるとA-2-dが1点、A-3-aが1点、A-3-dが2点、A-3-eが1点、A-3-fが1点で、口縁部が側部からくの字形をなして上がり、口径が胴形より小さいという特徴を指し得るが、口縁部そのものの形態となるとまちまちで用途により造り分けたとも考えられる。なお、ST-4出土の甕（137）は破片であるがその形態からみて搬入品と考えられる。瓶は出土例が僅かで、形態的変遷は追えなかった。鉢は比較的まとまって出土しており、その変遷を概ね把握することができる。ただし、弥生時代後期にみられる大型の鉢は出土していない。本遺跡のI-1期には鉢A-1が主流を占め、I-2期には鉢A-2が中心となる。外面には叩目が残り、平底を呈するものが多い。I-3期には鉢Bに主体が替り、鉢C、鉢D-1が出現して来る。今回は出土していないが鉢D-1に先行するものとして平底の底部を有するもの

存在も推測される。この期の特徴は鉢Cの出現であり、かつ器台Aが共伴する点である。小型丸底壺そのものの確認には至らなかったが、小型三種の他の2点が出現する。この現象を古墳文化の始まりととらえることができるのではなかろうか。鉢B-2や鉢D-1の中にこのI-3期に後続するものも含まれるが、その量は極めて少なくなる。II期になって再び鉢B-2と鉢D-2がみられるようになる。高杯はA・Bの2類に大別される。高杯Bについては今回明確なものは出土していないが、実体として存在することは疑う余地のないものである。また、脚部のみの破片が多く、それらには弥生土器とみられるものも多々あるが、形態分類できたのはすべて土師器に属するものであり、基本的に高杯A-1から高杯A-2へ移行するとみることができよう。器台はI-3期に属するものが出土している。脚部の形態により2類に分けたが、器台Bがやや古相を呈する程度の差とみられる。

以上、若干の考察を加えまとめてみたが、弥生時代の終焉と古墳時代の始まりについては流動的な面が多く、今後当然変更しなければならないこともでてこよう。前節で触れたように南四国という地域に根ざした時代区分が今後より一層重要なってくるのではなかろうか。

(2) 粗製土器

24点の手捏土器が確認され、内18点が遺構から出土している。これらは、第V章で記したようにA類とB類5種に分類され、広義の土製模造品に含まれるとみられるが、粗製土器（小型）⁽¹³⁾として一項を設けた。A類とB-5類については、前者が余りにも簡単な造りで、後者が極めて粗雑な造りのため、どのような土器を模したか不明確であるが、鉢Aないし鉢Bにその粗型を求めるができるのではなかろうか。他の形態については、今回出土の鉢類にその粗型を見出しが可能で、B-1類が鉢A、B-2類が鉢B-1、B-3類が鉢B-2、B-4類が鉢Dをそれぞれスケールダウンし模造しているとみることができよう。各形態の内訳は、A類が5点、B-1類が4点、B-2類が3点、B-3類が10点、B-4類が1点、B-5類が1点である。出土数の多いB-3類は、弥生時代後期後半から古墳時代後期にかけての各遺構から出土しており、普遍的な形態とみることもできる。一方、B-1類、B-2類は、ST-8・4の弥生時代終末から古墳時代初頭の遺構を中心に出土しており、比較的古い形態ととらえることもできよう。なお、手捏土器が塚下で最もまとまって出土している中村市只同中山遺跡群（4世紀、5世紀後半～6世紀初頭）と同市古津賀遺跡（6世紀前半前後）では、前者にB-1類、B-2類、B-4類が比較的多くみられるのに対し、後者にはA類とB-3類が目立つ。

(3) 須恵器

今回確認された須恵器は5世紀後半から8世紀後半にかけてのものであるが、6世紀後半以降のものは極めて少ない。最も古い5世紀後半に位置付けられるものは、中村市只同中山遺跡群での時期区分（以下中筋編年と言う）ではI期に属し、現在のところ南四国では最古の須恵器に該当する。330の杯蓋、331の杯身、317と325の無蓋高杯などがそれに当たる。中でも330

・317は陶邑のTK-208そのものであり、その出土は予想されていたとはいえるがその意味は大きく、具同中山遺跡群同様中央政権との密接な繋がりを物語っているといえよう。具同中山遺跡群では、次のⅡ期で最盛期を迎えるが、本遺跡では中筋編年のⅡ期、Ⅲ期に位置付けられる遺物は今回ほとんど出土せず、次のⅣ期で最盛期を迎える。これは、中村市古津賀遺跡と全く同じ状況を呈しており、両遺構の関係が注目される。後川・中筋川流域では、Ⅲ期を境に祭祀の主体が具同中山遺跡群から古津賀遺跡へ移行したと考えられている。その時期、本遺構でも同様に祭祀行為が行われたと推測され、言わば後川・中筋川文化圏に組み込まれていたとみることができよう。古津賀遺跡は、それ以後徐々に衰退して行く。本遺跡も軌を一にする。次に須恵器が本遺跡でみられるのは、律令体制も整った奈良時代も後半になってからである。その出土量からみて、古墳時代にみられたような華々しさとは程遠いようなものに思われる。

(4) 陶磁器類

すべて18世紀後半以降のもので、特に19世紀以降とみられるものが目立った。18世紀後半の代表として伊万里Ⅲ期の紅猪口を挙げることができる。373の伊万里の皿もこの期に属するものであろう。それらに続く、伊万里Ⅳ期に属するもの(379)や京焼系とみられるもの(381)などが比較的多く出土しているが、図示していないものもある。これらは概ね19世紀以降と考えられるもので、幕末ないし明治時代に該当し、本遺跡のⅣ期の主体をなす。田村遺跡群でも、18世紀後半以降、伊万里系、唐津系、瀬戸焼、備前焼が目立って多くなり、中でも土器に煙管などと共に副葬された例が多くなる。これは農民層が力を貯えて来た証とも考えられ、本遺跡においても似たことが言えるのかもしれない。ただ、SD-20などはその規模も比較的大きいものとみられ、単に農村風景を連想するのはやや無理がありそうである。なお、詳細については今後の研究に委ねたい。

(5) 土製品

土鍤と土製模造品がある。まず、土鍤は孔を設けるものと抉りを設けるものとに分けることができる。前者は弥生時代以降普遍的にみられるもので、用途によりその大きさを異にすると考えられる。また、形態的には、古代以前のものは391に代表されるように概して円筒形を呈し両端が平坦となり、中世以降は390にみられるように両端を細く仕上げた紡錘形を呈するものが多くなる傾向にあるとみることができよう。抉りを設けたものは3点出土しており、397は比較的珍しいもので県下では類例に乏しい。388・389も孔を設けるものに比べればその出土例は少ないが、田村遺跡群の莊館跡とみられる遺構や具同中山遺跡群の平成元年度以降の調査個所など概して古代に位置付けられる遺跡から多く出土している。

土製模造品には、玉(1点)、鏡(2点)、円板(6点)があり、表土層出土のものが半数を占めるが、これだけまとまって出土しているのは県下では先の具同中山遺跡群や古津賀遺跡のみである。中でも円板の出土数では県下一である。さて、玉は土佐山田町林田遺跡と奈良県纏向遺跡に類例を求める事ができるが、それらには文様が全くと言ってよいほど施されておらず

す、単にソロバン玉状をなすのみである。また、本山町嶺北高校遺跡でも出土しているらしいがその实体は不明である。林山遺跡出土のものは鉢鍤車を模したものと考えられているが、今回出土のものは両面にそれぞれ異った刺突文を施しており、一種異様で呪術的色彩の濃いものとみることができないであろうか。本来の意味を断定することはできないが、今回は広義の玉として扱った。鏡と円板については形態的に異っており分類して記述したが、本来は双方とも模造鏡と考えられているもので、前者には鉢が付き、後者には鉢が付かないものとして分類されている。⁽²⁵⁾また、後者には刻線が両面に施されたもの、片面のみに施されたもの、全く施されないものの3種類が存在する。

(6) 石製品

叩石、磨石、模造品（円板）、砥石、石臼がある。その8割近くは叩石が占めている。叩石自体は縄文時代に普遍的にみられるものであるが、具同中山遺跡群や古津賀遺跡など古墳時代の祭祀遺跡から比較的目立って出土する。本遺跡においても50点以上が確認されている。本来は、木の実等を打ち割るために使用されたものと考えられ、SK-25出土の414・415などのセット（B類とC類のセット）はそれを如実に表わしたものということができよう。一方、A類に対応するC類は極めて少なくST-7から1点出土する程度である。本来414と415のようなセット関係にあったならば、C類の占める割合がもう少し高かったとしても不思議ではなかろう。また、敲打痕の部位についてみてみると、縁辺部にもそれが認められるA-3類がA類の中で半数近くを占めている。これはA類の叩石が手で握られ敲打用、換言すればC類と同じ方法で使用されたことを意味しているとみることもできよう。これらを総合すると、B類とC類のようなセット関係以外にA類、特にA-3類には特別な用途があったとみることができるのでなかろうか。この古墳時代は金属器が一般化していた時代でもあり、新たに河原石を運んで来て使用する必要があったのであろうか。同時代の集落跡ではその出土をほとんどみない。また、A類はすべて手の平に乗る程度の人気さである。このように推考すると叩石A類、中でもA-3類は本来の用途以外に使用されていたと考えられないであろうか。次に、磨石と模造品についてみてみる。これらはすべてST-8から出土している。模造品の円板は、前述の土製円板と施文がほぼ同じでやはり鏡を模したものであったとみることができよう。管見の限りでは類例がなく、他との比較ができないが、磨石が共存していることなどからみても、祭祀に使用されたと考えてよくはなかろうか。砥石、石臼については特に目立った出土状態は認められなかった。

(7) 金属製品

3点の煙管が出土しているのみで、前述の陶磁器類同様本遺跡のⅣ期の所産であるとみることができよう。

3.まとめ

早咲遺跡の集落の発生は弥生時代に遡ることができ、以後断続的ではあるが2度の繁栄期を迎えた。以下時代別に概述し、まとめとする。

(1) 弥生時代

出土遺物からすると中期後半に集落が発生したとみることもできる。しかし、出土量が稀少であり、本格的に集落が形成し始めるのは後期後半を待たなければならない。弥生時代も終りに近づいた頃、多数の住居が立ち並び最初の繁栄期を迎える。この頃は、香長平野でも各地区に集落が爆発的に増え始め、拠点の大集落が形成し始める時期である。幡多地方では宿毛市芳奈でこの時期の集落が発見されている。この時期、本遺跡の規模は東西150m、南北200m前後に及ぶと推測され、大方一円の拠点的大集落であったといえるのではなかろうか。正にこの繁栄は古墳出現前夜まで続くのである。

(2) 古墳時代

弥生時代から100年余りも続いた繁栄も古墳時代にはいり間もなく終焉を迎えることになる。香長平野を始めとして各地でみられた大集落も軸を一にする。この終焉と新たな集落形成が南四国における古墳時代当來を正に意味しているのかもしれない。そして、後期になり再び早咲遺跡に集落が形成し始める。この集落は、弥生時代に形成された集落とは異なり、中央政権と密接な関係の上で成り立ったものであり、中央政権主導型の祭祀行為が頻繁に行われるようになる。ほぼ同時期に中村市古津賀遺跡でも同様の祭祀行為が行われる。この時期が、2番目の繁栄期であり、かつ早咲遺跡の最盛期ともいえる時期で、集落は東西200m、南北250m前後に拡大されている。しかし、それも6世紀の半ばを境として急速に衰退して行く。古津賀遺跡を始めとして幡多地区・円の遺跡にいえることで、南四国の中核が幡多国から土佐国へ移ってしまったことに起因するのではなかろうか。以後、早咲遺跡が歴史の表舞台に立つことはなくなる。

(3) 古代

律令体制となりこの大方にも郷が設置される。しかし、かつて繁栄を來した早咲の地には設置されなかった。以前のような華々しさはもはや見出すことができず、のどかな田園風景が浮んで来る。

(4) 中世

大方・円に山城が林立し、群雄割拠する時代であるが、立地故か、集落は確認されるに至っていない。

(5) 近世

近世も終わりに近づいた18世紀後半以降19世紀にかけて、集落が形成されている。比較的大きな溝に囲まれたとみられる屋敷地もあり、一つの部落をなしていたのではなかろうか。幹線道路の推移により今日の部分に集落が移動していったのであろう。

註

- (1) 田中琢「布留式以前」『考古学研究』第12卷第2号 1965
- (2) 第VI章2遺物(1)弥生土器、土器類の中でも触れているが、壺の形態の傾向として、壺Aが弥生土器に多くみうけられる。
- (3) 岡本健児・廣田典夫「ひびのき遺跡」土佐山田町教育委員会 1977
- (4) 岡本健児・廣田典夫「山根・石屋敷遺跡(付)馬場木遺跡」春野町教育委員会 1976
西暦では4世紀末から5世紀前半にかけてのものと報告書に記されているが、写真で紹介されている中には古墳時代始め頃に位置付けられるのではないかとみられるものもあり、今後再検討の必要があるのではなかろうか。
- (5) 岡本健児・木村剛朗「芳奈遺跡・芳奈向山遺跡」宿毛市教育委員会 1978
- (6) 「愛媛県史 原始・古代I」資料編 南予地方の弥生時代後期の土器の中に類例を求めることができる。
- (7) 岡本健児著『日本の古代遺跡 39 高知』保育社 1989
- (8) 高知県教育委員会『高岡山古墳群発掘調査報告書』 1985 には5世紀初頭から前半にかけて築造されたと報告されているが、発掘担当者の山本哲也氏によれば4世紀後半に遡る可能性が全くないわけではないとのことであった。
- (9) 香長平野ではこの時期狭間古墳といわれる小円墳1基が確認されている以外全く発見されておらず、前方後円墳の出現は6世紀初頭の土佐山田町伏原大塚古墳まで待たなければならない。また、昭和63、平成元年度に実施された遺跡分布調査においても新たな前方後円墳等は発見されなかった。
- (10) 陶邑のⅢ型式に比定される須恵器の出土は極めて少なく、Ⅱ型式の須恵器と共存した形となっている。白鳳時代の比江庵寺からはⅡ型式の須恵器の出土がみられ、また仮に7世紀にⅡ型式の須恵器がほとんど存在しないとなれば、土佐では終末期の古墳は全く存在しないことになる。土佐の場合時代と時代の節目にこのような状況を呈していたのではなかろうか。ただし、律令体制以降このような状況は今のところみられない。
- (11) 高知県教育委員会『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書』一古津賀遺跡・共同中山遺跡群一 1988
- (12) 緑釉陶器や転用碗が多数出土している。平成3年度に報告書が刊行される予定である。
- (13) 小野亘一「祭記遺跡」考古学ライブラリー10 ニューサイエンス社 1982
- (14) 註10と同じ
- (15) 註10と同じ
- (16) 田辺昭三『陶邑古窯址群』I 平安学園考古学クラブ 1966、大阪府教育委員会『陶邑』III 1978等
- (17) 今回付録で紹介した須恵器の杯蓋を、大方町ふるさと総合センターで見た時、共同中山遺跡群の例から必ず先行する須恵器が存在すると確信していた。
- (18) 廣田佳久「県内遺跡からみた持ち込み文物、古式須恵器について」『土佐史談』第185号 1990 の中にその一端を記している。
- (19) 九州陶磁文化館『国内出土の肥前陶器』 1984
- (20) 高知県教育委員会『田村遺跡群』第9分冊 1986

- (21) 高知県教育委員会『田村遺跡群』第6分冊 1986
- (22) その内容については平成3年度に『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』として刊行される予定である。
- (23) 土佐山田町教育委員会『林田遺跡』1985
- (24) 横原考古学研究所『撫向』1980
- (25) 註(23)と同じ
- (26)『神道考古学講座』第三巻 雄山閣 1981

あとがき

早咲遺跡に道路建設の計画があることを知ったのは、丁度高知県遺跡詳細分布調査事業に着手した昭和61年であった。それから数えること3年、早咲遺跡の第1次調査を開始したのは、平成元年の真夏、8月1日のことであった。梅雨明けの蒸し暑い日が続き、最初の1週間は何の収穫もなく、果して砂地に遺構があったのか、このまま何一つ確認できずに終わってしまうのではないか等々自問した日のことがきのうのように思いだされる。C区で始めて遺構が検出されてからは通常のペースに戻ることができた。しかし、砂地がいかに水に弱いのか、度重なる台風で痛感させられた。

調査以外にもいろいろのことがあった。第1次調査の際、現場指導に来てもらった高知県文化財保護審議会委員である父が、第2次調査の終了を待たずに他界した。第2次調査は父の死期を知りつつの出張であった。この間あまりにも多くのことがあったような気がする。

このような状況の下で、無事に調査が完了できたのは同僚のようにいつも温かく接していた文野榮喜教育長を始めとする大方町教育委員会の皆様方のお蔭と心より感謝する次第である。

報告書の内容については、調査結果に基づき記述したつもりであるが、管見故に今日の学問的水準にひどく遅れたものになったのではかという強い懸念がある。中でも、弥生時代と古墳時代の境となる遺物については、何度も自問自答し、今なお自問自答しているものもある。しかし、貴重な資料であるが故、できるだけ早く多くの方々にみていただきたいという気持ちの方が先行したのも事実である。ともかく、いろいろなことがあった。それ故、何かと思い入れがあったのかもしれない。特に整理作業にあっては作業員の方々に何かと無理をいったような気がする。記してお詫びする次第である。

最後にこの間、御指導、御教示をいただいた諸先生・先輩・同僚諸氏の芳名を記して感謝の言葉に代えさせていただきたい。(五十音順)

小橋徳道、須田 勉、出原恵三、日野尚志、故廣田典夫、前田光雄、松田直則、森田尚宏、安光敬雄、山本哲也、吉原達生

付 編

今回の機会を利用して以前早咲遺跡から出土した遺物の主だったものを紹介することとした。478の須恵器は、以前岡本健児先生を招き、早咲遺跡のほぼ中央部を試掘調査した時に出土したものであると聞いている。その時は、全く遺構は検出されず、1mぐらい掘った時点で湧水があり、調査を打ち切ったらしい。調査地点は、D区の北約30mの地点で、現在樹木が生い茂っている所である。今回の調査区の状態から当時の状況を推測すると、表土層、遺物包含層、さらには遺構検出面である地山を掘り抜いてしまい、湧水をみたということになるのではなかろうか。遺物は完形であることから包含層から出土したのであろう。なお、この遺物は以前大方町ふるさと総合センターに展示されていたものである。

他の遺物については、昭和62年の県営圃場整備事業に伴う工事の際、早咲遺跡の縁辺部からまとまって出土したらしい。

以下、各器種について紹介する。

土師器 (Fig. 68-474-476)

474は長胴の甕で、甕B-3-dに該当さすことができる。器面は摩耗しており調整不明である。475は鉢で、鉢B-2に該当さすことができる。所謂、椀と表現した方が適切なものである。口縁部は内済する。476は台付鉢で、475に高台を付けたものであり、台付鉢と表現し得るものである。2点とも器面は摩耗しており調整不明である。この3点はほぼ同期とみられ、鉢の形態からすると、5世紀末～6世紀初頭のものではなかろうか。

手握上器 (Fig. 68-477)

B-3類に分類されるもので、口縁部は指でつまんで造り出している。時期的には前述の3点とはほぼ同じとみられる。

須恵器 (Fig. 68-478・479)

478は杯蓋で、前述の中筋編年ではⅡ期に該当さすことができる。稜は小さな断面三角形をなし、稜の下に凹線を巡らすことにより、稜をより明確にさせている。天井部外面には粗いが回転カキ目調整を回転ヘラ削りの後に加えている。極めて珍しい例である。

479は杯身で、前述の中筋編年ではⅢ期に該当さすことができ、時期的には前述の土師器とほぼ同じと考えることができる。たち上がりは内傾して上がり、縁部は外傾する平面をなす。

これらの遺物は、早咲遺跡のⅡ期でもやや古い時期に位置付けられるもので、第Ⅶ章で記したように将来的には数期に細分することができよう。

Tab. 3 懸穴住居址又は懸穴状遺構計測表

調査区	遺構番号	平面形	規模(m)	主軸方向 (Nは真北)	柱穴	面積 (m ²)	施設	備考
B区	S T - 1	方 形	5.00×(5.00)	N-26°-W	9	(25.0)		古墳時代後期 (6世紀初頭)
✿	S T - 2	円 形	約6.00	—	3	28.3		弥生時代後期 後半
D区	S T - 3	方 形	(5.00)×(4.00)	N-15°-W	6	(20.0)		✿
✿	S T - 4	✿	5.65×5.50	N-14°-W	12	31.1		古墳時代初頭 (4世紀)
✿	S T - 5	円 形	約5.00	—	7	19.6	ベット 状遺構	弥生時代後期 後半
E区	S T - 6	隅丸方形	4.50×3.20	N-13°-W	4	14.4		✿
✿	S T - 7	✿	3.20×(1.50)	N-63°-W	2	(4.8)		古墳時代後期 (6世紀前半)
✿	S T - 8	円 形	3.50	—	4	9.6	中央 ピット	弥生時代終末

Tab. 4 掘立柱建物跡計測表

調査区	遺構番号	規 模				面 積 (m ²)	様 方 向 (Nは真北)	備 考
		梁 × 術 (間) (間)	梁間 m × 術行 m (尺) (尺)	柱 間 距 離 梁 m (尺)	術 m (尺)			
D区	S B - 1	2×2以上	4.5×3.75以上 (15)(12.5)	1.95×2.55 (6.5)(8.5)	1.8×1.95 (6.0)(6.5)	(17.55)	N-6°47'-W	平安時代 (10世紀)

Tab. 5 土坑計測表 1

調査区	遺構番号	平 面 形	規 模 (m)			長軸方向 (Nは真北)	断面形	備 考
			長 辺	短 辺	深 さ			
B区	S K - 1	不整粒円形	2.19	1.37	0.14	N-83°-E	舟底形	近世 (19世紀以降)
✿	S K - 2	不整形	2.14	1.70	0.25	N-5°-E	✿	✿ (18世紀後半)
✿	S K - 3	不整形	1.83	1.60	0.40	N-27°-W	✿	✿ (19世紀以降)
✿	S K - 4	不整円形	1.72	1.64	0.27	N-63°-W	✿	✿
✿	S K - 5	方 形	2.00	1.99	0.14	N-60°-W	逆台形	弥生時代終末
✿	S K - 6	✿	1.00 (1.91)	(0.68) (0.25)	0.11 0.02	N-24°-E N-60°-W	✿	✿
✿	S K - 7	椭円形	1.66	(0.50)	0.13	N-60°-W	舟底形	弥生時代
✿	S K - 8	隅丸方形	4.00	(1.60)	(0.20)	N-26°-W	逆台形	近世 (19世紀以降)
✿	S K - 9	不整形	2.65	1.45	0.13	N-24°-W	✿	✿ (18世紀後半)
✿	S K - 10	✿	1.38	1.35	0.21	N-9°-W	✿	弥生時代後期後半

Tab. 6 土坑計測表 2

調査区	遺構番号	平面形	規 模 (m)			長軸方向 (Nは真北)	断面形	備 考
			長辺	短辺	深さ			
B区	SK-12	方形	1.72	(1.00)	0.05	N-83°-E	逆台形	古墳時代
夕	SK-13	*	1.43	1.32	0.13	N-7°-W	*	古墳時代後期
夕	SK-14	*	2.96	1.60	0.12	N-2°-E	*	近世(19世紀以降)
夕	SK-15	椭円形	1.05	0.78	0.13	N-54°-W	U字形	弥生時代後期後半
夕	SK-16	不整円形	1.31	1.23	0.29	N-20°-W	舟底形	古墳時代後期
夕	SK-17	円形	1.41	—	0.09	—	*	夕
夕	SK-18	*	1.43	—	0.18	—	逆台形	近世(19世紀以降)
夕	SK-19	*	1.50	—	0.34	—	*	夕
夕	SK-20	方形	(0.90)	(0.80)	0.16	N-14°-W	*	古墳時代後期
夕	SK-21	隅丸方形	(1.80)	1.17	0.16	N-27°-E	*	夕
夕	SK-22	方形	2.62	(1.99)	0.30	N-36°-W	*	夕
夕	SK-23	不整形	7.64	1.39	0.25	N-23°-W	*	弥生時代後期後半
夕	SK-24	不整円形	0.98	0.83	0.29	N-4°-W	*	古墳時代後期(6世紀前半)
夕	SK-25	方形	1.35	1.12	0.45	N-12°-W	*	夕(6世紀初頭)
夕	SK-26	椭円形	1.61	0.93	0.11	N-20°-W	舟底形	夕
夕	SK-27	不整椭円形	1.68	0.75	0.10	N-21°-W	*	夕(6世紀前半)
夕	SK-28	不整円形	(1.30)	(1.20)	0.10	N-89°-W	*	夕(6世紀初頭)
C区	SK-29	椭円形	(1.80)	(0.54)	0.12	N-63°-W	逆台形	夕(6世紀前半)
夕	SK-30	不整椭円形	1.16	1.03	0.31	N-85°-W	*	夕(5世紀末~6世紀初頭)
夕	SK-31	不整形	4.34	1.39	0.06	N-21°-W	舟底形	夕(6世紀前半)
夕	SK-32	方形	1.34	1.21	0.06	N-73°-E	逆台形	*
夕	SK-33	*	2.10	1.26	0.03	N-20°-W	*	*
夕	SK-34	不整円形	1.24	1.20	0.16	N-60°-E	*	近世(19世紀以降)
夕	SK-35	円形	1.18	—	0.21	—	*	*
夕	SK-36	不整形	2.78	1.62	0.09	N-48°-E	舟底形	*
夕	SK-37	舟形	2.20	0.47	0.13	N-73°-E	*	*
夕	SK-38	不整形	1.40	0.90	0.06	N-52°-W	*	古墳時代後期(6世紀前半)
夕	SK-39	舟形	5.65	2.00	0.30	N-19°-W	逆台形	近世(19世紀以降)
夕	SK-40	隅丸方形	1.54	1.27	0.10	N-5°-W	*	古墳時代後期(6世紀前半)
夕	SK-41	不整椭円形	1.35	0.79	0.05	N-58°-E	舟底形	弥生時代後期後半
夕	SK-42	椭円形	1.15	0.85	0.13	N-23°-W	U字形	近世(19世紀以降)
夕	SK-43	舟形	(1.40)	0.53	0.14	N-60°-E	舟底形	古墳時代後期(6世紀前半)
夕	SK-44	不整円形	(1.70)	1.39	0.45	N-65°-E	逆台形	近世(19世紀以降)

Tab. 7 土坑計測表3

調査区	遺構番号	平面形	規 模 (m)			長軸方向 (Nは貞北)	断面形	備 考
			長辺	短辺	深さ			
C区	SK-45	隅丸方形	2.80	1.96	0.38	N-15°-W	逆台形	近世(19世紀以降)
D区	SK-46	不整円形	1.01	0.86	0.09	N-73°-E	舟底形	古墳時代後期
※	SK-47	不整形	1.60	0.55	0.13	N-28°-E	逆台形	※(6世紀前半)
※	SK-48	椿円形	1.18	(0.35)	0.15	N-66°-W	舟底形	弥生時代後期
※	SK-49	方 形	1.61	1.50	0.30	N-66°-E	逆台形	古墳時代後期
※	SK-50	不整形	1.12	0.95	0.38	N-45°-E	タ	※(6世紀前半)
※	SK-51	舟 形	1.88	0.60	0.32	N-57°-E	タ	近世(19世紀以降)
※	SK-52	不整方形	1.51	1.01	0.14	N-28°-W	タ	タ
※	SK-53	隅丸方形	1.61	1.01	0.45	N-29°-W	タ	古墳時代前期(4世紀)
※	SK-54	円 形	0.78	—	0.22	—	タ	タ
※	SK-55	椿円形	1.18	0.98	0.26	N-25°-W	タ	古墳時代後期(6世紀前半)
※	SK-56	不整形	1.62	0.35	0.25	N-87°-E	タ	古墳時代前期(4世紀)
※	SK-57	椿円形	1.36	(1.03)	0.17	N-59°-W	舟底形	タ
※	SK-58	不整形	1.64	(1.40)	0.41	N-67°-W	逆台形	古墳時代後期(6世紀前半)
※	SK-59	円 形	1.10	—	0.04	—	タ	古墳時代前期(4世紀)
※	SK-60	不整円形	2.05	1.85	0.49	N-8°-E	タ	近世以降
※	SK-61	不整形	2.15	1.20	0.06	N-71°-W	タ	古墳時代前期(4世紀)
※	SK-62	不整椿円形	1.10	0.76	0.10	N-17°-W	タ	古墳時代後期(6世紀前半)
※	SK-63	舟 形	1.83	0.54	0.02	N-3°-W	舟底形	タ
※	SK-64	不整形	2.36	1.06	0.08	N-83°-E	逆台形	タ
※	SK-65	タ	3.84	1.56	0.31	N-49°-E	U字形	近世(19世紀以降)
※	SK-66	タ	(0.90)	(0.54)	0.08	N-66°-W	逆台形	古墳時代後期(6世紀前半)
※	SK-67	舟 形	(0.60)	0.40	0.12	N-89°-E	舟底形	タ
※	SK-68	方 形	1.08	1.02	0.14	N-24°-W	逆台形	タ
※	SK-69	タ	1.30	1.10	0.14	N-47°-W	タ	タ
※	SK-70	舟 形	2.24	0.54	0.16	N-72°-E	舟底形	弥生時代後期
※	SK-71	タ	(0.80)	0.28	0.06	N-78°-E	タ	古墳時代後期(6世紀前半)
※	SK-72	方 形	1.10	0.77	0.19	N-53°-W	逆台形	古墳時代前期(4世紀)
※	SK-73	舟 形	(0.78)	0.46	0.03	N-59°-E	舟底形	古墳時代後期(6世紀前半)

Tab. 8 土坑計測表4

調査区	造構番号	平面形	規 模 (m)			長軸方向 (Nは真北)	断面形	備 考
			長辺	短辺	深さ			
D区	S K - 74	角 形	1.12	0.56	0.17	N - 18° - E	舟底形	古墳時代後期 (6世紀前半)
+	S K - 75	方 形	(1.70)	(1.00)	0.07	N - 68° - W	逆台形	+
+	S K - 76	舟 形	2.90	0.34	0.24	N - 39° - W	U字形	+
+	S K - 77	不整形	(2.20)	(0.64)	0.09	N - 14° - W	逆台形	弥生時代終末
E区	S K - 78	円 形	0.98	—	0.55	—	+	近世 (19世紀以降)
+	S K - 79	不整円形	3.75	(2.10)	0.16	N - 76° - E	+	+
+	S K - 80	方 形	3.23	1.08	0.18	N - 15° - W	+	古墳時代後期 (6世紀前半)
+	S K - 81	不整形	(2.85)	(1.00)	0.06	N - 82° - W	+	（6世紀初頭）
+	S K - 82	椭円形	(1.80)	(1.75)	0.36	N - 6° - W	+	+
+	S K - 83	方 形	1.46	1.40	0.29	N - 79° - E	舟底形	近世 (19世紀以降)
+	S K - 84	円 形	1.42	—	0.42	—	逆台形	+
+	S K - 85	不整椭円形	2.39	1.21	0.25	N - 58° - E	舟底形	古墳時代後期 (6世紀前半)
+	S K - 86	不整方形	1.11	(0.47)	0.16	N - 72° - E	+	弥生時代後期
+	S K - 87	不整円形	1.70	1.58	0.14	N - 31° - W	+	弥生時代後期後半
+	S K - 88	不整椭円形	2.05	0.62	0.10	N - 66° - W	+	弥生時代後期
+	S K - 89	椭円形	1.54	0.87	0.08	N - 81° - E	+	古墳時代後期 (6世紀前半)
+	S K - 90	方 形	0.85	0.83	0.18	N - 69° - E	逆台形	+
+	S K - 91	椭円形	1.29	1.12	0.04	N - 50° - W	舟底形	+
+	S K - 92	不整椭円形	(1.90)	1.25	0.16	N - 25° - W	逆台形	近世 (18世紀後半)
+	S K - 93	不整方形	3.39	2.81	0.42	N - 89° - E	+	古墳時代後期 (6世紀前半)
+	S K - 94	+	2.80	1.40	0.16	N - 8° - W	舟底形	近世 (19世紀以降)
+	S K - 95	不整三角形	2.53	1.30	0.10	N - 5° - W	+	古墳時代前期 (4世紀)
+	S K - 96	不整椭円形	1.48	1.13	0.11	N - 81° - W	逆台形	+
+	S K - 97	不整方形	1.77	1.55	0.22	N - 5° - W	舟底形	近世 (18世紀後半)
+	S K - 98	+	(1.41)	1.40	0.19	N - 1° - W	+	古墳時代後期 (6世紀前半)
+	S K - 99	不整椭円形	1.60	1.28	0.19	N - 34° - W	+	弥生時代後期
+	S K - 100	不整方形	2.20	1.50	0.42	N - 13° - W	逆台形	近世 (19世紀後半)
+	S K - 101	不整形	0.90	(0.60)	0.06	N - 87° - W	舟底形	弥生時代後期
+	S K - 102	+	2.15	0.98	0.10	N - 16° - W	+	+
+	S K - 103	方 形	7.12	2.68	0.28	N - 15° - W	逆台形	近世 (19世紀以降)
+	S K - 104	+	2.10	1.73	0.19	N - 13° - E	+	弥生時代後期

Tab. 9 土坑計測表 5

調査区	遺構番号	平面形	規模(m)			長軸方向 (Nは真北)	断面形	備考
			長辺	短辺	深さ			
E区	S K-105	方形	1.70	1.13	0.12	N-79°-E	逆台形	弥生時代後期
◆	S K-106	◆	1.61	1.16	0.11	N-77°-E	◆	近世(19世紀以降)
◆	S K-107	◆	(2.30)	(1.00)	0.11	N-13°-W	◆	◆
◆	S K-108	橢円形	2.15	(0.89)	0.26	N-57°-W	◆	◆

Tab. 10 溝跡計測表 1

調査区	遺構番号	規模(m)			断面形	方向 (Nは真北)	備考
		幅	深さ	検出長			
B区	S D-1	0.80~1.18	0.26~0.29	15.00	U字形	N-79°-E	近世(19世紀以降)
◆	S D-2	0.55~0.68	0.06~0.12	4.30	舟底形	N-73°-E	◆
◆	S D-3	0.70~1.47	0.18~0.35	29.20	逆台形	N-74°-E	◆
◆	S D-4	0.54~0.75	0.05~0.07	11.40	舟底形	N-7°-W	古墳時代後期
◆	S D-5	0.63~0.92	0.07~0.15	9.76	◆	N-21°-W	◆
◆	S D-6	0.50~0.60	0.16~0.20	3.10	U字形	N-7°-W	近世(19世紀以降)
◆	S D-7	0.30~0.44	0.19~0.26	8.00	◆	N-16°-W	古墳時代後期(6世紀前半)
◆	S D-8	1.30~2.09	0.20~0.33	12.80	舟底形	N-73°-E	◆
◆	S D-9	0.85~1.15	0.31~0.33	12.00	◆	N-65°-E	◆
◆	S D-10	0.80~2.05	0.18~0.20	12.00	◆	N-76°-E	◆
◆	S D-11	0.83~1.13	0.15~0.17	14.40	◆	N-68°-E	奈良末~平安始め
◆	S D-12	0.86~1.57	0.27~0.32	16.40	◆	N-30°-W	古墳時代後期(6世紀前半)
◆	S D-13	1.13~1.30	0.33~0.42	14.00	◆	N-29°-W	◆
◆	S D-14	0.23~0.62	0.04~0.07	13.68	逆台形	N-68°-E	◆
◆	S D-15	(0.80)	(0.17)	2.30	◆	N-76°-E	◆
C区	S D-16	(1.05)	0.13~0.21	6.20	◆	N-75°-E	近世(19世紀以降)
◆	S D-17	0.83~1.70	0.02~0.14	6.08	◆	N-74°-E	◆
◆	S D-18	1.17~2.09	0.24~0.26	2.80	舟底形	N-8°-W	古墳時代後期(6世紀前半)
◆	S D-19	1.79~2.10	0.20~0.31	4.00	◆	N-21°-W	◆
D区	S D-20	2.81~3.50	0.42~0.48	22.40	U字形	N-70°-E	近世(19世紀以降)
◆	S D-21	0.50~0.55	0.06~0.12	12.80	舟底形	N-15°-W	古墳時代後期(6世紀前半)
◆	S D-22	0.45~0.59	0.06~0.15	2.75	◆	N-65°-E	◆

Tab. 11 溝跡計測表 2

測定区	遺構番号	規 模 (m)			断面形	方 向 (Nは真北)	備 考
		幅	深さ	突出長			
D 区	S D - 23	0.53~0.64	0.12~0.15	2.88	舟底形	N - 62° - E	近世 (19世紀以降)
夕	S D - 24	1.10~1.30	0.23~0.26	3.88	♦	N - 65° - E	夕
夕	S D - 25	0.43~1.19	0.06~0.12	9.28	邊台形	♦	古墳時代後期 (6世紀前半)
夕	S D - 26	0.28~0.30	0.02	2.00	舟底形	N - 16° - W	夕
夕	S D - 27	0.63~0.85	0.08~0.17	5.84	♦	N - 71° - E	近世 (19世紀以降)
夕	S D - 28	0.37~0.50	0.03~0.12	4.50	邊台形	N - 59° - E	古墳時代後期 (6世紀前半)
夕	S D - 29	0.74~1.30	0.06~0.07	3.00	♦	N - 60° - E	近世 (19世紀以降)
夕	S D - 30	0.25~0.61	0.03~0.10	4.20	舟底形	N - 23° - W	夕
E 区	S D - 31	0.45~0.73	0.02~0.09	1.55	♦	N - 11° - W	不詳 (弥生~古墳時代)
夕	S D - 32	0.45~0.81	0.05~0.07	2.30	♦	N - 11° - W	夕 夕
夕	S D - 33	0.42~0.97	0.06~0.10	2.40	邊台形	N - 7° - W	♦ 夕
夕	S D - 34	0.60~1.12	0.02~0.20	9.12	♦	N - 85° - W	♦ (近世)

Tab. 12 性格不明遺構計測表

調査区	遺構番号	平 面 形	規 模 (m)			備 考
			長辺	短辺	深さ	
B 区	S X - 1	不整形	5.28	4.40	0.13	弥生時代後期後半
夕	S X - 2	♦	6.16	2.16	0.09	古墳時代後期 (6世紀前半)
夕	S X - 3	不整方形	11.20	6.88	0.21	♦
C 区	S X - 4	不整形	5.84	3.60	0.04	♦
夕	S X - 5	♦	3.92	(0.64)	0.05	古墳時代前期 (4世紀)
夕	S X - 6	♦	5.36	4.64	0.14	弥生時代終末
D 区	S X - 7	♦	14.00	5.92	0.28	近世 (19世紀以降)
夕	S X - 8	♦	4.80	2.72	0.21	古墳時代初期
夕	S X - 9	♦	6.72	3.44	0.26	近世 (18世紀後半)
E 区	S X - 10	不整方形	2.56	1.92	0.08	古墳時代初期
夕	S X - 11	不整円形	4.24	—	0.04	弥生時代後期後半
夕	S X - 12	隅丸方形	3.04	1.76	0.04	♦
夕	S X - 13	不整形	6.96	6.32	0.33	近世 (19世紀以降)

Tab. 13 弥生土器、土師器観察表1 (B区第Ⅱ層)

検出番号	通称番号	器種	法量 (cm) 口徑 器高 胸徑 底径	形態・文様	手 法	備 考
Fig. 44 -1	B14 第Ⅱ層	土器器 蓋	17.0 (5.0) —	二重口縁のやである。口縁部は外 反する頬部から斜め上方にはほぼ直 線となる。端部は丸く仕上げる。	器裡は摩耗が著しく調査不明。	表A。
* -2	*	*	— (4.6) — 12.6	白釉の脚台部とみられ、216の 白陶器のそれより一回り大きい。 脚部は大きくハの字形に開き、頬部 は丸く仕上げる。	底部内面と脚台部外側はナデ調 整。他は不明。	表D。
* -3	*	赤土器 裏	16.8 (8.0) 15.7	口縁部はくの字形をなし、外上方 へほぼ直ぐ上がる。端部は内傾 する直面をなす。胸部は内凹気味に 下方へ下る。	口縁部外側は凹の後に旋方向 のハケ調整を施す。頬部外側に は旋方向の印加。内面にはハケ 目が残る。	表A-2-a。
* -4	*	土器器 蓋	12.8 (10.0) 12.3 —	口縁部は頬部から外反し、外上方 へほぼ直ぐ上がる。端部は丸味 を有す。胸部は内凹気味に下方へ 下る。	外面ナデ調整で、内面不明。	表B-2-d。
* -5	*	*	17.0 (9.0) 16.2 —	—	*	*
* -6	*	*	17.8 (12.7) 17.5 —	口縁部は頬部から外反し、外上方 へほぼ直ぐ上がる。端部は丸 味を有す。頬部は頬部で若干膨ら んだ後、やや内傾して下る。長脚 の発達である。	口縁部内外面ともヨコナデ調整 で、他はナデ調整。胸部には粘 土の接合痕が残る。	*
* -7	*	*	19.0 (5.5) —	口縁部は頬部から外反して上るが、 比較的長い口縁部である。頬部は 脚形を呈するとみられる。	口縁部外側はヨコナデ調整。他 は摩耗しており不明。	表B-3-a。
* -8	*	*	19.2 (8.0) 19.5 —	口縁部は頬部から外反して上るが、 比較的長い口縁部である。頬部は 脚形を呈するとみられる。	口縁部外側はヨコナデ調整。頬 部外側はナデ調整。他は不明。	*
* -9	*	*	16.0 (7.2) (19.3)	口縁部は頬部から外反し、そのま ま端部に至る。端部は丸味を有す。 胸部は脚形を呈する。	*	表B-3-c。
* -10	*	*	16.0 25.5 20.8 —	—	口縁部外側はヨコナデ調整。他 はナデ調整。	*
* -11	*	*	18.4 (13.5) 21.8 —	口縁部は頬部から外反し、そのま ま端部に至る。端部は丸味を有す。 胸部は、肩がやや張った後下方に ほぼ直ぐ下る。長脚の型である。	*	*
* -12	*	*	18.0 (5.4) — —	口縁部は頬部から外反し、途中で 屈曲して上るが。端部は丸味を有 す。脚部は丸味のあるものとみら れる。	口縁部の外側はヨコナデ調整。 他は不明。	表B-3-f。 口縁部外側には傷 が付着する。
* -13	*	*	18.4 (10.0) (23.6)	—	*	*
* -14	*	*	15.8 (9.3) 16.7 —	口縁部は頬部から外反し、途中で 屈曲して上るが。端部は丸味を有 す。胸部は脚形を呈するとみら れる。	*	表B-3-f。
Fig. 45 -15	*	*	16.8 (4.9) —	—	*	*

Tab. 14 弥生土器、土器観察表2 (B区第II層)

特徴番号	遺構番号	器種	口径 法量 (cm)	器高 網経 底径	形態・文様	手 法	備 考
Fig.45 -15	B区 第II層	土器器 蓋	19.0 (20.0) 23.0	11縁部は側部から外反し、途中で 屈曲して上げる。縁部は丸味を有 す。網経は網目を保つ。	器面は摩耗が著しく調査不明。	裏B-3-f。	
+	+	+	17.0 (9.0) (21.2) —	口縁部は側部から外反し、口唇部 を入りきる屈曲さ。側部は御形を呈 するともみられる。	口縁部内面ともヨコナガ調整。 側部外面はナガ調整。他は不明。	裏B-3-g。	
+	+	+	14.6 (4.7) —	—	—	—	+
+	+	+	22.6 (7.0) 21.3	口縁部はほぼ直線的に伸びる網経 から外傾する。長脛の型である。	器面は摩耗が著しく調査不明。	裏C。 口縁部外面には僅 の付着がみられる。	
+	+	+	— (8.0) —	下縁部から底部にかけてが残存す る。底部は丸底である。	外表面はナガ調整で、他は摩耗し ており不明。底部外面には粘土 の被合痕がある。		
+	+	史の把手	全長 6.0 全幅 6.8 全厚 3.6	縫が広く、厚みのあるものである。 21と対になるとみられる。	表面は摩耗しており調査不明。		
+	+	+	全長 6.0 全幅 5.2 全厚 4.0	縫が広く、厚みのあるものである。 21と対になるとみられる。	表面はナガ調整を施すが、指頭 厚板が部分前に残る。		
+	+	史の把手	全長 7.0 全幅 3.3 全厚 3.0	角状をなす把手で、史の把手とな るかもしれない。	表面はナガ調整を施すが、ヘラ ナガの痕が付け被合部を中心につ れ存在する。		
+	+	弥生土器 体	11.5 8.6 — 4.0	口縁部は体部から内湧気味に上が り、縁部付近で外上方を向く。底 部は平底でやや丸味がある。	器面は摩耗しており調査不明。	体A。	
+	+	土器蓋	13.9 5.4 —	縫状をなすもので、口縁部は内湧 気味に上がり、通路は丸く仕上げ る。底部は丸底である。	表面はナガ調整で、他は摩耗し ており調査不明。	鉢B。	
+	+	+	9.6 9.5 10.6	11縁部は体部から外反し、外上方 へ入りきる、縁部は内傾する縫を有 す。体縫幾大形は中位よりやや上位 あり。底部はやや尖底である。	口縁部内面から口縁部にかけて ヨコナガ調整、外選ナガ調整。 内面はヘラ状工具によるナガの 後にナガ調整を加える。	鉢D。	
+	+	高杯	16.1 15.2 — 10.8	杯底は斜面して伸びるもので、口 縁部は外傾して上がる。縁部は斜 め上方へドリ、縁部で大きく開く。 縫部は丸く仕上げられる。	杯底口縁内外面と器内面はヨコ ナガ調整。縫内面は右から左へ のヘラ削り。他はナガ調整。杯 底内面は丁寧なナガ調整。	高杯A-1。	
+	+	+	19.0 15.5 — 14.0	—	調査は27とは同じこととみられる が、摩耗しており不明瞭。他、 縫内面のヘラ削りは認められな かった。	*	
+	+	+	16.6 12.3 — 11.2	杯部は屈曲して伸びるもので、口 縫部はほぼ直線的に外上方へ上が る。縫部は斜め下方へドリ、縫部 で大きく開く。縫部は丸い。	杯部口縁内外面と縫内面はヨコ ナガ調整。縫内面上面にはヘラ 状工具による往來が残る。他は ナガ調整。	高杯A-2。	
+	+	+	5.0 — 7.2	縫部のみ残存しているもので、縫 部は中央で、縫部で大きく開く。	外縫ナガ調整。内面は不明。		

Tab. 15 弓生土器、土器器観察表3 (B区ST-1, SK-5・22・24・25, SD-1)

拂回番号	遺構番号	器種	法量 cm 器高 側径 底径	形態・文様	手 法	備 考
Fig. 46 -31	B区 ST-1	上部器 裏	26.6 29.5 27.6 —	口縁部は腹部から外反し。そのまま上反して端部に至る。端部は丸味を有す。腹部最大径は上部部にあり、内湾気味に上方へ下り、丸底の底部に至る。	口縁部外端はヨコナデ調整。腹部外面はナデ調整。内面は摩耗しており調査不明。	要B-1-e。 腹部外面には煤が付着。
* -32	* SK-5	弥生土器 *	24.0 (8.5) 25.0	口縁部はくの字形をなし。外上方へは丸直ぐ上がり、端部は内傾する面をなす。腹部は仰形。	外面上には並いたタキ目が残存。口縁部内面は右から左へのハケ調整。腹部内面はナデ調整。	要A-1-b。
* -33	* SK-22	上部器 *	18.6 (14.2) 25.1	口縁部は腹部から外反し。外上方へは丸直ぐ上がり、端部は内傾する面をなす。腹部は仰形。	口縁部内外面ともヨコナデ調整。他はナデ調整。腹部内面には粘土被の接合痕が残る。	要B-3-b。
* -34	* SK-24	*	12.6 (3.4) —	口縁部は腹部から外反し。そのまま外反し端部へ至る。端部は丸味を有す。	口縁部内外面ともヨコナデ調整。他はナデ調整。	要B-3-e。
* -35	* *	*	14.4 (4.9) —	*	口縁部外端はヨコナデ調整。腹部外面はナデ調整。他は摩耗しており不明。	*
* -36	* *	*	15.8 (8.1) (18.0) —	*	*	*
* -37	*	*	13.2 (5.9) —	輪状をなすもので、口縁部は内湾気味に上がり、腹部は頗く仕上げる。底部は丸底である。	器面は丁寧なナデ調整を施す。	鉢B-2。
* -38	*	*	11.2 (4.2) —	口縁部は体部から外反し。外上方へ直ぐ伸びる。腹部は頗く仕上げる。体部は内湾気味に下りる。	口縁部外向はヨコナデ調整。他は摩耗しており不明。	鉢D-1。
* -39	* SK-25	*	13.0 (5.2) —	口縁部は腹部から外反し。そのまま外反し端部へ至る。端部は丸味があるが頗く仕上げる。腹部は仰形をなすとみられる。	口縁部内外面ともヨコナデ調整。要B-3-e。 他はナデ調整。	要B-3-e。
* -40	*	*	13.8 (7.9) (17.5) —	*	*	*
* -41	*	弥生土器 *	— (3.2) 3.4	底部は小さな平底をなし。内湾気味に外上方へ上がる。	脚部外面には切き目が残存する。 底部外面と内面はナデ調整。	
* -42	*	土器器 鉢	10.0 4.6 —	口縁部は体部から外上方へ上がり、端部を頗く仕上げる。底部は丸底である。	外面上にはナデ調整。内面は摩耗しており不明。	鉢B-1。
* -43	*	*	10.8 5.7 —	碗状をなすもので、口縁部は体部から内湾気味に上がる。端部は頗く仕上げられる。底部は丸底である。	内面はナデ調整。外面は摩耗しており不明。	鉢B-2。
* -44	*	*	14.6 7.1 —	*	器面は比較的丁寧なナデ調整。	鉢B-2。 45をスケールアップしたものである。
* -45	SD-1	弥生土器 *	12.8 7.1 — 4.0	碗状をなすもので、口縁部は体部から内湾気味に上がる。端部は丸く仕上げられる。底部は小さな平底である。	内面はハケ調整。他はナデ調整。	鉢A-2。

Tab. 16 弥生土器、土師器観察表4 (B区 S D-8・12・13, S X-1・3,
P-1, C区第I層)

検査番号	遺傳番号	器種	口径 器高 側径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手 法	考	
Fig. 46 -46	B区 S D-8	弥生土器 支脚	5.0 (4.0) — —	円錐状をなすもので、受部は直状を呈す。脚は中実で、根部でやや膨らむかしない。	ナガ調整で、表面には指圧痕が残る。		
* -47	*	土師器 高杯	— (9.1) — 10.0	杯部が弧曲して上がるるものか、碗状をなすか不明。脚は外下へ膨らんで大きく閉く。脚部は丸く往上に傾ける。	脚部内面は左から右へのヘリナガ調整。脚は螺旋しており不明確。		
* -48	*	S D-13	＊ — — —	15.6 (4.0) — —	口縁部は外方の半形をなし、外上方へほぼ直角に上がる。底部は内傾する面をなす。	口縁部内面は横方向のハケ調整。他はナガ調整。	要A-3-b。
* -49	*	*	— — —	16.7 (4.7) — —	口縁部は削葉から外反し、そのまま外反して外方へ上がる。端部はやや丸味がある。	唇部は摩耗しており調整不明。	要B-3-e。
* -50	*	*	— — —	16.1 (6.1) — —	碗状のものに高台が付くものである。全体は外上方に内湾汽味に上がる。	外反はナガ調整。他は摩耗しており不明。	
* -51	*	弥生土器 器	9.9 9.7 9.4 2.2	口縁部は削葉から外反し、外上方へ屈く伸び、端部は丸く付ける。脚部は内湾汽味に内下方へ下り、小さな平底の底部に至る。	口縁部内外ともヨコナガ調整。脚部外側は横方向のハケ調整。他はナガ調整。	要B-2-d。	
Fig. 47 -52	*	S X-3	＊ — — —	14.6 (5.2) — —	二重口縁のものである。口縁部は外方へ屈く伸び、端部は丸く付ける。脚部は内湾汽味に内下方へ下り、小さな平底の底部に至る。	唇部はヨコナガ調整とみられるが、摩耗しており不明確。	要A-3。
* -53	*	*	— — —	16.0 (11.5) 18.2	口縁部はくの字形をなし、外上方へほぼ直角に上がる。底部は丸味を有する。脚部は削葉をなし、底部は小さいが平底である。	外側には印目が残存する。口縁部のみナガ調整を加えている。内面はハケ調整を施す。口縁部のナガ調整を加える。	要A-3-d。
* -54	*	*	— — —	15.0 23.1 17.7 3.1	口縁部はkの字形をなし、外上方へ外反して上る。端部は丸味を有する。脚部は削葉をなし、底部は小さいが平底である。	外側は全面に印目が残存し、下脚部では削葉工具による調整を加える。内面はハケ調整後、口縁部と中脚部以下にナガ調整。	要A-3-e。
* -55	*	土師器	17.0 (6.5) (17.1) —	口縁部はkの字形をなし、外上方へ外反して上る。端部は丸味を有する。脚部は削葉をなしとみられる。	口縁部内面はヨコナガ調整。脚部内面はナガ調整。他は摩耗しており不明。	*	
* -56	*	*	— — —	16.8 (5.6) — —	口縁部は削葉から外反し、そのまま外方に外反して伸びる。脚部は丸味を有する。脚部は削葉をなしとみられる。	唇部は摩耗しており調整不明。	要B-2-e。
* -57	*	*	— — —	22.4 (7.6) (22.9) —	口縁部内面ともヨコナガ調整。他はナガ調整。		
* -58	*	*	— — —	(21.1) 22.0 —	口縁部は丸味を有する。丸味のある脚部は内湾して内下方へ下り、ほぼ丸味の底部に至る。	外側には印目が残存する。内面は上脚部ハケ調整、下脚部にナガ調整を施す。	
* -59	*	弥生土器 器	(11.5) (18.7) 13.7 1.8	口縁部は欠損するが、外反するものとみられる。脚部は丸味を有する。脚部や上にあり、そこから内湾して下り、小さな平底の底部に至る。	外側は下から上への粗いハケ調整。内面はナガ調整。口縁部内面はナガ調整とみられる。	要B-3-e。	
* -60	C区 第I層	*	— — —	17.9 (4.3) — —	口縁部は大きく外反し、脚部を削葉し、内側ある面を造り、そこに文様(鉛筆文?)を施す。	口縁部外側に横方向のハケ調整。他は摩耗しており不明。	底面有脚部並行、擦り系統。

Tab. 17 弥生土器、土師器観察表5 (C区第I・II層)

件名	造機番号	器種	口径 器高 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
Fig. 47 -41	C区 第I層	土師器 鉢	10.6 3.5 — —	碗状をなすもので、口と表現し得るものである。口縁部は内面気球に上がり、底部は丸く仕上げる。底部は丸底である。	外側はナデ調整を施すが、指頭圧痕も残る。他は摩耗しており不明。	鉢B-3。
* -62	*	*	— (5.8) —	杯底と腹部が欠損する。脚は斜め下方へ下る。	脚外面にはヘク状工具によるとみられるナデ調整が施される。内面にはしづか目が残る。	
* -63	*	弥生土器 ※	19.2 (1.3) —	口縁部は大きく外反し、底部を上下に膨張し、3条の凹縦文を施す。	口縁部外側は冠方向のハケ調整。縦内筋質株式走行臺系。	
* -64	*	*	17.8 (5.6) —	二重口縁の型で、口縁部は外向気球に上った後立てる。端部は内側する平底をなす。外側には粗縫6条のクシ彫波状紋が1本施される。	口縁部内外面ともヨコナナデ調整。冠A-3。	
* -65	*	*	16.0 (8.6) —	大きめ外反する口縁で、底部は斜く仕上げられる。	外面にハケ目が落く様。他は不明。	笠B。
* -66	*	土師器 ※	14.3 (23.2) 22.4 —	口縁部は外上方へ直線的に伸び、底部は丸味を有す。底部はほほ彫形をなす。	脚部外側に印目、内腹に指ナデの痕と指頭圧痕が部分的に残存する以外は不明瞭。	笠C。
* -67	*	*	17.3 (5.7) —	口縁部は外傾して伸びた後、外反する。底部は丸く仕上げる。肩部はやや強張るとみられる。	口縁部内面下部はヘラナデ調整で、その上にヨコナナデ調整を加える。	笠D。
* -68	*	*	13.9 (6.7) —	口縁部の破片である。口縁部はやや内向気球に外上方へ立ち上がる。底部は丸く仕上げる。	口縁部のみヨコナナデ調整。口縁部内面はナナデ調整で、外面には下から上へのヘク磨きを施す。	笠E。
* -69	*	*	— (7.3) 12.0	肩部のみが残存している。輪彫形の胸窓で、最大径は中脚部よりやや上にある。底部は丸底である。	外腹面ともナナデ調整で、内面には指頭圧痕が残る。	笠E。 中脚部外腹面に輪の付番がみられる。
* -70	*	*	16.7 (4.5) —	口縁部は脚部から外反し、上外方へほぼ直立ぐ上る。底部は丸く仕上げられる。脚部は彫形を以すとみられる。	脚部内面にハケ目が残存する。	笠B-2-d。
Fig. 48 -71	*	*	18.4 11.9 (24.0)	口縁部は脚部から外反し、その上まで外傾して外上方へ上る。底部は丸く仕上げる。脚部は彫形を以す。	裏面は摩耗が著しく調整不明。	*
* -72	*	弥生土器 ※	15.0 (15.0) 16.0 —	口縁部だけ脚部から外反し、その上まで外傾して外上方へ上る。底部は丸く仕上げる。脚部は彫形を以す。	脚部外側には印きを施し、下脚部ではハケ調整を加える。他はナナデ調整。脚部内面には指頭圧痕が残る。	笠B-3-e。
* -73	*	*	— (3.6) — (8.0)	底部の破片である。上底風のしっかりした底部である。	内面はナナデ調整。外腹は摩耗しており。調査不明。	
* -74	*	*	— (2.5) — (4.7)	底部の破片である。底部は平底で脚部は内凹して上る。	内面はナナデ調整。脚部外側には印目が明瞭に残る。底部外側はナナデ調整。	
* -75	*	土師器 ※	— (4.8) —	底部の破片である。底部は丸底で、脚部は内凹して上る。	内面はナナデ調整。外腹は印きの後にナナデ調整を行う。	

Tab. 18 弥生土器、土師器観察表 6 (C 区第 II 層, SK -30・41)

種別番号	遺構番号	器種	口径 法量 (cm) 側径 底径	形態・文様	手 法	備 考
Fig. 48 -76	C 区 第 II 層	土師器 甕の把手	全径 5.0 今幅 3.2 底径 2.7	角状をなす把手で瓶形は円形が 果す。	全周に指ナデの痕が残る。	
*	-77	* 弥生土器 甕	9.4 7.4 2.5	口縁部は外上方へほぼ直進的に上 がり、端部を丸く仕上げる。底部 はやや丸味があるが小さな平底で ある。	外面には筋を中心いて目が残 り、内面には下部に指ナデの痕 がみられる。口縁部を中心にナ デ調整がみられる。	鉢 A-1。
*	-78	*	10.5 5.2 4.8	口縁部は外上方を向き、体部は内 湾気味に上がる。底部は平底でや やく底風である。	口縁部内外面はナデ調整を施す。 内外面には指ナデと指圧痕が残 る。	*
*	-79	*	— (4.6) —	口縁部は欠損する。体部はやや内 湾気味に上がる。底部はやや尖るが丸 底である。	内外面ともナデ調整を行なうが底 部分に指圧痕が残る。器壁が厚い。	鉢 B-1。
*	-80	*	11.6 5.3 —	輪状をなす。口縁部は体部から内 湾して上がり、端部を丸く仕上げる。 底部は丸底である。	内面には筋ナデの痕が残る。底 部に粘土を貼付する。	*
*	-81	*	11.6 5.2 —	輪状をなす。口縁部は体部から内 湾して上がり、端部を丸く仕上げる。 底部は丸底である。	内面には筋ナデの痕が残る。底 部に粘土を貼付する。	鉢 B-2。
*	-82	*	— (6.2) —	輪状のみ残存する。中実の輪部で 輪部で大きく開くとみられる。	外面に指圧痕が残るが、摩耗 しており調査不明。	
*	-83	*	— (5.6) — 11.9	杯部は欠損する。輪部は付け根か ら大きく開き、端部を丸く仕上げる。 底部は丸底である。	内外面ともナデ調整。	
*	-84	*	7.2 6.1 — 7.8	受部は皿状をなし、端部はそのまま 丸く仕上げる。脚部は中央で、 輪部から大きく内側して開く。残 る部分には徑1.2cmの丸い透し窓を 3方に穿っている。	器壁は摩耗が著しく擦痕不明。	器台 A。
*	-85	*	7.0 (6.0) —	受部は皿状をなし、端部はそのまま 丸く仕上げる。脚部は中央で、 輪部から大きく内側して開く。残 る部分には徑1.2cmの丸い透し窓を 3方に穿っている。	受部口縁部はヨコナデ調整。側 面はナデ調整で、脚部外縁には腹 方向のハケ目が残る。	器台 B。
*	-86	SK-30	— 15.0 (4.0) —	口縁部は輪部から外反し、そのま ま外反して上がり、端部を丸く仕 上げる。	口縁部内外面ともヨコナデ調整。	器 B-3-4。
*	-87	*	15.2 (5.8) —	口縁部は輪部から外反し、そのま ま外反して上がり、端部は上方に 斜め上む。輪部はやや張ったも のと推測される。	口縁部内外面ともヨコナデ調整。 他はナデ調整。	器 B-3-5。 88と同一個体の可 能性がある。
*	-88	*	15.2 (5.8) —	—	—	*
*	-89	*	23.0 (7.5) —	口縁部は上方には直進的に立ち 上がり。輪部は斜め下方に下る。 下駆れた脚部になると推測され る。	外面はナデ調整で、部分的に初 期圧痕が残る。内面は摩耗して おり不明。	器 D。
*	-90	SK-41	11.6 6.2 — 3.5	口縁部は外上方へやや内湾気味に 上がり、口縁部付近で下方に向く。 底部は小さな平底である。	内面にハケ調整を行なった後、口 縁部内外面から外面にかけてナデ 調整を施す。	鉢 A-2。

Tab. 19 弥生土器、土師器観察表7 (C区S X-4~6, D区第I層)

検出番号	遺物番号	器種	法 量 (cm)	上部 器高 胴径 底径	形 態 ・文 様	手 法	備 考
Fig. 48 -91	C区 S X-4	土師器 甕	18.0 (4.1) — —	口縁部は頸部から大きく外反し、斜め上方にそのまま上がり、腹部は丸味を有す。	器面は摩耗しており調整不明。	要B-3-c。	
* -92	* S X-5	*	12.4 (3.0) — —	口縁部はくの字形をなし、斜め上方へ直線的に上がる。縁部は細く仕上げられる。腹部は折が強らずに下る。	*	要A-3-d。	
* -93	* S X-6	弥生土器 甕	16.0 (2.1) —	二重口縁の形で、口縁部は垂直した後斜め上方に屈く内済して上がる。腹部は丸味を有す。縁部は丸味を有す。	口縁部外側はヨコナデ調整と縱方向のハケ調整。内面は不明。	要A-1。	
* -94	* *	*	15.0 (6.2) — —	口縁部はくの字形をなし、上方外へ直角で伸び途中で屈曲して上がる。縁部は内済する平凸を有す。腹部は折が強らず、卵形を呈するのみられる。	胴部外縁には叩目、内面にはハケ目がそれぞれ残存する。他は摩耗しており不明瞭。	要A-2-i。	
* -95	* *	*	17.2 (3.6) —	口縁部はくの字形をなし、上方外へ直角で伸び途中で屈曲して上がる。縁部は丸味を有す。腹部は丸味を有す。胴部以下は欠損不詳。	口縁部内面は上端から外縁にかけてヨコナデ調整。内面は横方向のハケ調整とナデ調整。	要A-3-i。 口縁部外縁に器の付着がみられる。	
* -96	* *	*	15.0 (24.5) 17.7 —	L1縁部は頸部から外反し、外上方へ直線的に上がる。縁部は丸味を有す。縁部は卵形を呈し、腹大縁はほぼ中側部にある。	口縁部外縁はナデ調整。縁部外縁は叩きを施し、中側部以下に後でハケ調整を加える。胴部内面はナデ調整。	要B-3-d。 口縁部外縁に器の付着がみられる。	
* -97	*	*	18.8 (6.1) —	口縁部は頸部から外反し、外上方へそのまま外反して上がる。腹部は屈く仕上げられる。	口縁部外縁に縱方向のハケ目。胴部外縁に叩目が残存する。他は摩耗しており不明瞭。	要B-3-e。	
* -98	*	*	— (5.7) 3.8	縁部は外上方へ伸び、底部は平底である。	内面に指ナデの痕が残る。		
Fig. 49 99	*	*	12.6 5.6 4.0	口縁部は体部からやや内済して上がり、縁部を屈く仕上げる。腹部は丸味である。	内面はハケ調整の後ナデ調整を加える。口縁部外縁はナデ調整。体部外縁には前めの叩目が残存する。	要A-1。	
* 100	*	*	16.8 5.1 4.2	器高に比べて口径が広いもので、L1縁部は体部からやや内済して上がり、縁部は丸味である。腹部は丸味である。	L1縁部内外縁と底部外縁はナデ調整。内底面にハケ目。外底面に叩目が残存する。	*	
* -101	*	*	9.0 (5.0) —	小さな狭縁を有すもので、口縁部は体部からやや内済して上がり、縁部を丸く仕切る。腹部は丸味である。	内面にはハケ目。外縁には叩目が残存する。	要B-1。	
* -102	*	*	11.2 5.6 —	横板をなすもので、L1縁部は体部からやや内済して上がり、縁部を丸く仕上げる。腹部は丸味である。	外面は叩きを施した後、底部は外にナデ調整を加える。内面は摩耗しており不明。	*	
* -103	*	*	12.8 5.4 —	—	*	*	
* -104	D区 第I層	土師器 甕	16.8 (4.5) —	口縁部はくの字形をなし、外上方へ外済気味に上がり、縁部を丸く仕上げる。腹部は丸味である。	L1縁部外縁はナデ調整。縁部外縁には叩目が残存する。内面は不明。	要A-1-e。	
* -105	*	*	15.8 (5.2) —	L1縁部はくの字形をなし、外上方へ外済気味に上がり、縁部を丸く仕上げる。腹部以下は欠損する。	口縁部内面はヨコナデ調整。縁部内面はヘラナデ調整。外縁は不明。	*	

Tab. 20 弥生土器、土器器観察表8 (D区第I層, S T - 3)

検出番号	遺集番号	器種	法量 (cm)	形態・文様	手 法	備考
Fig. 49 -106	D区 第I層	土器器 美	17.4 (6.7) 17.3 ---	口縁部は腹部から外反し、外上方へそのまま外反して上がる。端部は内側する面をなす。腹部は丸く仕上げられる。底部は丸く仕上げている。	口縁部はヨコナゲ調整。腹部外縁はナゲ調整。内面は摩耗しており不明。	鉢B-1-4。
* -107	*	*	15.7 (4.5) ---	口縁部は腹部から外反し、外上方へそのまま外反して上がる。端部は繋く仕上げられる。底部は丸く仕上げる。	外縁はナゲ調整。内面は摩耗しており不明。	*
* -108	*	*	15.6 (6.5) ---	口縁部は腹部から外反し、外上方へそのまま外反して上がる。端部は丸味を有す。腹部はやや丸味がある。	内面にはヘラナゲ調整の痕が残る。外縁は摩耗しており不明。	*
* -109	*	*	18.2 9.0 (20.7) ---	*	口縁部内外面はヨコナゲ調整。腹部内面はナゲ調整。外縁は摩耗しており不明。	*
* -110	*	*	18.4 (4.7) ---	*	口縁部内外面はヨコナゲ調整。内面及び腹部外縁にはハケ目が残る。	*
* -111	*	弥生土器 類	---	平底の底座。腹部は斜め上方へ上がる。	器面は摩耗しており調整不明。	
*	112	*	3.3 4.2	七旋風の底座。腹部は外上方へ上がる。	*	
* -113	*	*	(9.2) 3.5	腹部は内湾気味に上がる。底部は極めて小さな平底である。	内面はハケ調整の後にナゲ調整。外縁は叩きの後にハケ調整を加える。	
* -114	*	土器器 類	10.4 4.0 ---	楕状をなすもの。口縁部は内湾気味に上がり、端部は丸く仕上げる。底部は丸底である。	外縁には四ナゲの痕が残る。	鉢B-2。
* -115	*	*	---	口縁部は丸屈する。体部は外上方へ上がる。底部は平らである。	17クロス形。底部外縁は四軒角切りである。内面は四軒ナゲ調整。外縁は未調整。	平安時代の土器器。
* -116	S T - 3	弥生土器 類	21.6 (5.0) ---	口縁部は腹部からそのまま外上方へ上がり、口縁部付近で若干外側する。端部は上方を向く平底をなす。	外縁はナゲ調整。内面は摩耗しており調査不明。	
* -117	*	*	(3.6) 3.8	椭円形をなすもの。腹部は内湾気味に上がる。底部は平底である。	内面と底部外縁はナゲ調整。外縁には叩目が残る。	
* -118	*	*	8.8 4.4 3.8	椭状をなすもの。口縁部は外上方へやや内湾して上がる。端部は内側する面をなす。底部は平底である。	内面にハケ調整。外縁に叩きを施した後、口縁部内外面にナゲ調整を加える。底部外縁は丁寧なナゲ調整。	鉢A。
* -119	*	*	12.4 6.0 ---	椭状をなすもの。口縁部は外上方へやや内湾して上がる。端部は丸く仕上げる。底部はすぼらである。	*	*
*	-120	*	14.0 6.1 2.8	*	外縁は叩きの後にナゲ調整を施す。内面は摩耗しており調査不明。	*

Tab. 21 弥生土器、土器観察表9 (D区S T - 4)

件名番号	遺構番号	器種	法量 口径 器高 側溝 底径 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
Fig. 49 -121	D区 S T - 4	土器器 蓋	14.8 (7.1) — —	「並口縁」の蓋である。口縁部は上方へ弧線的に上がった後屈曲し外上方へやや外反して上がる。端部は丸く仕上げる。	口縁部内面はヨコナデとナデ調整。外側は不明。	蓋A - 4。
* -122	*	*	20.0 (4.7) — —	二重口縁の蓋である。口縁部は外反して上がった後屈曲し外反して上がる。端部は丸く仕上げられる。	蓋面は序純しており調整不明。	*
* -123	*	*	20.5 (3.9) — —	口縁部は大きく外反して上がり、端部は丸く仕上げる。	口縁部内面ともヨコナデ調整。	蓋B。
* -124	*	*	14.6 (4.7) — —	口縁部は脇部から屈曲し、直立した後大きく外反する。端部は丸く仕上げる。	蓋面は摩耗しており調整不明。	蓋D。
* -125	*	*	(16.2) 23.0 — —	口縁部と底盤が欠損する。脇部は丸く球形に近い形である。	外底はヨリの後にナデ調整を加える。内面はハケ調整の後にナデ調整を加える。	
Fig. 50 -126	*	*	14.0 (6.5) — —	口縁部はくの字形をなし、外上方へはほぼ直立して上がる。端部は丸く仕上げる。脇部はあまり刃が張らずに下る。	脇部内面にヘラナデ調整を施す。他は摩耗しており不明瞭。	蓋A - 3 - d。
* -127	*	赤陶土器	14.8 (5.6) — —	口縁部はくの字形をなし、外上方へ外反して上がる。端部は丸く仕上げる。脇部は形態をなすとみられる。	外面上には明さを除し、口縁部内面を中心ヨコナデ調整を加える。内面は接合部以下にナデ調整を施す。	蓋A - 3 - e。
* -128	*	土解器	16.6 (10.0) — —	*	口縁部外面はヨコナデ調整。脇部外面はハケ調整。他は摩耗しており不明瞭。軽土様の接合部が再びに残る。	蓋A - 3 - e。 脇部外面には僅の付着がみられる。
* -129	*	*	15.8 (7.2) — —	*	口縁部内面はヨコナデ調整。他はナデ調整。粘土様の接合部が明瞭に残る。	蓋A - 3 - e。
* -130	*	*	18.9 (6.9) — —	*	口縁部内面はヨコナデ調整。脇部内面はナデ調整。脇部外面は摩耗しており不明。	*
* -131	*	*	15.4 (4.9) — —	*	脇部内面は横方向のヘラナデ調整。他は摩耗しており不明。	*
* -132	*	*	15.2 (3.4) — —	口縁部はくの字形をなし、外上方へ上がり途中で屈曲して伸びる。端部は丸く仕上げる。	口縁部内面ともヨコナデ調整。他はナデ調整。	蓋A - 3 - f。
* -133	*	*	16.2 (3.7) — —	*	口縁部内面ともヨコナデ調整。内面はヘラナデ調整。外面はナデ調整。	*
* -134	*	*	15.6 (10.2) 16.8 — —	口縁部はくの字形をなし、外上方へ上がり途中で屈曲して伸びる。端部は丸く仕上げる。脇部はやや大きめを有し、球形を呈するとみられる。	口縁部内外面ともヨコナデ調整。他はナデ調整。	*
* -135	*	*	20.0 (4.5) — —	口縁部はくの字形をなし、外上方へ上がり途中で屈曲して伸びる。端部は丸く仕上げる。脇部はやや丸味を有するものとみられる。	*	*

Tab. 22 弥生土器、土師器観察表10 (D区 S T - 4)

擇回番号	遺構番号	器種	注意 (cm)	口縁 器底 側厚 度	形態・文様	手 法	備考
Fig. 30 -136	D区 S T - 4	土師器 甕		14.0 4.0 —	口縁部は胴部から外反し、外上方へ外反したまま上がる。端部は丸く仕上げられる。胴部はあまり削がれないとみられる。	器底は摩耗しており調整不明。	要B-1-e。
* -137	*	*	*	15.2 3.6 —	口縁部は胴部から外反し、外上方へ外反したまま上がる。縁部を内側に若干肥厚さ。胴部は丸味があるものとみられる。	内面はハケ調整。外面は摩耗しており不明。	要B-3-C。
*	*	*	*	12.1 (5.0) —	口縁部は胴部から外反し、外上方へ外反したまま上がる。端部は丸く仕上げる。胴部はやや丸味を有するとみられる。	口縁部内外面ともヨコナデ調整。軸はナデ調整。	要B-3-d。
*	*	*	*	13.2 (4.5) —	口縁部は胴部から外反し、外上方へ外反したまま上がる。端部は内側で削る面をなす。胴部は丸味を有するとみられる。	*	*
*	*	*	*	17.0 (5.7) —	口縁部は胴部から外反し、外上方へ外反したまま上がる。端部は丸く仕上げる。胴部はやや丸味を有する。	内面はハケ調整を施す。他の摩耗しており不明。	*
*	*	*	*	17.0 (7.0) —	口縁部は胴部から外反し、外上方へ外反したまま上がる。端部は丸く仕上げる。胴部はやや張る丸味があるものとみられる。	内面底部以下は横方向のハナデ調整。他の不明。	*
*	*	*	*	17.8 (5.9) —	口縁部はくの字形をなし、外上方へ外反して上がる。端部は丸く仕上げる。胴部はあまり削がれずにいる。	口縁部外端はヨコナデ調整。胴部外面には印目が残る。内面は摩耗しており不明。	要A-2-d。
*	*	*	*	18.0 (4.3) —	口縁部は胴部から外反し、外上方へ外反して上がる。端部は丸く仕上げる。胴部以下は欠損する。	口縁部内面はヨコナデ調整。他のナデ調整。	要B-3-d。
*	*	*	*	13.5 (6.4) —	口縁部は胴部から外反し、外上方へ外反したまま上がる。端部は丸く仕上げる。胴部はあまり削がれずにいる。	口縁部内面はヨコナデ調整。胴部内面はナデ調整。外面は摩耗しており不明。	要B-3-e。
*	*	弥生土器		— (2.8) 4.2	平底の底部で胴部は外上方へ内消氣孔に上がる。	内面と底外部はナデ調整。外面には印目が残る。	
*	*	*	*	— (4.3) — (7.0)	平底の底部で、胴部は外上方へほぼ直立ぐ上る。	内外面ともナデ調整。	出土が123と極めて近く同一個体の可能性あり。
*	*	土師器 甕		— (3.8) —	やや尖り気味の底盤で、胴部は内消氣孔に上がる。	内面はナデ調整。外面は縱方向のハケ調整を施す。	
*	*	*	*	— (5.3) —	丸底の底部。胴部は内消氣孔に上がる。	内面はハラ状工具によるナデ調整。外面には横方向の印目が残す。	
*	*	*	*	— 12.0 (28.0)	丸底の底盤。胴部は内消氣孔に外上方へ上がる。	内面は比較的丁寧なナデ調整。外邊もナデ調整を施すが底盤に印目が部分的に残存する。	
*	*	*	*	(12.7) (16.6) 1.8	胴部は内消氣孔に内下方へ下り、尖り気味の底盤には直径約1.5mmの円孔を穿つ。	内面はハケ調整の後にナデ調整を施す。外邊は丸く仕上げた後のナデ調整を加えるが、上部にはやや深い印目、下部には浅い印目がそれぞれ残存する。	

Tab. 23 弥生土器、土師器観察表11 (D区ST-4, SB-1, SK-52)

件名番号	遺跡番号	器種	法長 (cm)	口径 器高 製作 度	形態・文様	手法	備考
Fig. 51 -151	D区 ST-4	弥生土器 鉢		9.5 6.8 — 4.5	コップ状をなすもので、口縁部は外上方へ漸段的に上がり、溝部を丸く仕上げる。底盤は平底である。	内面は指ナガ調整とナガ調整。外縁は摩耗しているが底部に跡目が残る。	鉢A-1。
*	-152	*	土師器 鉢	14.5 6.6 — —	楕円状をなすもので、口縁部は底部から内窓気孔に上がり、溝部を丸く仕上げる。底盤は丸い。	内外面ともナガ調整で、口縁部内面のみヨコナガ調整を施す。	鉢B-1。
*	-153	*	*	13.8 7.3 — —	*	口縁部外側にヨコナガ調整。他はナガ調整。口縁部内面にハケ目は、底部外周に項目が残存する。	*
*	-154	*	*	(3.5) — —	楕円状をなすものであるが、口縁部が欠損する。形態的には152とは同じである。	内面には部分的にハケ目が残る。他は摩耗しており不明。	*
*	-155	*	*	15.0 (4.9) — —	楕円状をなすものであるが、底部が欠損する。形態的には152とは同じであるとみられる。	内外面ともヨコナガ調整。	*
*	-156	*	*	13.2 6.1 — —	楕円状をなすもので、底部は深い。口縁部は内窓気孔に上がり、溝部で上方を向く。底部は丸い。	内面はナガ調整。外縁はハケ調整の後ナガ調整を加える。	鉢B-2。
*	-157	*	*	13.2 5.3 — —	楕円状をなすもので、口縁部は内窓して上がり、溝部を丸く仕上げる。底盤は比較的深く丸い。	基面は摩耗しており調整不明。	*
*	-158	*	*	15.0 (5.0) — —	*	内面はハケ調整の後にナガ調整を加える。外縁はナガ調整。	*
*	-159	*	*	12.2 (4.0) — —	楕円状をなすものであるが、杯と表現した方が適切かもしれない。口縁部は内窓気孔に上がり、溝部を丸く仕上げる。底部は比較的浅く丸い。	口縁部外側から内面にかけてはヨコナガ調整。他はナガ調整。	鉢B-3。
*	-160	*	*	10.6 (2.9) — —	皿状をなすもので、頭と呼称しても良いものもある。口縁部はやや内窓して上がり、溝部は丸い。底部は浅く、丸い。	器面は摩耗しており調整不明。	鉢C。
*	-161	*	*	10.8 1.9 10.0 — —	皿状をなすもので、正に盤である。口縁部は斜く外上方を向く。底部は平らである。	*	*
*	-162	*	高杯	16.2 11.0 11.2 — —	杯部は屈曲して外上方へ漸段的に伸びる。溝部は丸く仕上げる。脚部は付け根から外反して側縁部に至る。底盤は丸い。	杯部口縁部はヨコナガ調整、内面はナガ調整。外縁には細かいハケ目が施してある。	高杯A-3。
*	-163	*	弥生土器 鉢	(6.3) — —	脚部のみ残存する。中空の脚で、脚部で大きく開くとみられる。	外縁は腹方向のハケ調整。他は不明。	
*	-164	*	土師器 鉢	14.0 4.5 — 6.0	口縁部は外上方に伸び、溝部を丸く仕上げる。体部はやや内窓して上がる。底盤は平らである。	ロクロ成型。底部外縁は回転ヘタ切り後ナガ調整。他は回転ナガ調整。	平安時代の土師器。
*	-165	*	兜	17.6 (8.5) (15.6) —	口縁部はくの字形をなし、外下方に外反して上がる。溝部は内窓する平面をなす。脚部は弱が強らずに下る。	口縁部外縁はヨコナガ調整。他は摩耗しており調整不明。	兜A-2-e。

Tab. 24 弥生土器、上師器観察表12 (D区 S K - 53・54・57・59・65・70・77,
S D - 20, S X - 7)

辨別番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口径 器高 脇幅 底深	形態・文様	手法	備考
Fig. 51 -166	D区 S K - 53	上師器 杯	12.9 (5.5) — —	輪状をなすもので、口縁部は内湾気味に上がる。端部は丸く仕上げる。	口縁部はナデ調整。内外面にはハケ目が残る。器壁が厚い。	鉢B - 2。
* -167	* S K - 54	* 高杯	— (4.6) — —	杯底は欠損する。脚は付け脚よりやや下から外下方に直線的に聞く。	器底はナデ調整。脚の付け根部分に小さな折筋状痕が残存する。	
* -168	*	*	16.0 (3.8) — —	口縁部は側面から外反し、外上方へ直線的に上がる。端部は丸く仕上げられる。	器底は摩耗しており調査不明。	対A - 3 - d。
* -169	*	*	12.0 15.1 14.0 — —	LJ縁部は側面から外反し、外上方へ直線的に上がる。端部を丸く仕上げる。側面縫合部は上1/3あり、難覆積円形を呈す。底部は丸い。	口縁部外面はヨコナナ調整。他はナデ調整とみられるが、摩耗しており不明瞭である。	対B - 3 - e。
* -170	*	*	15.1 (6.2) — —	口縁部は側面から外反し、外上方へはは真直ぐ伸びた後外傾する。端部は丸く仕上げる。側面は肩が強らずにいる。	器底は摩耗しており調査不明。	対B - 3 - f。
* -171	S K - 57	*	— (3.4) —	丸底の底部。胴部はそのまま内湾気味に上がる。	内面にはハケ目。外面には粗いハケ目が残る。底部外面はナデ調整。	
* -172	S K - 59	*	— (3.0) —	丸底の底部。胴部は外上方へ内湾して上がる。	外面には呪目が残る。	
* -173	*	*	12.2 9.2 — —	輪状をなすもので、口縁部は内湾して立ち上がり、端部を繊く仕上げる。底部は丸い。	内面は横方向のハケ調整で、内側面のみナデ調整を行つ。外面はナデ調整で、底部に呪目が残る。	対B - 2。
* -174	S K - 70	弥生土器 甕	— (2.5) 4.0	丸底があるが平底の底部である。胴部は内湾気味に上がる。	内外面ともナデ調整を施すが、外面には呪目が残る。	
* -175	*	*	— (3.4) — 3.7	体部は内湾気味に上がる。底部は小さいが厚らである。	内面はナデ調整。外面はナデ調整。	鉢A - 2。
* -176	*	*	— (5.0) —	脚部のみ残存する。中空の脚は付け根から外下方へ直線的に下る。	器底は摩耗しており調査不明。	
* -177	*	上師器 甕	14.3 (9.3) 15.6 — —	口縁部は側面から外反し、外上方へ外反したまま上がる。端部は丸く仕上げる。胴部は紡錘形を呈するのみられる。	外面は横方向の呪目の後に縱方向のハケ調整を加える。内面にもハケ目が残る。他は摩耗しており不明瞭。	対B - 3 - e。
* -178	*	*	— (5.3) — —	杯底は欠損する。中空の脚は外下方へ直線的に下る。呪目が大きく開くとみられる。	外面はナデ調整。脚は厚いとしており不明。	
* -179	*	*	— (6.0) — 10.9	杯底は欠損する。中空の脚は外下方へ直線的に下り。端部で大きくなっている。	外面はナデ調整。脚部内面は脚ナデ調整。底部内面はヨコナナデ調整。	
* -180	S K - 7	*	14.2 (7.1) 15.6 — —	口縁部は側面から外反し、外上方へ外反したまま上がり、端部は丸く仕上げる。胴部は脚が張らずに下る。	器底は摩耗しており調査不明。	対B - 2 - e。

Tab. 25 弥生土器、土師器観察表13 (D区 S X - 7・8)

神田番号	遺構番号	器種	目録 法量 (cm) 等高 明徳 底径	形態・文様	手法	備考
Fig. 52 -181	D区 S X - 7	土師器 甕	12.0 (11.2) 13.1 —	口縁部は腹部から外反し、外上方へほぼ直立伸び。縁部は丸く仕上げる。肩部は最大径をほんの少しでも上回る。	口縁部内面はヨコナガ調整。肩部内面はハナダ調整。外側は御頭压痕が残るが、摩耗しており調査不明。	要B-3-d。
* -182	*	*	17.0 (12.1) 19.5 —	口縁部は腹部から外反し、外上方へ伸びた後直角で上がる。縁部は丸く仕上げる。肩部は中腹時に最大径をもつとする。	口縁部内外面ともヨコナガ調整。他はナダ調整。	要B-3-i。 口縁部外側には保付着が見られる。
* -183	S X - 8	甕	15.0 (3.0) —	二重口縁の者であり、口縁部は腹面と外方へやや外反気味に上がる。縁部は丸く仕上げる。	器曲は摩耗しており調査不明。	要A-4。
* -184	*	*	16.0 (6.9) —	二重口縁の者であり、口縁部は腹面と外方へ外反して上がる。縁部は丸く仕上げられる。	内外面ともヨコナダ調整で、外側には腹方向のハケ目が残る。	要A-4。
* -185	*	*	17.6 (4.2) —	口縁部は直ぐする頸部から大きく外反し、縁部は内側からの凹面をなす。肩部以下は欠損する。	口唇部はヨコナダ調整によるものとみられるが、器底は摩耗しており調査不可能。	要D。
* -186	*	*	12.8 (5.2) —	小型の造で、胴躍以下は欠損する。口縁部は外上方へ直線的に立ち上がる。縁部は丸く仕上げられる。	口縁部内外面ともヨコナダ調整。他はナダ調整。	要E。
* -187	*	*	14.2 (4.6) —	—	外側は腹方向のハケ目が生存する。他は不明。	*
* -188	*	*	— (17.9) 15.2 —	口縁部はくの字形をなし立ち上がるのみはあるが欠損する。縁部は最大径を上部1/3に有し、内済して下り、底部は丸い。	外側はハケ調整後細かいヘラ書きを加える。内面はナダ調整。	*
* -189	*	弥生土器 甕	14.6 (4.3) —	口縁部はくの字形をなし、外上方へほぼ直立ぐ上がる。縁部は丸い。	外側には即日が明晰に残る。	要A-3-d。
* -190	*	土師器 甕	16.8 (6.7) —	—	口縁部内外面と肩部外側はハケ調整後ナダ調整を加える。内面はナダ調整。	*
* -191	*	*	16.8 (5.0) —	—	口縁部内外面はナダ調整。肩部外側は即日、内面には折筋に裏が明瞭に残る。	*
* -192	*	*	14.8 (15.0) 20.3 —	口縁部はくの字形をなし、外上方へ伸びた後若干屈曲さす。縁部は丸く仕上げる。腹部はほほ球形をなす。	口縁部内外面はハケ調整。外側には即日、内面には粗いハケ目が残存する。	要A-3-i。
* -193	*	*	16.0 (4.1) —	口縁部は腹部から外反し、外上方へ外反したまま伸びる。縁部は丸く仕上げる。腹部は丸く仕上げる。	内外面ともハケ調整。口縁部内外面はナダ調整を加える。	要B-3-e。
* -194	*	*	13.8 (4.3) —	口縁部は腹部から外反し、外上方へ外反したまま伸びる。縁部は丸く仕上げる。腹部は丸く仕上げる。	内外面はハケ調整。腹部外側には叩きを施した後口縁部内外面にヨコナダ調整を加える。	*
*	195	*	16.8 31.5 23.0 —	—	腹部外側は横方向の叩き、内面は下から上の指ナダ調整を行う。他は摩耗しており不明。	要B-3-e。 底部はほぼ丸底である。

Tab. 26 弥生土器、土師器観察表14 (D区 S X - 8)

検査番号	追跡番号	器種	注意 (cm)	口縁 器底 胸足 底径	形態・文様	手法	備考
Fig. 52 -196	D区 S X - 8	土師器 甕	—	16.2 (6.8) —	口縁部は胴部から外反し、外上方へ伸び途中で屈曲して上がる。端部は丸く仕上げる。胴部は丸味がある。	11段部外面にハケ目。胴部外面には叩目が残存する。全般に器面は摩耗する。	鉢B-3-1。
*	*	*	*	— (13.9) 18.1	L1縁部と底部が欠損する。胴部は御形を呈す。	外底には叩目が残存する。全般に器面は摩耗する。	
*	*	弥生土器 +	*	— (2.7) — 1.9	小さな平底の底盤。胴部は外上方へ内側して上がる。	内面はナゲ調整。外面は叩目が残存する。	
*	*	*	*	— (2.9) —	尖り底風の底盤。胴部は外上方へ内側して上がる。	内外面ともナゲ調整を施すが、外面には叩目が残存する。	
*	*	土師器 +	*	— (2.9) —	*	内面はナゲ調整。外底は叩きを施す。	
*	*	*	*	— (2.7) — —	*	*	
Fig. 53 -202	*	*	*	— (8.1) —	*	*	
*	*	*	*	— (3.4) —	*	*	
*	*	*	*	— (2.9) — —	丸底の底盤。胴部は内面気味に上がる。	*	
*	*	*	*	— (5.2) —	*	*	
*	*	*	*	— (4.7) — 4.4	突出した底盤。胴部は内面気味に上がる。	*	
*	*	*	*	— (12.0) 16.5 2.0	突出した小さな平底の底盤。胴部は外上方へ内面気味に上がる。	内面は下から上へのハケ調整。外底には細い叩目が残る。	
*	*	*	*	14.9 (3.8) —	L1縁部は斜め上方へほぼ直線的に伸びる。端部は丸く仕上げる。	内面はナゲ調整。口縁部ロコナゲ調整。外底は細かいハラ巻きを施す。	鉢B-1。
*	*	*	*	15.1 5.5 — —	口縁部は斜め上方へほぼ直線的に伸びる。端部は斜め上方へ内面気味に上がり、底盤は斜め上方へ内面気味に上がる。底盤は丸底である。	内外面ともナゲ調整。	*
*	*	*	*	11.3 4.5 — —	楕状をなすもので、輪と表現できるものである。口縁部は内面気味に上がり、底盤を丸く仕上げる。底盤は浅く丸底に近い。	内外面ともナゲ調整。L1縁部内面にはハケ目が残る。	鉢B-3。

Tab. 27 弥生土器、土師器觀察表15 (D区 S X - 8・9, P - 9・11)

辨別番号	追査番号	器種	法量 (cm)	口径 基部 胸径 底径	形態・文様	手 注	備考
Fig. 53 -211	D区 S X - 8	上部器 鋸	9.2 (2.1) — —	直状をなすもので、頂と表現できるものである。口縁部は短く内彌し、底部は幅く仕上げる。底部は平らである。	内外面ともナガ調整で、外底面には指痕が残る。	鉢C。	
*	*	*	9.8 2.9 —	直状をなすもので、頂と表現できるものである。口縁部は短く内彌し、底部は幅く仕上げる。底部は丸い。	*	*	
*	*	*	10.0 2.6 —	直状をなすもので、頂と表現できるものである。口縁部は短く内彌し、底部は幅く仕上げる。底部は丸い。	*	*	
*	*	*	12.0 10.2 11.6 4.6	I) 縫部は底部から外反し、外上方へ斜めにしたままである。縫部を衛く仕上げる。体部は最大径を上部1/3に有し、内下方へ内凹気味に下る。底部は丸く有する。 II) 縫部は底部から丸く外反し、外上方へ外反したままである。縫部を衛く仕上げる。体部は最大径を上部1/3に有し、丸い。	体部外面には印目が残存する。 他は表面が摩耗しており調査不明確。	鉢D-1。	
*	*	*	13.2 (7.2) 14.1	口縁部は底部から丸く外反し、外上方へ外反したままである。縫部を衛く仕上げる。体部は最大径を上部1/3に有し、丸い。	*	*	
*	*	*	— (2.5) 10.6	縫台のみ残存する。脚はハの字形に開く優しいもので、縫部は外後する面をなす。	外縁はハケ調整の後にナダ調査を施す。他は不明。	*	
*	*	*	15.2 (10.2)	杯部を削り直して外上方へ直線的に上上がり、縫部は丸く仕上げる。脚は中央で斜め下方へ下り、根元で大きく開くとみられる。	脚部内側はハラ型。他はハケ調査後ナダ調査を加える。	高杯A-1。	
*	*	弥生土器 鋸	— (5.9) 13.0	杯部を削る。脚は中央で幅大きく横く。縫部は丸く仕上げる。縫部外縁には丸い透し窓を3方に穿つ。	外縁はナダ調査。内面はハケ調査。縫部先端部のみヨコナダ調査。		
*	*	土師器 鋸台	7.8 6.3 9.0	受部は直状を呈し、縫部を丸く仕上げる。脚は付け根からハの字形に開き、丸く仕上げる。縫部には径1.1cmの丸い透し窓を3方に穿つ。	基面は摩耗しており調査不明。	器台A。	
*	*	*	10.4 (4.2)	脚部は裏側する。受部は直状をなし、外上方へ直線的に上上がり縫部は丸く仕上げる。脚との接合部が丸く突出している。	器面はナダ調査。	*	
*	*	*	— (5.6) 10.6	受部は裏側する。脚部は付け根から大きさ開き縫部は丸く仕上げる。縫部には径1.1cmの丸い透し窓が3方に穿たれる。	基面は摩耗しており調査不明。	*	
*	*	*	— (5.6) —	受部は裏側する。脚部は付け根から内凹気味に下る。脚部には径1~1.2cmの丸い透し窓が3方に穿たれる。	脚上部には部分的に印目が残存する。他はナダ調査。	*	
*	S X - 9	実	14.6 (6.3) (13.0) —	口縁部はほぼ直角に上方へ開き縫部から外縫して伸び、縫部は丸く仕上げる。また、口縫部を肥厚している。	基面は摩耗しており調査不明。	鉢C。	
*	P - 9	*	21.2 (6.0) — —	口縫部は側部から外反し、さらに外反して縫部に並ぶ。縫部は丸く仕上げる。縫部は下方には丸直ぐ下る。	*	器B-2-c。	
*	P - 11	*	20.0 (4.0) —	I) 縫部は側部から外反し、さらに外反して縫部に並ぶ。縫部は丸く仕上げる。縫部はやや丸味を持つて下る。	器部外面はナダ調査。他はハケ調査。	器B-3-c。	

Tab. 28 弥生土器、土師器観察表16 (D区P-11・13~15, E区第I層, S T - 6)

標印番号	遺構番号	器種	口径 器高 胸深 底径 法量 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
Fig. 53 -226	D区 F-11	土師器 鉢	15.0 3.3 —	浅い碗状をなすもので、口縁部は内湾状に上がり、底部は丸味を有す。	内面ともハケ調整を施し、外側のみナガ調整を加える。	鉢B-3。
+	+ -227	+ P-13	11.0 (3.2) — —	深い碗状をなすもので、口縁部は外輪から強く外反する。底部は幅く立ち上げる。	内面はナガ調整。外面は不明。	鉢D-2。
+	+ 228	+ P-14	— (10.7) 13.5	口縁部は欠損する。底部はほぼ直形をなし、中胸部に最大径がある。底部は丸い。	内面には指ナガの痕が明確に残る。外面はハケ磨きを施していたとみられるが、摩耗しており不明。	壹E。
+	+ -229	+ 弥生土器 鉢	10.4 5.1 — 4.5	碗状をなすもので、口縁部は内湾気味に上がり、底部は幅く立ち上げる。底部は平らである。	外側はナガ調整。底は摩耗しており不明。	鉢A-2。
+	+ -230	+ 土師器 鉢	11.6 (8.8) 11.4 —	口縁部は底部から外反し、外上方へ外反したままとする。底部は幅く立ち上れる。	内外面全面にハケ調整を施す。	鉢D-1。
Fig. 54	+ -231	+ 高杯	22.8 (4.2) —	杯部は屈曲し、外上方へ外反して上る。底部は丸く立ち上げる。	表面は摩耗しており調査不明。	高杯A-1。
+	+ -232	+ P-15	15.0 8.0 —	碗状をなすもので、口縁部は底部から内湾して上がり、底部は幅く立ち上げる。底部はやや尖り気味で丸い。	内面ともナガ調整。	鉢B-1。
+	+ -233	+ + +	11.6 3.5 —	碗状をなすもので、口縁部は内湾して上がり、底部は丸く立ち上れる。底部は丸く立ち上れる。底部は丸い。	—	鉢C。
+	+ -234	+ 高杯	— (6.7) 12.8	杯部は欠損する。脚部中空で、外方へ外反から大きく開く。底部は丸く立ち上れる。脚部には径1.1cmの丸い溝の跡を留む。	外側はナガ調整。底面内面はヨコナガ調整。内面はハケ調整。	
+	E区 第I層	弥生土器 鉢	14.8 6.0 —	碗状をなすもので、口縁部は内湾気味に上がり、底部は幅く立ち上れる。底部は尖り気味で丸い。	外側はナガ調整。内面は不明。	鉢B-1。
+	+ -236	+ 土師器 +	11.8 5.2 —	碗状をなすもので、極と表現できるものである。口縁部内湾して上部が底部から強く向外し、底部は幅く立ち上る。底部は丸い。	器面は摩耗しており、調査不明。	鉢B-2。
+	+ -237	+ +	11.2 8.5 10.4 —	口縁部は底部から外反し、外上方へ外反して上る。底部は丸味を有す。	口縁部内外面はヨコナガ調整。他はナガ調整で、内部外面にはハケ目、下部には明白らしい痕が残る。	鉢D-1。
+	+ -238	+ 弥生土器 高杯	— (9.4) 8.0	杯部は欠損する。脚部は外方へ外反してやや外反する。底部は丸味を有す。	内面にはしばり目、外面上には即日が残存するが、全般に摩耗している。	
+	+ -239	S T - 6	22.2 (5.8) —	直口形の蓋で、口縁部は折曲し、さらに外上方へ外反して上る。底部は内湾する平面を有す。	内面はナガ調整で、ハケ目が部分的に残る。外側は摩耗しており不明。	壹A-5。
+	+ -240	+ +	14.8 9.4 15.0 —	口縁部は脇部から外反し、外上方へ外反したまま上がり、底部は丸味を有す。	口縁部外側はナガ調整、内面はハケ調整。脇部外側は叩き、内面はナガ調整を施す。	壹B-2-e。

Tab. 29 苏生土器、土器器観察表17 (E区 S T - 6 ~ 8)

押印番号	通称番号	器種	口部 器高 柄径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手 法	備考
Fig. 54 -241	E 14 S T - 6	苏生土器 茎	15.4 (10.4) 18.0 —	口縁部は脚部から外反し、外上方へ直線的に伸び、端部を丸く仕上げる。脚部は丸味を持って下る。	口縁部外面はナデ調整。外面には即日が残る。内面は摩耗しており不明。	类型B - 3 - d。 口縁部外面から上部周辺にかけて擦痕が付着する。
*	*	*	15.4 (10.7) — (22.5)	口縁部は脚部から外反し、外上方へ外反したまま上がり、端部は丸く仕上げる。脚部は丸味を持って下る。	口縁部外面はハケ調整。脚部外縁に即日が残存する。内面は摩耗しており不明。	类型B - 3 - c。
*	*	*	14.4 (8.7) 16.2 —	口縁部はくの字形をなし、外上方へ外反して上がり、端部を丸く仕上げる。脚部は丸味を持って下る。	外縁は叩き、内面はナデ調整を施す。口縁部内面にはハケ日が残る。	类型A - 3 - e。
*	*	*	15.0 (6.8) 18.7 —	口縁部はくの字形をなし、外上方へ外反して上がり、端部は丸く仕上げる。脚部は丸味を持って下る。	*	*
*	*	*	15.0 (6.5) (20.0) —	口縁部は脚部から外反し、外上方へ外反したまま上がり、端部を丸く仕上げる。脚部は丸味を持って下る。	口縁部内外面ともヨコナデ調整。施はナデ調整で、内面には指痕圧痕が残る。	*
*	*	苏生土器 茎	(12.4) (5.5) 4.8	楕状をなすもの。口縁部は内面気味に上がる。底部は平底である。	内面はハケ調整の後にナデ調整を行う。外面はナデ調整。	类型A - 2。
*	*	*	15.0 (4.2) — —	楕状をなすもの。口縁部は内溝気味に上がる体部から極めて短く外縮し、端部を丸く仕上げる。端部は欠損する。	口縁部内面はヨコナデ調整。内面はナデ調整。外面は摩耗しており不明。	类型D - 2。
*	*	苏生土器 茎	17.6 (6.3) — —	二重U脚の山である。口縁部は外反した後直角に外上方へほぼ直線ぐ上がる。端部は丸く仕上げる。	口縁部内面はヨコナデ調整とハケ調整。全段に摩耗が見立つ。	类型A - 2。
*	*	*	16.2 (11.5) — —	「直線」の型である。口縁部は外縮した後斜角を持って上方に立ち上がる。端部は上方に向て平底をなす。脚部は丸味を持って下る。	底部から脚部外縁にかけて即日が残る。施は摩耗しており不明。	类型A - 3。
Fig. 55 -250	*	*	15.0 (5.5) (13.8) —	口縁部はくの字形をなし、外上方へ直線的に上がり、端部を丸く仕上げる。	外縁には叩き、内面にはハケ日が残るが、器皿は全般に摩耗しており不明瞭。	类型A - 2 - d。
*	*	*	15.9 32.9 25.0 —	口縁部はくの字形をなし、外上方へ直線的に立ち上がる。端部は外縮した後斜角をなす。脚部は斜めに現出し、最高点は中脚部や上部にある。脚部は丸味であるが丸い。	口縁部はヨコナデ調整。脚部外縁には即日が残存する。内面はナデ調整。	类型A - 3 - a。
*	*	*	14.4 (14.3) 15.5 —	口縁部はくの字形をなし、外上方へほぼ丸底ぐ上がり、端部は丸く仕上げる。脚部は丸味を持って下る。	口縁部内外面ともナデ調整。脚部外縁は即日、内面はハケ目が残る。	类型A - 3 - d。
*	*	*	14.8 (8.5) (18.2) —	口縁部はくの字形をなし、外上方へ外反して上がり、端部を丸く仕上げる。脚部は丸味を持って下る。	口縁部内外面はナデ調整。内面はハケ調整。脚部外縁には粗い即日が残る。内面は不明。	类型A - 3 - e。
*	*	*	16.2 (4.8) — —	口縁部はくの字形をなし、外上方へ外反して上がり、端部を丸く仕上げる。脚部は丸味を持って下る。脚部はやや丸味を有するところである。	口縁部内外面はナデ調整。内面はハケ調整。脚部外縁には粗い即日が残る。内面は不明。	类型A - 3 - f。
*	*	*	9.0 13.5 10.0 1.0	口縁部は脚部から外反し、外上方へ短く伸び、端部を丸く仕上げる。脚部はやや丸味を持つ下り。小さな平底の底部に平ら。	内面はナデ調整。外面は叩きの後にハケ調整を部分的に加える。	类型B - 3 - d。

Tab. 30 弥生上器、土器器観察表18 (E区S T-8, S K-87, P-16・17)

鉢図番号	遺構番号	器種	径量 (cm)	口徑 器高 胸深 底径	形態・文様	手法	備考
Fig. 55 -256	E区 S T-8	弥生上器 鉢	10.4 5.4 — 4.4	輪状をなすもの。口縁部は内溝 窓に外上方へ上がり、底部を丸く 仕上げる。底部は平らである。	内外面ともナガ調整で、体部外 面には印目が残存する。	鉢A-1。	
*	*	*	11.8 4.9 — 4.6	*	器面は摩耗しており調整不明。	鉢A-2。	
*	*	*	11.8 4.8 — 4.4	*	内外面ともナガ調整で、体部外 面には印目が残存する。	*	
*	*	*	12.5 5.5 — 3.8	*	*	*	
*	*	*	(12.5) (8.0) — 4.6	輪状をなすもの。口縁部は内溝 窓に外上方へ上がる。底部は平 らで突出している。	外面はナガ調整。内面は不明。	*	
*	*	*	11.5 5.1 — 3.5	輪状をなすもの。口縁部は内溝 窓に上がり、底部を丸く仕上げ る。底面は丸紙である。	粗製土器で、器形に変遷がある。 内外面ともナガ調整を施すが、 輪状窓が部分的に残る。	鉢B-2。	
*	*	*	(5.7) — —	杯は欠損する。脚は付け根から ハバ字形に開く。脚部には径約 1cmの丸い造り堅が下方に卓たれ る。	脚部内面はハケ調整。他はナガ 調整。		
*	*	高杯	(24.0) 28.6 6.0 —	口縁部は欠損する。脚部は球形を なし、中脚部に最大径を求めるこ とができる。底部は平らである。	内外面ともナガ調整で、脚部外 面には印目が残存する。		
*	S K-87	弥生土器 壺	13.2 (5.3) — —	口縁部は外反しながら広がる。端 部は丸く仕上げる。脚部は球形を 呈するとみられる。	基盤は摩耗しており調整不明。	壺B。	
*	P-16	土器器	22.4 (8.3) (25.6) —	口縁部は脚部から外反し、外上方 へ外反したまま上がる。端部は内 傾する面をなす。脚部は丸底を持 つて下る。	*	壺B-3-e。	
*	P-17	壺	2.0 2.0 —	口縁部の一部が欠損するが、底部 は輪めて浅い。介体的には丸い様 状をなす。底部は丸底である。	*		

Tab. 31 粗製土器観察表1 (B区S D-8)

鉢図番号	遺構番号	器種	径量 (cm)	口徑 器高 胸深 底径	形態・文様	手法	備考
Fig. 56 -256	B区 S D-8	手捏土器	1.5 1.9 —	極めて小型で、球形をなす。口縁 部は短く上方を向く。底部は丸底 である。	指壓成形したもので、器面には 輪状窓痕が残る。	A型。	
*	*	*	2.0 2.0 —	口縁部の一部が欠損するが、底部 は輪めて浅い。介体的には丸い様 状をなす。底部は丸底である。	*	*	
*	*	*	2.0 2.8 —	極めて小型で、球形をなす。口 縁部は短く上方を向く。底部は丸 底である。	*	*	

Tab. 32 植製土器観察表2 (B区SD-8, SX-1, C区第II層,
D区第I層, ST-3・4, SK-77)

持因番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口縁 器高 底径	形態・文様	手 法	備 考
Fig. 56 -269	B区 SD-8	手捏土器	3.4 2.2 —	小型の楕円を呈するもので、口縁部は近く上方に向く。底部は近く仕上げる。底盤丸い。	内外面には指捺圧痕が残る。	B-3類。	
* -270	*	*	3.6 3.9 —	口縁部は全体から稍曲し、近く外側に傾する。底部は丸く仕上げる。体部はやや内湧んでおり、丸底の底盤に平ら。鉢身-1のタイプである。	器面はナデ調整で、捺頭圧痕が部分的に残る。	B-4類。	
* -271	*	*	4.8 4.3 —	楕円をなすもので、口縁部の歪みは著しい。口縁部は内済気球形にトガる。底部は丸く仕上げる。底盤は丸い。	*	B-3類。	
* -272	SX-1	*	3.4 3.5 —	楕円をなすもので、口縁部は内済気球形にトガり、端部を細く仕上げる。底盤は丸い。	*	B-3類。 粘土の接合痕が表面に残る。	
* -273	C区 第II層	*	2.0 3.1 —	球形をなすものである。口縁部は内済気球形に近くトガり。底部は丸く仕上げる。底盤は丸い。	断頭で成形したもので、器面には指捺圧痕が残る。	A類。	
* -274	*	*	7.6 3.2 —	楕円をなすもので、口縁部は斜め上方へほぼ直角トガり、端部を丸く仕上げる。底部は丸底を有する。	器面はナデ調整で、指捺圧痕が部分的に残る。	B-2類。	
* -275	D区 第I層	*	4.8 3.7 —	楕円をなすもので、口縁部は内済気球形にトガり、端部を細く仕上げる。底盤は丸い。	*	B-3類。	
* -276	*	*	4.0 4.3 —	楕円をなすもので、底盤は浅い。口縁部は近く上方にトガり、端部を細く仕上げる。底盤は平らである。	*	B-5類。	
* -277	*	*	— (2.6) — 3.1	楕円をなすもので、口縁部は上方へトガる。端部は平らである。	*	B-1類。	
* -278	ST-3	*	5.7 5.8 3.1 —	コマブチ形をなすもので、口縁部は内凹して上方にトガり、端部を細く仕上げる。底盤は直角トガりである。	口縁部内面は横方向のハケ調査、他のナデ調査で、指捺圧痕が部分的に残る。	*	
* -279	ST-4	*	2.2 1.1 —	楕円形をなすもので、口縁部は上方へ直角トガり、端部を細く仕上げる。底盤は丸底である。	端部で成形したものの、器面には指捺圧痕が残る。	A類。	
* -280	*	*	4.1 2.4 —	楕円をなすもので、器面は歪みがある。口縁部は外上方へトガり、端部を丸く仕上げる。底盤は丸底である。	内面にはハケトガが残る。外側には叩きの後にナデ調査を加える。	B-3類。	
* -281	*	*	4.7 3.7 —	楕円をなすもので、口縁部は外上方へトガり、端部を丸く仕上げる。底盤は丸底である。	内面には指ナデ調査の痕が明瞭に残る。外側はナデ調査。	*	
* -282	*	*	8.0 5.2 — 2	大型の楕円をなすもので、口縁部は内済気球形にトガり、端部を細く仕上げる。底盤は小さい。	内面は指ナデ調査。外側はナデ調査で、端部外側には叩目が一部残存する。	B-1類。	
* -283	SK-77	*	4.0 2.3 —	楕円をなすもので、口縁部は斜め上方に伸び、端部を細く仕上げる。底盤は丸い。	器面はナデ調査で、捺頭圧痕が部分的に残る。	B-3類。	

Tab. 33 粗製土器観察表3 (D区S X-8, P-5, E区第I層, ST-6・8)

神田番号	遺物番号	器種	法量 (cm) 口径 器高 肩幅 底径	形態・文様	手 法	備考
Fig. 56 -284	D区 S X-8	手程土器	5.4 (2.9) — —	輪状をなすもの。口縁部は外上 方へ上がり、端部を細く仕上げる。 底部は丸くとみられる。	器面はナデ調整で、成形時の指 痕が直に残る。	B-3類。
* -285	* P-5	*	3.0 2.7 —	輪状をなすもの。口縁部は内縮 して上がり、端部を細く仕上げる。 底部は丸味を有す。	*	*
* -286	E区 第I層	*	6.8 2.9 —	皿状をなすもの。口縁部は内溝 気味に上がり、端部を細く仕上げ る。底部はやや尖り気味で丸味が ある。	器面はナデ調整。	B-2類。
* -287	* ST-6	*	3.6 3.1 —	輪状をなすもの。口縁部は内溝 気味に上がり、端部を丸く仕上げ る。底部は丸味を有す。	内面はナデ調整。外面は叩きの 後にナデ調整を施す。	B-3類。
* -288	* ST-8	*	7.2 4.1 —	大型の輪状をなすもの。口縁部 は内溝気味に上がり、端部を細く 仕上げる。底部はやや尖り気味で ある。	内面はナデ調整を比較的丁寧に 施す。外面には指痕圧痕が跡跡に 残る。	B-2類。
* -289	* *	*	5.1 3.6 — 3.0	コップ状をなすもの。口縁部は 外上方へはほんの僅く上がり、端部 を細く仕上げる。底部は下らである。	器面には指痕圧痕と指ナデ調整 の跡が残る。	B-1類。

Tab. 34 猶患器観察表1 (B区第II層)

神田番号	遺物番号	器種	法量 (cm) 口径 器高 肩幅 底径	形態・文様	手 法	備考
Fig. 57 -290	B区 第II層	杯(盃)	— (3.8) —	口縁部は外下方へ下り、端部は 傾する浅い凹面をなす。縁は背面 二角形をなすが、鋭い。天井部は 丸味を有すとみられる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 器面は回転ナデ調整。	天井部外縁にハダ 荒れがみられる。
* -291	* *	*	15.6 4.1 棱径 14.2	口縁部は内溝気味に近く下る。端 部は抵接し内部する凹面をなす。 縁は小さな段をなす。天井部は丸 味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部約2/3に回転へラ削り調 整を施す。能は回転ナデ調整で、 天井部内面にナデ調整を施す。	ロクロ回転方向は 左方向。
* -292	* *	*	15.2 4.8 棱径 14.3	口縁部は内溝気味に下り、端部 は内傾する浅い凹面をなす。縁は凹 面を高らして端より出る。天井部は 丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部約2/3に回転へラ削り調 整を施す。能は回転ナデ調整。 天井部内面に叩きが残る。	ロクロ回転方向は 右方向。
* -293	* *	*	14.2 5.1 棱径 13.9	—	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部約2/3に回転へラ削り調 整を施す。能は回転ナデ調整。 天井部内面に叩きが残る。	*
* -294	* *	*	16.0 (3.8) 棱径 15.2	—	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部約2/3に回転へラ削り調 整を施す。能は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は 左方向。
* -295	* *	*	15.4 (3.8) 棱径 14.4	口縁部は外下方へ細く下り、端部 は内傾する浅い凹面をなす。縁は 口縁部が偏むことによります。 天井部は丸味を有す。	*	ロクロ回転方向は 右方向。
* -296	* *	杯(盃)	— (3.7) たち上がり高 2.0	たな上りがりは内傾して伸び、端部 は外傾する浅い凹面をなす。受部 は細く外上方を向く。端部は鋭い。 底部は欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 器面は回転ナデ調整。	

Tab. 35 須恵器観察表2 (B区第II層, ST-1, SK-22・24・25)

件名番号	遺物番号	器種	口径 器高 剖面 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
Fig. 37 -297	B区 第II層	杯(身)	12.8 4.8 たら上がり高1.2 受部径14.9	たら上がりは内傾して伸び、端部は丸味を有す。受部は近く水平に伸び、端部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 端部外側約2/3に回転ヘラ削り調整。裏は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は右方向。
*	*	*	11.6 4.5 たら上がり高1.1 受部径14.0	たら上がりは内傾し、端部は丸味で上方を向く。端部は上方に向く字面をなす。受部は水平に伸び、端部は細い。底部は丸味を有す。	*	*
*	*	*	13.4 (4.0) たら上がり高1.1 受部径15.8	たら上がりは内傾し、端部は丸味。受部は水平に伸び、端部は丸味。底部は欠損するがやや扁平とみられる。	*	*
*	*	*	14.0 (3.5) たら上がり高1.1 受部径16.4	たら上がりは内傾し、端部は丸味。受部は近く斜上方を向き、端部は細い。底部は欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 器面は回転ナデ調整。	
*	*	高杯	— (5.2) — 10.6	脚部は欠損する。脚部はハバの字型に開き屈曲してさらに開く。端部は細く仕上げられる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 器面は回転ナデ調整で、杯形内面のみにナデ調整を加える。	
*	*	盃の蓋	11.4 (2.6) かえり径7.9	11脚部は斜く上方へ張りながら下り、端部を細く仕上げる。内面には内下方を向くかえりが付く。天井部は丸味を有す。つまみは折損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外側約3/4に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は右方向。 外側にはハダ焼れがみられる。
*	*	短颈甌	7.2 (3.9) 9.6	口脚部は短く立ち直り、端部は丸味を有す。脚部は短く天井部にある。底部は欠損するが丸いとみられる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 器面は回転ナデ調整。	肩部にハダ焼れがみられる。
*	*	*	9.2 (7.5) 15.7	11脚部は斜く上方を向く。端部は細く仕上げられる。脚部はその太さが欠損する。底盤は丸味を有す。底盤は天井部や下にあり、そこに凹縫を残す。底部は欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 器面は回転ナデ調整。	下脚部外腹は自然焼が弱めし、ハダ焼れがみられる。
*	*	*	10.8 4.0 —	11脚部は斜く内傾し、端部は細く仕上げる。脚部はその太さが欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 脚部外側には押印の後に回転カキ目調整を加える。裏は回転ナデ調整。	
*	*	甌	20.8 (6.8) —	口脚部は脚部から大きく述べ、通部を上下に押出し、内傾する平面をなす。脚部以下は欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 器面は回転ナデ調整。	
*	*	*	24.2 (10.8) (28.0)	口縁部は器や外反し、端部を肥厚する。脚部は細かに下り、中脚部以下が欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 器面内面は凹凸の文の押印。外腹は平行の凹の後に回転ナキ目調整を加える。裏は回転ナデ調整。	外腹外側が削離し、ハダ焼れが立つ。
Fig. 38 -308	ST-1	杯(身)	13.2 4.4 たら上がり高1.3 受部径15.6	たら上がりは内傾し、端部は丸味を有す。受部は水平に伸び、端部は細く丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底盤外側約3/4に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は右方向。
*	SK-22	*	10.8 5.2 たら上がり高1.2 受部径13.2	たら上がりは内傾し、端部には1次の丸味を残す。受部は斜く斜め上方を向く。端部は細く丸味を有す。	*	*
*	SK-24	*	11.8 (3.6) たら上がり高1.4 受部径14.3	たら上がりは内傾し、端部には1次の丸味を残す。受部は斜く斜め上方を向く。端部は細く丸味を有す。	*	*
*	SK-25	杯(蓋)	13.0 4.2 12.5 —	口縁部は内溝しており、端部は内側する丸い内面をなす。接部は内側を逃らして逃げ出す。天井部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外腹は全境に回転ヘラ削り調整を施す。他は回転ナデ調整で天井部内面にナデを加える。	*

Tab. 36 須恵器観察表3 (B区SK-25, SD-5・8)

博回番号	遺構番号	器種	口径 器高 法量 (cm) 径深 底径	形態・文様	手法	備考	
Fig. 38 -312	B区 SK-25	杯(蓋)	13.6 4.2 後径 12.8	口縁部は内済気味に下り、縁部は内側に よって造り出す。天井部はいくつ 丸めを有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面の火事に回転ヘラ削 り調整。他は回転ナゲ調整。	ロクロ回転方向は 右方向。	
+	-313	*	13.4 4.1 後径 13.0	口縁部は外下方へほぼ直進ぐで下り、 縁部は内側する平底をなす。後は 縁部に弱いものである。天井部は 平である。	*	*	
+	-314	*	13.4 5.1 後径 13.2 つまみ径 3.7	口縁部は短く下り、縁部は円筒面を なす。移は小さなほどとなる。天井 部は丸味を有し、中央部に歪なつ みが付く。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面約1/2に回転ヘラ削 り調整。他は回転ナゲ調整。	ロクロ回転方向は 左方向。	
+	-315	*	13.0 4.8 後径 14.6	たら上がりは内側した後真上に伸 び、縁部は丸く仕上げられる。受 部は底へ水平に伸び、縁部は丸い。 底部はほぼ平坦である。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面約2/3に回転ヘラ削 り調整。他は回転ナゲ調整。	ロクロ回転方向は 右方向。	
+	-316	*	10.8 (4.5)	たら上がりは内縮し、縁部を細く 伸ばせる。受部は底へ短く伸び、 縁部は圓い。底部は丸い。	*	*	
+	-317	SD-5	高杯	底部の一部が残存する。口縁部は伸 び、縁部は丸く仕上げる。外面に は2条の断面三角形の凸部と1条 の凹部が付まれていて本基準のクシ 横構造文が描かれる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面には回転ヘラ削り調整。 他は回転ナゲ調整。	*	
+	-318	SD-8	杯(蓋)	12.4 (3.9) 後径 12.2	口縁部は外下方へ下り、縁部は内 側する浅い凹面をなす。後は凹縫 によって造り出す。天井部は欠損 する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 縁部は回転ナゲ調整。	
+	-319	*	13.4 4.3 後径 13.0	口縁部は外下方へ下り、縁部は内 側する浅い凹面をなす。後は凹縫 によって造り出す。天井部は丸味 を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面約4/5に回転ヘラ削 り調整。他は回転ナゲ調整。	ロクロ回転方向は 右方向。	
+	-320	*	14.4 4.5 後径 14.4	口縁部は外下方へ下り、縁部は細 く内側に浅縫を有する。後は凹縫 によって造り出す。天井部は丸味 を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面約2/3に回転ヘラ削 り調整。他は回転ナゲ調整。	*	
+	-321	*	15.0 (4.7)	口縁部は内済気味に下り、縁部は内側 する浅い凹面をなす。後は凹縫 によって造り出す。天井部は丸 味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面約2/3に回転ヘラ削 り調整。他は回転ナゲ調整。	*	
+	-322	*	13.0 (3.0)	たら上がりは内縮し、縁部は外傾 する浅い凹面をなす。受部は底へ 伸び、縁部は丸く尖る。底部は 欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部は回転ナゲ調整。	外面にはハダ巻れ がみられる。	
+	-323	*	13.0 (4.2)	たら上がりは内縮し、縁部は外傾 する浅い凹面をなす。受部は底へ 伸び、縁部は丸く尖る。底部の大字 は欠損する。	*	底部外面はハダ巻 れが美しい。	
+	-324	*	13.8 (3.9)	たら上がりは内側し、縁部を細く 仕上げる。受部は底へ水平に伸び、 縁部は丸味がある。底部の大字は 欠損する。	*		
+	-325	*	17.0 (4.4)	杯縁は外上方へほぼ直進ぐ上 がり、縁部は丸い。外縁には2条 の断面三角形の凸部と8木単位の クシ横構造文を配す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面には回転ヘラ削り調整。 他は回転ナゲ調整。	ロクロ回転方向は 右方向。	
+	-326	*	(6.9)	杯縁は外上方へほぼ直進ぐ上 がり、縁部は丸い。外縁には2条 の断面三角形の凸部と8木単位の クシ横構造文を配す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面には回転ヘラ削り調整。 縁部外縁には割目カキ升調整。 他は回転ナゲ調整。	*	

Tab. 37 須恵器観察表4 (B区 S D - 9~13, S X - 2・3)

件名番号	遺物番号	器種	口径 法量 器高 側径 底径	形態・文様	手法	備考
Fig. 58 -327	B区 S D - 9	杯(蓋)	— — — (3.7)	口縁部は真下に下り、端部は内傾する浅い四面をなす。底は断面三角形をなす。天井部は欠損する。	マキアゲ。ミズビキ成形。 底部は回転ナダ調整。	
* -328	* S D - 10	杯(身)	13.6 (4.1) たち上がり高1.5 受部 17.0	たち上がりは内傾し、端部には円錐を造らす。受部は外上方へ伸び、端部は丸い。底部の火事は欠損する。	*	
Fig. 59 -329	* S D - 11	*	9.8 3.9 6.6	小型の杯で、口縁部は体部から外上方へほほ出る線上に上りがき部は丸い。底部は平らで、外底邊にハの字形に開く高台が付く。	マキアゲ。ミズビキ成形。 底部外表面は回転ヘラ切りであり、他の回転ナダ調整。	
* -330	* S D - 12	杯(蓋)	12.6 (4.4) 枝径 12.4	口縁部は外下方へほほ出る线上に上りがき部は丸い。底部は下方を向く平面をなし、底は断面三角形を呈し、丸い。天井部はやや丸味を有す。	マキアゲ。ミズビキ成形。 天井部外表面約4/5に回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転方向は右方向。
* -331	* 杯(身)	*	— (3.0) たち上がり高1.6	たち上がりは内傾し、端部は内傾する平面をなす。受部は水平に伸びる丸く窓く窓。底部の大半が欠損する。	マキアゲ。ミズビキ成形。 底部は回転ナダ調整。	
* -332	* *	蓋	— (3.9)	口縁部は外反して立ち上がり、端部を下方に把厚する。外表面には14本單線の波状文が施される。	マキアゲ。ミズビキ成形。 底部は回転ナダ調整。	
* -333	* S D - 13	杯(蓋)	12.8 4.3 後径 11.7	口縁部はハの字形に開き、端部は丸く、内側に浅い凹窓を造らす。底は四綫によって造り出す。天井部は丸味を有す。	マキアゲ。ミズビキ成形。 天井部外表面約2/3に回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整で天井部内面はナダ調整を加える。	ロクロ回転方向は右方向。
* -334	* *	*	15.9 3.9 枝径 14.1	口縁部はハの字形に開き、端部は丸く、内側に浅い凹窓を造らす。底は四綫によって造り出す。天井部は平らである。	マキアゲ。ミズビキ成形。 天井部外表面約2/3に回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整で天井部内面に同心円文の印目が残る。	*
* -335	* *	*	14.6 4.6 枝径 13.6	口縁部は内済気味に下り、端部は内傾する平面をなす。底は四綫によって造り出す。天井部はやや丸味を有す。	マキアゲ。ミズビキ成形。 天井部外表面約2/3に回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整で天井部内面に同心円文の印目が残る。	*
* -336	* *	*	15.4 5.3 枝径 15.0	口縁部は内済気味に下り、端部は内傾する平面をなす。底は内側に上って造り出す。天井部は丸い。	*	*
* -337	* 杯(身)	*	(4.6) たち上がり高1.9	たち上がりは内傾して伸び、端部は外傾する浅い凹窓をなす。受部は底へ水平に伸び、端部は丸い。底部の火事が欠損する。	マキアゲ。ミズビキ成形。 底部外表面は回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	*
* -338	* *	*	12.6 (3.8) たち上がり高1.3	たち上がりは内傾し、端部は丸味を有す。受部は底へ水平に伸び、端部は丸い。底部は丸味を有す。	*	ロクロ回転方向は右方向。
* -339	* S X - 2	直口盤	7.4 (4.7)	小皿の形である。口縁部は外上方へ直線的にたち上がり、端部を側ぐ仕上げる。底部凹下は欠損する。	マキアゲ。ミズビキ成形。 底部は回転ナダ調整。	
* -340	* S X - 3	杯(身)	12.6 (3.1) たち上がり高1.8	たち上がりは内傾して伸び、端部は丸味を有す。受部は底へ水平に伸び、端部は丸い。底部は丸味を有す。	*	
* -341	* *	*	11.0 4.4 たち上がり高1.4	たち上がりは内傾して伸び、端部は丸味を有す。受部基部には沈窓を造らす。底部は丸味を有する。	マキアゲ。ミズビキ成形。 底部外表面約2/3に回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転方向は右方向。 底部外表面には自然積が剥落し、ハダ荒れが目立つ。

Tab. 38 須恵器観察表 5 (B区 S X - 3, C区第Ⅰ・Ⅱ層, S K - 30, S D - 18, S X - 4, P - 4)

検出番号	遺構番号	器種	法量 （cm）	II件 器高 側面 底径	形態・文様	手法	備考
Fig. 59 -342	B区 S X - 3	杯（身）	11.8 2.6 たち上がり高 0.9 受部径 14.6	たち上がりは撇く内傾し、端部は水平に伸び、端部は撇く仕上げる。底部の大半は欠損する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部は回転ナダ調整。		
* -343	C区 第Ⅰ層	甌	21.8 (3.6) —	II件部は外反し、端部は肥厚し丸く仕上げる。	*		
* -344	第Ⅱ層	杯（腹）	13.4 3.7 12.6 —	口縁部は短くハの字形に開き、端部を撇く仕上げる。横口に捺部の細部によって伸縮が認められる。天井部は丸みを有す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外縁約1/2に回転ヘラ削り調査。他の回転ナダ調査。		ロクロ回転方向は右方向。
* -345	* *	高杯	— (3.8) — 15.0	脚部の荒が残在する。脚はハの字形に開き、根で屈曲する。端部は肥厚し、外傾する平面をなす。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部は回転ナダ調整。		
* -346	* *	短甌	13.2 (3.8) —	II件部は内傾して上がり、端部は撇く仕上げる。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部は回転ナダ型造。II件部外縁にヘラ状工具によるとみられる圧痕がある。		
* -347	* S K - 30	杯（腹）	16.2 (3.9) 15.9	口縁部は外下方に下り、端部を撇く仕上げる。様は凹面によって造り出している。天井部は欠損する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部は回転ナダ調整。		
* -348	* *	杯（身）	12.4 (3.2) たち上がり高 1.7 受部径 14.3	たち上がりにはほぼ直上に上がり、端部を撇く仕上げる。内部に1条の浅溝を有す。受部は組め上方へ上がり、端部は彫り。底部は欠損する。	*		
* -349	* *	高杯	— (4.5) — 9.0	脚部はハの字形に開き、裾部で屈曲して上方に向く。端部は撇く仕上げる。底部外縁は凹面を配す。長方形の透し窓を3方に穿つ。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外縁は回転カキ目調査。他の回転ナダ調整。		外面にはハダ彫れが部分的にみられる。
* -350	* *	甌	— (7.3) 9.6	端部外縁には9本単位のタシ彫波状紋が施される。脚部は撇く。中段より下に円孔を穿ち、そこに6本単位のクサ彫波状紋を施す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外縁は静止へ9割りの後にナダ彫整を加える。他の回転ナダ調整。		
* -351	S D - 18	杯（身）	11.4 (2.3) たち上がり高 1.0 受部径 13.7	たち上がりは撇く内傾し、端部は撇く仕上げる。受部は水平に伸び、端部は丸い。底部の大半が欠損する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部は回転ナダ調整。		
Fig. 59 -352	S X - 4	杯（腹）	13.6 4.3 —	II件部は撇く外下方に下り、端部は撇く仕上げる。核はなく、天井部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外縁約2/3に回転ヘラ削り調査。他の回転ナダ調査を天井部内面のみナダ彫整を加える。		ロクロ回転方向は右方向。
* -353	* *	*	14.0 3.2 —	II件部は撇く外下方に下り、端部は撇く仕上げる。後ではなく、天井部は半径である。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外縁約2/3に回転ヘラ削り調査。他の回転ナダ調査。	*	
* -354	* *	杯（身）	12.4 (3.3) たち上がり高 1.6 受部径 15.2	たち上がりは内傾して伸び、端部は丸く、側面に凸線を高らし、外傾する辺縁にみせている。受部は撇く外下方に向く。底部は欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部は回転ナダ調整。		
* -355	* *	高杯	— (3.8) — 9.6	脚部はハの字形に開き、裾部で下方に撇く屈曲する。また、脚部は台形の透し窓が3方に穿たれる。	マキアゲ・ミズビキ成形。 脚部外縁は回転カキ目調査。他の回転ナダ調整。		脚部外縁から内面にかけてハダ彫れが豊富。
* -356	* P - 4	杯（身）	11.9 (3.5) —	たち上がりは内傾して伸び、端部は丸く仕上げる。受部は削め上方へ上がり端部は丸い。底部の大半が欠損する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部は回転ナダ調整。		

Tab. 39 須恵器観察表6 (D区第I層, SK-52, SD-20, SX-7)

P-6・10, E区ST-7)

検査番号	遺傳番号	形種	法量 (mm)	口徑 器高 側径 底径	形態・文様	手法	備考
Fig. 60 -357	D区 第I層	杯(身)	13.5 4.5 12.9 —	口縁部は内凹気味に下り、縁部は内傾する浅い四面をなす。底部は円錐によって造り出す。天井部は丸味を有す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外周約2/3に回転ヘラ削り調整。他の回転ナガ調整で天井部内面のみナガ調整を加える。	ロクロ回転方向は右方向。	
* -358	* *	杯(身)	10.7 (3.5) たち上がり高1.7 受部径13.7	たち上がりは内傾し、縁部は外傾する四面をなす。受部はよく広く水平に伸び、縁部は細い。受部基部に丸味が落ちる。底部は欠損する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 残部は回転ナガ調整。		
* -359	* *	*	11.2 (2.2) たち上がり高0.7 受部径13.0	たち上がりはよく内傾し、縁部は細く仕上げる。受部は水平に伸び、底部は細い。底部の大手が欠損する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面には回転ヘラ削りの痕が残る。他の回転ナガ調整。		
* -360	* *	高杯	12.4 (3.3) — —	口縁部は外上方へほぼ直立ぐ上り、縁部は丸く仕上げる。外面上には断面三角形の凸巻が巡る。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面は回転ナガ調整。		
* -361	* *	*	— (4.7) —	脚部の軸が残存する。脚は外下方へ外度して下る。	マキアゲ・ミズビキ成形。 外度は回転カタ目調整。他の回転ナガ調整。		
* -362	* SK-52	杯(身)	12.8 (2.8) たち上がり高0.7 受部径15.2	たち上がりは内傾して伸び、縁部は細く仕上げる。受部は外上方へ伸び、縁部は丸い。底部の大手が欠損する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面は回転ヘラ削り調整。他の回転ナガ調整。		
* -363	S D-20	杯(蓋)	14.0 (3.3) —	口縁部は外下方へ下り、縁部は丸く仕上げる。模はほとんどない。天井部の大事が欠損する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外周は回転ヘラ削り調整。他の回転ナガ調整。	ロクロ回転方向は右方向。	
* -364	*	*	13.6 3.5 —	口縁部は深く外下方へ下り、縁部は丸く仕上げる。模はほとんどない。天井部は丸味を有す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外周約3/4側に回転ヘラ削り調整。他の回転ナガ調整を加える。		*
* -365	*	高杯	— (2.7) — 10.0	脚部のみ残存する。脚はその字形に開き組合してさらに細く。脚部外周には浅い断面三角形の凸巻が巡る。靴部外周にも浅い断面三角形の凸巻が巡る。	マキアゲ・ミズビキ成形。 脚部外周は回転カタ目調整。他の回転ナガ調整。		
* -366	S X-7	杯(蓋)	13.0 (4.0) 11.8 —	口縁部は内凹気味に外下方へ下り、縁部は丸く仕上げる。内部に凹窓が巡る。模は四面によって造り出す。天井部の大手が欠損するが、丸味がある。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外周の大手に回転ヘラ削り調整。他の回転ナガ調整。	ロクロ回転方向は右方向。	
* -367	*	杯(身)	13.1 3.9 たち上がり高(0.9) 受部径15.0	たち上がりは短く内傾し、縁部は細く尖る。受部は底平に伸び、縁部は丸味を有す。底部の一端が欠損するが、丸味のある底部である。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外周約3/4に回転ヘラ削り調整。他の回転ナガ調整。		*
* -368	P-6	鉢	26.0 (4.5) —	口縁部の軸一部が残存する。口縁部は外下方へ直線的に上がり、縁部は内傾する平面をなす。	マキアゲ・ミズビキ成形。 残部は回転ナガ調整。		
* -369	P-10	杯(蓋)	12.0 (3.2) —	口縁部は底下方へ深く下り、縁部は丸味を有す。模はほとんどない。天井部は欠損するが、丸みを有するとみられる。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外周の大手に回転ヘラ削り調整。他の回転ナガ調整。	*	
* -370	E区 ST-7	高杯	— (2.7) — 9.8	杯部は欠損し、脚部下半分が残存する。脚はその字形に開き、脚部外周は幅狭く。縁部は外傾する半面を有す。脚部には方形の透かし窓が4方に草たれていたと思われる。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外周の大手に回転ヘラ削り調整。他の回転ナガ調整。	*	

Tab. 40 陶器類観察表 (B区SK-10, SD-3, C区第II層, SD-16, P-3,
D区SD-20, SX-9, P-7)

標因番号	遺構番号	器種	法身 器高 (cm) 底径	形態・文様	手 法	備 考
Fig. 60 -371	B区 SK-10	唐津系 鉢	12.4 (8.0) —	口縁部は体部から内凹して上がり、底盤を外側に肥厚し、下縁上をなす。外面上にはハケ目文が施される。底部は欠損する。	口唇部以外に乳白色の釉を施釉する。	
* -372	* SD-3	素焼きの皿 蒸し器	11.2 1.8 8.4	口縁部は深く内凹し、底盤を丸く仕上げる。底盤は平らである。内面には文様を施している。	盤折によるもので、内外面ともナザ調整を施す。	
* -373	*	伊万里系 皿	13.4 3.0 7.0	口縁部は短く内凹し、底盤は内側する面をなす。底盤は平らで、断面造台形の削り出し高台が付く。見込にコンニャク割の五角花と内面に豪華文を施す。	内面は鉛ノ目状に釉削ぎ。骨付きも釉削ぎを行う。	
* -374	C区 第II層	伊万里系 猪口	4.7 1.3 1.4	口縁部は内凹して上がり、端部は上方に向く平面をなす。底盤は平らで削り出し高台が付く。外側に放射線状の刻目をいれる。	口縁部外側から内面にかけて白色釉を施釉する。底盤はナザ調整。	
* -375	*	*	4.5 1.4 1.4	*	*	
* -376	* SD-16	*	(4.4) (4.7)	口縁部は欠損する。体部は内凹気味に上がる。底盤は削り出し高台となる。見込にコンニャク割の丸弁花。高台外側に3条の豪線。体部外側の文様は不明瞭。	見込は鉛ノ目状に釉削ぎ。骨付きも釉削ぎを行う。	
* -377	*	土師質十呂 小皿	5.3 0.8 2.7	極めて小型の皿である。口縁部は鋸の上方へ傾くがる。底盤は平らである。	底盤は锯削り底。他は圓輪ナザ調整。	
* -378	D区 SD-20	伊万里系 鉢	11.1 6.4 4.2	口縁部は外上方へ直線的にたち上がり、底盤は丸く仕上げる。底盤には高台が付く。内外面に格子目の文様を施す。	内面に灰白色の釉、外面上に青緑色の釉をそれぞれ施釉し、骨付きも釉削ぎを行う。	
* -379	*	*	10.0 6.1 3.9	口縁部は体部から内凹気味に上がり、底盤は丸く仕上げる。底盤には高台が付く。内外面に格子目の文様を施す。	内面に灰白色の白細緻を施す。骨付きも釉削ぎを行う。	
Fig. 61 -380	*	*	14.3 3.7 9.1	口縁部は内凹気味に上がり、底盤は丸く仕上げる。底盤は削り出し高台となる。	内面に灰白色の釉、外面上に青緑色の釉をそれぞれ施釉し、底盤外側は鉛ノ目状に釉削ぎを行う。	
* -381	*	京焼系 皿	13.6 3.9 4.7	口縁部は内凹気味に上がり、底盤は丸く仕上げる。底盤は削り出し高台となる。	口縁部内外面に施釉し、見込は鉛ノ目状に釉削ぎを行う。	
* -382	*	備前燒 鉢	28.0 (7.2) —	口縁部は外上方へ直線的に上がり、底盤を肥厚する。口縁部外側に2条の豪線を施す。	内面には口本部位の豪線を施す。口縁部は削れナザ調整。外面上は底方向のヘリ削りの後にナザ調整を加える。	
* -383	*	*	31.4 (4.6) —	*	内面には口本部位の豪線を施す。口縁部は削れナザ調整。外面上は底方向へラ削り調整を行う。	
* -384	*	*	31.8 (6.0) —	*	内面には口本部位の豪線を施す。口縁部は削れナザ調整。外面上は静止ヘラ削り調整を行う。	口縁部内面に刻印がある。
* -385	*	伊万里系 猪口	4.6 1.4 1.5	口縁部は内凹して上がり、端部は平底をなす。底盤は削り出し高台。外側には放射線状の刻目をいれる。	口縁部外側から内面にかけて白色釉を施釉する。	
* -386	P-7	*	6.8 3.3 2.0	口縁部は外反して立ち上がり、端部は平底をなす。底盤は削り出し高台。外側には草花文が描かれる。	高台以外に灰白色の釉を施釉する。	

Tab. 41 土製品観察表1 (B区ST-1, SK-18, SX-3, P-2, C区SX-4,
D区第I層, SX-7, P-8, E区ST-8, SK-100)

標本番号	遺物番号	器種	計測値 (cm, g)	形態・文様	手法	備考
Fig. 61 -387	B区 SK-18	土鍋	(3.7) 1.4 — (5.7)	土鍋質の土鍋で円筒形を呈す。端部が欠損する。孔径は0.3cmである。	表面はナメ調整で指痕圧痕が残る。	
* -388	* SX-3	*	(4.5) (4.2) 3.2 50.0	土鍋質の土鍋で、梢円形を呈するものとみられる。両側面に溝状の抉りを有する。	*	
* -389	* *	*	(4.8) 5.2 2.7 (46.9)	(4.8) 5.2 2.7 (46.9)	*	
* -390	* P-2	*	(3.7) 1.3 — (5.5)	土鍋質の土鍋で、楕円内筋形を呈す。端部が一部欠損する。孔径は0.4cmである。	*	
* -391	C区 SX-4	*	(2.5) 2.2 — (10.3)	上鍋質の土鍋で、約1/2が欠損するが、円筒形を呈す。孔径は0.6cmである。	*	比較的厚い土鍋である。
* -392	D区 第I層	*	(4.4) 1.3 — (8.1)	土鍋質の土鍋で、端部が一部欠損するが、円筒形を呈す。孔径は0.5cmである。	*	
* -393	* *	*	(3.0) 1.2 — (4.2)	上鍋質の土鍋で、端部が一部欠損するが、楕円内筋形を呈す。孔径は0.4cmである。	*	
* -394	* SX-7	*	(2.8) 0.9 — (1.9)	土鍋質の土鍋で、約1/2が欠損するが、楕円内筋形を呈する。孔径は0.3cmである。	*	
* -395	* *	*	(5.0) 1.1 — (4.9)	土鍋質の土鍋で、円筒形を呈するが歪みがある。孔径は0.35cmである。	*	
* -396	* P-8	*	3.6 1.0 — 2.8	上鍋質の土鍋で、楕円内筋形を呈す。孔径は0.4cmである。	*	
* -397	E区 ST-8	*	4.2 2.7 1.6 6.5	土鍋質の土鍋で、梢円形を呈す。十字文に経済を配す。	経済は棒状工具により造り出す。	
* -398	* SK-100	*	3.0 2.5 — 15.5	土鍋質の土鍋で、短い円筒形を呈す。孔径は0.8cmである。	表面はナメ調整である。	比較的厚い土鍋である。
Fig. 62 -399	B区 ST-1	上製陶器品 玉	4.0 2.9 — 40.0	ソロバイン状をなすもので、0.25mmの縦孔を穿つ。片面には2重の同心円状と放射溝状に刻突文。片面には同心円状ないし螺旋状に刻突文をそれぞれ施す。	表面をナメ調整後に施文。	
* -400	D区 第I層	* 鍋	5.0 — 1.4 (20.0)	円筒形を呈する扁平なもので、半尖部に縫を造り出す。鍋を持たない鍋は丸味を有す。	表面はナメ調整で指痕圧痕が部分的に残る。	
* -401	* *	*	5.9 — 2.3 35.0	5.9 — 2.3 35.0	*	

Tab. 42 土製品観察表2 (D区第I層, SK-54, SD-20, P-12)

探査番号	遺構番号	器種	全長 計測値 (cm, g) 全幅 重量 差量	形態・文様	手法	備考
Fig. 62 -402	D区 第I層	上製円盤 (鉛)	6.5 6.0 1.7 60.0	格子状にヘラ工具で刻線を施し、 亜甲狀を呈す。片面はほぼ平坦で 施文されていない。	表面はナデ調整。片面のみ後で 施文する。	
*	*	*	6.7 5.7 2.2 67.0	両面に格子状の刻線を施す。	表面はナデ調整後両面にヘラ状 工具で施文する。	
*	*	*	(4.9) (4.5) 1.7 40.0	格子状に棒状工具で刻線を施し、 亜甲狀を呈す。片面はほぼ平坦で 施文されていない。	表面はナデ調整。片面のみ後で 施文する。	
*	S K-54	*	(5.6) (3.7) 1.7 (30.0)	両面に格子状の刻線を施す。	表面はナデ調整後両面にヘラ状 工具で施文する。	
*	SD-20	*	(3.6) (1.6) (1.3) 5.0	太平が欠損するが、片面に刻線2 条が残る。片面は施文されず、平 坦とみられる。	表面はナデ調整。片面のみ後で 施文する。	
*	P-12	*	(9.1) (6.4) (2.5) (145.0)	約1/2が欠損する。両面ともほぼ 平坦であるが、刻線は全く施され ていない。	表面はナデ調整。	

Tab. 43 石製品観察表1 (B区第II層, ST-2, SK-19・25)

探査番号	遺構番号	器種	全長 計測値 (cm, g) 全幅 重量 差量	石種	特徴	備考
Fig. 63 -408	B区 第II層	叩石	9.6 7.3 4.6 680.0	粗粒砂岩	手の平に乗る程度の大きさのもので、河原石を使用する。敲打痕が両面に残り、両端部にも弱いが敲打痕が残る。	A-2類。
*	*	*	8.8 7.1 4.4 390.0	中粒砂岩	手の平に乗る程度の大きさのもので、河原石を使用する。極めて浅い敲打痕が両面に残る。終端部に敲打痕は認められない。	*
*	*	*	8.8 7.5 4.5 440.0	*	手の平に乗る程度の大きさのもので、河原石を使用する。比較的深い敲打痕が両面に残る。終端部に敲打痕は認められない。	*
*	ST-2	*	(8.6) 7.1 3.8 340.0	*	*	A-1類。 端部が欠損する。
*	SK-19	*	10.5 7.9 5.9 700.0	粗粒砂岩	手の平に乗る程度の大きさのもので、河原石を使用する。敲打痕は両面に残り、片面は浅く歯尖的な敲打痕である。両端部にも敲打痕が残る。	A-3類。
*	SK-25	*	12.5 7.7 3.6 490.0	*	手の平に乗る程度の大きさのもので、河原石を使用する。敲打痕は両面に残るが弱いものである。	*
*	*	*	22.5 19.8 6.4 4,500.0	中粒砂岩	大型のもので、河原石を使用する。敲打痕は両面に残り、片面は4ヵ所、片面は2ヵ所にそれぞれ深い敲打痕が残る。また、後者の片側には擦り薙も残っている。	B-2類。 415とセットで使用されたと考えられる。

Tab. 44 石製品観察表2 (B区SK-25, SD-1・3・8, SX-3, P-1, C区第II層)

標印番号	遺構番号	器種	計測値 (mm.)	石 材	特 徴	備 考
Fig. 63 -415	B区 SK-25	叩石	16.9 4.7 4.6 620.0	細粒砂岩	縦状を呈し、断面形はほぼ円形をなす。河原石を使用したもので、撲抜に加工している。周辺部に敲打痕が残り、一部が欠損する。	C類。 44とセットで使用されたと考えられる。
Fig. 64 -416	* SD-1	*	16.0 15.0 7.4 2,700.0	中粒砂岩	大型のもので、河原石を使用する。表面にそれぞれ1か所の深い敲打痕が残る。火受け赤色に変色した箇所がある。	B-2類。
Fig. 63 -417	* SD-3	*	9.3 6.5 4.4 430.0	*	手の平に来る程度のもので、河原石を使用する。両面及び縁辺部にそれぞれ敲打痕が残る。	A-2類。
*	* -418	*	8.8 8.1 4.6 500.0	*	*	*
*	* -419	*	9.7 7.5 5.5 530.0	細粒砂岩	手の平に来る程度のもので、河原石を使用する。断面形は扁球形を呈し、片面のみ粗く深い敲打痕が残る。	A-1類。
Fig. 64 -420	* *	*	10.4 7.3 4.5 530.0	*	手の平に来る程度のもので、河原石を使用する。両面及び縁辺部にそれぞれ敲打痕が残る。	A-2類。
*	* -421	*	12.2 9.9 4.6 586.0	*	手の平に来る程度のものであるがやや大きい。河原石を使用する。敲打痕は両面に残り、片面は2カ所、片面は3カ所にそれぞれ残る。また、縁辺部にも敲打痕が残る。	*
*	* -422	磨石	6.9 6.6 3.0 210.0	頁岩	おむすび形をしたもので、断面扇形を呈す。全面を丁寧に研磨する。	A-2類。
*	* -423	叩石	7.6 7.1 3.6 290.0	細粒砂岩	手の平に来る程度のもので、河原石を使用する。両面及び縁辺部にそれぞれ敲打痕が残る。	A-2類。
*	* -424	*	9.3 7.6 3.5 370.0	*	手の平に来る程度のもので、河原石を使用する。両面に敲打痕が残るが、片面は極めて弱いものである。	*
*	* -425	*	11.6 10.0 4.8 815.0	細粒砂岩	手の平に来る程度のものであるが、やや大型である。河原石を使用する。敲打痕は両面に残る。縁辺部は表面が剥落している。	*
*	* -426	*	16.5 13.3 3.6 1,325.0	*	人類で最も多くの河原石を使用する。両面に敲打痕が最も多く残る。また、表面は火を受けており、赤く変色した箇所があり、その部分を中心に欠損する。	B-2類。
*	* -427	P-1	12.1 11.2 4.4 930.0	中粒砂岩	手の平に来る程度のものであるが、やや大型である。河原石を使用する。両面と縁辺部に敲打痕が残る。	A-3類。
*	C区 第II層	*	10.2 7.3 4.4 485.0	*	手の平に来る程度のもので、河原石を使用する。両面と縁辺部に敲打痕が残る。	A-2類。
Fig. 65 -429	* *	*	8.8 7.9 5.3 545.0	細粒砂岩	手の平に来る程度のもので、河原石を使用する。両面に極めて弱い敲打痕が残る。	*

Tab. 45 石製品観察表3 (C区第II層, SK-30, SD-18, SX-4,
D区第I層, ST-4, SK-50)

標本番号	遺構番号	器種	全長 計測値 (cm. a.)	石 材	軽 微	備 考
Fig. 65 -430	C区 第II層	叩石	11.2 9.2 4.8 205.0	粗粒砂岩	手の平に来る程度のもので、やや大型のものである。河原石を使用する。両面に敲打痕が残る。	A-2類。
* -431	*	*	13.5 7.0 4.8 740.0	*	手の平に来る程度のもので、やや細長いものである。河原石を使用する。両面と縁辺部に敲打痕が残る。	A-3類。
* -432	S K-30	*	14.0 7.2 4.3 480.0	中粒砂岩	手の平に来る程度のもので、やや扁平である。河原石を使用し、約1/2が欠損する。両面と縁辺部に敲打痕が残る。	*
* -433	S D-18	*	13.1 10.0 5.8 940.0	粗粒砂岩	手の平に来る程度のもので、やや大型である。河原石を使用する。両面に細めて弱い敲打痕が残る。	A-2類。
* -434	S X-4	磨石	6.7 5.5 3.0 150.0	中粒砂岩	円形をなすもので、断面指円形を呈す。全面を丁寧に研削する。	
* -435	D区 第I層	叩石	11.8 6.3 1.8 206.0	粗粒砂岩	手の平に来る程度のもので、河原石を使用する。全般に扁平で、片面と縁辺部に敲打痕が残る。	A-3類。
* -436	*	*	13.0 5.9 3.1 290.0	中粒砂岩	手の平に来る程度のもので、河原石を使用する。両面と縁辺部に敲打痕が残る。	*
* -437	*	*	9.7 6.7 3.8 375.0	*	*	*
* -438	*	*	8.6 8.3 4.0 420.0	*	*	A-2類。
* -439	*	*	13.2 9.2 4.3 800.0	粗粒砂岩	*	A-3類。
* -440	S T-4	*	(6.8) 7.5 3.7 (290.0)	中粒砂岩	手の平に来る程度のもので、河原石を使用する。約1/2が残存する。両面に細めて弱い敲打痕が残る。	A-2類。
* -441	*	*	13.3 5.4 2.5 320.0	*	手の平に来る程度のもので、河原石を使用する。両面と縁辺部に敲打痕が残る。	A-3類。
Fig. 66 -442	*	*	19.7 8.7 4.2 885.0	粗粒砂岩	*	*
* -443	*	*	15.3 7.2 5.4 923.0	中粒砂岩	粗粒をなすもので、断面形は扁指円形を呈する。両面に敲打痕があり、指円状に摩減する。	C類。
* -444	S K-50	*	12.8 7.2 5.8 770.0	粗粒砂岩	手の平に来る程度のもので、河原石を使用する。両面と縁辺部に敲打痕が残る。	A-3類。

Tab. 46 石製品観察表4 (D区SK-53, SD-20, SX-7・8,
E区第I層, ST-7・8, SX-12・13)

採集番号	遺構番号	器種	計測値 (mm, g)	石材	特 許	考
Fig. 66 -445	D区 SK-53	叩石	10.1 8.6 5.4 650.0	中粒砂岩	手の平に乗る程度のもので、河原石を使用する。両面に敲打痕が残る。	A-2類。
* -446	* SD-20	*	10.5 5.9 3.7 335.0	*	手の平に乗る程度のもので、河原石を使用する。両面と縁辺部に敲打痕が残る。	A-3類。
* -447	* *	*	10.5 9.0 2.8 465.0	細粒砂岩	手の平に乗る程度のもので、河原石を使用する。繊維をなすもので、両面に敲打痕が残る。	*
* -448	* *	*	6.3 7.6 5.9 550.0	中粒砂岩	手の平に乗る程度のもので、河原石を使用する。両面に揉めて弱い敲打痕が残る。	*
* -449	* *	*	10.5 7.6 5.1 580.0	粗粒砂岩	手の平に乗る程度のもので、河原石を使用する。両面と縁辺部に敲打痕が残る。	*
* -450	* *	*	12.2 7.9 4.1 590.0	*	手の平に乗る程度のもので、河原石を使用する。両面、各2カ所に敲打痕が残る。	A-2類。
* -451	* SX-7	*	8.7 6.2 4.5 280.0	*	手の平に乗る程度のもので、河原石を使用する。約1/2が欠損する。両面に敲打痕が残る。	*
* -452	* SX-8	*	8.6 7.4 3.1 320.0	中粒砂岩	手の平に乗る程度のもので、河原石を使用する。両面と縁辺部に敲打痕が残る。	A-3類。
* -453	* *	*	9.7 6.6 3.6 385.0	*	手の平に乗る程度のもので、河原石を使用する。両面に敲打痕が残る。	*
Fig. 67	E区 第I層	*	14.4 7.9 4.1 740.0	細粒砂岩	*	A-2類。
* -454	* ST-7	*	8.4 3.5 3.1 131.0	中粒砂岩	繊維をなすもので、断面形は不整円形を呈す。河原石を使用する。両端部に弱い敲打痕が残る。	C類。
* -455	* ST-8	磨石	12.5 6.4 4.6 560.0	粘板岩	手の平に乗る程度のもので、断面形は不整三角形を呈す。全面を丁寧に研磨する。	
* -456	* *	*	13.1 6.9 3.0 490.0	細粒砂岩	手の平に乗る程度のもので、断面形は不整円形を呈す。全面を丁寧に研磨する。	
* -457	* *	*	9.9 9.5 3.0 4.6 675.0	中粒砂岩	手の平に乗る程度のもので、河原石を使用する。両面と縁辺部に敲打痕が残る。	A-3類。
* -458	* SX-12	叩石	11.6 8.5 3.4 530.0	細粒砂岩	*	*
* -459	* SX-13	*	11.6 8.5 3.4 530.0	細粒砂岩	*	*

Tab. 47 石製品観察表5 (E区ST-8, C区第I・II層, SX-4,
D区ST-3・4, SB-1, SK-54・60, C区SK-44・45)

博団番号	遺構番号	器種	計測値 (cm, g)	石種	特徴	備考
Fig. 67 -460	E区 ST-8	石製円板	11.6 6.1 5.3 455.0	織紋砂岩	断面不整精円形を有するもので、河原石を使用する。 両面に格子状の刻線を配したものである。十巻円板を石で造り出したものといえる。極めて特殊なものである。	
+	C区 第I層	砥石	(5.2) (6.0) 3.9 220.0	+	大半が折損しているもので、2面に使用面が残る。	
+	SX-4	*	8.5 4.2 4.2 160.0	+	両面が折損する。4面に使用面が残る。	
+	-463	*	7.9 3.8 2.8 135.0	+	大半が折損する。2面に使用面が残る。	
Fig. 68 -464	D区 ST-3	*	(40.9) 33.0 13.0 2,350.0	織紋砂岩	一部が折損する。片面の2カ所に使用痕が残る。また、火を受け全体が黒化している。	
+	ST-4	*	(7.3) 2.1 3.1 100.0	織紋砂岩	一部が折損する。1面のみに使用痕が残る。	
+	SB-1	*	7.6 5.5 2.7 49.0	蛭石	片面のみに使用痕が残る。	
+	SK-54	*	31.9 23.7 7.0 9,500.0	織紋砂岩	片面のみを使用し、2カ所に使用面が残る。	
+	SK-60	*	(11.6) (3.1) (3.8) (270.0)	織紋砂岩	大半が折損する。1面のみに使用痕が残る。	
+	C区 SK-44	461	38.7 — 7.8 5,500.0	織紋砂岩	上口で上面約24cmの闇を窓ませている。標目は摩滅している。約1/2が残存する。	
+	SK-45	*	28.0 — 8.7 5,000.0	+	上口で上面約21cmの闇を窓ませている。標目は摩滅している。約1/2が残存する	

Tab. 48 金属製品観察表 (D区SK-52, SD-20, SX-7)

博団番号	遺構番号	器種	計測値 (cm, mm)	材質	特徴	備考
Fig. 69 -471	D区 SK-52	鍍管	(4.2) 1.0 1.3	銅	鍍管と羅字の一部が残存する。羅字は3分割して造られ、接合している。鋼板の厚さは約1mmである。	
+	SD-20	*	(6.2) 1.0 1.5	*	鍍管と羅字の一部が残存する。羅字は2分割して造られる。鋼板の厚さは約1mmである。	
+	SX-7	*	(3.9) 0.7 —	*	喉口があり、羅字の一部が残存する。喉口は2分割して造られ、喉口の径は4mmである。鋼板の厚さは約1mmである。	

Tab. 49 付編収録遺物観察表

件名番号	遺物番号	器種	口径 深さ 幅 底径 (cm)	形態・文様	手 法	備考	
Fig. 69 -474	—	土師器 蓋	18.6 29.0 23.3 —	口縁部は腹部から外反し、外上方へほぼ直ぐに上がり、腹部は丸く仕上げる。柄部はほぼや位に最大径を有し、内湾で内下方へ下り丸底の底部に至る。	容器は垂耗が著しく調整不明。	変形-3-d。	
+	-475	+	鉢	11.4 5.7 —	口縁部は内湾して上方へ上る体部から上方を向く。腹部は丸く仕上げる。底部は丸底である。	*	鉢B-2。
+	-476	+	台付鉢	11.9 (6.7) —	口縁部は内湾して上方へ上る体部から上方を向く。腹部は丸く仕上げる。底部は丸く、ハの字形に開く高台が付く。	*	*
+	-477	—	手挽土器	4.8 3.6 —	口縁部は内湾して上方へ上る体部から上方を向く。腹部は丸く仕上げる。底部は丸い。	器皿はナガ調整で、指痕压痕と能ナガの痕が残る。特に、口縁部外側には指痕压痕が明瞭に残る。	B-3類。
+	-478	—	須恵器 杯(蓋)	12.7 5.0 12.7 口縁部高 2.1	口縁部は真下に下り、直通は内傾する凹面をなす。横は底ぐく小さいが、断面で角形を呈す。天井部は丸底を有す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外側約2/3に調査ヘラ削り調査。後で、蓋に圓柱カキ舟調査を加える。蓋は調査ナガ調整。	ロクロ同板方向は右方向。
+	-479	+	杯(身)	10.3 5.2 たち上がり高 1.8 受盤径 13.2	たち上がりは内傾して伸び、縁部は外傾する平面をなす。受盤は斜め上方へ上がり、腹部は丸く仕上げる。底部は丸底を有す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外側約2/3に調査ヘラ削り調査。他は目洗ナガ調査。	ロクロ同板方向は左方向。

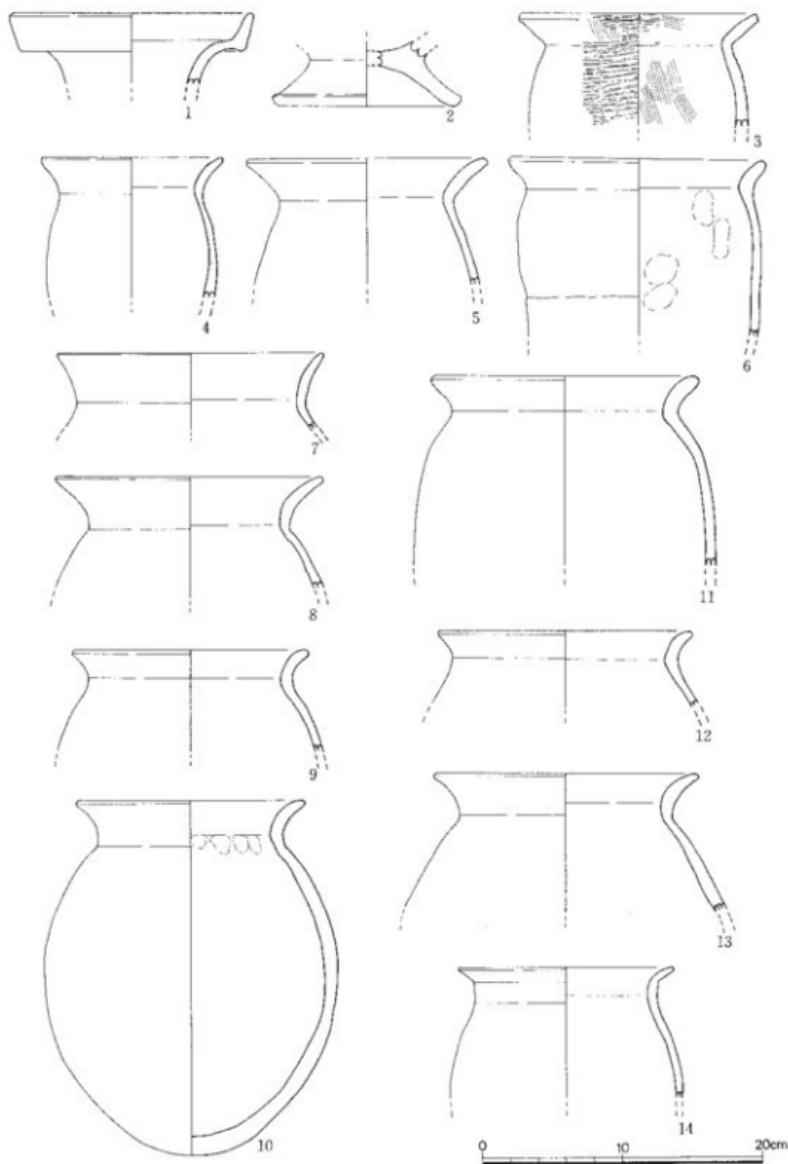


Fig. 44 遺物実測図 1 (弥生土器, 土師器)

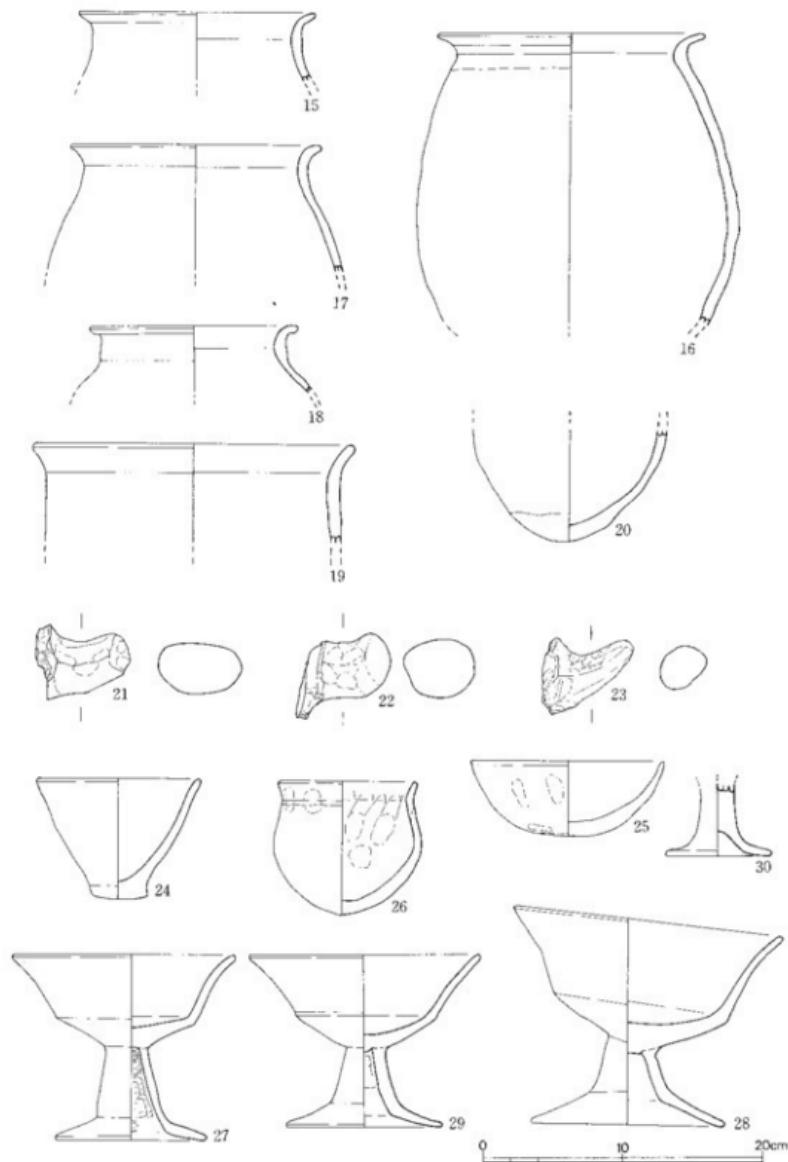


Fig. 45 遺物実測図 2 (埋生土器, 土器器)

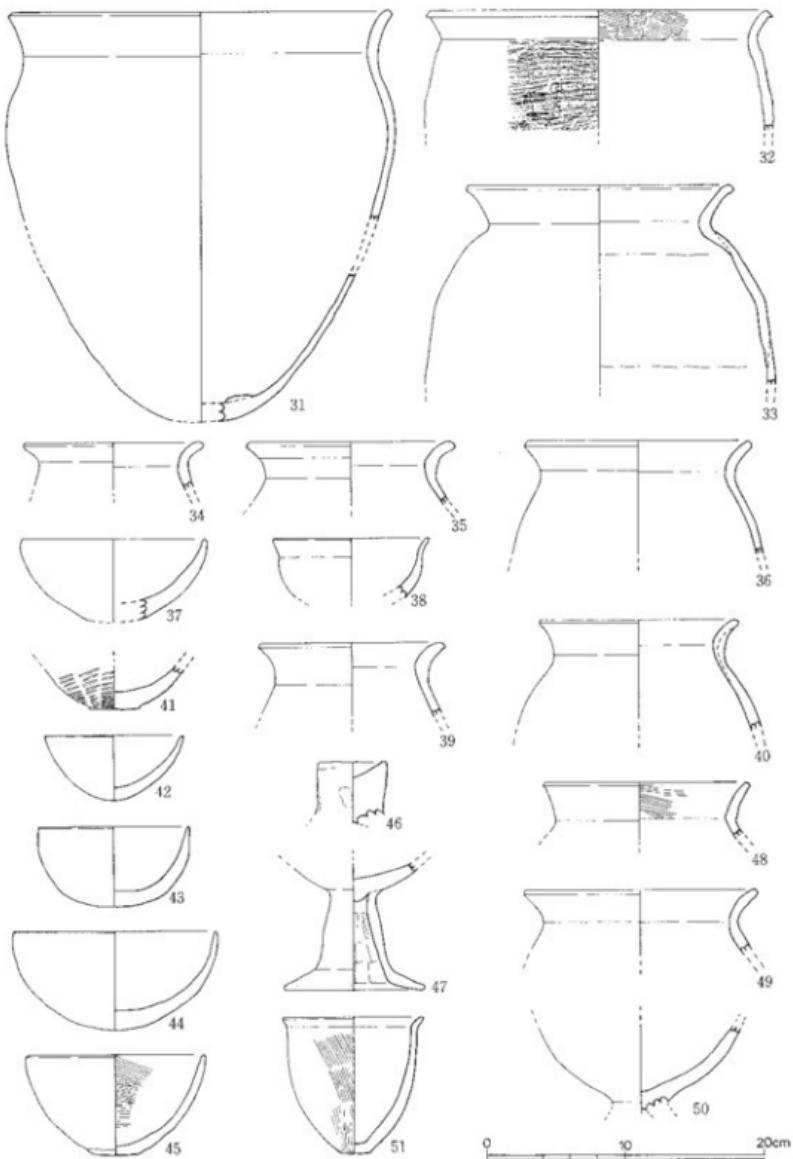


Fig. 46 遺物実測図 3 (弥生土器、土師器)

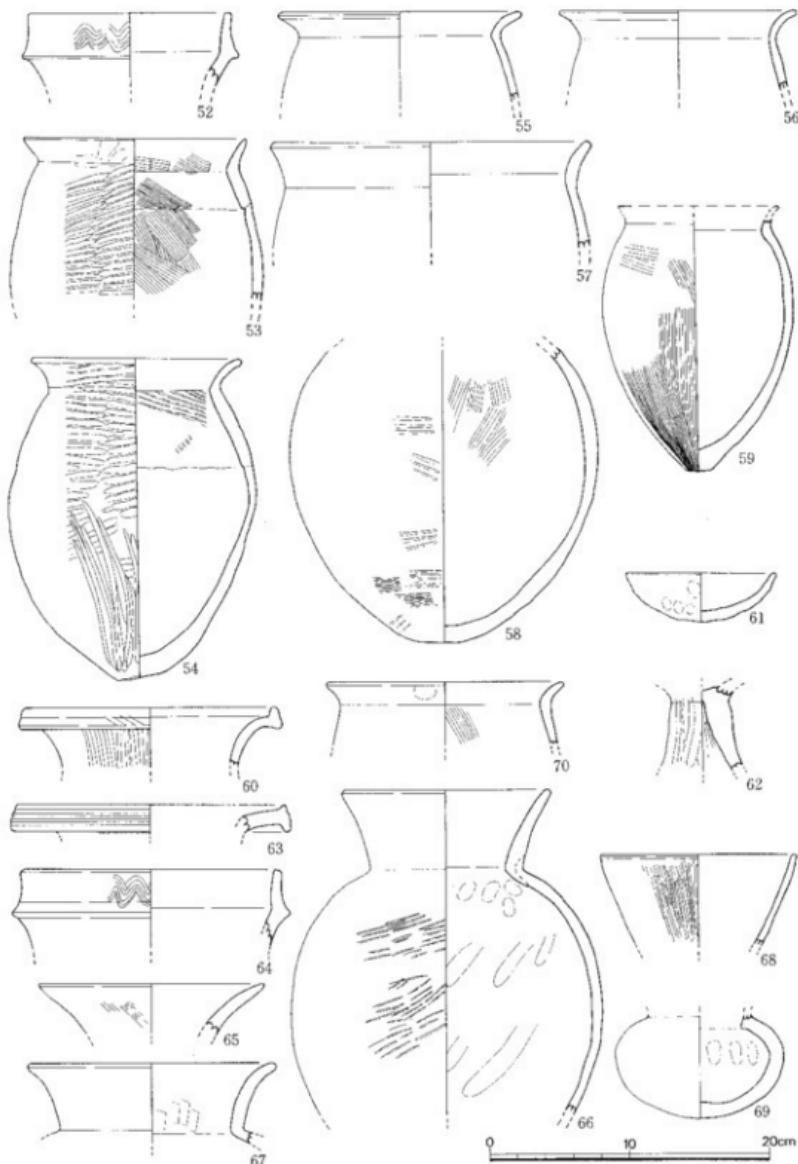


Fig. 47 遺物実測図 4 (弥生土器, 土師器)

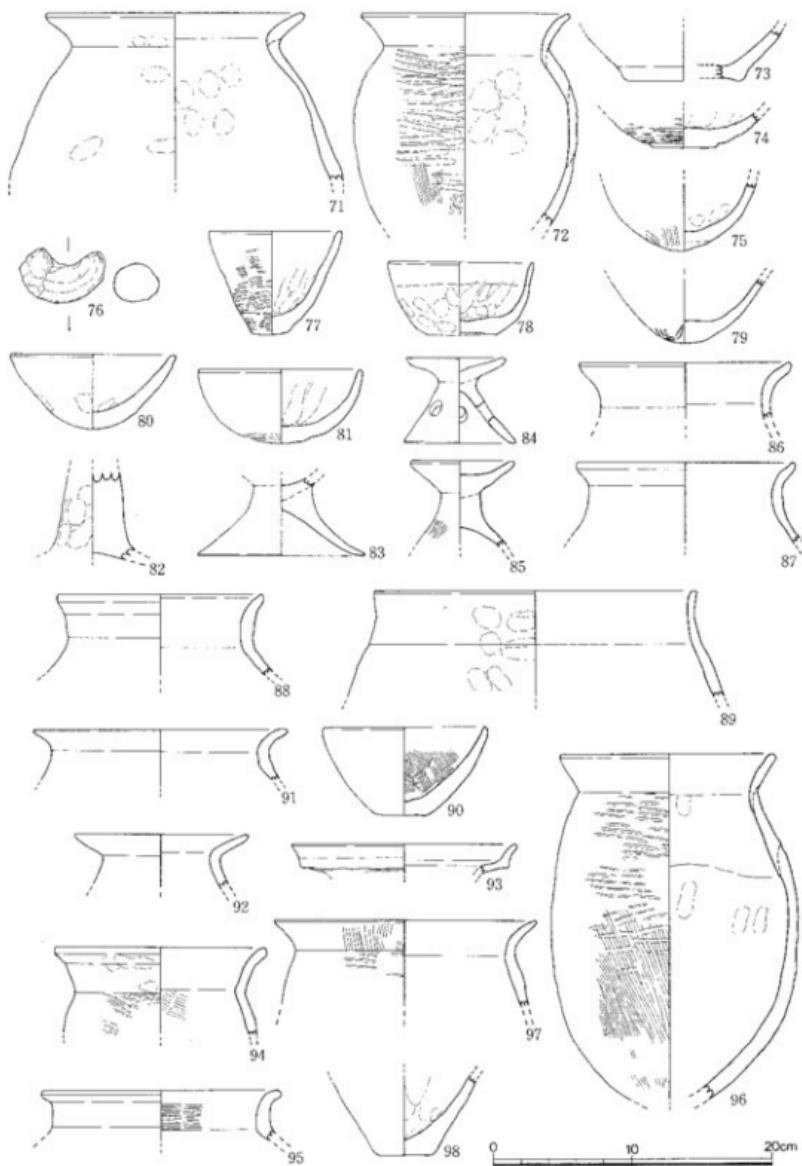


Fig. 48 遺物実測図 5 (赤生土器, 土師器)

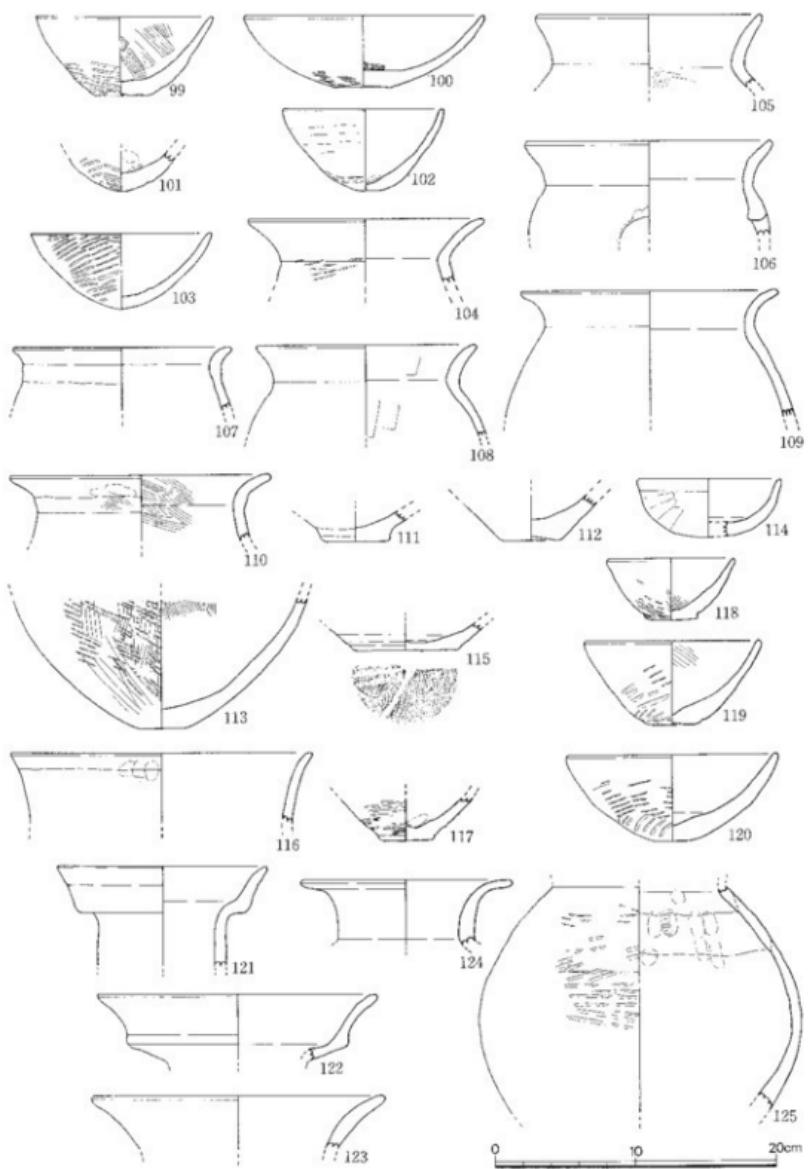


Fig. 49 遺物実測図 6 (弥生土器、土師器)

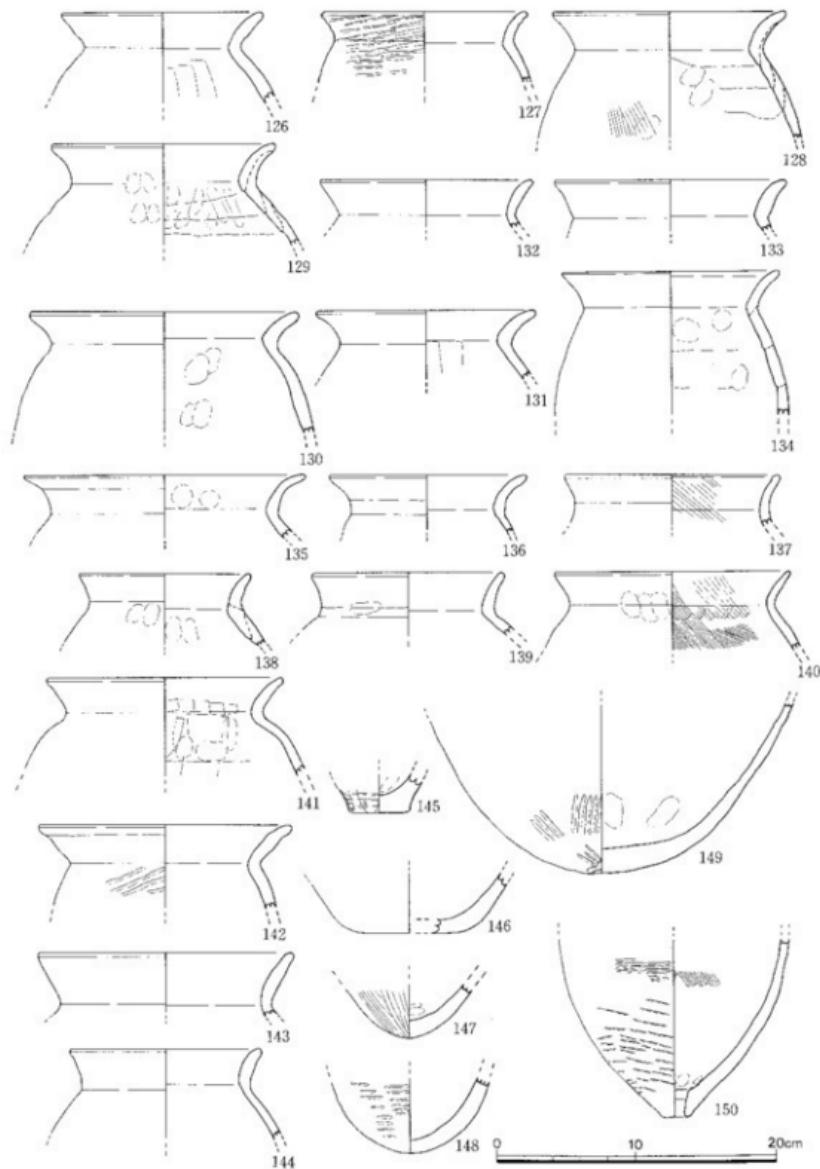


Fig. 50 遺物実測図 7 (弥生土器, 土師器)

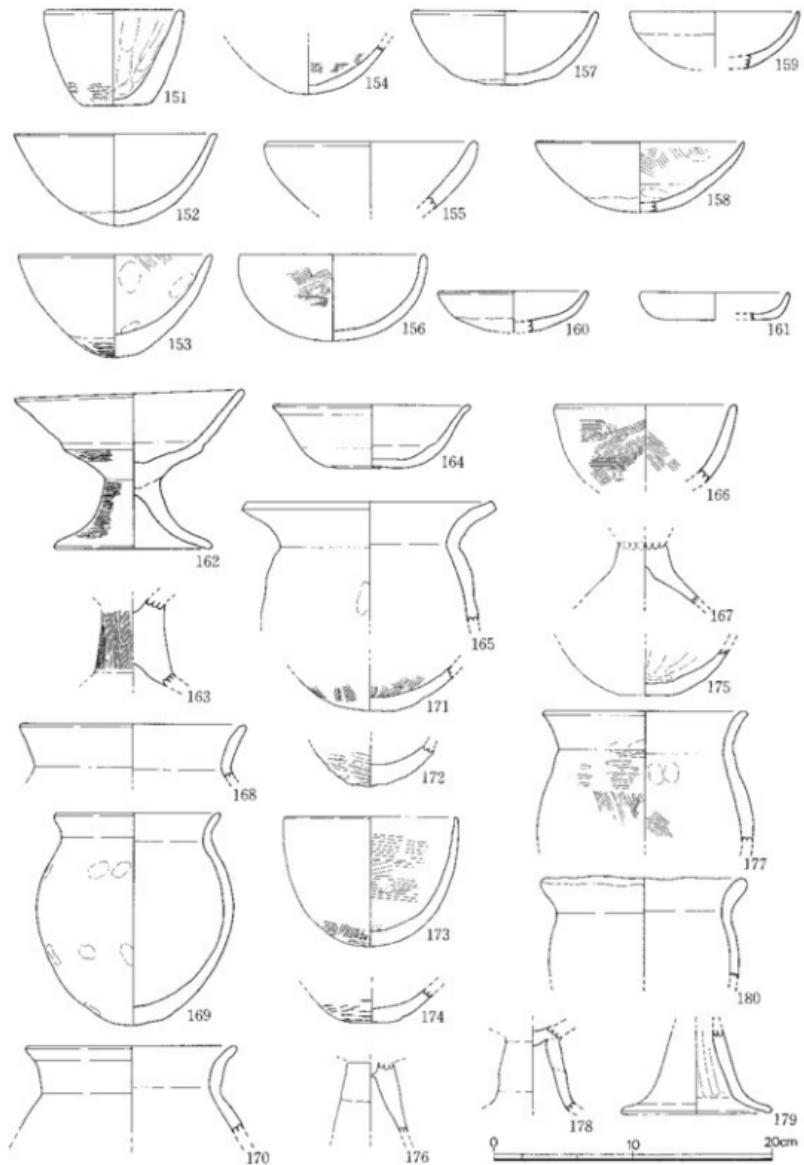


Fig. 51 遺物実測図 8 (弥生土器, 土師器)

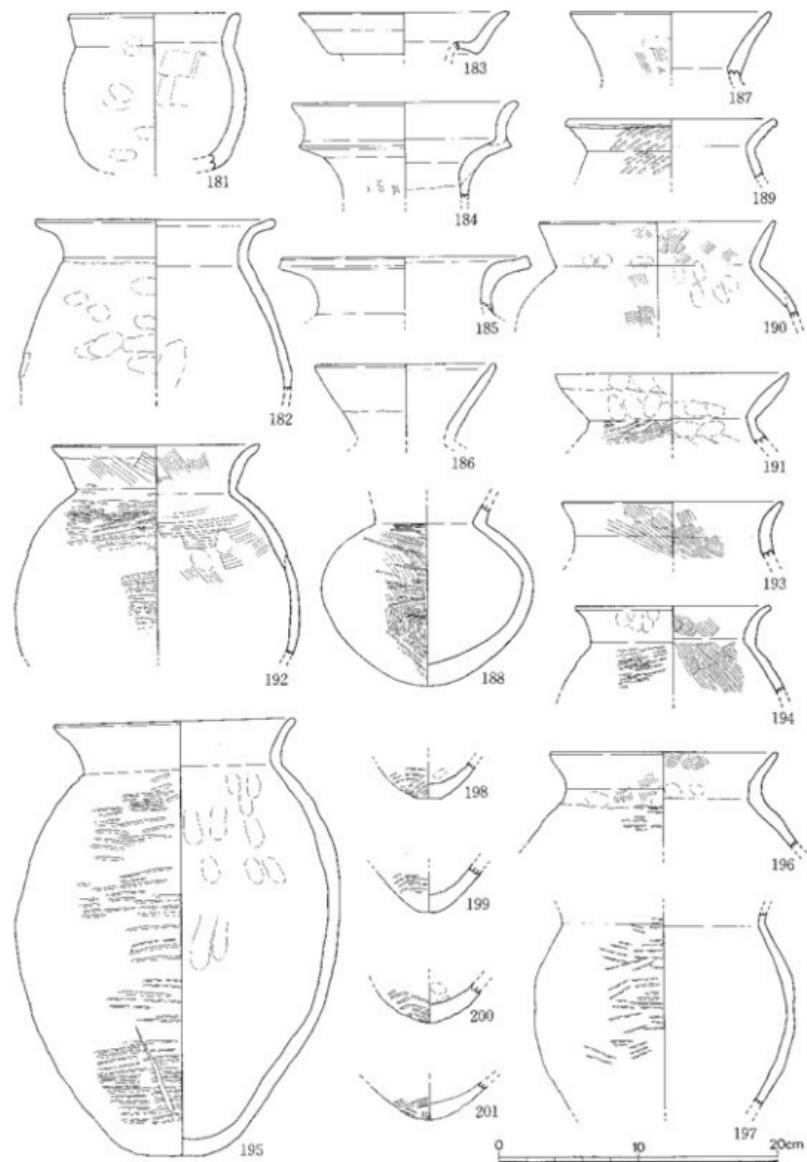


Fig. 52 遺物実測図 9 (弥生土器、土師器)

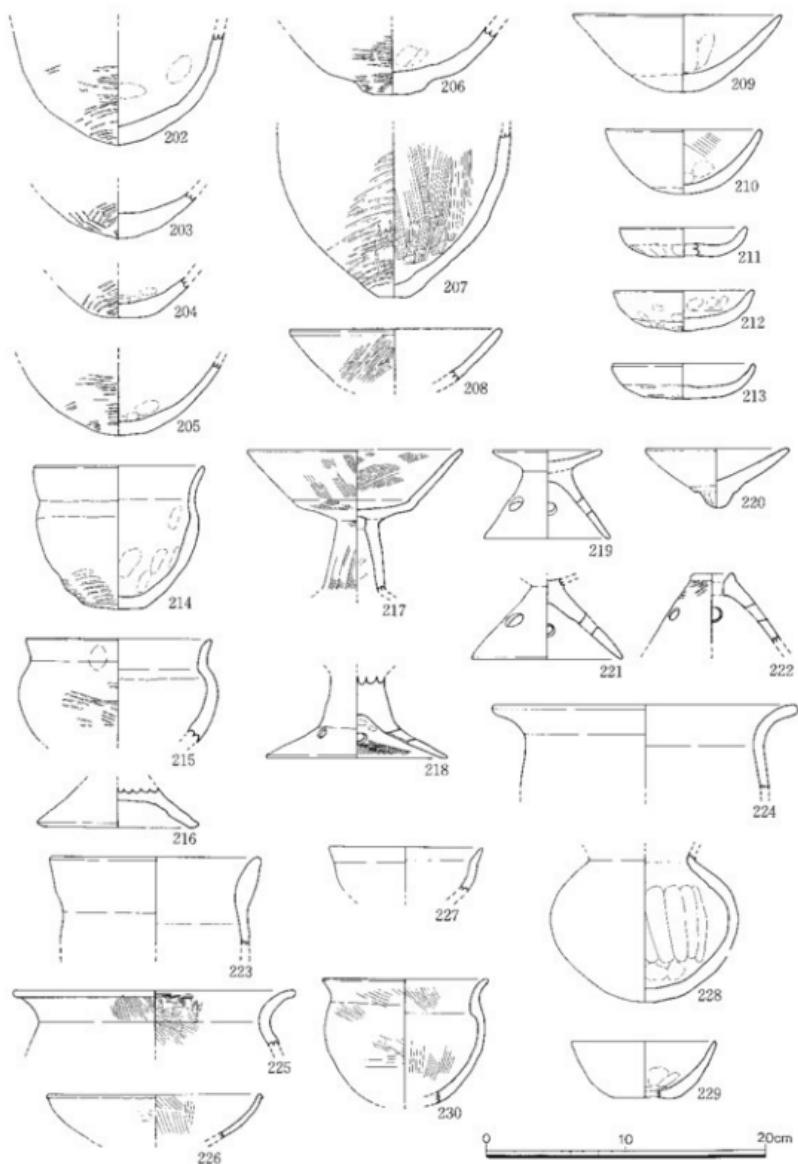


Fig. 53 遺物実測図10(赤生土器、土師器)

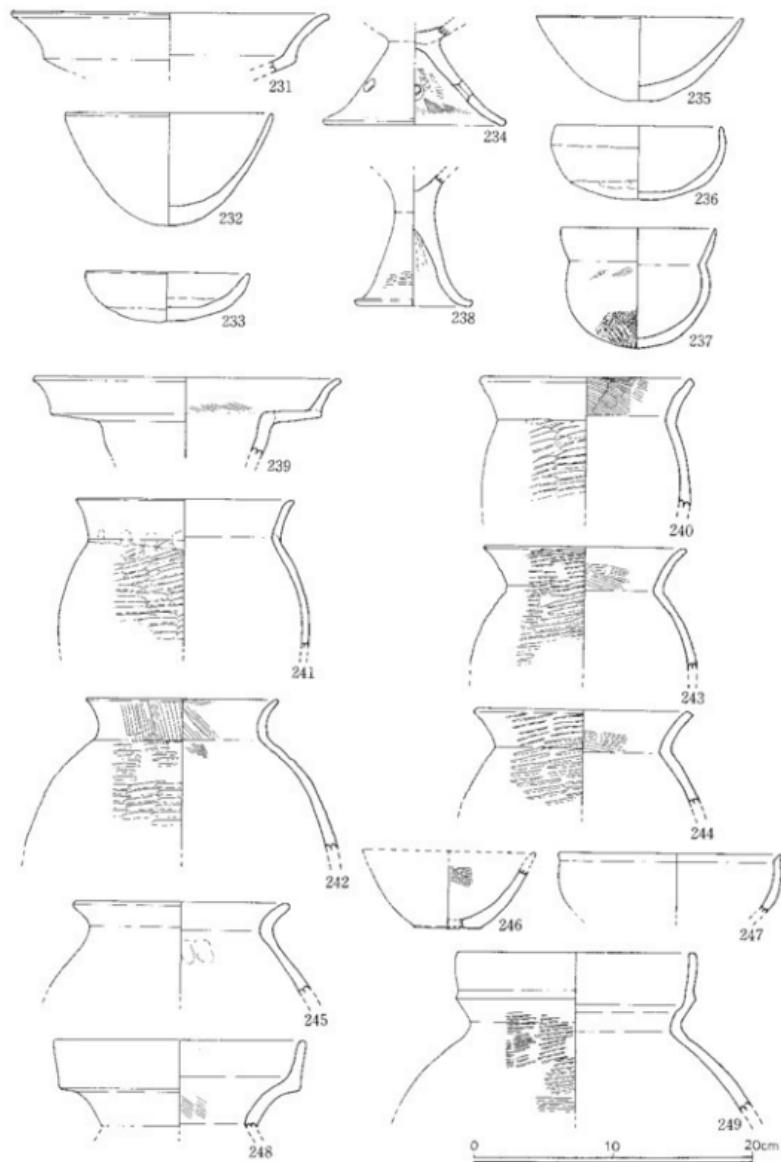


Fig. 54 遺物実測図11(弥生土器、土師器)

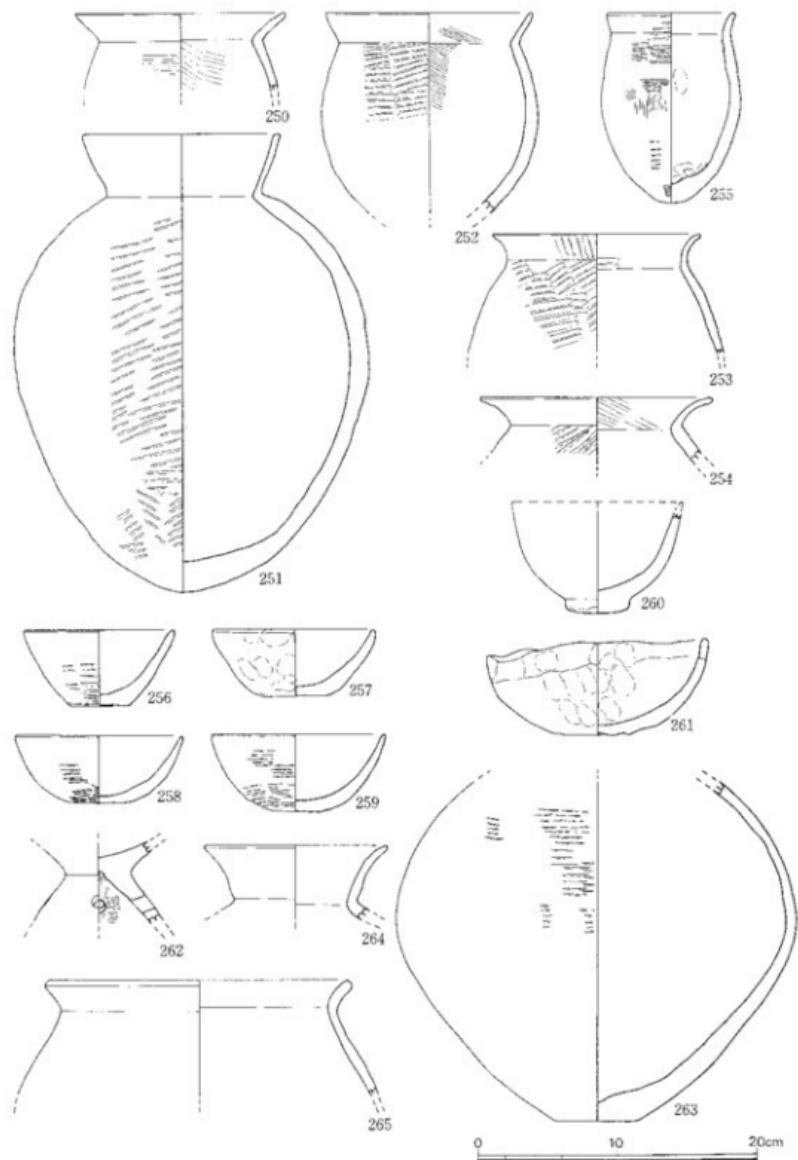


Fig. 55 遺物実測図12(弥生土器、土師器)

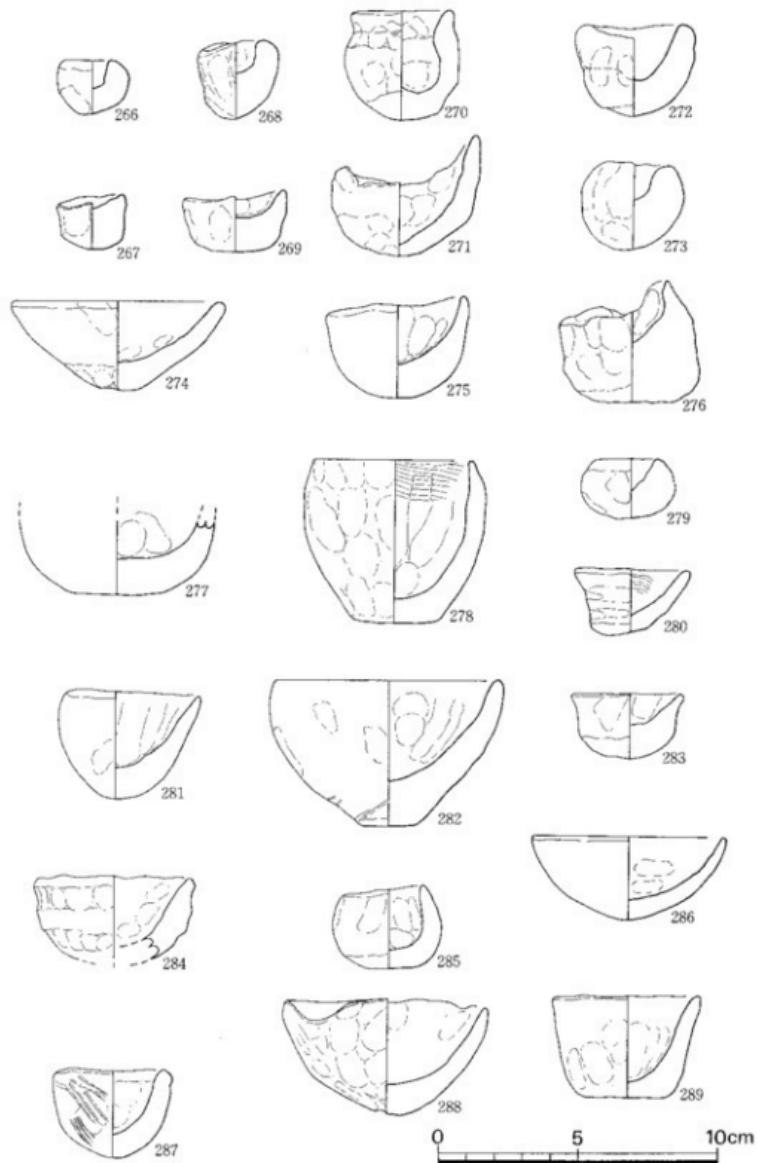


Fig. 56 遺物実測図13(粗製土器)

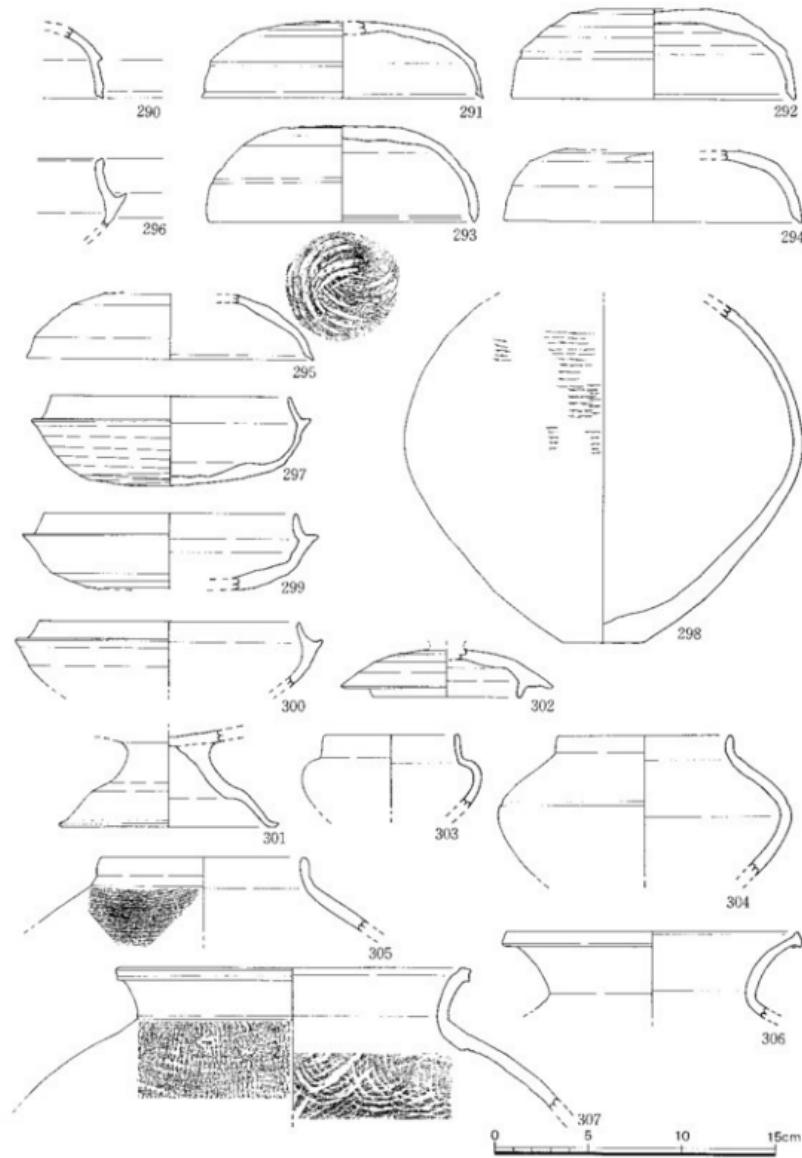


Fig. 57 遺物実測図14(須恵器)

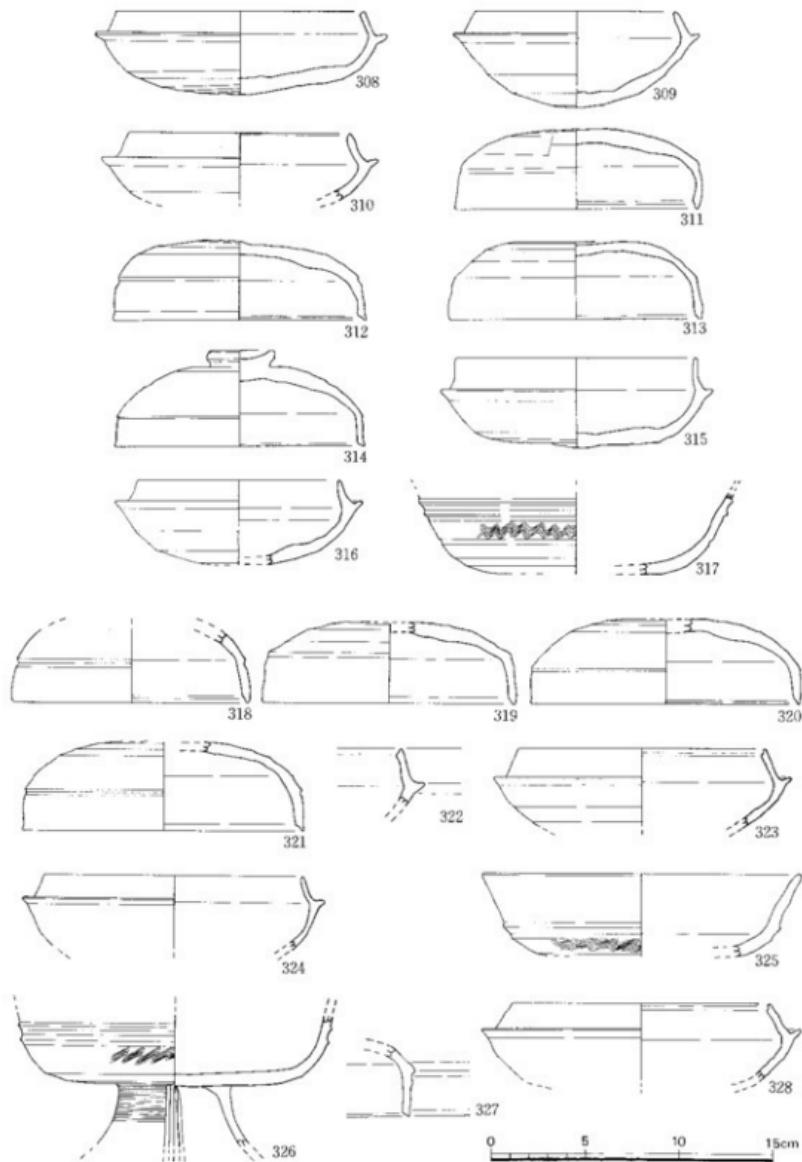


Fig. 58 遺物実測図15(須恵器)

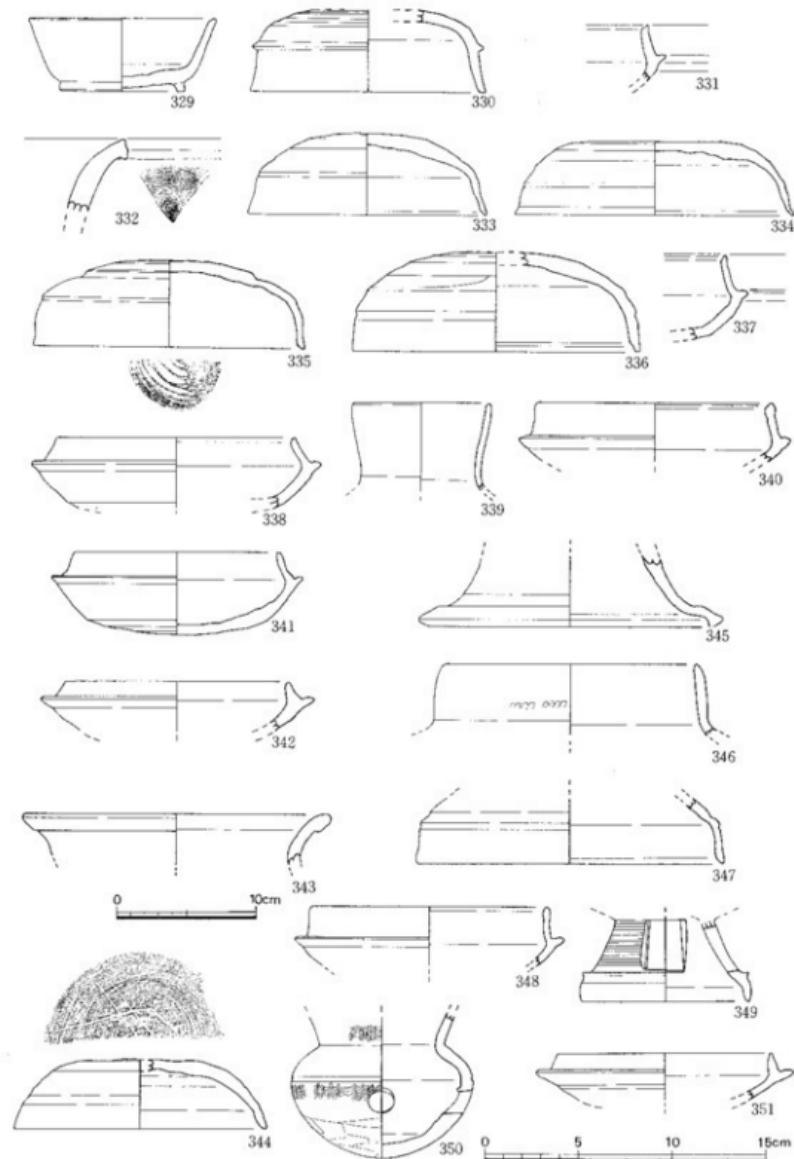


Fig. 59 遺物実測図16(須恵器)

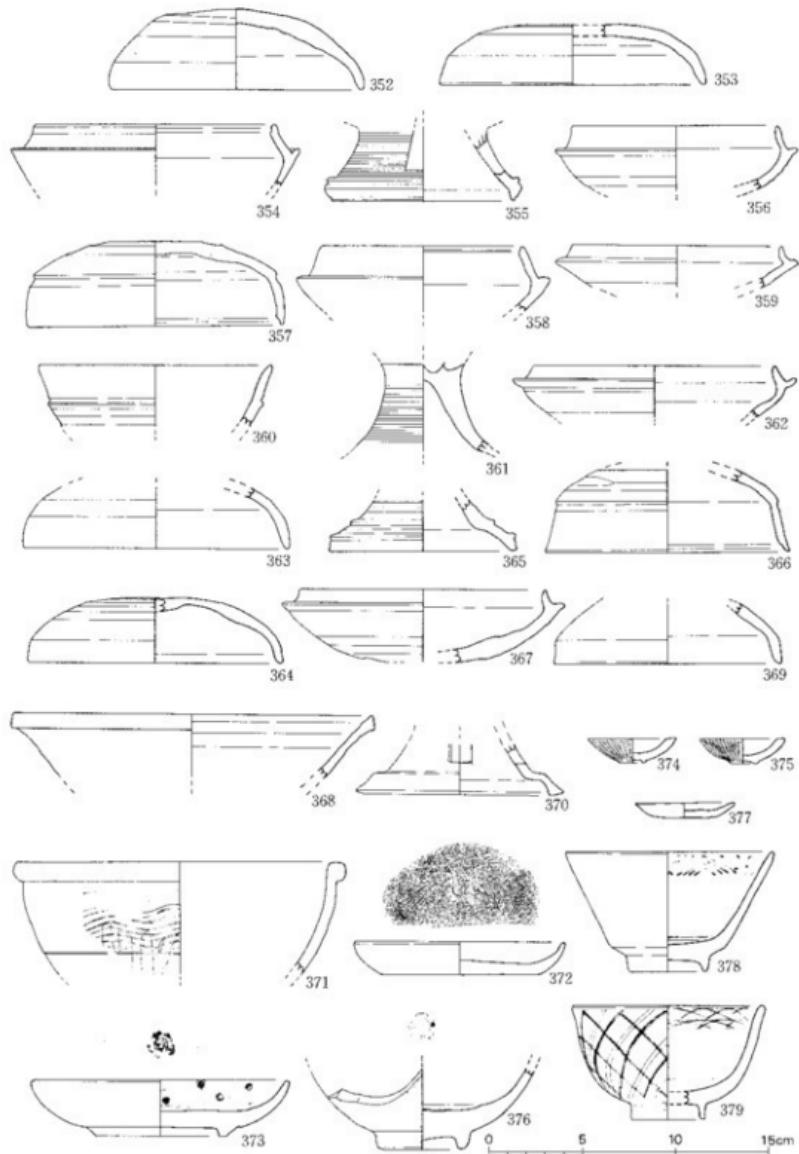


Fig. 60 遺物実測図17(須恵器、陶磁器類)

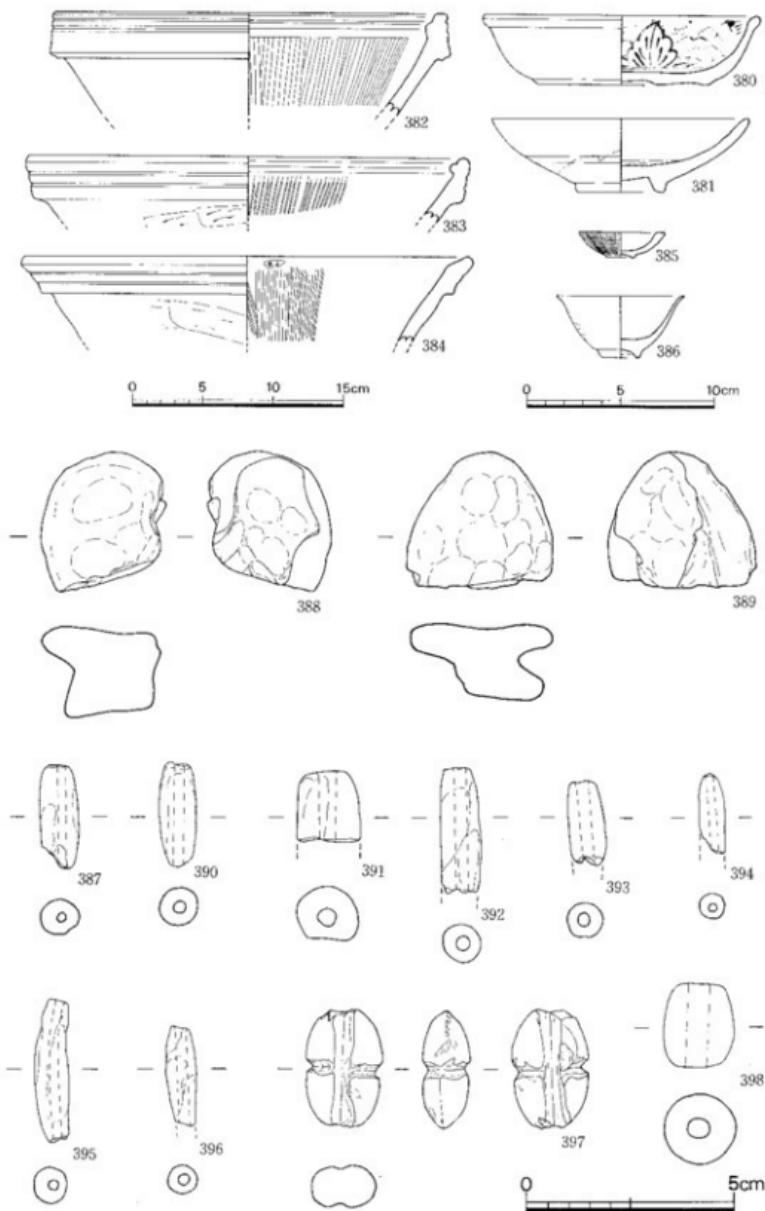


Fig. 61 造物実測図18(陶磁器類、土製品)

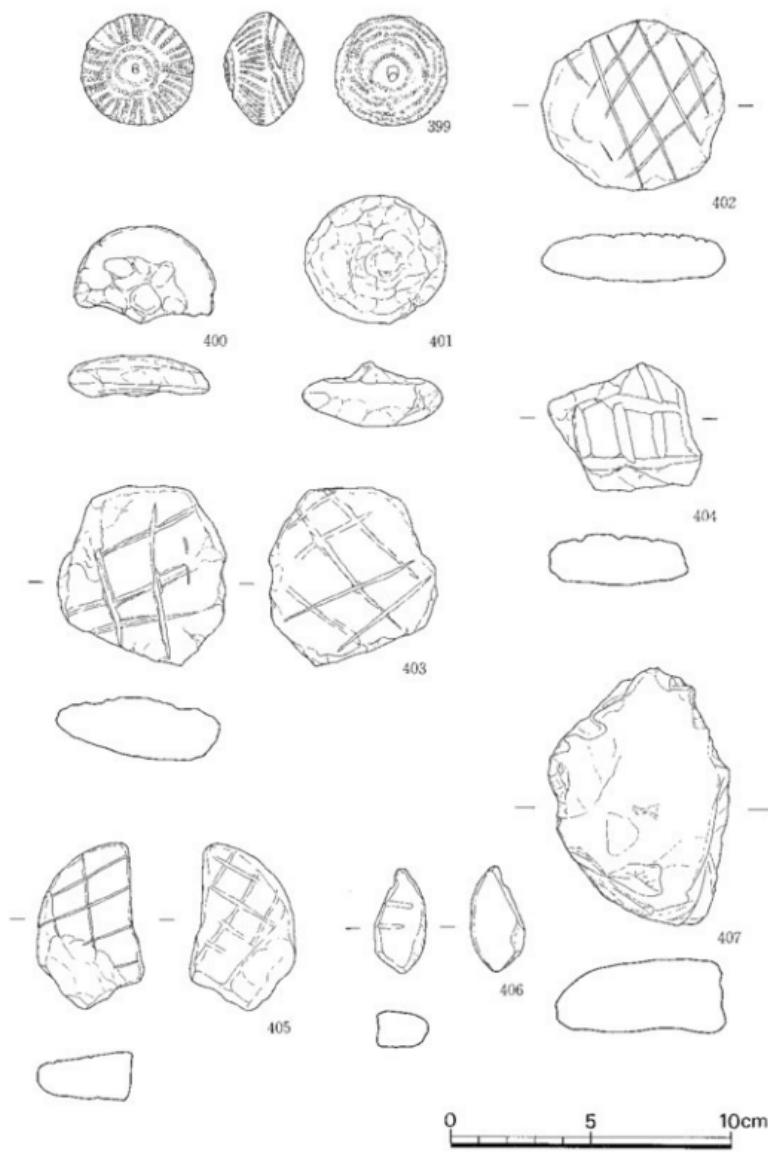


Fig. 62 遺物実測図19(土製品)

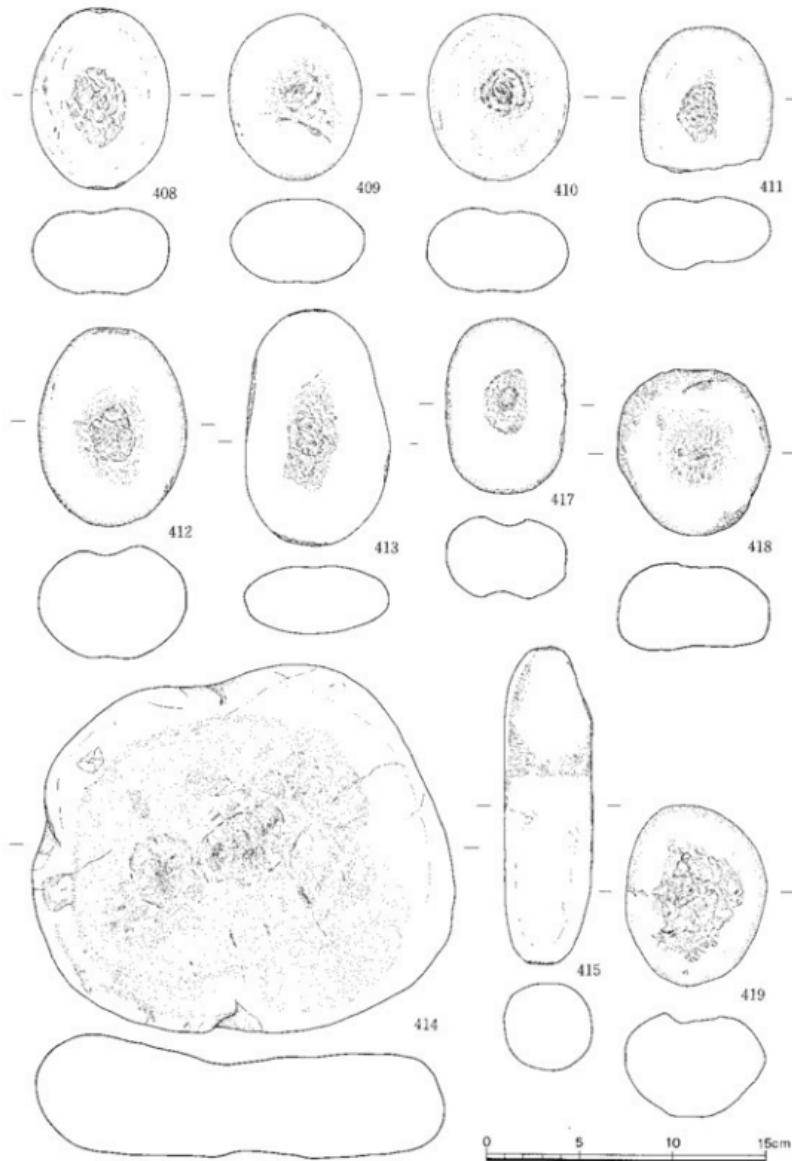


Fig. 63 通物実測図20(石製品)

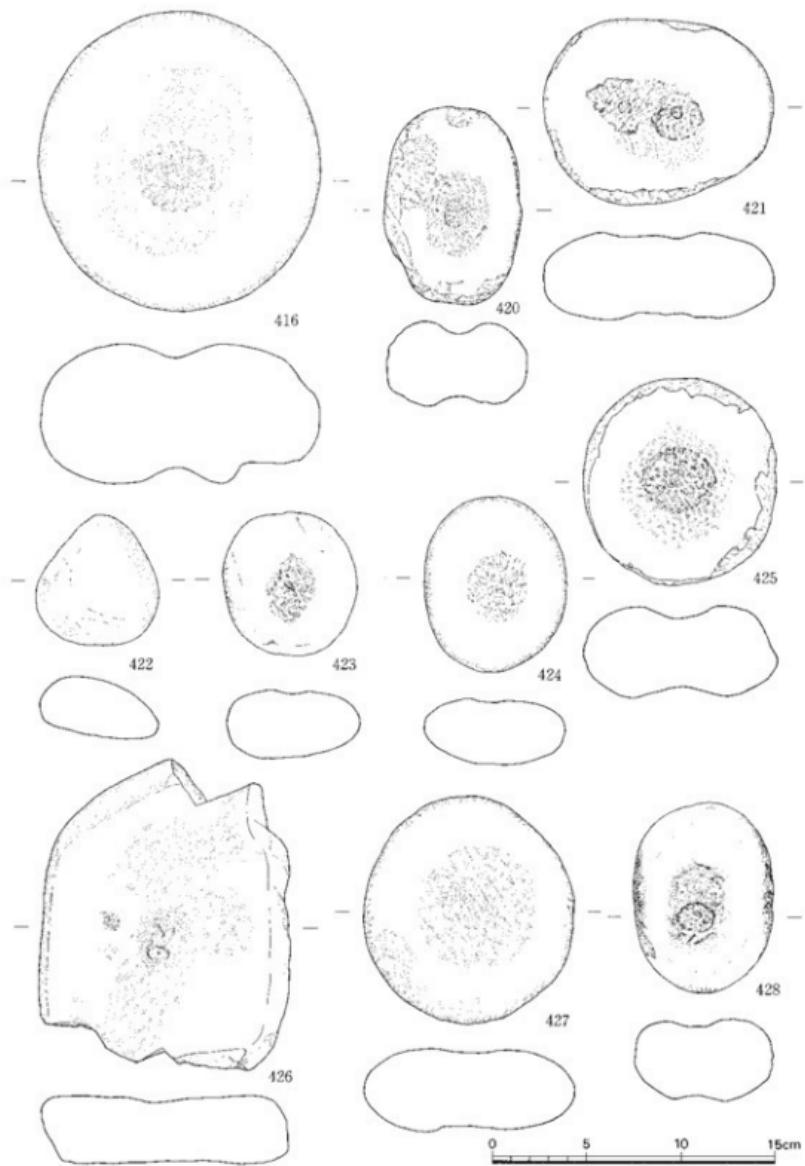


Fig. 64 遺物実測図21(石製品)

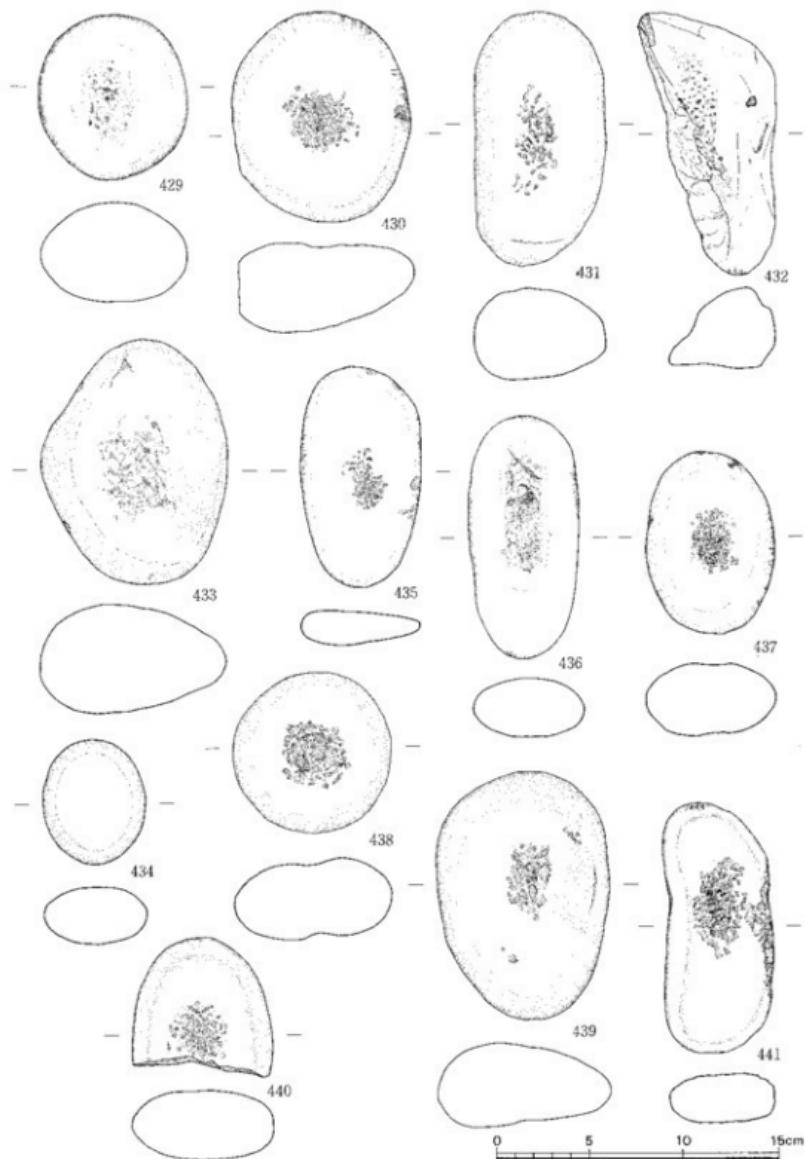


Fig. 65 遺物実測図22(石製品)

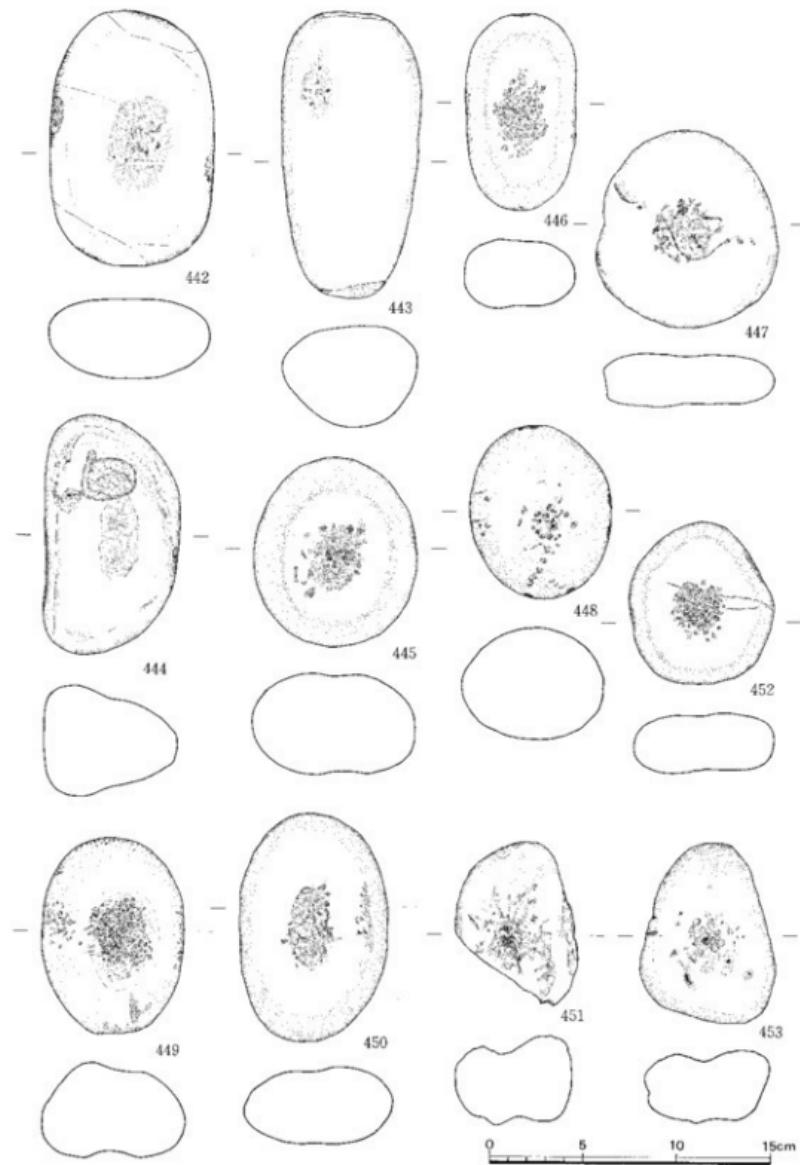


Fig. 66 遺物実測図23(石製品)

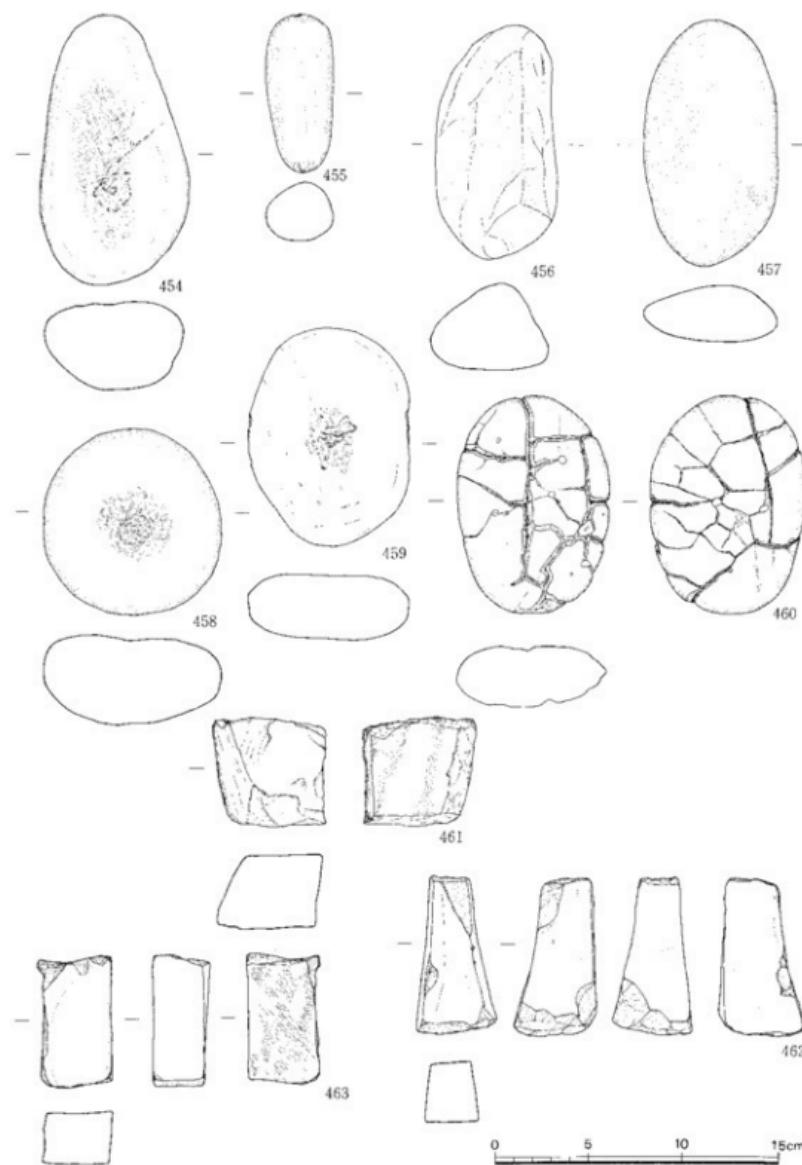


Fig. 67 遺物実測図24(石製品)

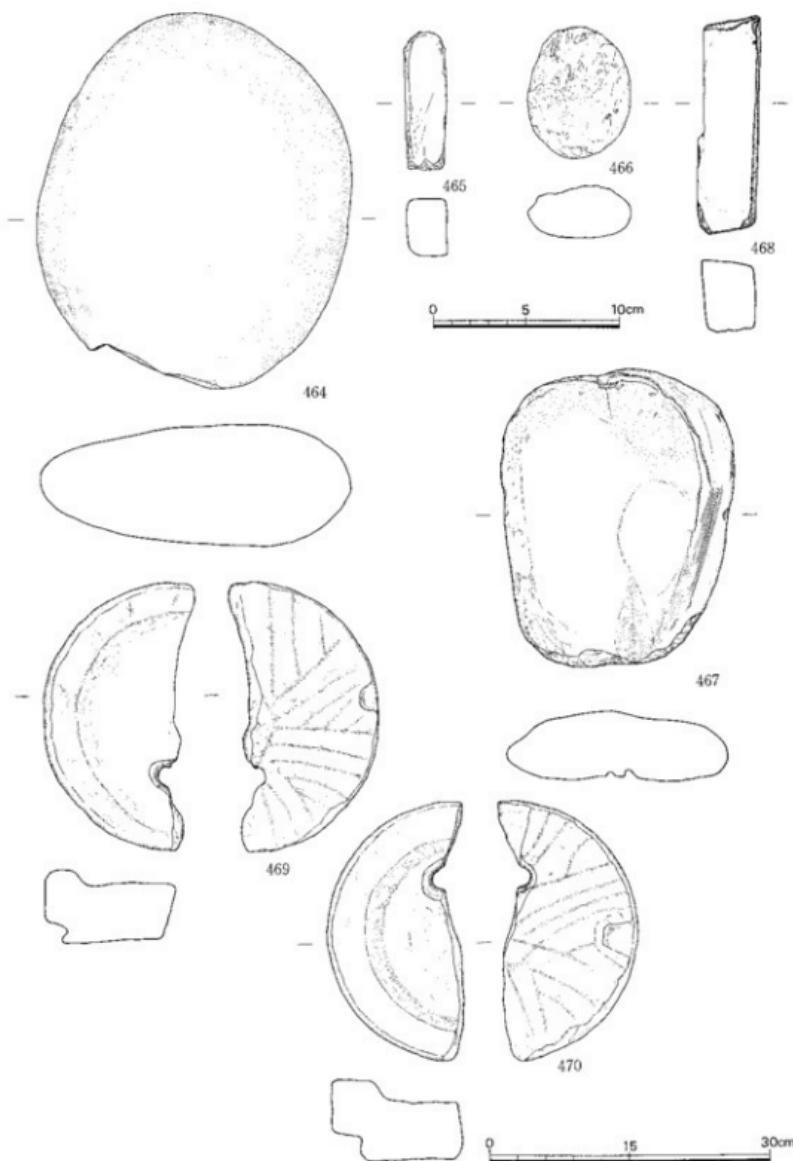


Fig. 68 遺物実測図25(石製品)

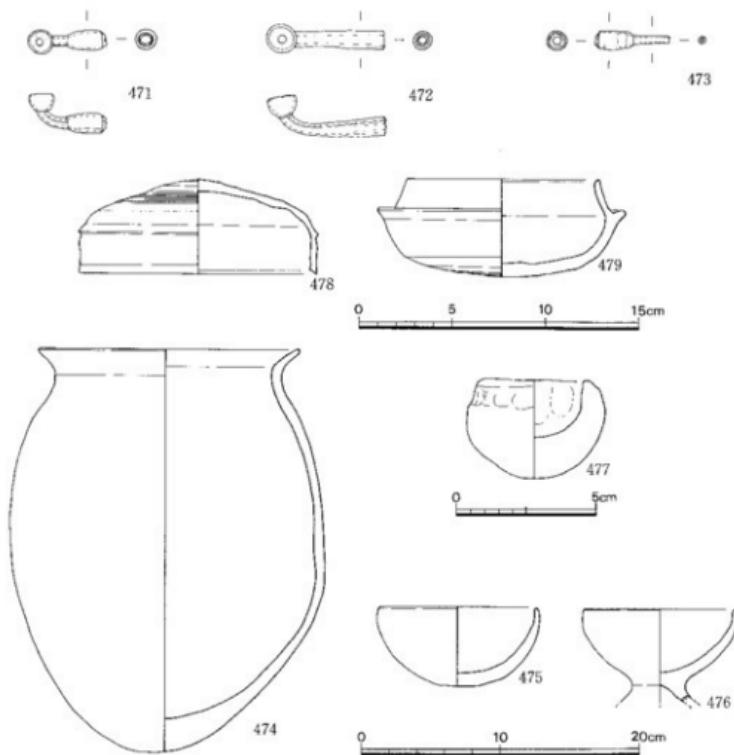


Fig. 69 遺物実測図26(金属製品、付属取締遺物)

Report of Archaeological Excavation of Ōkata Town, Volume I

HAYASAKI SITE

Report of Excavation Prior to
Remodeling of Ōyu-Ōkata Prefectural Highway,
Kōchi Prefecture, Japan

1991

Ōkata Town Board of Education

English Summary

This report summarizes the achievements of excavations of the Hayasaki site located on a sandy plain in the Iri no region around the center of Ōkata Town, south-western part of Kōchi Prefecture, Shikoku Island of Japan. Surface scatter of numerous artifacts ranging from the protohistoric Yayoi Period (ca. 3rd C. B.C. to A.D. 3rd C.) to historic Muromachi Period (1338-1573) has indicated the presence of a large complex site here. Particularly noteworthy is the surface discovery of artifacts related to the Kofun Period (ca. A.D. 4th to 6th C.) rituals, and it has been assumed that the Hayasaki site represents a ceremonial and ritual center like the Kotsuka site and the Gudōnakayama site cluster in Nakamura City, also Kōchi Prefecture. For these reasons, we conducted excavations from 1 August to 17 October, 1989 and from 25 June to 8 September, 1990, prior to the remodeling of the Ōyu-Ōkata Prefectural Highway. The excavated areas extend for 1,527.5 sq.m. The excavations yielded eight semisubterranean houses, one timber structure, 108 pits, 34 ditches, 397 possible postholes, and 13 unidentified features. The dates of these features fall between the final Yayoi (A.D. 3rd C.) and the modern period, which is divided into the following four major phases:

Phase I (third and fourth centuries, final Yayoi to early Kofun Periods)

The earliest settlement at the Hayasaki site is dated to this phase, but the settlement declined in the fourth century. Archaeologists observe the similar rise and fall of final Yayoi/early Kofun settlements in other areas of the southern Shikoku Island, which indicates economic and social changes in the third and fourth centuries. Such changes may have been brought by the arrival of the new Kofun Culture from the west-central Japan (Yamato region; present Nara prefecture).

Phase II (early half of the sixth century; Late Kofun Period)

A settlement was formed again. The Hayasaki site reached the peak of occupation during the phase II. The settlement expanded to 200m in east-west and 250m in the north-south. The second Hayasaki settlement is distinguished from the phase I settlement in that the government-controlled ritual activities probably took place at the Hayasaki settlement. This is supported by the discovery of similar ritual artifacts such as mirror-shaped clay disks and features at the Kotsuka site in the neighbouring Nakamura City dating to the same time. The second Hayasaki settlement declines in

the middle sixth century, and afterwards no major settlements are formed here.

Phase III (Ninth and tenth centuries; early Heian Period)

Although it is historically known that the central government in Kyoto founded a *gō* [village; an administrative unit of land, lowest level of administrative hierarchy] in the present Ōkata Town, no features or artifacts indicating the existence of this *gō* are discovered at the Hayasaki site. The discovery of a few archaeological remains of this phase suggests that the site probably occupied a periphery of a settlement, if any.

Phase IV (eighteenth and nineteenth centuries; late Edo Period)

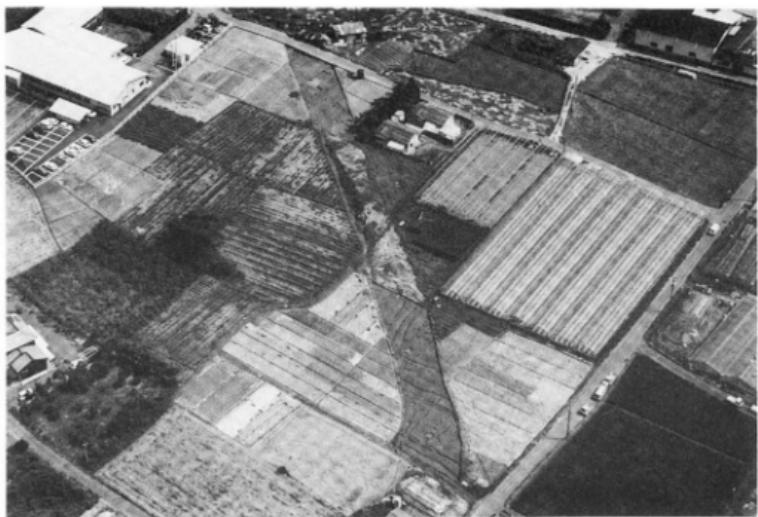
A small village was formed at Hayasaki.

In conclusion, this site is significant in future research into history of the southern Shikoku Island owing to the discovery of protohistoric settlement as well as numerous ritual artifacts.

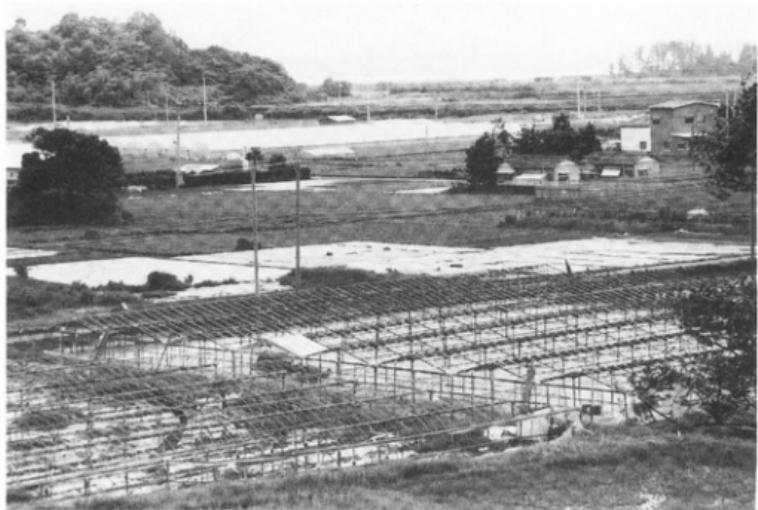
Further Readings

- Aikens, C. M. and Higuchi T.
 1982 *Prehistory of Japan*. Academic Press, New York.
- Pearson, R. J., G. L. Barnes and K. L. Hutterer, Editors
 1986 *Windows on the Japanese Past; Studies in Archaeology and Prehistory*. Center for Japanese Studies, the University of Michigan, Ann Arbor.
- Tsuboi K., Editor
 1987 *Recent Archaeological Discoveries in Japan*. UNESCO, Paris and Centre for East Asian Culture Studies, Tokyo.

図 版



調査区全景(西上空より)

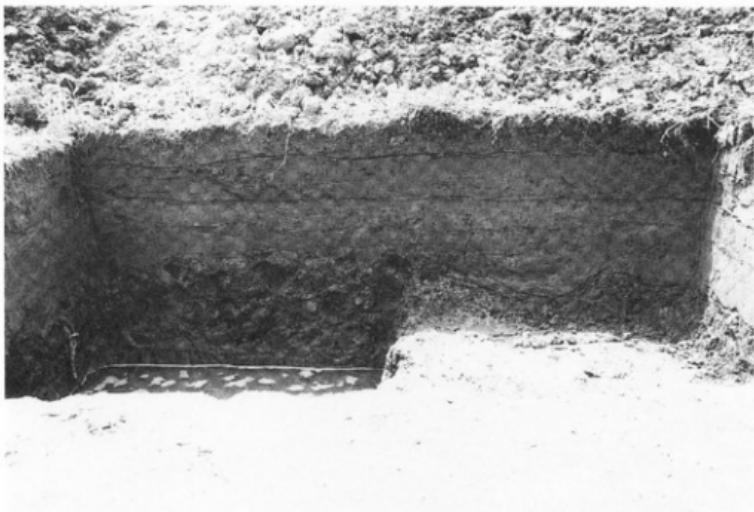


調査前全景(西より)

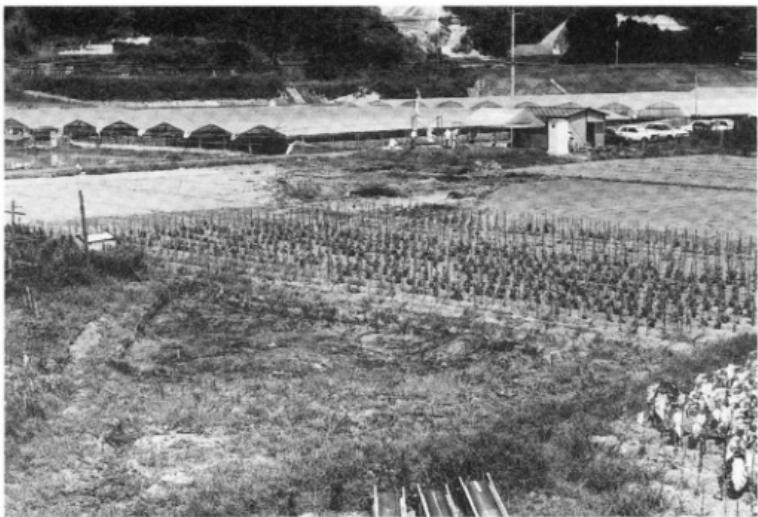
PL. 2



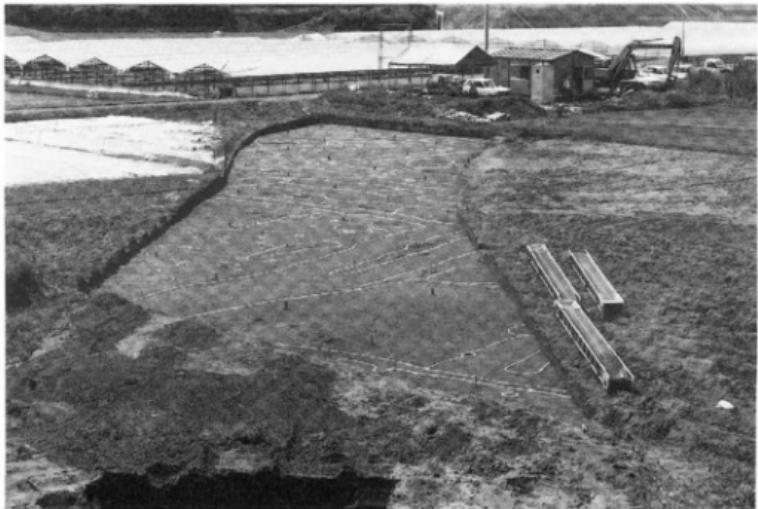
A区 試掘トレンチ(南より)



A区 TRA-1 セクション(北より)



B区 調査前全景(東より)



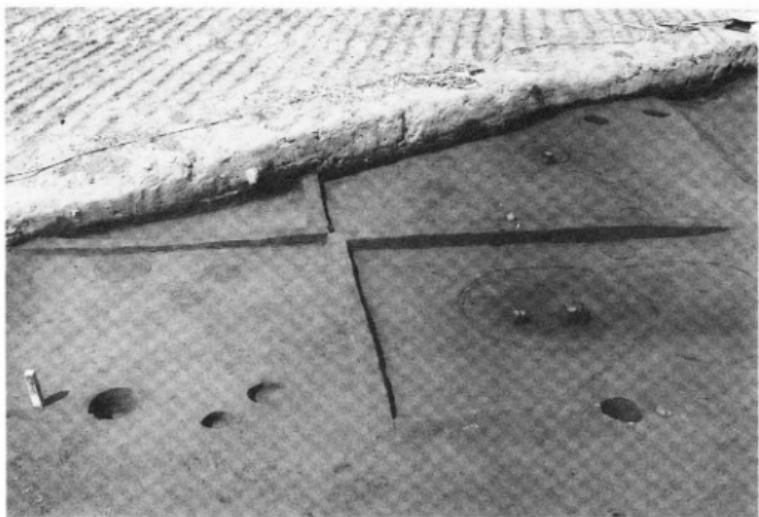
B区 造構検出状態(東より)



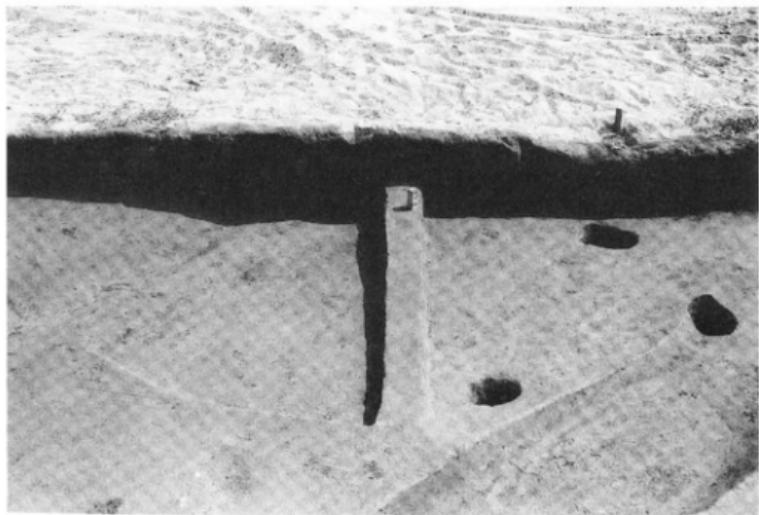
B区 造構完掘状態(東より)



B区 造構完掘状態(西より)

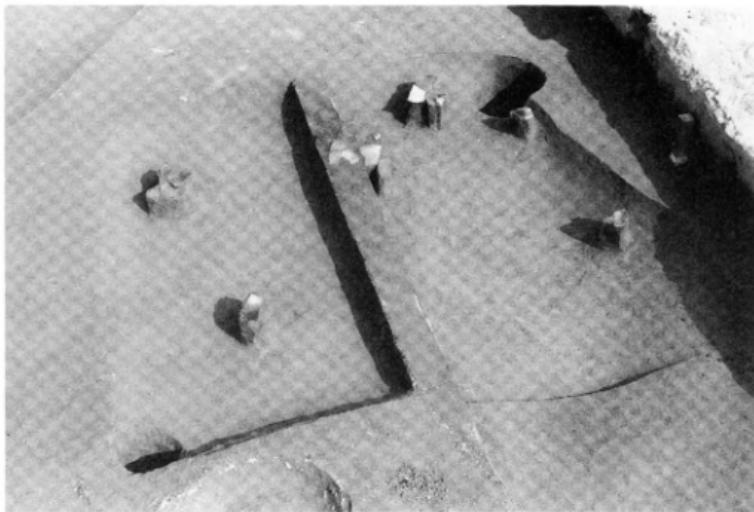


ST - 1 床面遺構検出状態(東より)

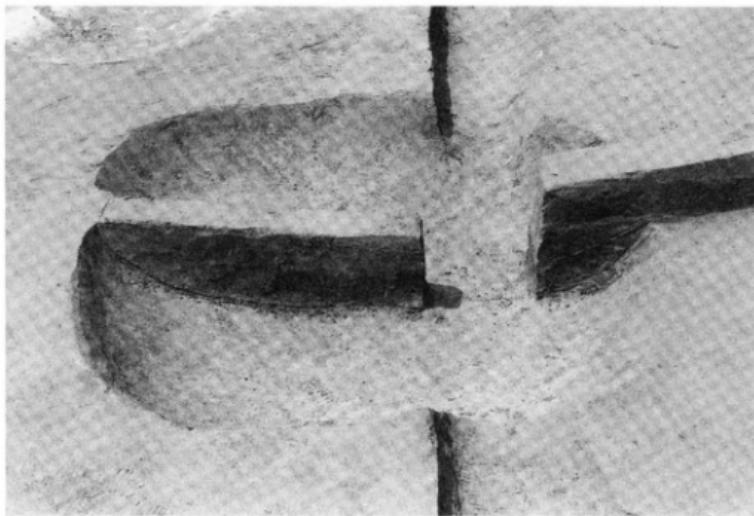


ST - 2 (西より)

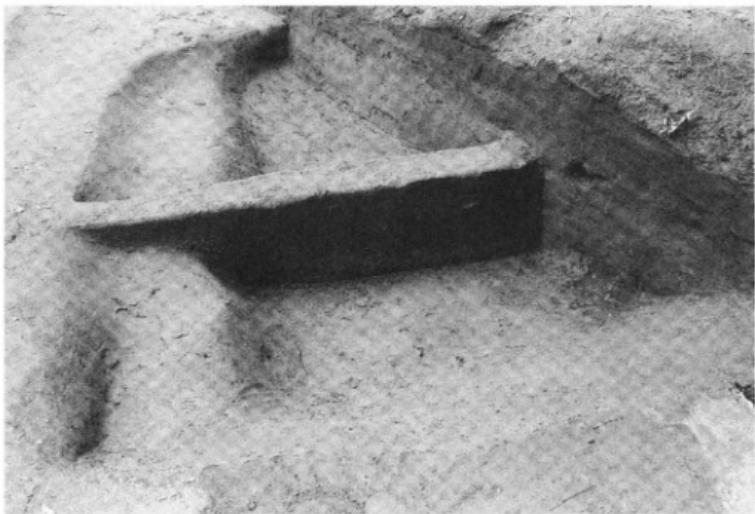
PL. 6



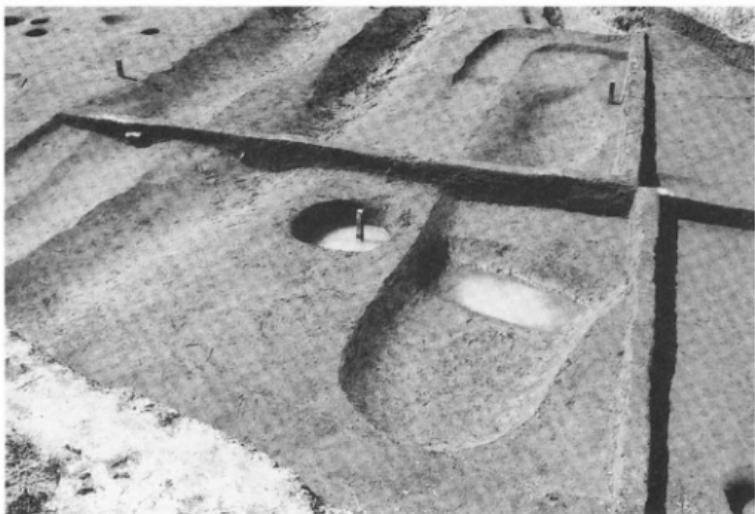
SK - 5 遺物出土状態(西より)



SK - 11, SD - 7 (南より)



SK - 22 セクション(東より)

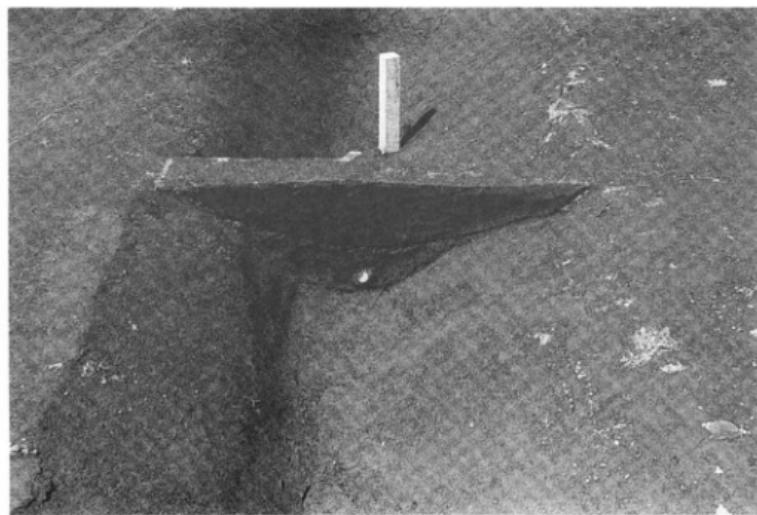


SK - 23・24, SX - 3 (東より)

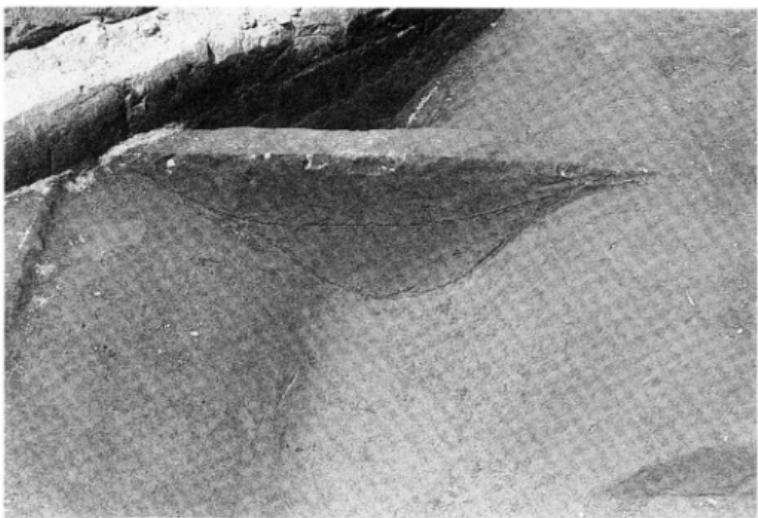
PL. 8



SD - 8 (東より)



SD - 9 セクション(東より)



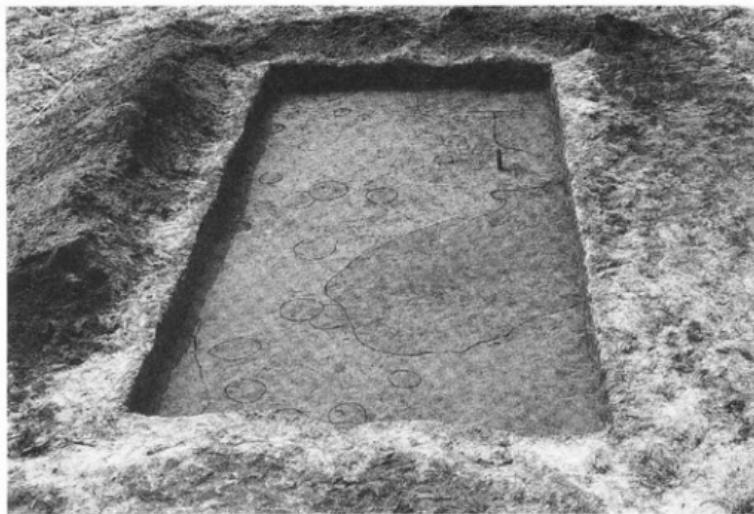
SD-11 セクション(東より)



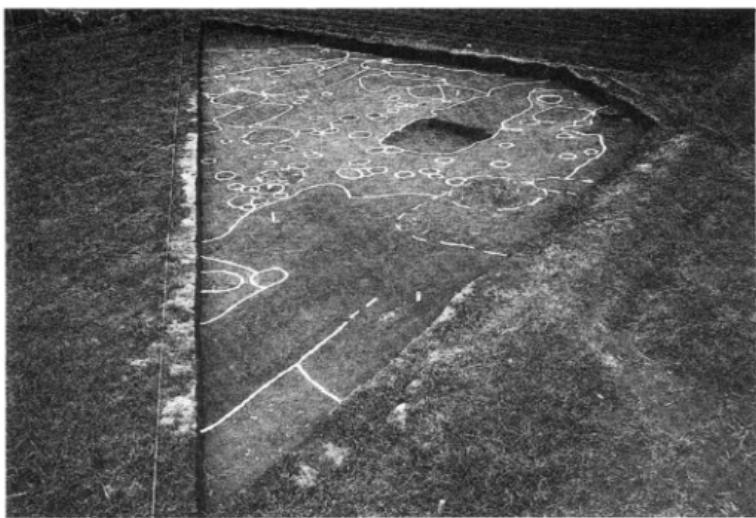
SD-12・13(北より)



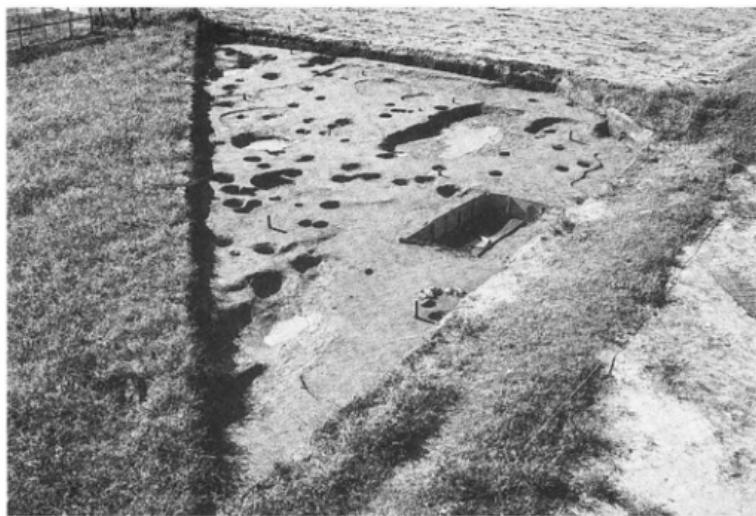
C区 調査前全景(東より)



C区 TRC-1 造構検出状態(東より)

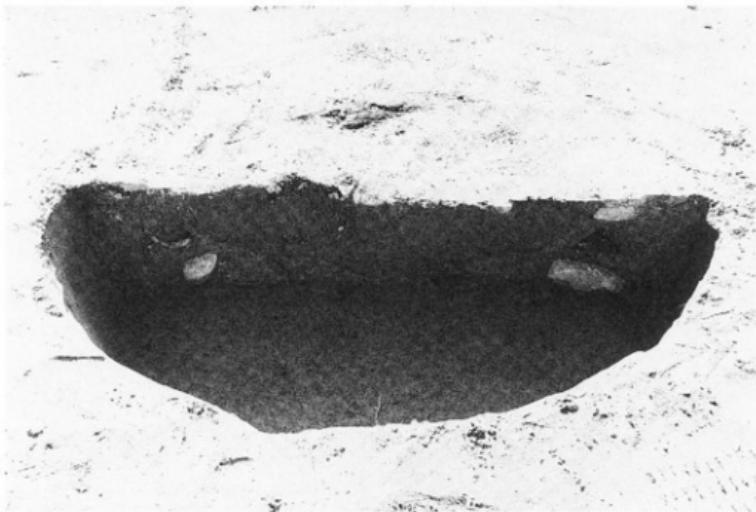


C区 遺構検出状態(東より)

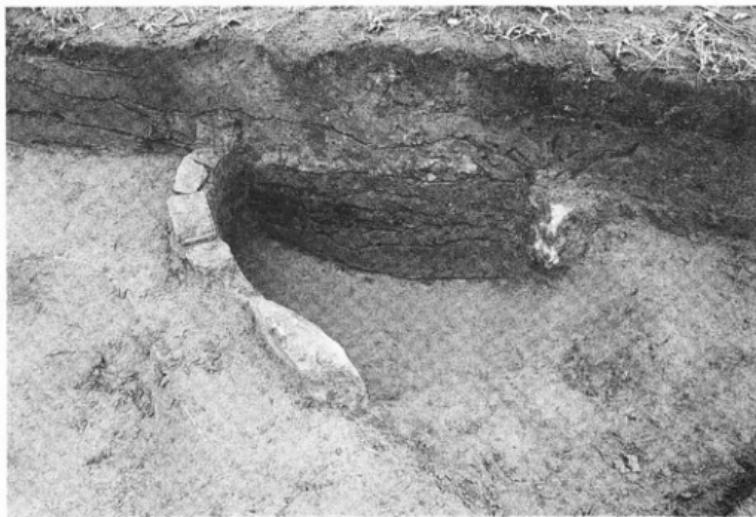


C区 遺構完掘状態(東より)

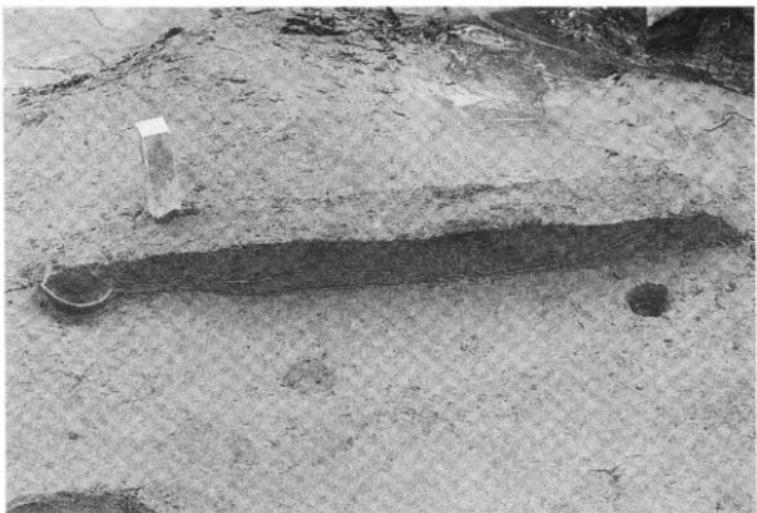
PL. 12



SK -34 セクション(東より)



SK -42(南より)

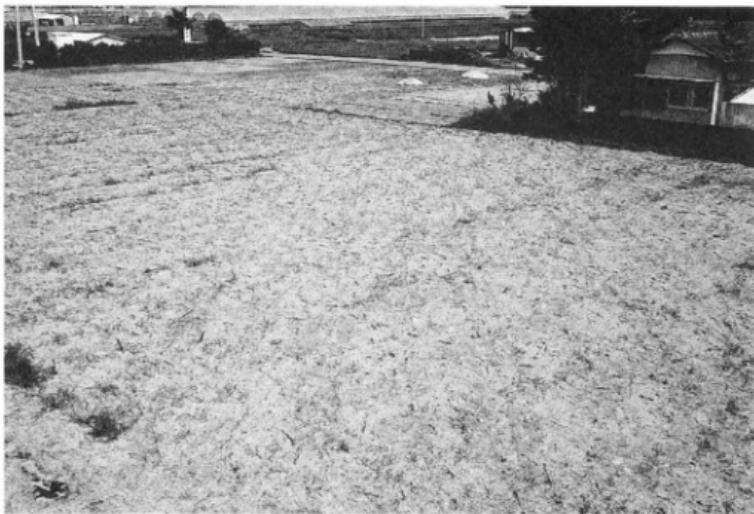


SK - 41 遺物出土状態(南より)

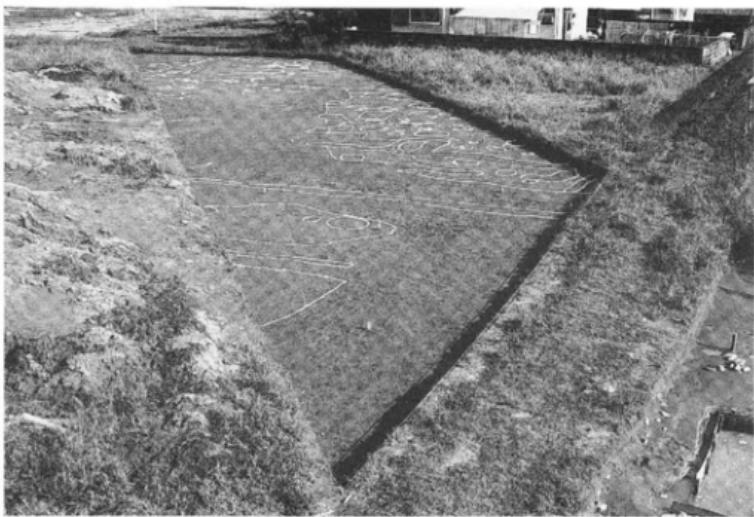


SD - 19, SX - 6 (北より)

PL. 14



D区 調査前全景(西より)



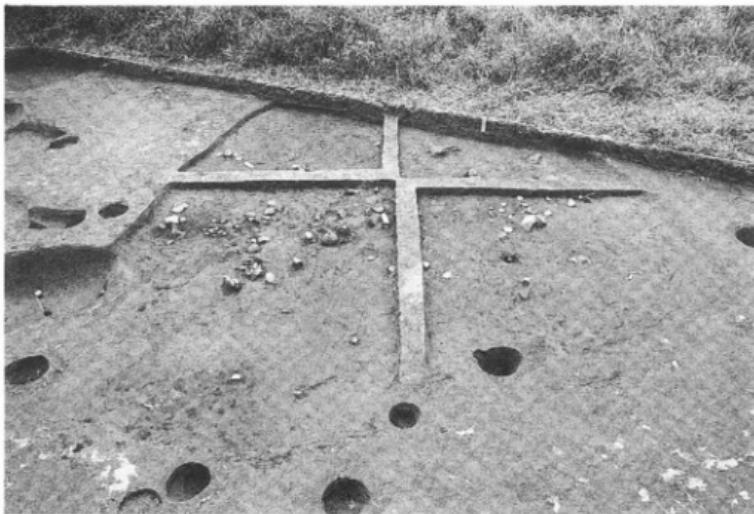
D区 遺構検出状態(西より)



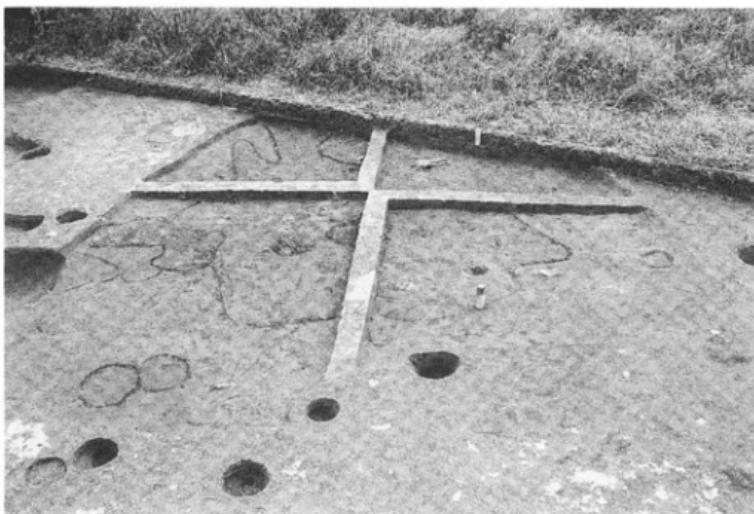
D区 遺構完掘状態(西より)



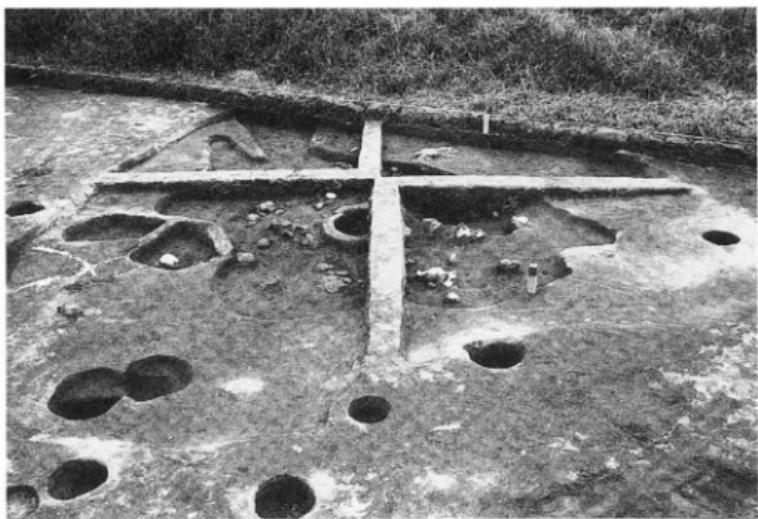
D区 遺構完掘状態(東より)



ST - 4 遺物出土状態(北より)



ST - 4 床面遺構検出状態(北より)

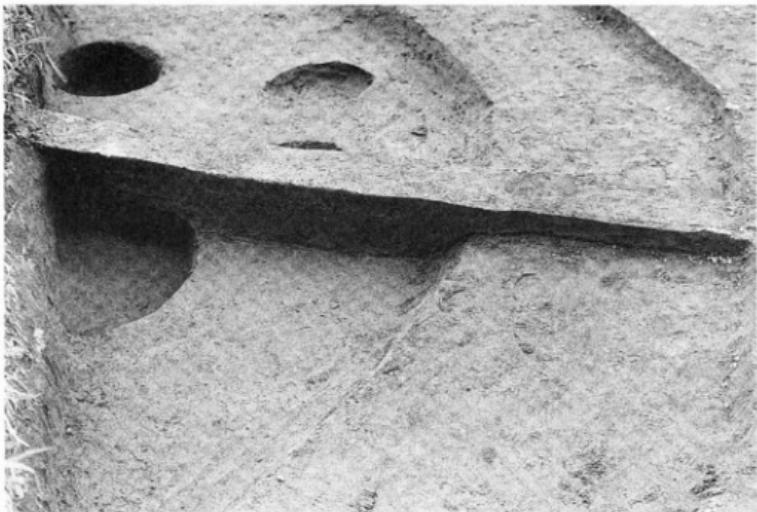


ST - 4, SX - 8 遺物出土状態(北より)

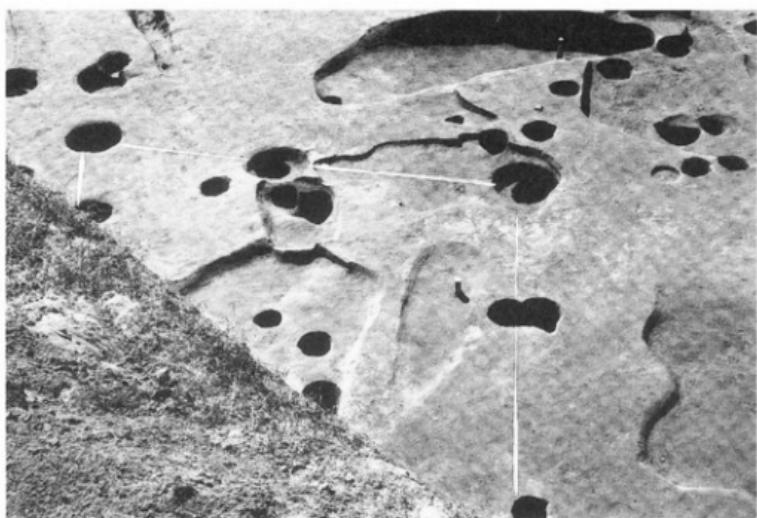


ST - 4, SX - 8 (北より)

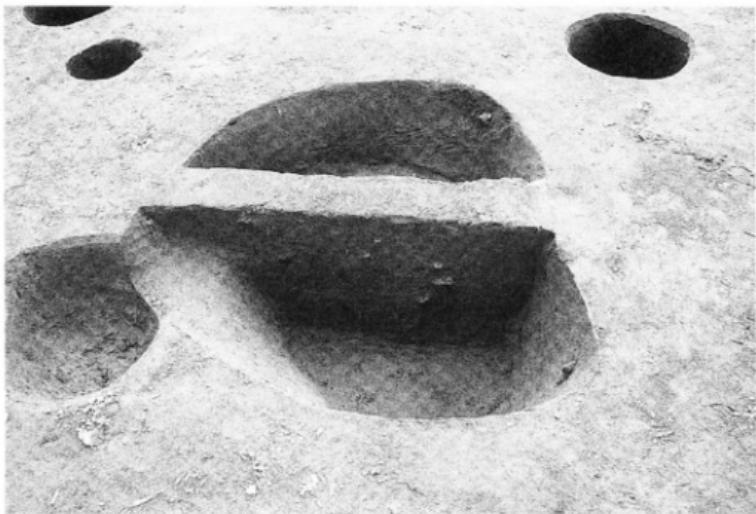
PL. 18



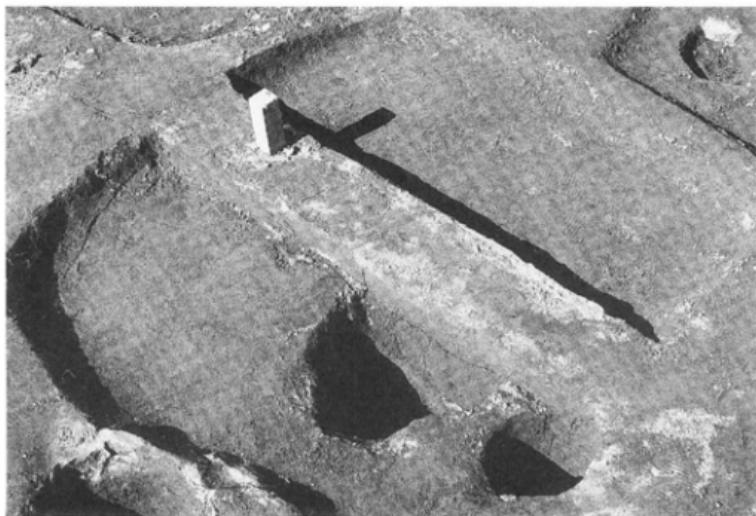
ST - 5 (西より)



SB - 1 (北より)

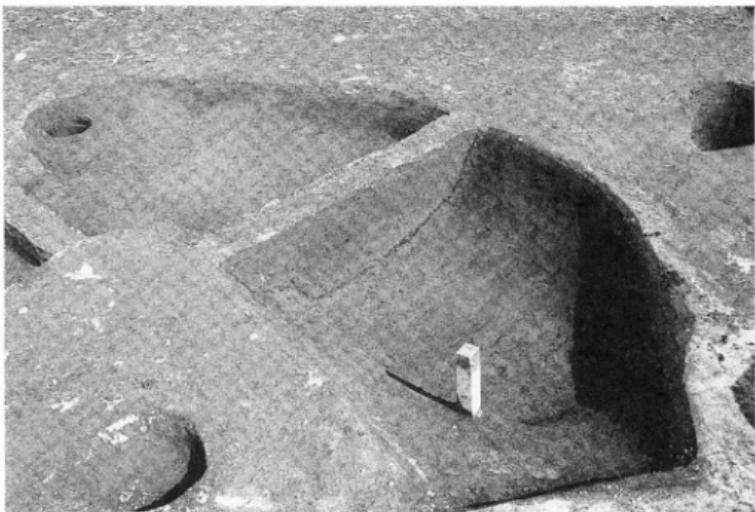


SK - 50(東より)



SK - 52(西より)

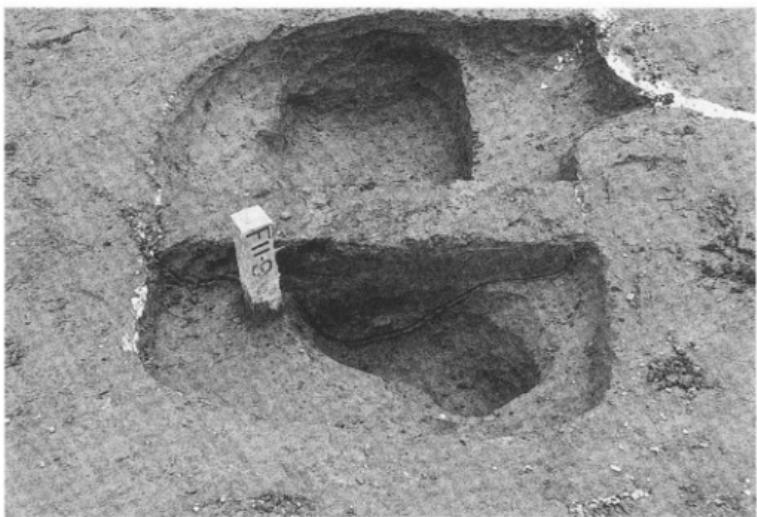
PL. 20



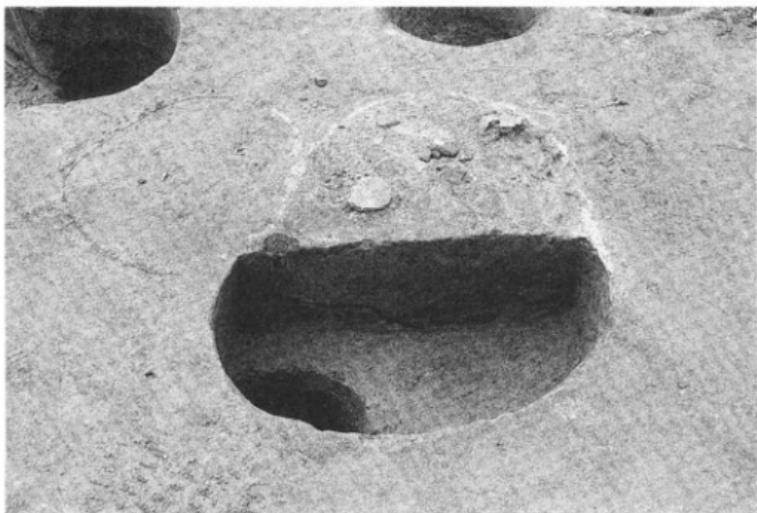
SK - 65(西より)



SK - 70(東より)

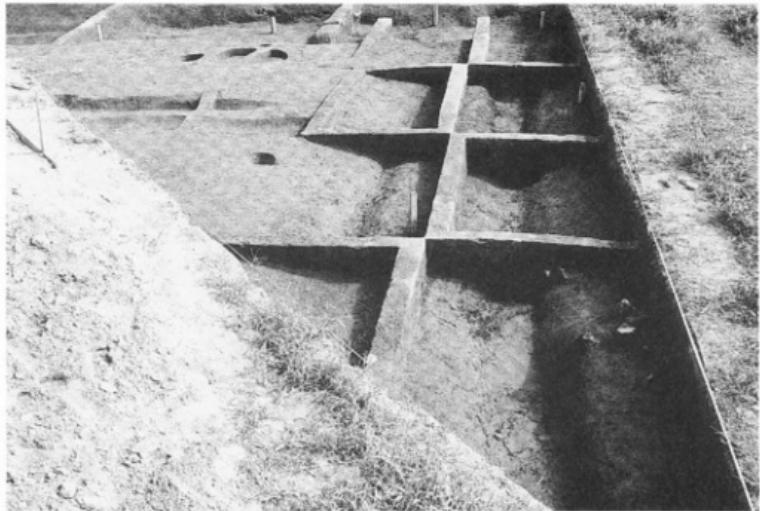


SK - 72(東より)



P - 11(東より)

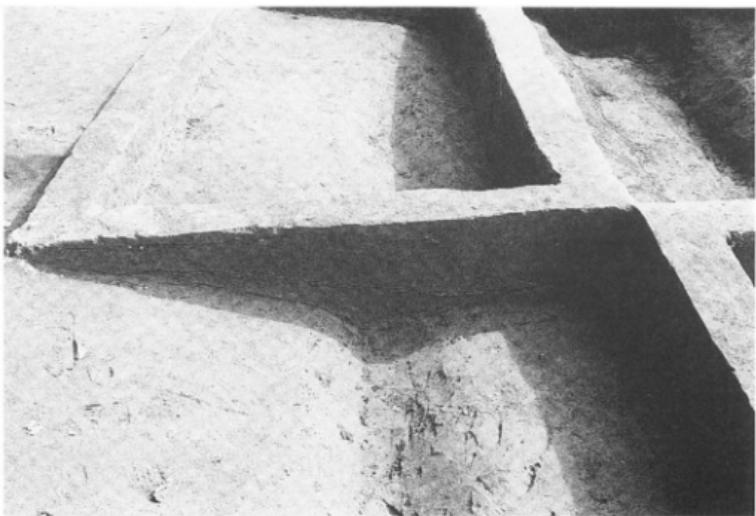
PL. 22



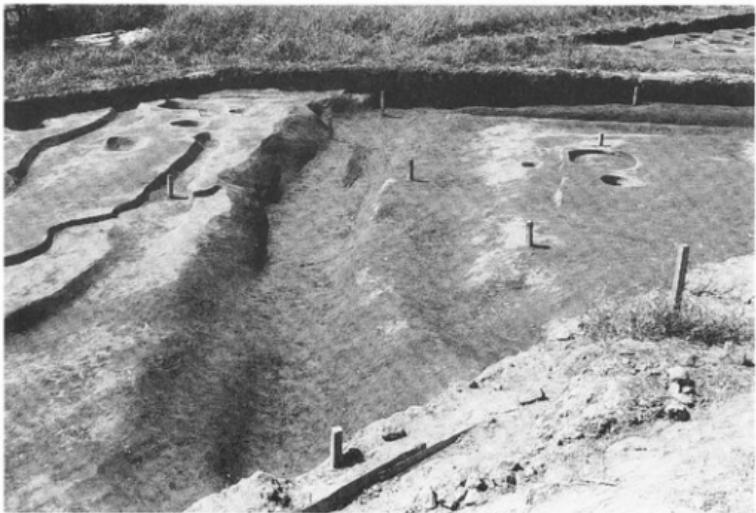
SD -20(北より)



SD -20 セクション(北より)



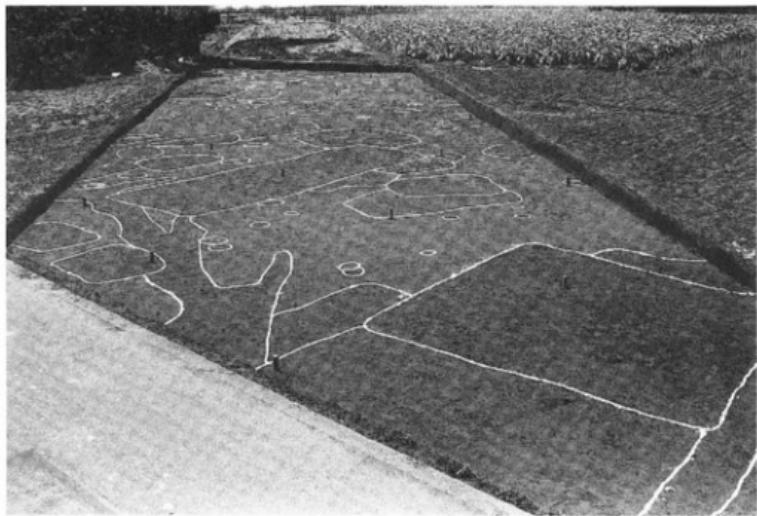
SD-20 セクション(北より)



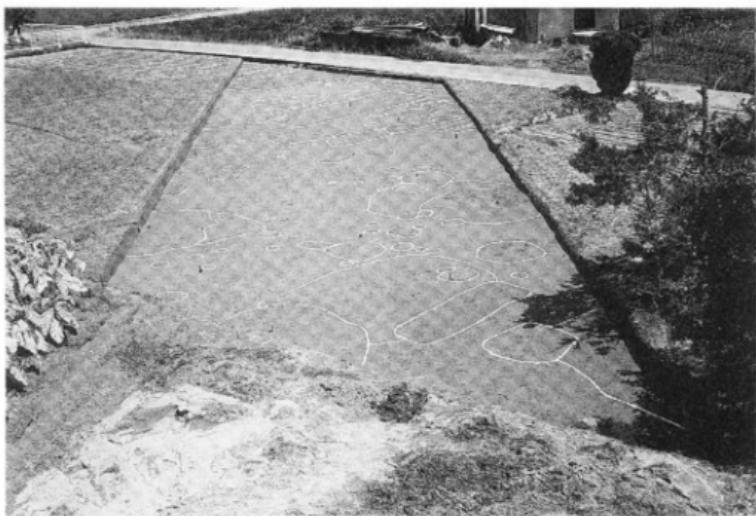
SD-20(北より)



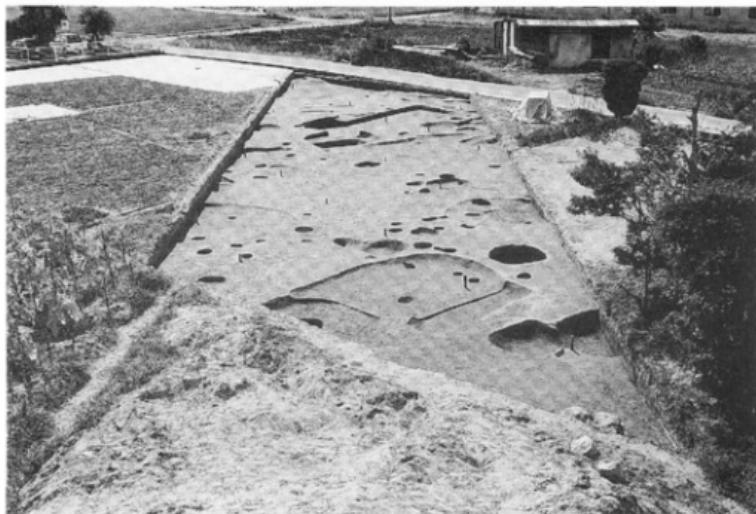
E区 調査前全景(東より)



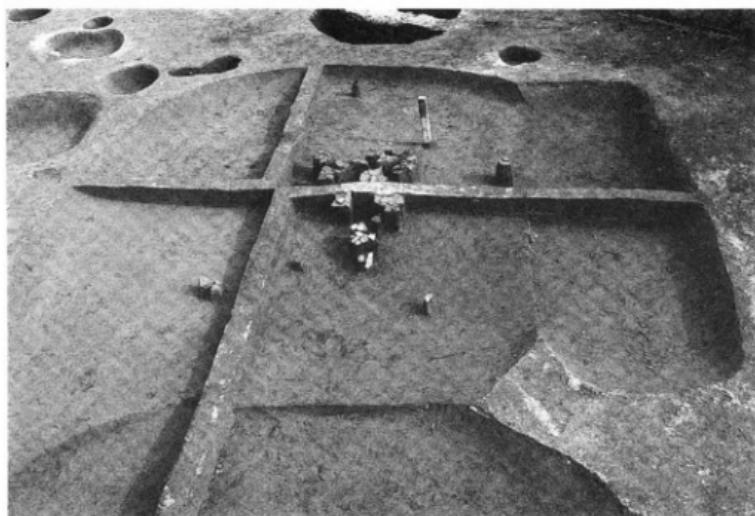
E区 遺構検出状態(東より)



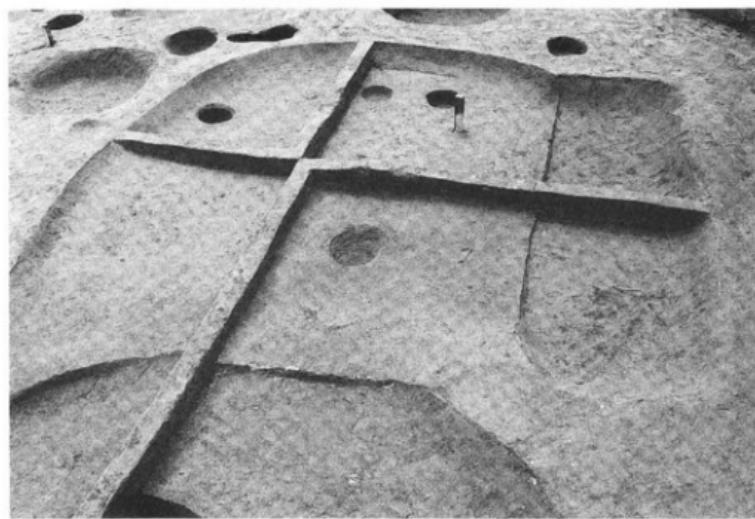
E区 造構検出状態(西より)



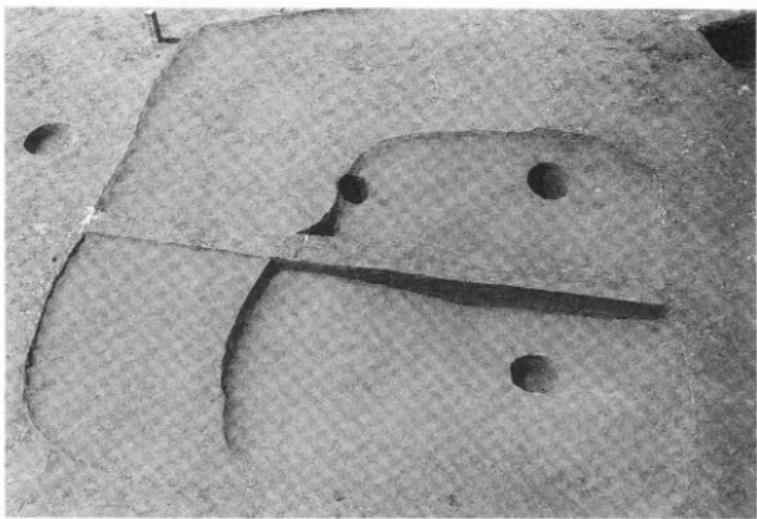
E区 造構完掘状態(西より)



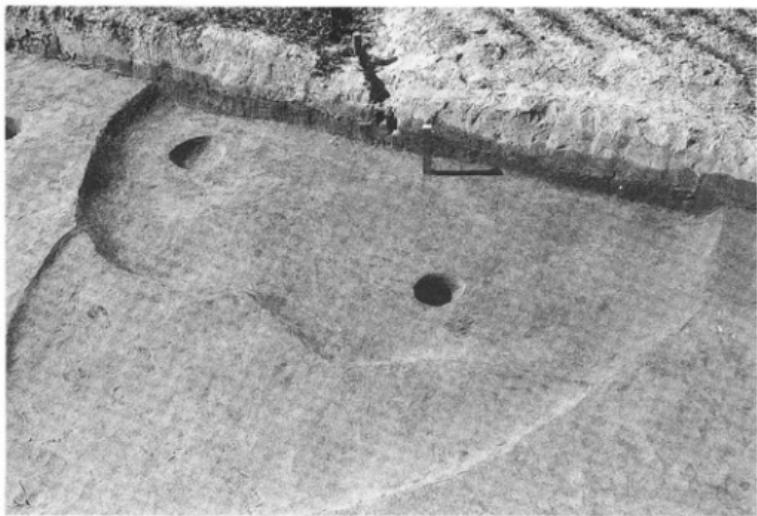
ST - 6 遺物出土状態(西より)



ST - 6 (西より)



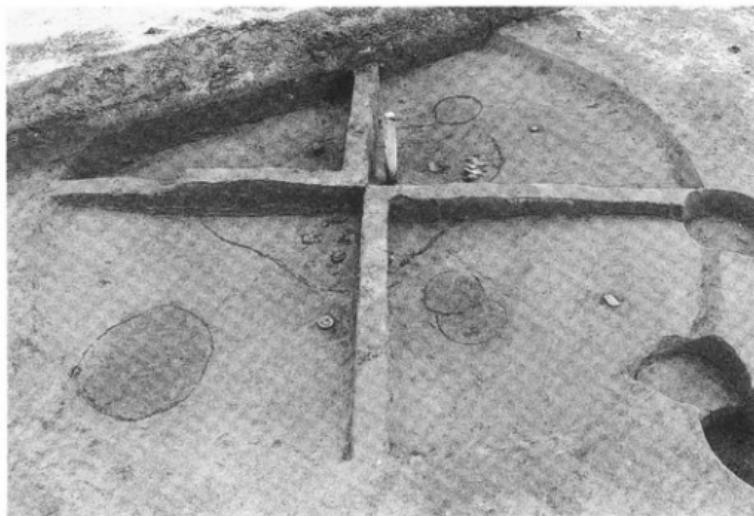
ST - 7, SX - 10(東より)



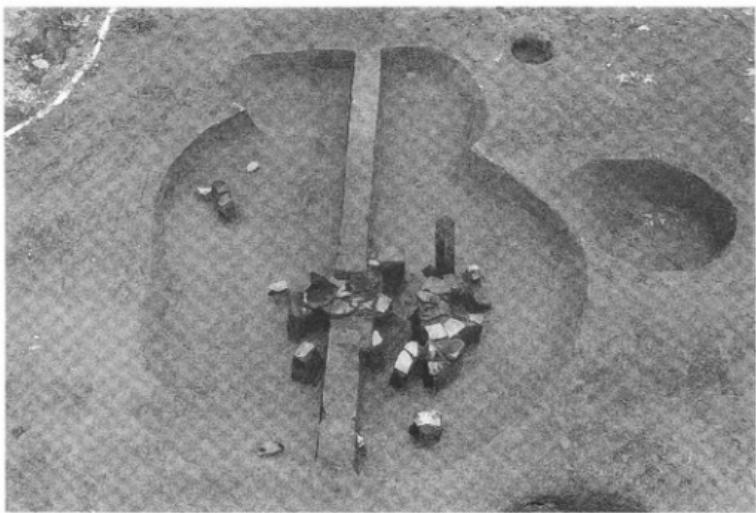
ST - 7, SX - 10(南より)



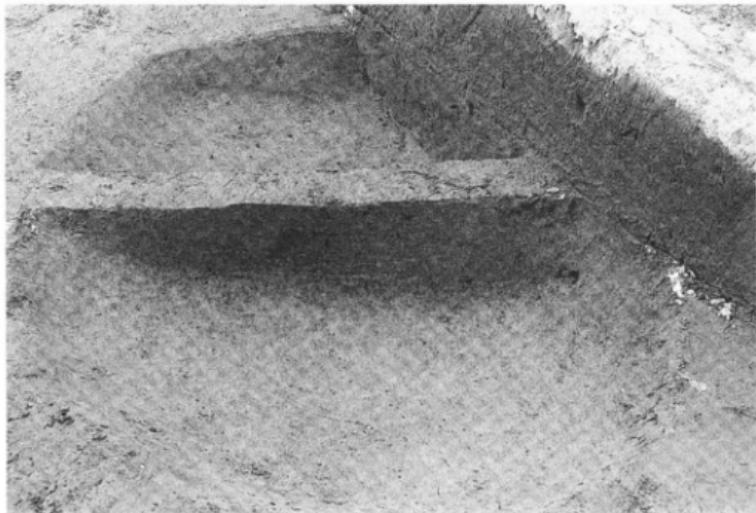
ST - 8 遺物出土状態(北より)



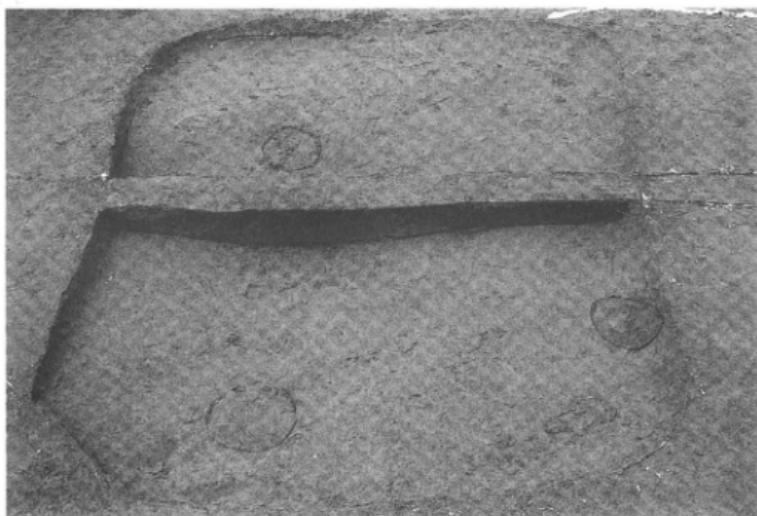
ST - 8 付属遺構検出状態(北より)



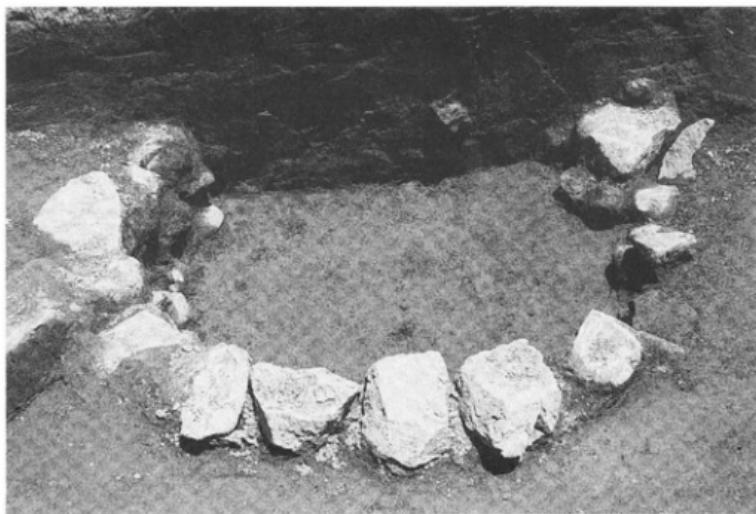
SK-87 遺物出土状態(東より)



SK-99(東より)



SK - 104(南より)



SK - 108(南より)



F区 調査区全景(西より)



調査区全景(北上空より)



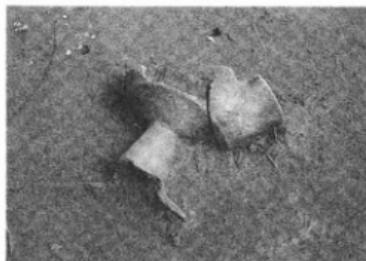
B区 第II層 遺物出土状態



B区 第II層 遺物出土状態



B区 第II層 遺物出土状態(11)



B区 第II層 遺物出土状態(27)



ST - I 遺物出土状態(399)



ST - I 遺物出土状態(308)



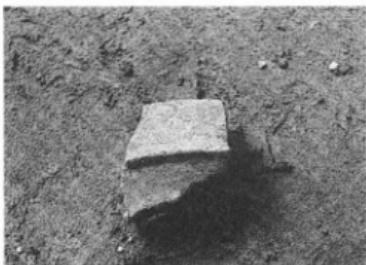
SK - 22 遺物出土状態(309)



SK - 24 遺物出土状態



SX - 1 遺物出土状態(317)



SX - 3 遺物出土状態(52)



SX - 3 遺物出土状態(54)



SD - 12 遺物出土状態(330)



SD - 8 遺物出土状態(266)



SD - 8 遺物出土状態(267)



SD - 8 遺物出土状態(428)



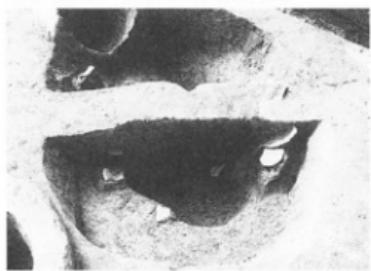
P - 1 遺物出土状態(59・427)



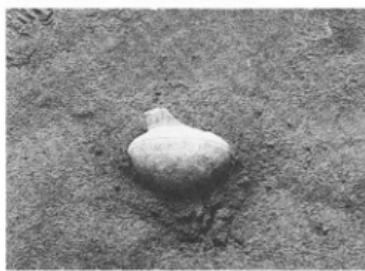
C区 第II層 遺物出土状態(68・69)



C区 第II層 遺物出土状態(78)



SK-30 遺物出土状態



SK-30 遺物出土状態(350)



SK-41 遺物出土状態(90)



ST-3 遺物出土状態(278)



ST-4 遺物出土状態



ST-4 遺物出土状態



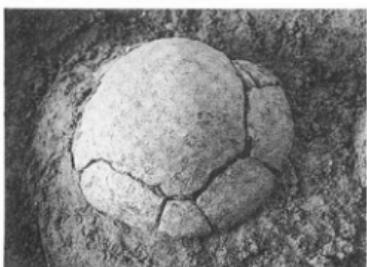
SB - 1 遺物出土状態(164)



SK - 53 遺物出土状態(445)



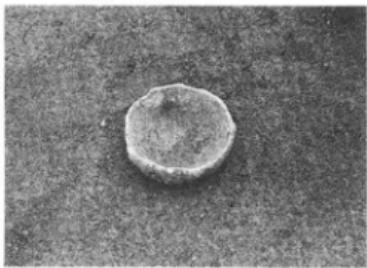
SK - 54 遺物出土状態(169)



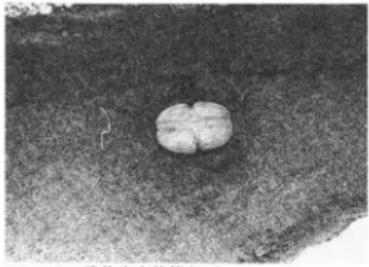
P - 15 遺物出土状態(232)



ST - 8 遺物出土状態(249)



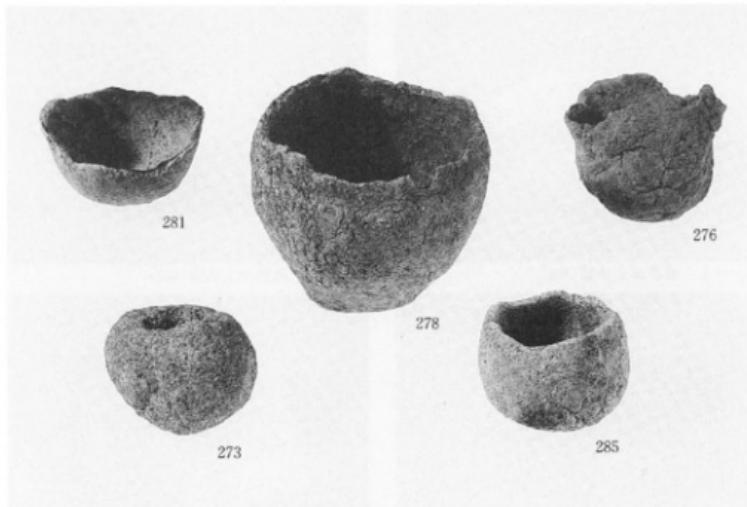
ST - 8 遺物出土状態(288)



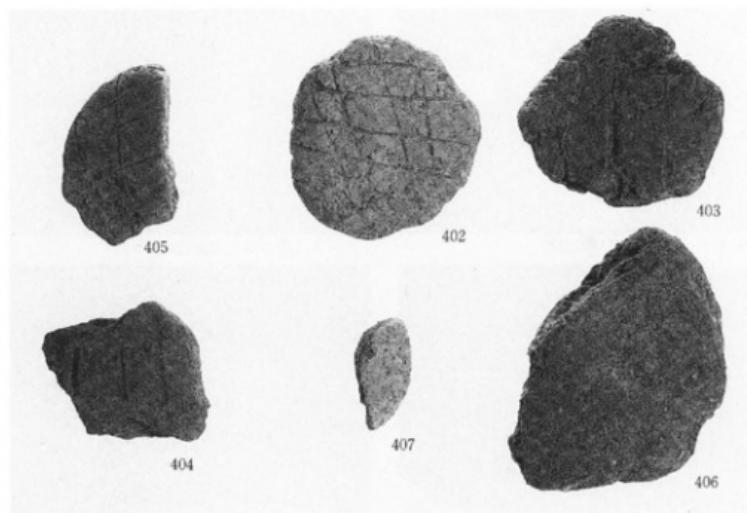
ST - 8 遺物出土状態(397)



ST - 8 遺物出土状態(460)



手捏土器



土製圓板





29



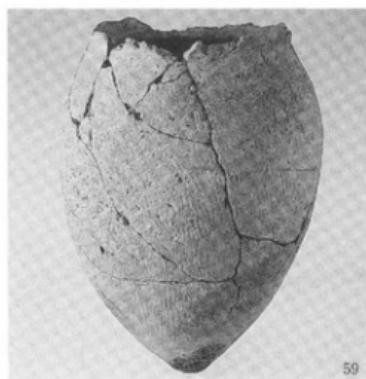
51



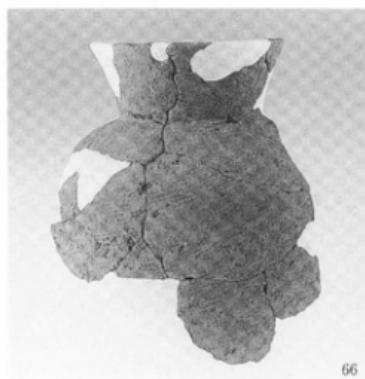
53



54



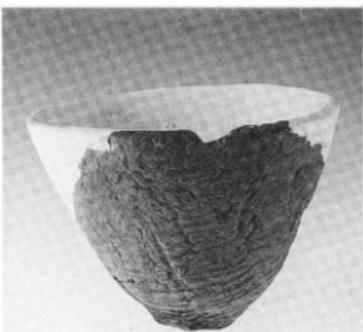
59



66



72



77



84



85



96



120



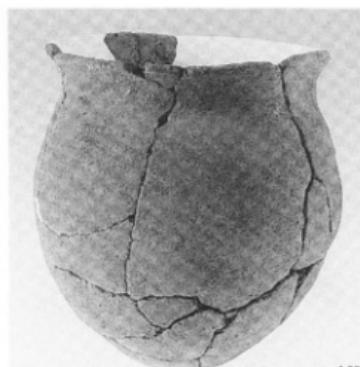
150



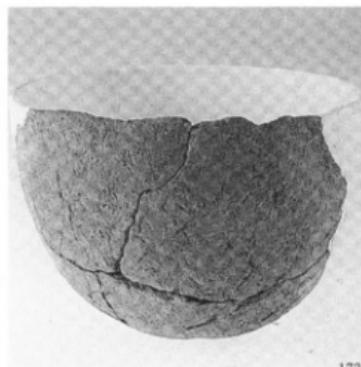
151



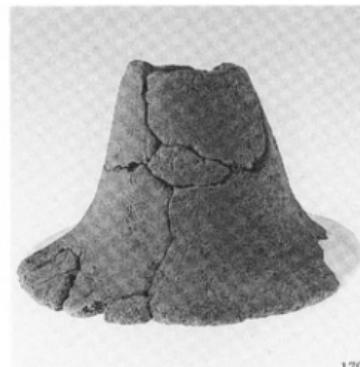
162



169



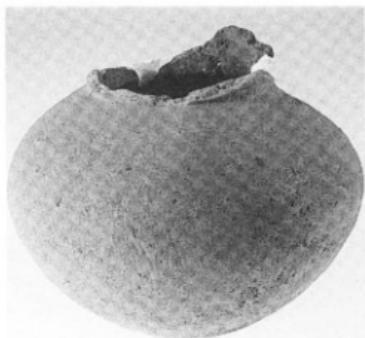
173



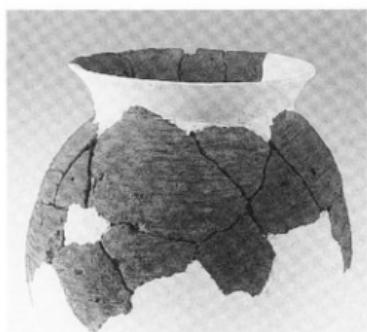
179



182



188



192



195



214



217



218



219



221



222



230



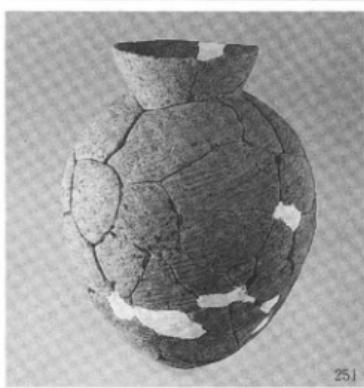
234



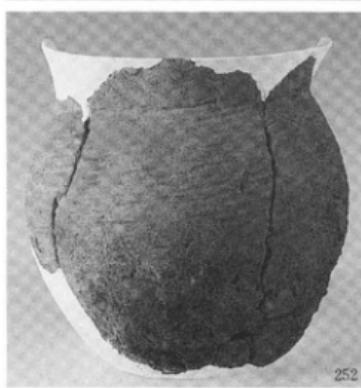
241



242



251



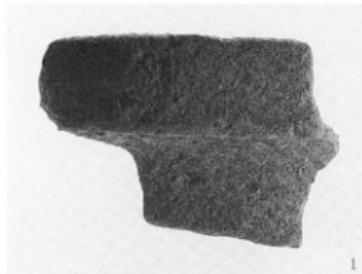
252



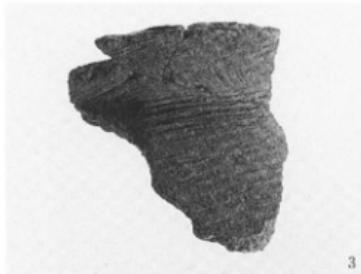
304



350



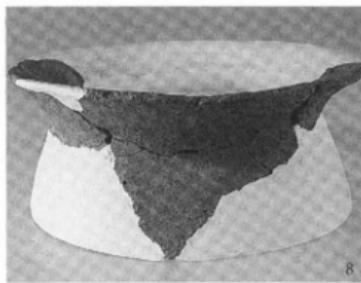
1



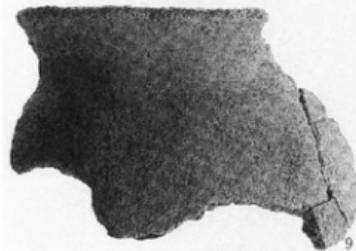
3



5



8



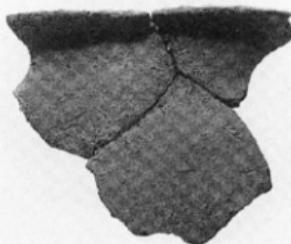
9



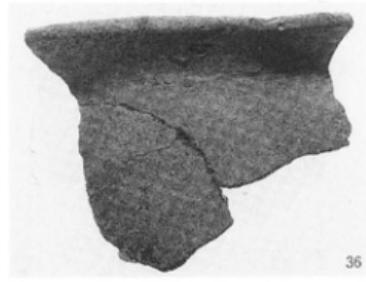
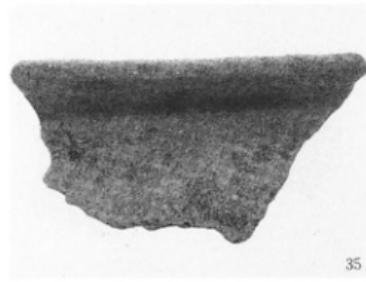
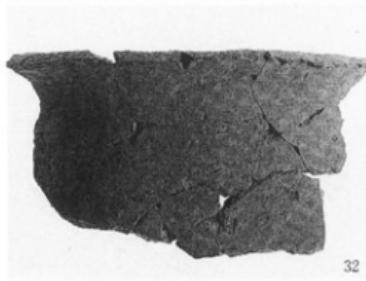
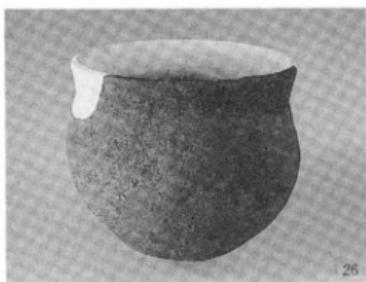
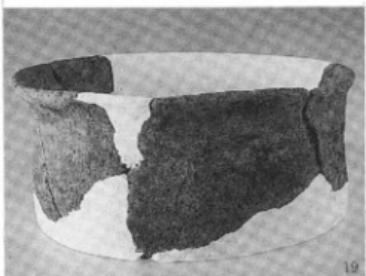
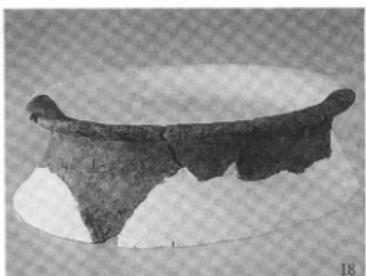
13

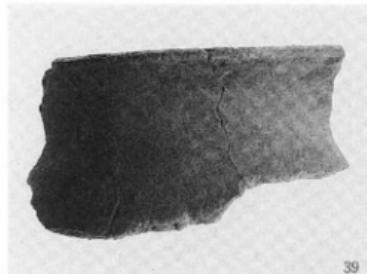


15



17





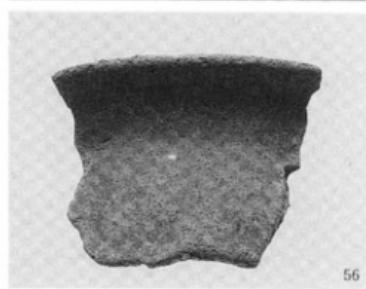
39



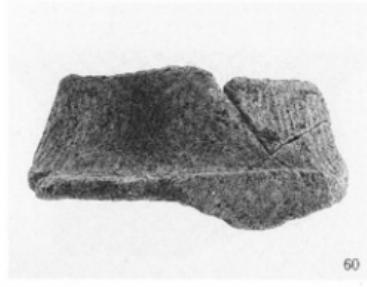
40



55



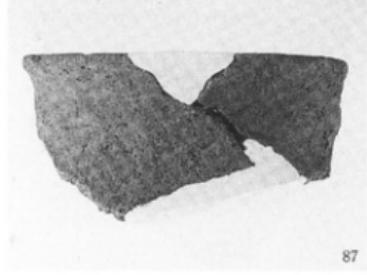
56



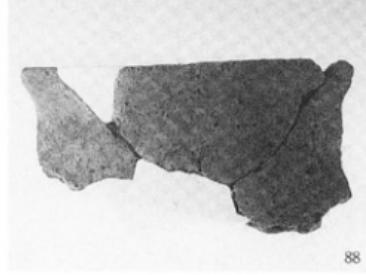
60



69



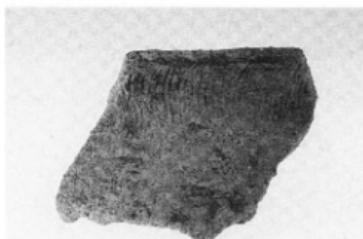
87



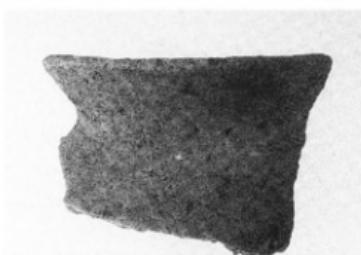
88



91



97



108



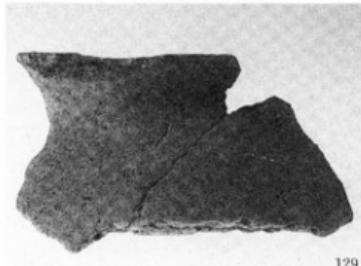
121



126



128

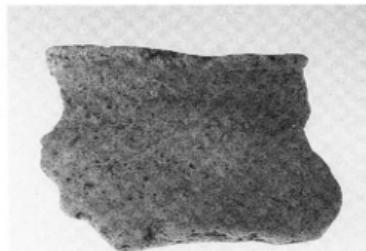


129



138

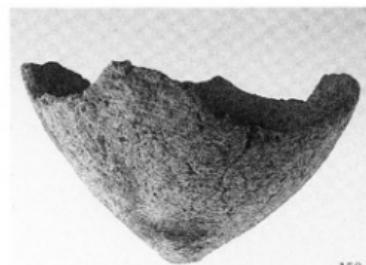
出土遺物11



141



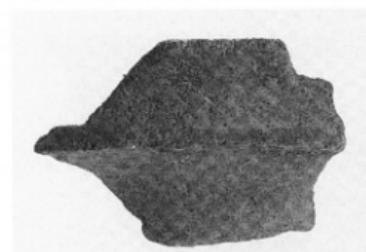
142



150



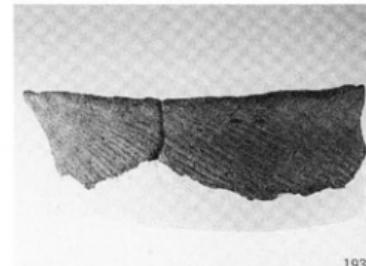
181



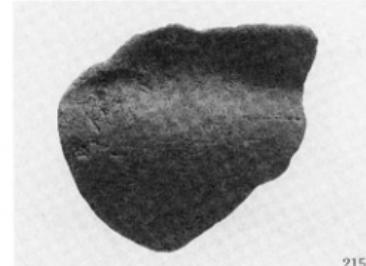
184



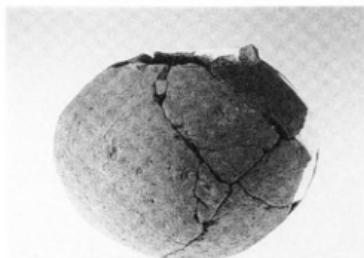
190



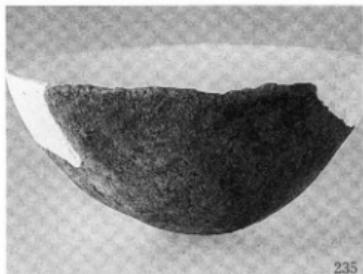
193



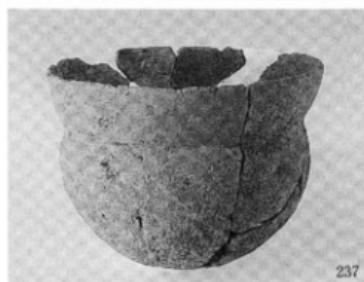
215



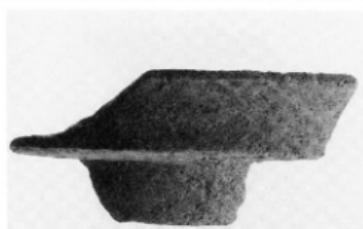
228



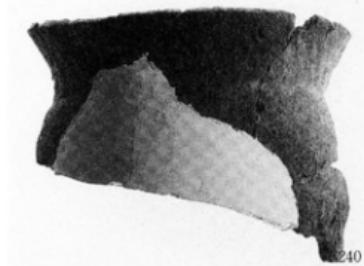
235



237



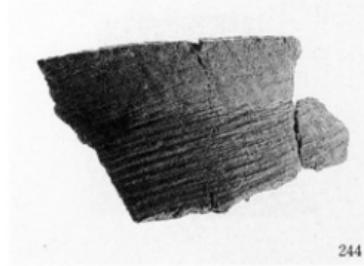
239



240



243



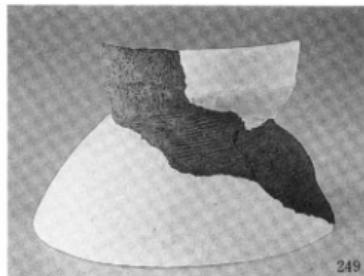
244



245



248



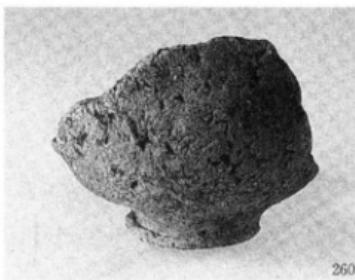
249



253



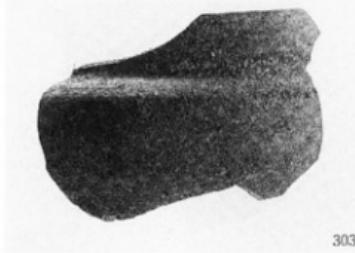
254



260



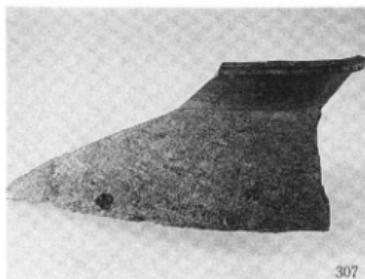
262



303



306



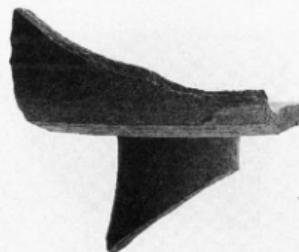
307



317



325



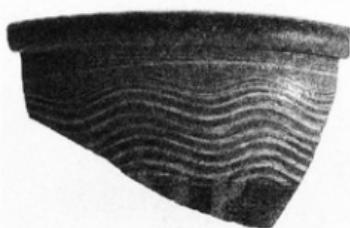
326



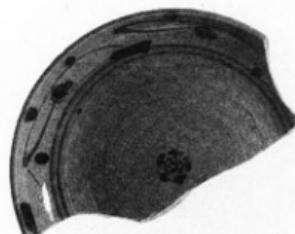
349



361

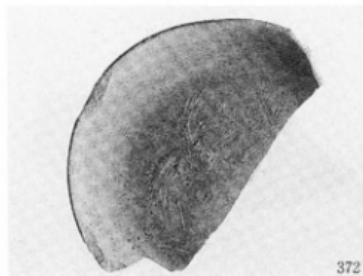


371



373

出土遺物15



372



383

382



384



389

388



414



426

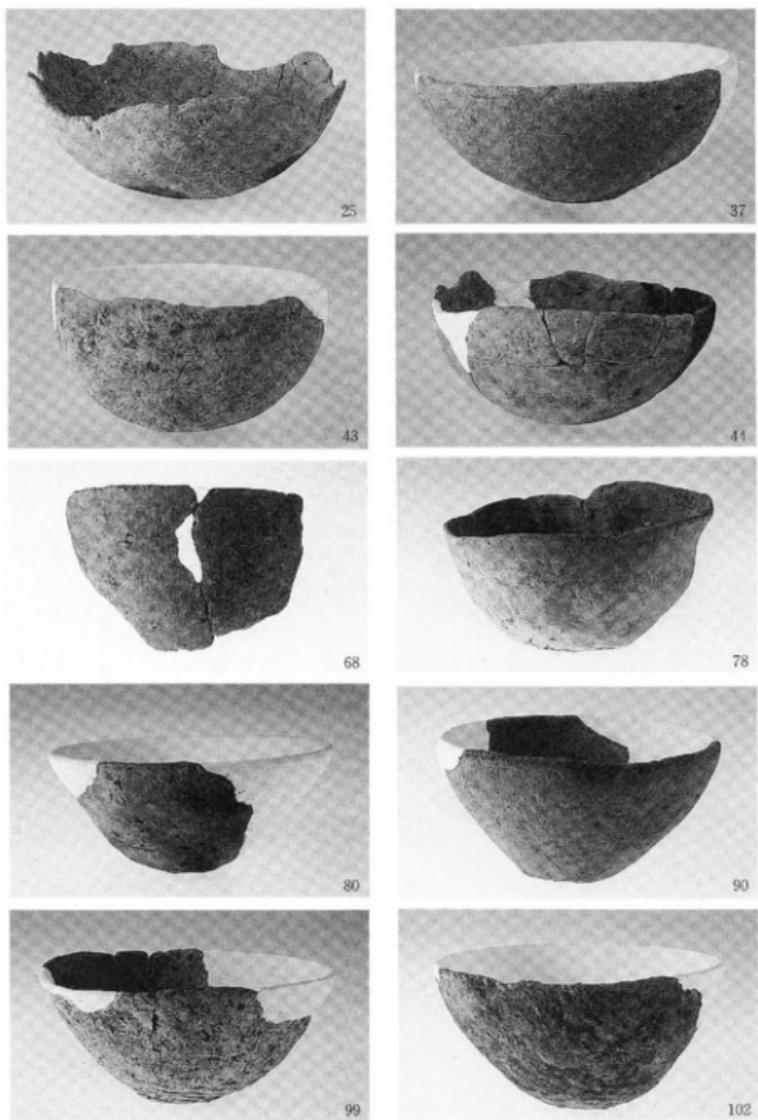


467

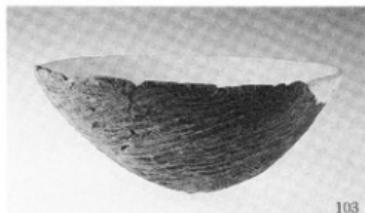


472

471



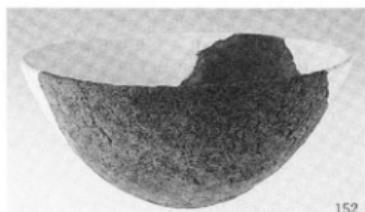
出土遺物17



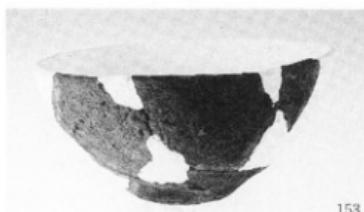
103



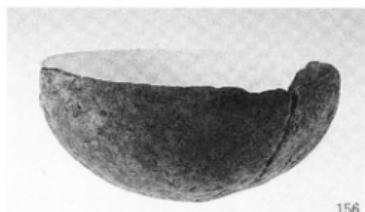
118



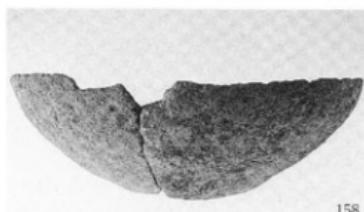
152



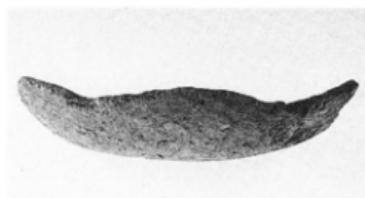
153



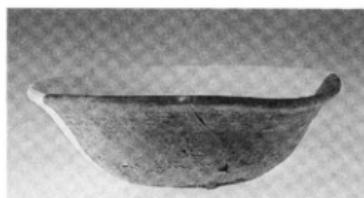
156



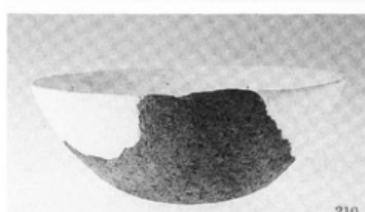
158



160



164



210

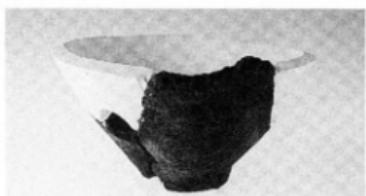


216

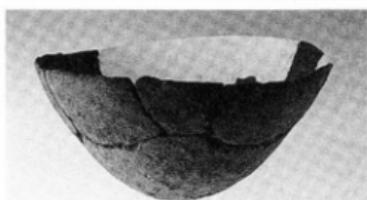
出土遗物18



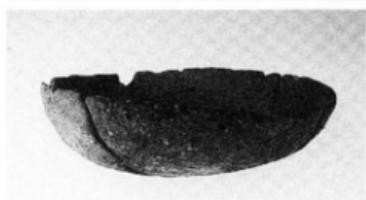
220



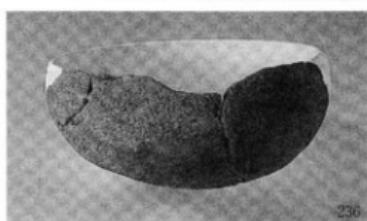
222



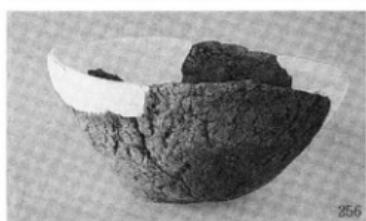
232



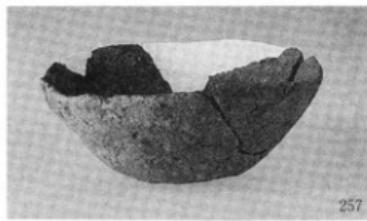
233



236



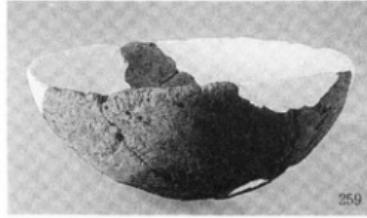
256



257



258



259



261

出土遺物19



282



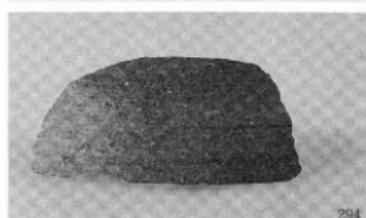
291



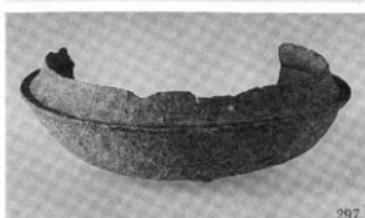
292



293



294



297



300



301

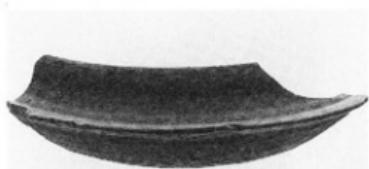


308

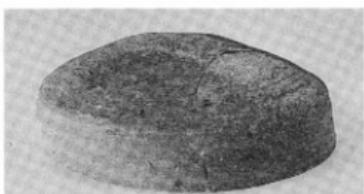


309

出土遗物20



310



311



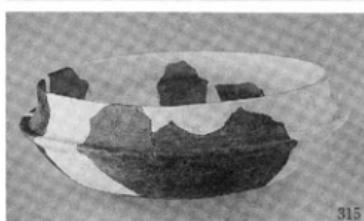
312



313



314



315



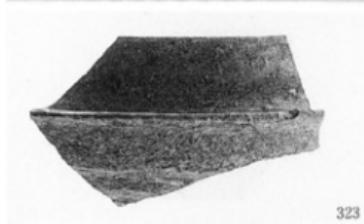
319



320



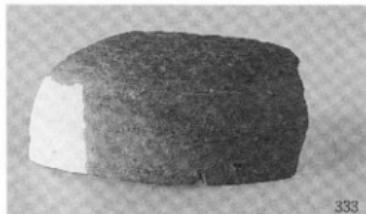
321



323



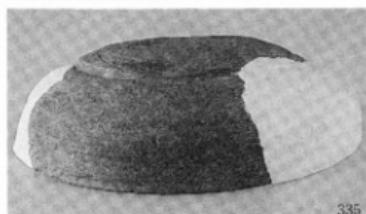
330



333



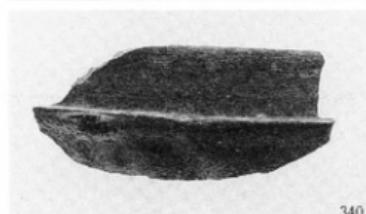
334



335



336



340



345



352



357



360



363



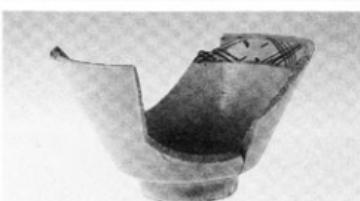
365



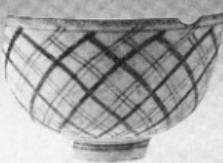
366



367



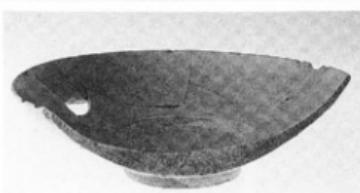
368



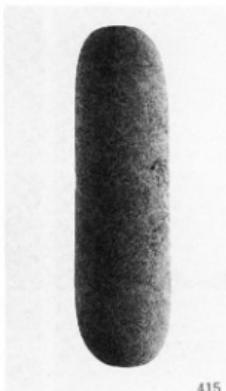
369



370



371



372



21



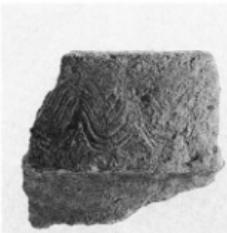
22



23



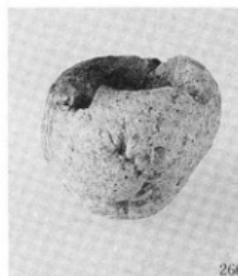
46



52



64



266



267



268



269



270



271



272



273



276



278



279



280



281



283



285



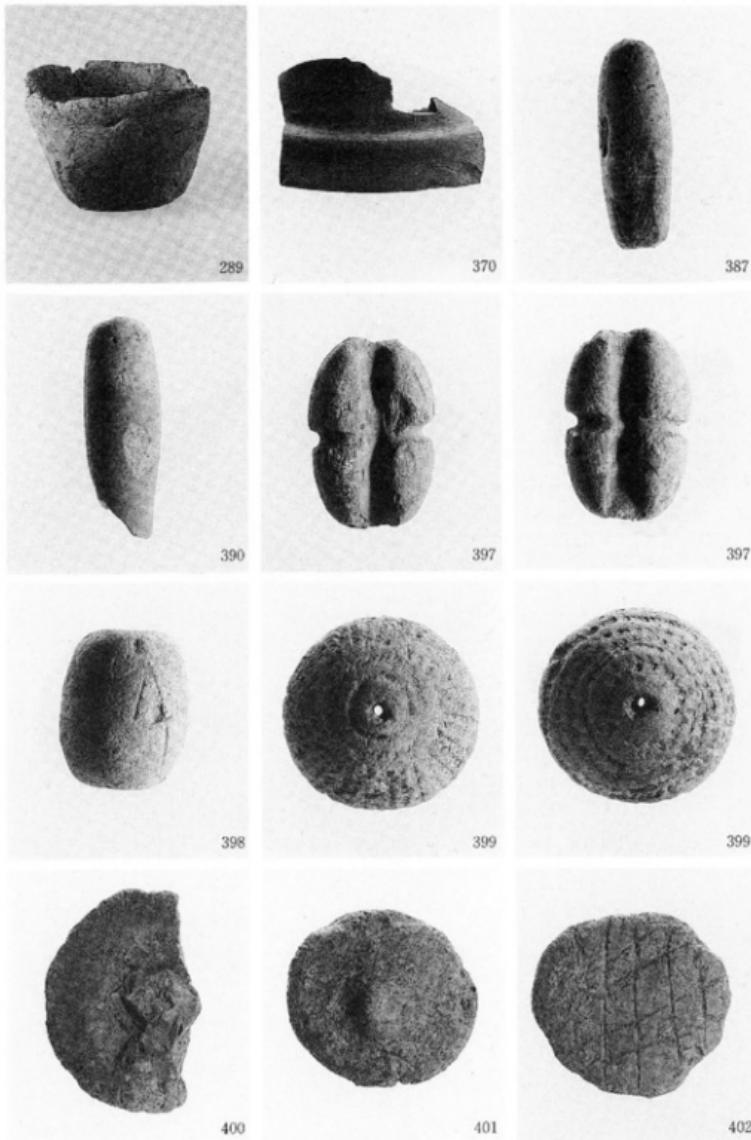
286



287



288



出土遺物26



403



404



405



406



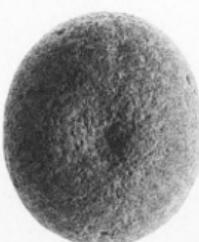
407



408



409



410



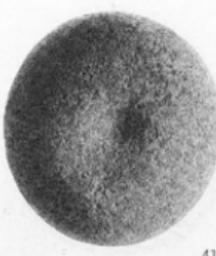
411



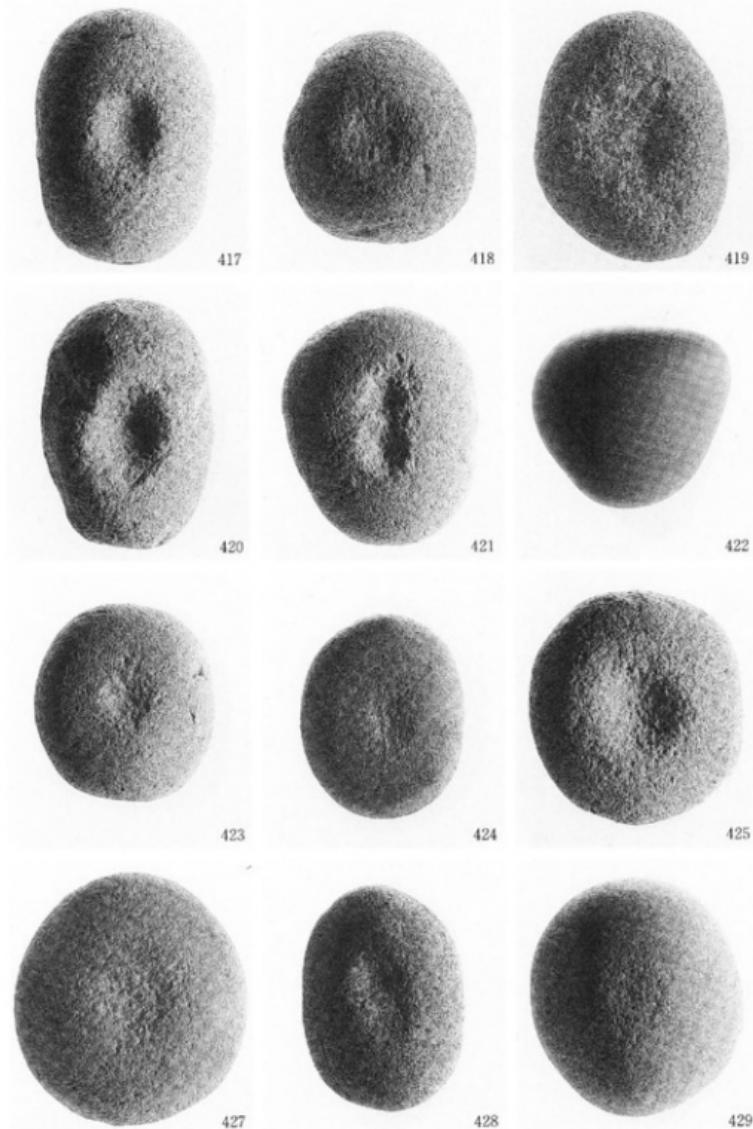
412



413



416



出土遺物28



430



431



432



433



434



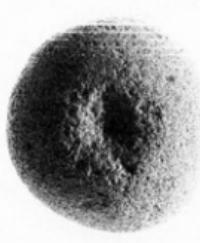
435



436



437



438



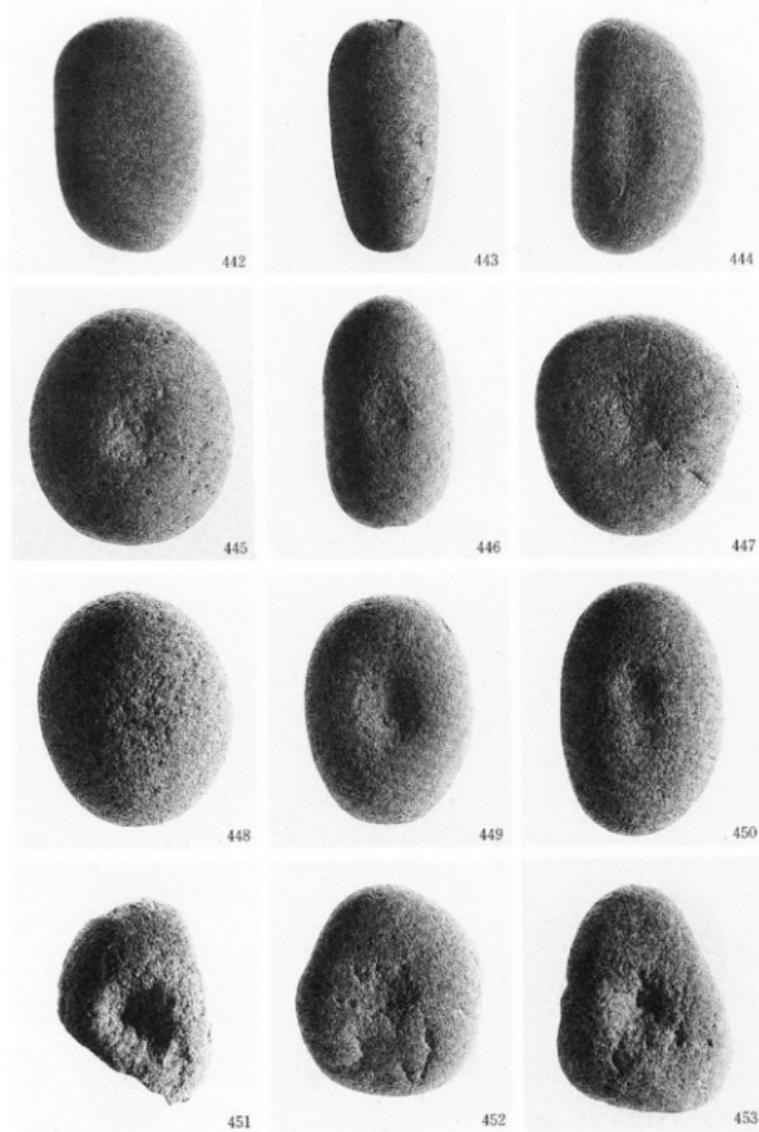
439



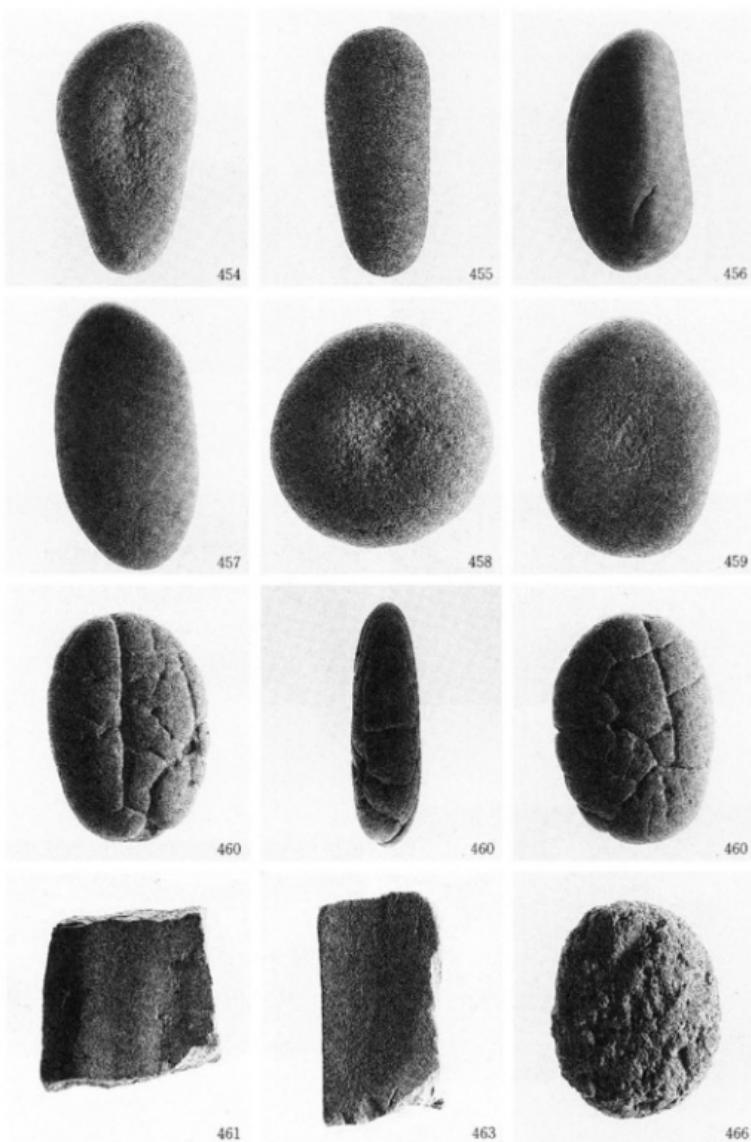
440



441



出土遺物30



出土遺物31



付編収録遺物

大方町埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

早 咲 遺 跡

県道大用大方線改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1991

発行 高知県大方町教育委員会
高知県幡多郡大方町入野2294番地
TEL 0880-43-1059

印刷 西村謄写堂

